一般県道荒見上野近江八幡線特殊改良第１種工事に伴う

笠原南遺跡発掘調査報告書

１９８７

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

正 誤 表

頁	行	誤	正
例言		調査第二技師	調査第二係技師
10	6	いる柱穴状遺構。	いる。
	7		柱穴状遺構
20	図	番号 出土地点 1 2	番号 出土地点 1 SD－6 2 〃
83	13	①層よ	③層よ
	30	①層より出土している。	③層より出土している。
85	16	SK－7（第44）	SK－7（第44図）
87	13	不明であるが、	不明である。
121	5	高は、はの字に開く。	台は、はの字に開く。
123	24	「越口」	「越口」
147	6	第4層、	第6層、
	7	が第3層、321・322 が第2層	が第5層、321・322 が第3層
	10	第4層の段階で	第6層の段階で
	12	第4層では	第6層では
	16	しかしながら第2層では	しかしながら第3層では

一般県道荒見上野近江八幡線特殊改良第１種工事に伴う

笠原南遺跡発掘調査報告書

１９８７

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化的な環境づくりにとりくんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策は、重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々にいたる貴重な宝でもあります。このような文化遺産を後世に引き継いでいくためには、広く国民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、一般県道荒見上野近江八幡線特殊改良第１種工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護の御理解に役だてていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました、地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年３月

滋賀県教育委員会

教育長　飯田志農夫

例　　言

1．本書は、昭和58年度から実施されている一般県道荒見上野近江八幡線特殊改良第１種工事事業に伴う笠原南遺跡の発掘調査報告書で、昭和58年度、59年度に試掘調査を、昭和60年度、61年度に発掘調査を実施して昭和62年度に整理調査を実施したその成果をまとめたものである。

2．本調査は、滋賀県土木部道路課の再配当により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。

3．本書で使用した方位は磁針方位に基づき高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

4．本事業の事務局は次のとおりである。

整理調査（昭和62年度）及び発掘調査（昭和61年度）

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部　正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
主任技師	用田　政晴
管理係主任主事	山本　徳樹（昭和61年度）
管理係主任主事	山出　隆

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	吉崎　貞一
	南　光雄（昭和61年度）
事務局長	中島　良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
総務課長	山下　弘
事務嘱託	中谷サカエ
調査第二係長	大橋　信弥
調査第二技師	森　格也

発掘調査（昭和60年度）

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原　浩
課長補佐	中正　輝彦
埋蔵文化財係長	林　博通
埋蔵文化財技師	用田　政晴
管理係主事	山本　徳樹

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤　滋
総務課長	山下　弘
事務嘱託	上田笑美子
調査第二係長	田中　勝弘
調査第二技師	木戸　雅寿

5．本書の執筆・編集は、調査担当者の木戸雅寿と整理調査担当の森格也の協力を得ておこなった。また、一部遺物の実測において森隆氏の協力を得た。

6．出土遺物や写真・図面については、滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

Ⅰ．はじめに…… 1

Ⅱ．遺跡の位置と環境…… 1

Ⅲ．調査の経緯と経過 …… 4

Ⅳ．調査の結果…… 8

〔昭和60年度発掘調査分〕

1．第1トレンチ…… 8

2．第2トレンチ…… 23

3．第3トレンチ…… 23

4．第4トレンチ…… 31

5．第5トレンチ…… 42

6．第6トレンチ…… 91

〔昭和61年度発掘調査分〕

1．第1トレンチ……95

2．第2トレンチ…… 96

3．第3トレンチ……103

4．第4トレンチ……105

5．第5トレンチ……109

Ⅴ．笠原南遺跡の理解と今後のために……145

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図……3
第２図　トレンチ配置図……5・6
第３図　第１トレンチＳＫ－３平面・断面図……9
第４図　第１トレンチ上層平面図……11・12
第５図　第１トレンチ下層平面図……13・14
第６図　第１トレンチ出土遺物実測図……17
第７図　銅製銙帯実測図……18
第８図　第１トレンチＳＤ－５、６出土遺物……19
第９図　第１トレンチＳＤ－６出土銅銭……20
第10図　第１トレンチＳＤ－６出土銅銭……21
第11図　出土銅銭一覧表……22
第12図　第３トレンチ平面図……25・26
第13図　第３トレンチ出土遺物実測図……28
第14図　第３トレンチ出土遺物実測図……30
第15図　第４トレンチＳＢ－１、２、３建物平面図……32
第16図　第４トンレチＳＢ－４、５、６、７建物平面図……33
第17図　第４トレンチＳＫ－２、３土層断面図……35
第18図　第４トレンチ平面図……37・38
第19図　第４トレンチ出土遺物実測図……39
第20図　第４トレンチ出土木器実測図……41
第21図　第５トレンチ溝土層断面図……43
第22図　第５トレンチ南半平面図……45・46
第23図　第５トレンチ北半平面図……47・48
第24図　第５トレンチＳＥ－１、３平面・断面図……49
第25図　第５トレンチＳＤ－２、４、５、８、12出土遺物実測図……51
第26図　第５トレンチＳＤ－９、15、19、21、23、24、26出土遺物実測図……53
第27図　第５トレンチＳＤ－10出土遺物実測図……56

第28図　第５トレンチＳＤ－10出土遺物実測図……57
第29図　第５トレンチＳＤ－10出土遺物実測図……59
第30図　第５トレンチＳＤ－11上層（②⑩）出土遺物実測図……61
第31図　第５トレンチＳＤ－11上層（②⑩）出土遺物実測図……62
第32図　第５トレンチＳＤ－11中層（③④）出土遺物実測図……65
第33図　第５トレンチＳＤ－11中層（③④）出土遺物実測図……66
第34図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図……68
第35図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図……70
第36図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図……72
第37図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図……73
第38図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図……75
第39図　第５トレンチＳＤ－16出土遺物実測図……77
第40図　第５トレンチＳＤ－16出土遺物実測図……78
第41図　第５トレンチＳＥ－１、２出土遺物実測図……80
第42図　第５トレンチＳＥ－２出土遺物実測図……82
第43図　第５トレンチＳＥ－３出土遺物実測図……84
第44図　第５トレンチＳＫ－７出土遺物実測図……85
第45図　第５トレンチ遺構面出土遺物実測図……86
第46図　第５トレンチ出土土錘実測図……87
第47図　第５トレンチ出土木製品実測図……88
第48図　第５トレンチ出土木製品実測図……89
第49図　第５トレンチ出土木製品実測図……90
第50図　第６トレンチＳＥ－１平面・断面図……91
第51図　第６トレンチ平面図……92
第52図　第１トレンチ平面図……93・94
第53図　第２トレンチ溝土層断面図……96
第54図　第２トレンチ平面図……97・98
第55図　第２トレンチ出土土器実測図……100
第56図　第２トレンチ出土硯実測図……100
第57図　第３トレンチ平面図……101・102

第58図　第３トレンチ出土遺物実測図……104
第59図　第３、４トレンチ溝土層断面図……105
第60図　第４トレンチ出土土器実測図……106
第61図　第４トレンチ平面図……107・108
第62図　第５トレンチ建物平面図……110
第63図　第５トレンチ建物平面図……112
第64図　第５トレンチ平面図……115・116
第65図　第５トレンチ包含層出土遺物実測図……118
第66図　第５トレンチＳＤ－１出土遺物実測図……120
第67図　第５トレンチＳＤ－１出土遺物実測図……122
第68図　第５トレンチＳＤ－２、３出土遺物実測図……125
第69図　第５トレンチ出土遺物実測図……127
第70図　第６トレンチ建物平面図……129
第71図　第６トレンチ平面図……133・134
第72図　第６トレンチ包含層出土遺物実測図……135
第73図　第６トレンチ出土遺物実測図……137
第74図　第７トレンチ建物平面図……138
第75図　第７トレンチ平面図……139・140
第76図　第７トレンチ包含層出土遺物実測図……142
第77図　第７トレンチ出土遺物実測図……143

図版目次

図版１　（上）昭和60年度第１トレンチ下層全景　（北より）
　　（下）第１トレンチＳＤ－６　（東より）
図版２　（上）昭和60年度第２トレンチ北半分全景（南より）
　　（下）昭和60年度第２トレンチ南半分全景（南より）
図版３　（上）昭和60年度第６トレンチ南半分全景（南より）
　　（下）昭和60年度第６トレンチ北半分全景（北より）
図版４　（上）昭和60年度第３トレンチ北半分全景（北より）
　　（下）昭和60年度第３トレンチ南半分全景（南より）
図版５　（上）第３トレンチＳＫ－２土器出土状況
　　（下）第３トレンチＳＰ－５土器出土状況
図版６　（上）昭和60年度第４トレンチ南⅓全景　（南より）
　　（下）第４トレンチ柱穴群近景　（南より）
図版７　（上）第４トレンチＳＰ－４柱痕検出状況
　　（下）第４トレンチＳＰ－５・15柱痕検出状況
図版８　（上）昭和60年度第４トレンチ北⅓全景　（北より）
　　（下）昭和60年度第４トレンチ中央部全景（南より）
図版９　（上）第４トレンチＳＰ－32礎板検出状況
　　（下）第４トレンチＳＰ－34礎板検出状況
図版10　（上）第４トレンチＳＰ－38礎板検出状況
　　（下）第４トレンチＳＰ－38礎板検出状況
図版11　（上）昭和60年度第５トレンチ北¼全景　（南より）
　　（下）昭和60年度第５トレンチ北¾全景　（南より）
図版12　（上）第５トレンチＳＤ－11土器出土状況（西より）
　　（下）第５トレンチＳＤ－11土器出土状況（南より）
図版13　（上）第５トレンチＳＥ－３上層土器出土状況
　　（下）第５トレンチＳＥ－３中層土器出土状況
図版14　（上）昭和60年度第５トレンチ中央部全景（南より）

（下）第５トレンチＳＤ群　（西より）
図版15　（上）第５トレンチＳＥ－２土器出土
（下）第５トレンチＳＥ－２土層断面
図版16　（上）第５トレンチＳＤ－12木製品出土状況
（下）第５トレンチＳＤ－12木製品出土状況
図版17　（上）第５トレンチＳＤ－11和琴出土状況
（下）第５トレンチＳＤ－11鍬出土状況
図版17　（上）昭和61年度第１トレンチ全景　（北より）
（下）昭和61年度第２トレンチ全景　（北より）
図版19　（上）昭和61年度第３トレンチ全景　（北より）
（下）昭和61年度第４トレンチ全景　（北より）
図版20　昭和61年度第５～７トレンチ全景
図版21　（上）第５トレンチＳＢ－１全景　（東北より）
（下）第５トレンチＳＢ－１全景　（北より）
図版22　（上）第５トレンチＳＢ－１全景　（北東より）
（下）第５トレンチ柱列検出状況
図版23　（上）第５トレンチＳＢ－12全景　（南西より）
（下）第６トレンチＳＤ－３近景　（西より）
図版24　（上）第６トレンチＳＤ群全景　（南より）
（下）第７トレンチ全景　（南より）
図版25　出土遺物
～
図版76　出土遺物

Ⅰ　は　じ　め　に

本調査報告は、滋賀県の実施する県道荒見・上野・近江八幡線特殊改良工事に伴う発掘調査の成果をまとめたものである。この県道における埋蔵文化財調査は昭和58年に始まり昭和61年度の４年間をかけて行った。当初この地には周知の遺跡は存在しないと考えられていたが、その後の試掘調査で弥生時代の終りから古墳時代の初頭にかけてと、平安時代初めの集落跡が存在することが確認された。これらの文化財は文化財保護法に基づき笠原南遺跡として登録され、工事着手の前に遺跡の保護策を講じる為に、記録保存として発掘調査調査を実施した。そして、昭和62年度にこれらの成果をまとめるために整理調査を実施したものである。

調査においては、草津土木事務所や調査に携わって頂いた笠原町の方々に多大の協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（木戸）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

笠原南遺跡の所在する守山市笠原町・荒見町は守山市の北西、野洲川南流の南側に位置の低湿地に位置する。地形的にみると御在所山を水源とする野洲川によって運ばれてきた土砂によって形成された三角州状の扇状地に存在している。現在野洲川は南流と北流の二本に分れているが、かっても位置をかえふたつの大きな河道が存在していたといわれておりそれ以外にも中小無数の分流が走っていたといわれている。守山市域の遺跡群は、これらの川が形成した微高地上にすべて立地しており、遺跡はその川とともに放射状に分布している。なかでも特に守山市街から金ケ森を経て山賀へぬける境川は旧野洲郡と栗太郡を分けるもので、この両側の微高地には連綿と遺跡が連なっておりそれらのことが顕著に認められる。笠原南遺跡もこのような遺跡群のひとつであると考えられる。

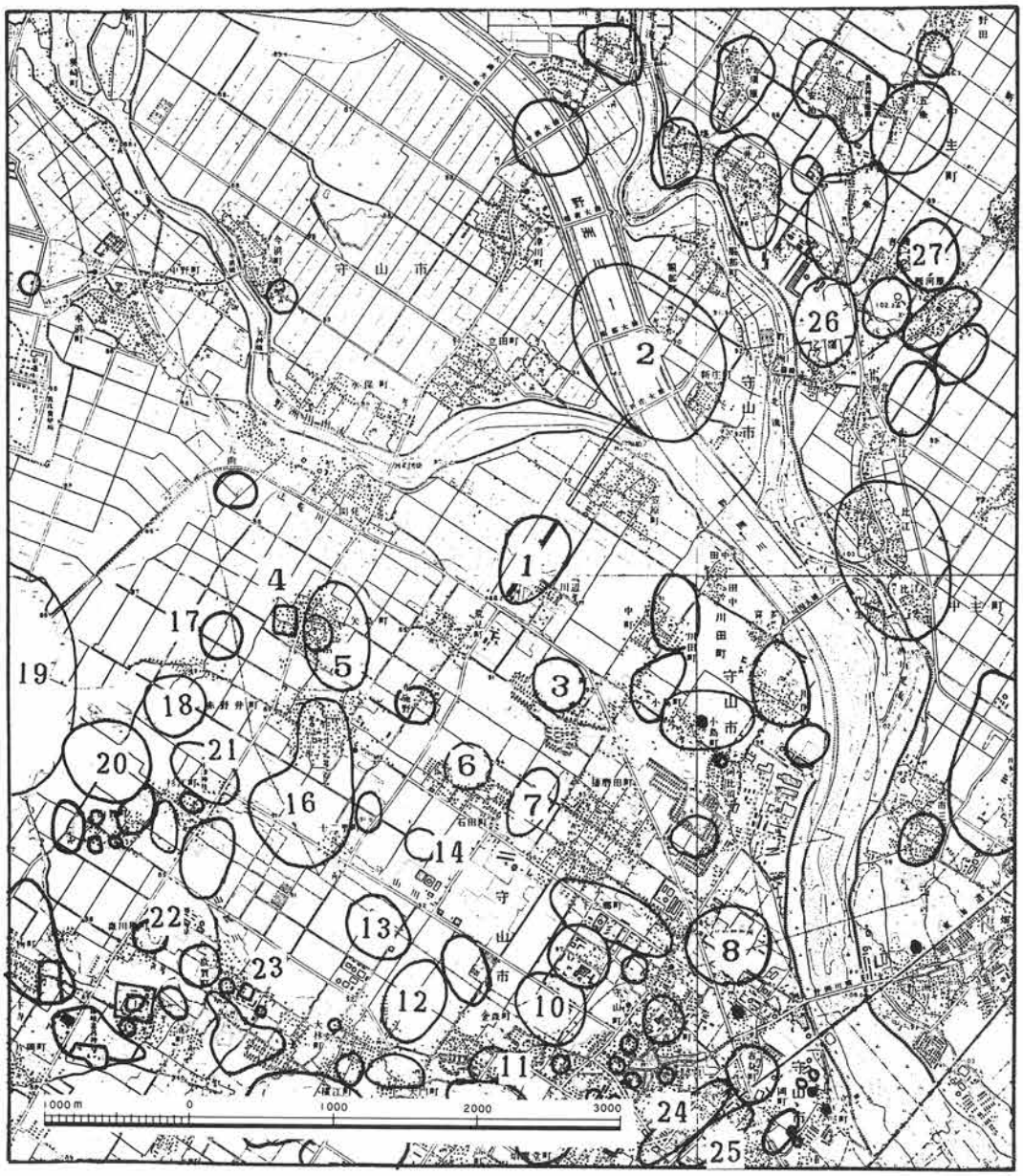
ここで笠原南遺跡の周辺に存在する遺跡を少し年代を追って概観しておく。

守山市域では現在のところ旧石器時代の遺物は発見されていはい。現在のところ、この地の最古の遺跡は琵琶湖総合開発に伴う発掘調査で明らかとなった赤野井遺跡の縄文早期の土器を含む層であるが、確実に集落跡と判断されるものはまだ発見されるにいたっていない。確実な集落跡が発見されているのは縄文時代中期のものからである。しかしながら、その数は多くはない。縄文時代も晩期になってようやくその数は増えるようである。次の時代の弥生時代はこれに反し、農耕を生活の基盤とするためであるのかこの沖積平野に爆

発的に集落が営まれるようになりその数が増える。弥生時代前期の集落は稲作とともに淀川水系を北上してきたためか、琵琶湖を取り巻くように湖岸沿いに広がっている。

近年発見されている遺跡としては小津浜遺跡。赤野井遺跡、赤野井浜遺跡、寺中遺跡、服部遺跡などがある。特に小津浜遺跡では約GL88.77m位あたりの水面下で居住していた確実な跡が発見されている。中期以降はこれらの集落を個々の母体としながら枝別れするように内陸部へとはいりこみ多くの集落群を形成するにいたっている。各時期をとおして存在していた服部遺跡は、その集落の規模や新庄から発見された複数埋納された銅鐸から考えても当時の拠点的集落であったと考えられる。しかしながら、古墳時代にはいると初頭あたりから吉身北遺跡、吉南遺跡、森川原遺跡等のように早い時期より掘立柱建物で構成される集落が営まれながらも前期の大規模な古墳群は発見されていず、古墳時代以降は時代の舞台は現在の野州あたりでその範囲を広げるものと考えられる。奈良時代に入ると欲賀寺や益寺のような寺院の建立や官衙的性格を持つと考えられる赤野井遺跡、川田遺跡、西川原遺跡等のような遺跡がこのあたりでは営まれている。しかし、この時代の集落跡は全体的にみればやや少ないように考えられる。これらの地で爆発的に集落の増加が認められるのは11世紀代から始まるものでおおよそ信長により一向衆が攻め滅ぼされるころまで連綿と営まれる。

笠原南遺跡もこのような環境と歴史のなかの同じような遺跡のひとつとして考えられるわけである。（木戸）



1 笠原南遺跡
2 服部遺跡
3 川中遺跡
4 観音寺遺跡
5 寺中遺跡
6 石田遺跡
7 播磨遺跡
8 播磨田東遺跡
9 吉身中遺跡
10 金森東遺跡
11 金森遺跡
12 金ヶ森西遺跡
13 三宅北遺跡
14 石田三宅遺跡
15 狐塚遺跡
16 赤野井遺跡
17 弘前遺跡
18 赤野井浜遺跡
19 赤野井湾遺跡
20 小津浜遺跡
21 杉江北遺跡
22 森川原遺跡
23 欲賀寺遺跡
24 吉身北遺跡
25 吉身南遺跡
26 吉地薬師堂遺跡
27 西河原森ノ内遺跡

第1図　周辺遺跡分布図

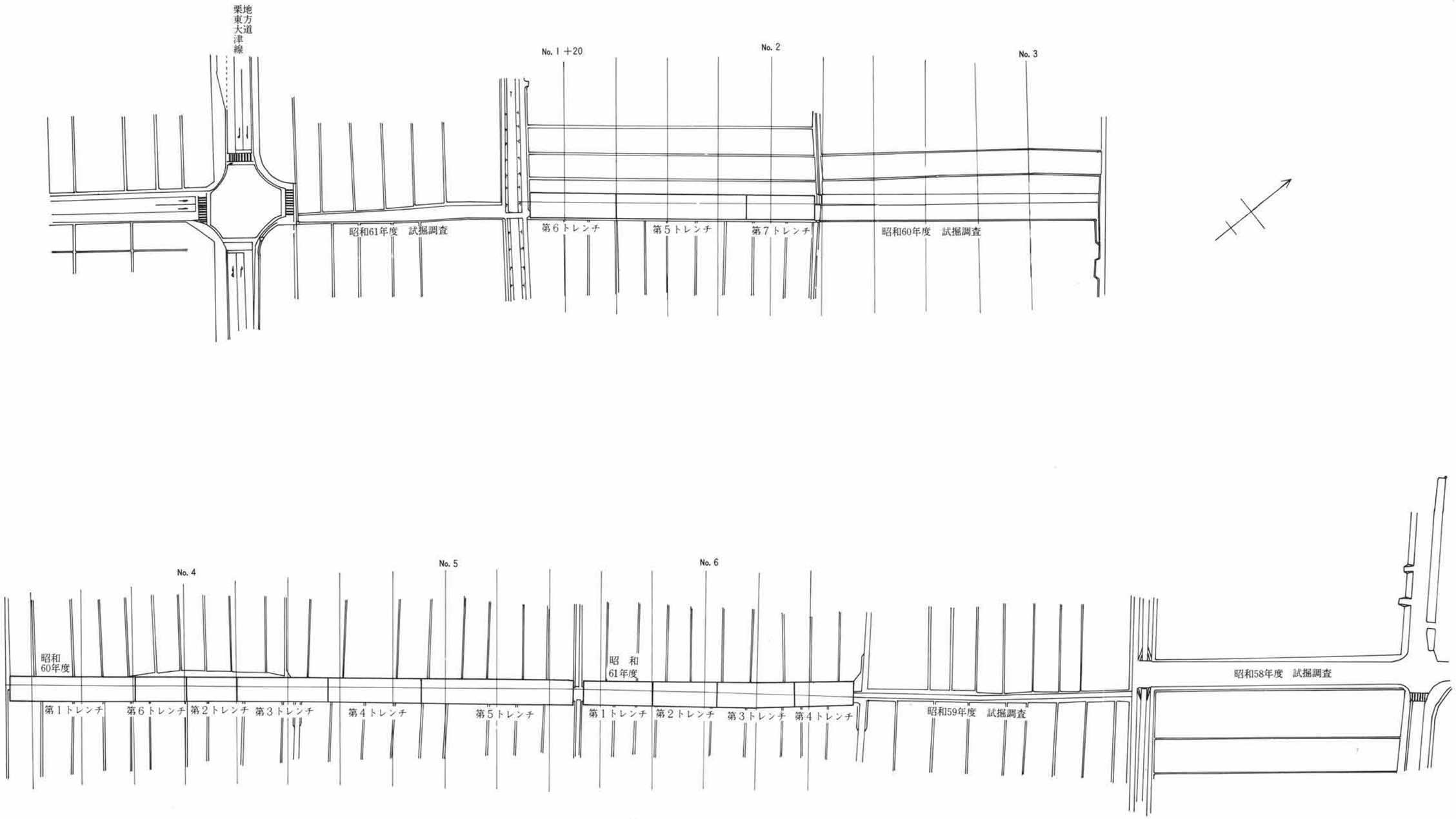
Ⅲ　調査の経緯と経過

事業対象地域であった守山市笠原町地先（町道笠原バス停地点）から荒見町地先（琵琶湖大橋取付け道路荒見交差点）迄の区間には、事業策定当初周知の遺跡は存在していなかった。しかしながら、計画道路全線の延長が10kmと長くて広範囲な地域にあたるため、県土木部道路課との協議による協力のもと、不時発見による緊急調査という事態を回避するために年度ごとの事業実施区間に合せて年度の当初もしくは前年度に各々の区間の試掘調査を事前に実施して遺跡の有無を確認したうえで、随時発掘調査を実施し遺跡の保護策を講じていくこととした。

昭和58年度は、道路センター杭No７＋80～No８＋80までの区間の事業計画がおこなわれ道路課より確認調査の依頼を受けて、県教育委員会が調査主体となって試掘調査を実施した。調査の結果、古代野洲川の河川敷きと考えられる砂利層の拡がりを確認したが、遺跡は存在しないことが判明した。

昭和59年度は、道路センター杭No２＋20～No７＋60区間の事業計画がおこなわれ昭和59年９月18日付け滋草土第3029号で草津土木事務所長より確認調査の依頼を受け、県土木部道路課の再配当により昭和59年11月20日～昭和60年３月30日の期間と650,000円の経費で県教育委員会が調査主体となり財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として調査を実施した。調査の結果、道路センター杭No２＋20～No３＋20までの区間においては遺跡は認められなかったが、道路センター杭No３＋30～No６＋20の区間で弥生時代の終りから古墳時代初頭にかけての土器を出土した遺構群を検出した。この区間の埋蔵文化財の取り扱いについては道路課との協議により、当該年度の工事実施は行わないこととなったため次年度に発掘調査を実施することとなった。

昭和60年度は、道路センター杭No0.0～No２＋20区間とNo３＋30～No６＋20の区間の調査を、昭和60年８月17日付け滋草土第2456号で草津土木事務所長より発掘調査の依頼を受け県土木部道路課の再配当により昭和60年10月１日～昭和61年３月31日の期間と12,405,000円の経費で県教育委員会が調査主体となり財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として調査を実施した。途中、作付けの調整の結果、調査不可能となった部分を昭和61年１月16日付けで調査面積を3190㎡から2420㎡に、調査予算を12,405,000円から11,011,000円に各々変更した。結果は後述のとおりである。なお、試掘調査の結果発見されたNo１＋40～No２＋20の区間の埋蔵文化財の取り扱いについては道路課との協議により当該年度の工


地方道
栗東大津線
No. 1 +20
No. 2
No. 3
昭和61年度　試掘調査
第6トレンチ
第5トレンチ
第7トレンチ
昭和60年度　試掘調査
No. 4
No. 5
No. 6
昭和
60年度
第1トレンチ
第6トレンチ
第2トレンチ
第3トレンチ
第4トレンチ
第5トレンチ
昭　和
61年度
第1トレンチ
第2トレンチ
第3トレンチ
第4トレンチ
昭和59年度　試掘調査
昭和58年度　試掘調査

第2図　トレンチ配置図

事実施は行わないことになったので次年度に発掘調査を実施することとなった。

昭和61年度は、道路センターNo１＋40～No２＋20の区間とNo５＋50～No６＋20の区間の調査を昭和61年９月12日付け滋草土第3065号で草津土木事務所長より依頼を受け、県土木部道路課の再配当により昭和61年９月24日～昭和62年３月31日の期間と8,690,000円の経費で県教育委員会が調査主体となり財団法人滋賀県文化財保護協会を調査期間として調査を実施した。途中、調査の内容により、遺跡が当初の予想よりも拡がることが確認され、No６＋20～40（420㎡）とNo６＋20～40（280㎡）の区間の調査延長が必要となり昭和62年２月13日付けで内容変更協議をおこなった。また、この部分の調査においては特に歴史上重要であると考えられる遺構と遺物が確認されたため道路課の協力を得て昭和61年12月９日に記者発表による資料提供を実施した。

昭和62年２月27日の終了引き渡しと伴に現地での笠原南遺跡の全調査は終了した。

（木戸）

調査の方法

発掘調査の方法は全ての年において、試掘調査の結果明らかになった区間を発掘調査の対象地とし、道路計画線のセンターの杭を基準にとって道路幅員の14m の幅で長さ10～20m の（当該地は非常に湧水が激しく大規模な面積の調査に耐えないため。）調査用トレンチを設定し順次１から番号を付して調査を実施した。

調査は最初の発掘調査用のバックホーにより表土の除去を行い、遺構面に達した段階で人力による遺構面の調査を行い、遺構を検出したうえで掘削を行なった。そして、それらの調査の結果を写真撮影（一部アドバルーンによる）と図面による図化によって記録保存を計った。

調査終了後は再びバックホーによる埋戻しを行い、水田用の排水と畦、田道を人力により復旧し引き渡した。（木戸）

Ⅳ　調査の結果

〔昭和60年度発掘調査分〕

1　第1トレンチ

第1調査区は道路センター杭No3＋30からNo3＋80の間にトレンチを設定した。この調査区はおもに中世～近世の溝と弥生時代末から古墳時代前期の溝と土壙、柱穴で構成されていた。また、全調査区のうちこの調査区のみ遺構面が2面で構成されていた。以下におもな遺構と遺物の説明をする。

（1）遺　構：第1面（第4図）

溝

調査区全域で東西溝3条、南北溝3条の計6条の溝を検出した。

ＳＤ－1

調査区のやや西側よりを南北に走る溝で、調査区のほぼ真ん中あたりで突き当たる。幅約1ｍ前後で深さ約20cmのもので断面はＵ字形を呈していた。埋土は茶褐色砂質土であった。この溝は一貫してほぼ全調査区の中を南北に流れるもので出土遺物より中世末から近世末まで存続していたものであると考えられる。現況においてもちょうどこの溝の上に当たる位置には、水田の区画を形成している畦畔道の側溝が存在するところであり、ここより現在の水田地割りの起源を知ることができる。

ＳＤ－2

調査区のほぼ中央を東西方向に走る溝である。幅は約70cm余りで深さ20cmであった。溝はＳＸ－1を切っており、東側は切断されているが西側はトレンチ外に続く。断面はＵ字形を呈している。埋土はマンガンを含んだ暗褐灰色粘質土である。

ＳＤ－3

調査区の中央やや北よりを東西に走る溝である。幅は約50cm～1ｍで深さ30cmであった溝はＳＤ－1に切られＳＤ－4、ＳＫ－7を切っており調査区の東側でＬ字に曲がり両側はトレンチ外に伸びる。また、コーナーの部分から枝別れして曲がりながら西に伸び行き止まる。

ＳＤ－4

南北に走る溝でＳＤ－3によって切られている。埋土は暗茶褐色砂質土であった。

ＳＤ－５

調査区の中央を東西に走る溝で西は行く止まり東はトレンチ外に伸びる。埋土は暗灰色砂質であった。

ＳＤ－６

調査区の南端を東西に流れる溝で幅は３ｍ以上あり北岸が検出された。深さは約40cmである。この溝の埋土より宋銭を中心とする銭が出土していることから鎌倉後期から室町時代のものとかんがえられる。またこの上面には現在も水田を区切る畦畔沿に側溝が走っておりその成立時期がこれよりわかる。

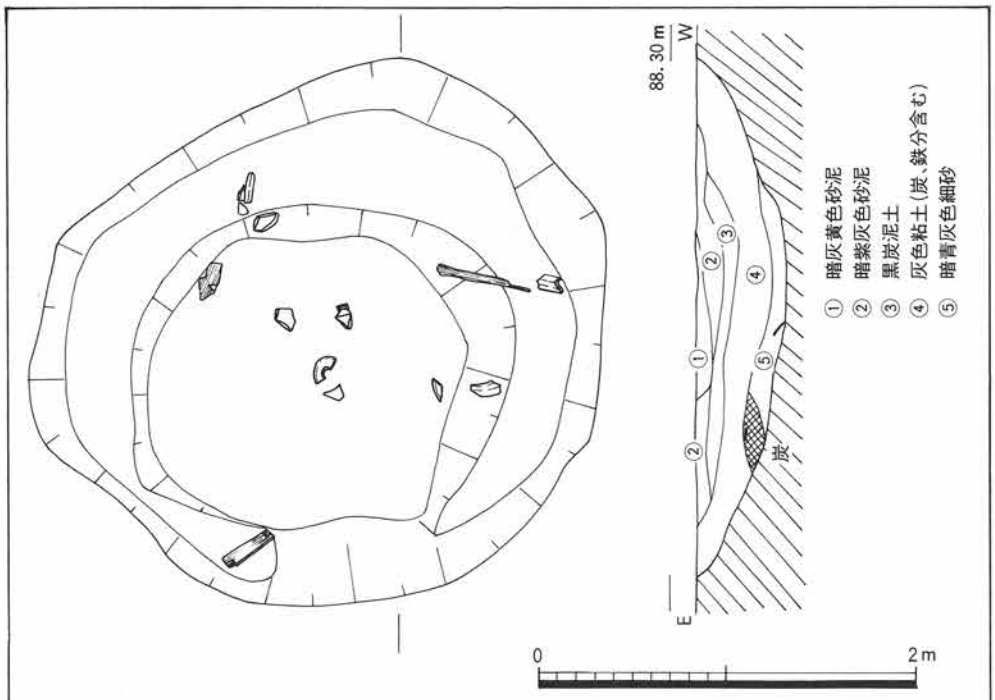
土　壙

ＳＫ－１

ＳＸ－２を切るような形で存在するもので東西約２ｍ南北約３ｍ、深さ約25cmを計るほぼ楕円形の土壙である。内部には暗褐灰色粘質土が堆積していた。

ＳＫ－２

円形のものと考えられるがＳＤ－４に切られているため径約１ｍの半円形を呈する。内部には暗茶褐色砂質土が堆積していた。



第３図　第１トレンチＳＫ—3平面・断面図

ＳＫ－３（第３図）

調査区のほぼ中央部に位置し、直径約25m 、深さ約50cmの円形を呈するものである。内部にはＣ形の段を持ち、５層からなる埋土がレンズ状に堆積していた。

ＳＫ－７

Ｌ字に曲がる不整形の土壙で西はトレンチ外に伸びＳＤ－１やＳＤ－３により切られている柱穴状遺構。

ＳＰ－１～15

何れかの時代における何れかの建物の柱穴を構成するものと考えられるが、調査区の制約上建物を構成出来なかった柱穴群である。Ｐ－２、11、13はＳＸ－１を切りＰ－11はＰ－２に切られる。Ｐ－４はＰ－３を切り、Ｐ－14はＰ－15を切っている。

その他遺構

ＳＸ－１、２

調査区の中央から南に大きく広がる不整形の土壙である。

（２）遺　構：第２面（第５図）

溝

下層においては東西方向の溝を２条、南北方向の溝を３条検出した。

ＳＤ－７、８

No３＋40地点の調査区の東側に位置するもので、二股にひらくもので東側はトレンチ外に伸び西側はいきどまる。切合い関係はわからない。埋土は各々ＳＤ－７は暗青灰色粘泥、ＳＤ－８は暗灰褐色粘泥であった。

ＳＤ－９、10、11

ほぼ中央に位置するもので長楕円形のものが対になるようによりそう。埋土はいずれも暗灰褐色粘泥であった。

土　壙

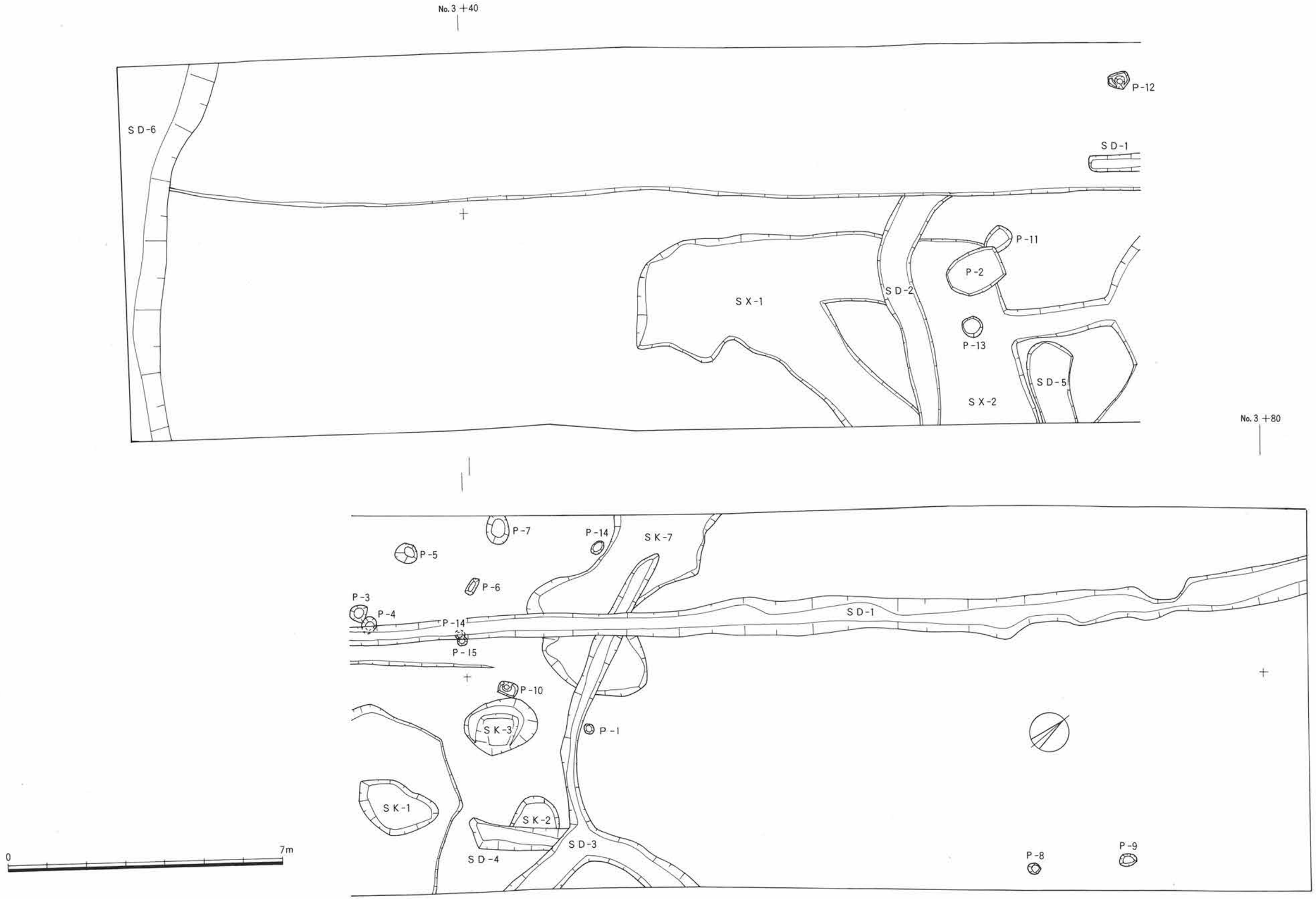
ＳＫ－４、５、６

何れも不整形の土壙であり西側がトレンチ外に伸びる。

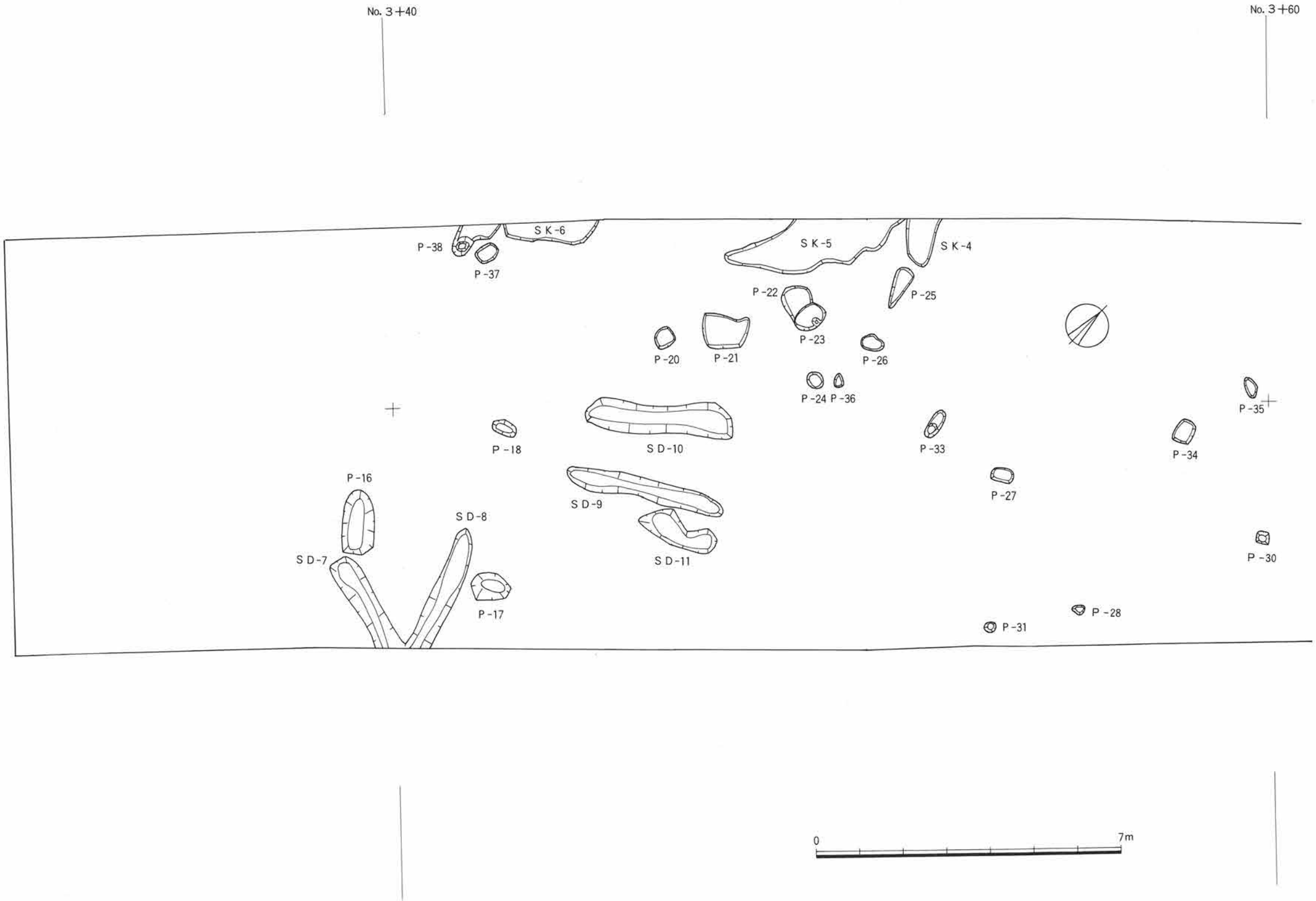
柱穴状遺構

ＳＰ－16～35

いずれも建物を構成することはできなかった柱穴群である。　（木戸）



第4図　第1トレンチ上層平面図



第５図　第１トレンチ下層平面図

（3）出土遺物：古代以前

包含層（第6図）

甕Ⅰ〈13、14〉

13は斜め上方に立ち上がった後に上へ立ち上がり端部を横へつまみ出した口縁をもっもので内面はヘラ削りである。14は段をもって斜め上方に立ち上がり、端部を横につまみ出すものである。

器台A〈16〉

ラッパ状に開く受け部をもち、受部は貫通するものである。受部の内、外面はヘラミガキされている。また受部の端部は上方へつまみあげられている。

壺〈17、18〉

いずれもやや上げ底の壺の底部である。

ＳＤ－３（第6図）

甕Ⅰ〈1〉

頸部より斜め外方に立ち上がった後に上方に立ち上がり端部を横につまみだして面をもたせる。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。

ＳＤ－10（第6図）

甕C〈2〉

ほぼ直線的に外方に開き、端部を丸く収める口縁をもつものである。

ＳＤ－11（第6図）

甕Ⅰ〈3〉

口縁部は斜め外方に立ち上がった後にゆるく立ち上がり、端部を斜め上方に少しつまみだす。胴部の外面にはハケ目の後に肩部にヘラ状工具により2条、断続的な直線紋が施されている。また、内面には指によりナデ痕をのこしている。

ＳＫ－１（第6図）

甕Ⅰ〈9～11〉

9は斜め上方に立ち上がった後上方へ立ち上がって、端部を斜め上方へつまみだす口縁部をもつものである。10の口縁部も9と同様である。11の口縁部は横に開かせ、そこから強くナデを施すことにより上方に立ちあがらせて端面に凹を形成させた口縁部をもつもの

である。

器台A 〈12〉

受部の端部を上方へつまみ上げるもので、受部は貫通している。また、受部外面にはヘラ状の工具で面取りを行なっている。

SX－1 （第6図）

甕I 〈4、5〉

4は口縁部が外湾して斜め上方に立ち上がった後に強い稜をもたせ上方に立ち上がり、横ナデすることにより端部は横につまみだされる。内面はヘラ削りである。5は斜め上方に立ち上がった後、なだらかに上方に立ち上がり、端部は斜め上方につまみだされる口縁を持つ。

小型壺〈6〉

底部のみの破片で、内外面ともに指頭圧痕が残る。底部は平底で外面の一部には黒斑がついている。

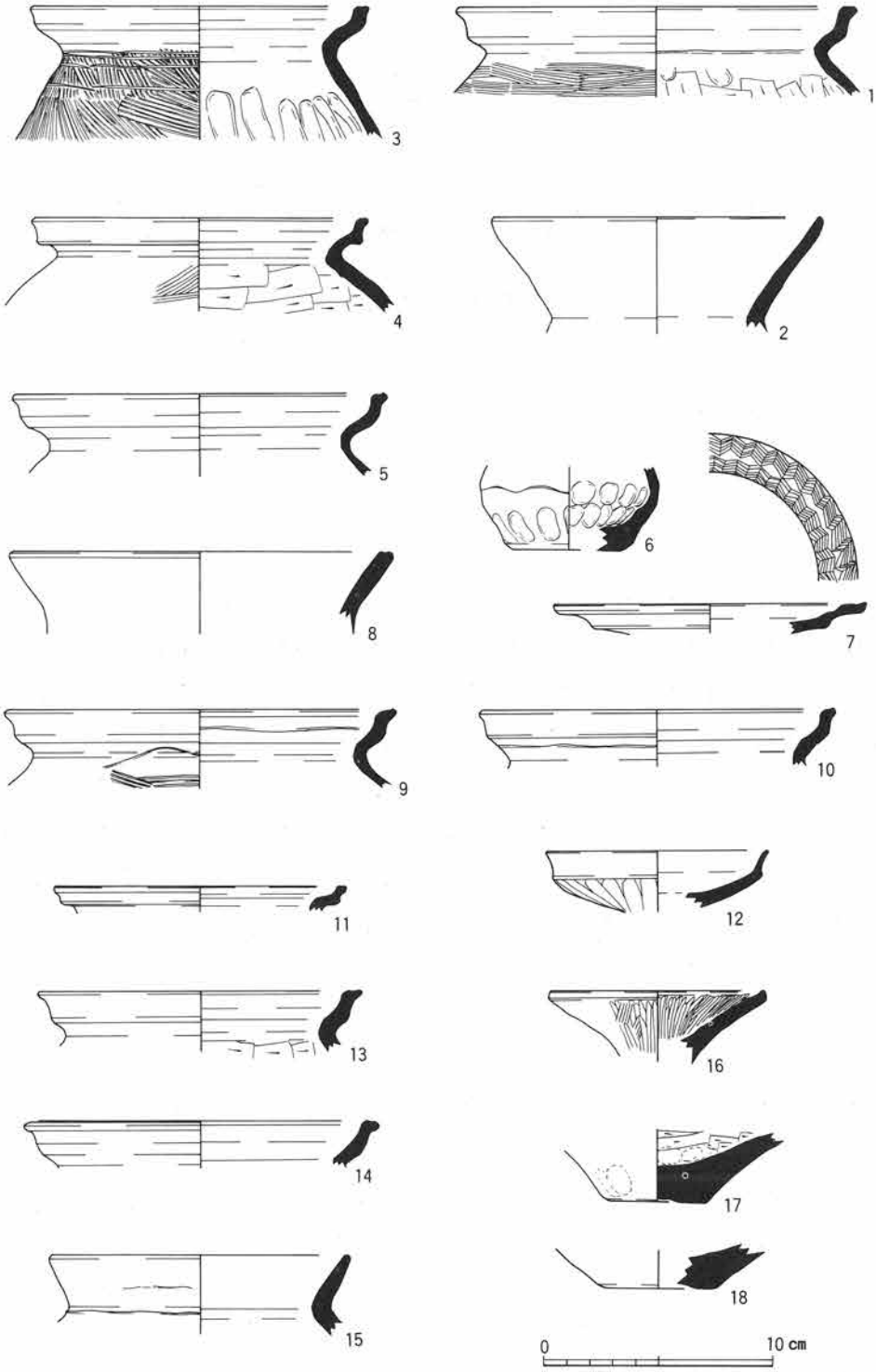
器台〈7〉

杯部で段をなして外方へ開き、端部は上へ少しつまみあげる。端部付近の内面には6条で1単位の櫛描波状紋が2条施されている。

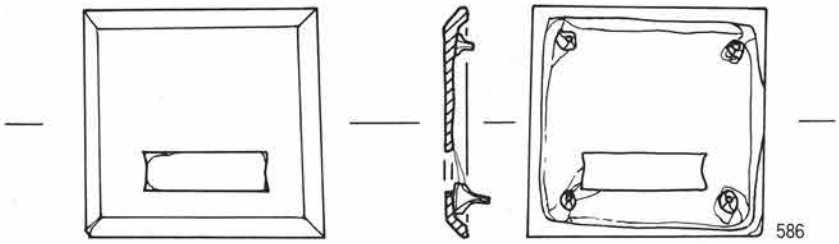
SX－2 （第6図）

甕C 〈8〉

外方に伸びる口縁をもつものである。 (森)



第6図　第1トレンチ出土遺物実側図



第７図　銅製銙帯実側図

（４）遺　物：古代以降

包含層（第８図）

金属器

帯金具〈586〉

縦３㎝、横3,3㎝の方形に近い横長の巡方である。中央下部に横1,7㎝、縦0,6㎝の腰飾腰飾等の垂飾を垂下させるための長方形孔があけられている。裏面の四方には皮留の鋲跡がある。材質は銅製であるが表面に黒漆の痕跡が認められる。型式は〔平城宮Ａ－Ⅲ－ａ〕と同等のもので〔平城宮ＳＤ－650〕にみられるものであると考えられる。「衣服令」によれば黒漆を塗った烏油腰帯は朝服では六位～初位、尉・志・兵衛・主帥、制服では無位官人が締めることになっている。平城宮の分類によると、大きさからこれは８位のものに当たる。これを所有していたのは出土地点より約100m 南の『越殿』の墨書土器を出土した建物跡に住む住人であったと考えられるが、『日本後紀』延歴15年12月辛酉条にもあるように銅製のものは剝げ易く落とし易かったからであろう。

県下出土の帯金具一覧

番　号	遺　跡　名	所　　在	形　　状	時代	材　質	文献
1	錦　織遺跡	大津市	巡方	奈良	石	未報告
2	大　伴遺跡	大津市	巡方	奈良	石	
3	榿木原遺跡	大津市	巡方	奈良	石	榿木原発掘調査報告
4	榿木原遺跡	大津市	丸鞆	奈良	石	
5	南滋賀遺跡	大津市	丸鞆		銅	未報告

6	横尾山遺跡	大津市	巡方	奈良	銅	未報告
7	浮御堂遺跡	大津市堅田	巡方		石	未報告
8	品井戸遺跡	彦根市西今町	丸鞆３点	６Ｃ	石	彦根市埋文報告８
9	金森東遺跡	守山市金森町		平安	銅	(鍍金)
10	中　島遺跡	守山市三宅町	鈴具	平安	銅	守山市文化財報告22
11	服　部遺跡	守山市服部町	丸鞆２点	奈良	銅	服部遺跡調査概報
12	手　原遺跡	栗東町手原	巡方	奈良	銅	
13	西河原遺跡	中主町西河原	丸鞆	奈良	石	中主町文化財報告９
14	野　瀬遺跡	蒲生町宮井	丸鞆		石	未報告
15	狐　塚遺跡	近江町高溝	丸鞆		石	未報告
16	永　田遺跡	高島町永田	鈴１丸１ 巡方２	奈良	銅	県ぽ報告ＸⅡ－８

ＳＤ－５（第７図）

陶　器

信楽焼壺〈354、355〉

何れも信楽焼の底部と考えられる。丁寧なロクロ横なでによって成形されている。

ＳＤ－６（第７図）

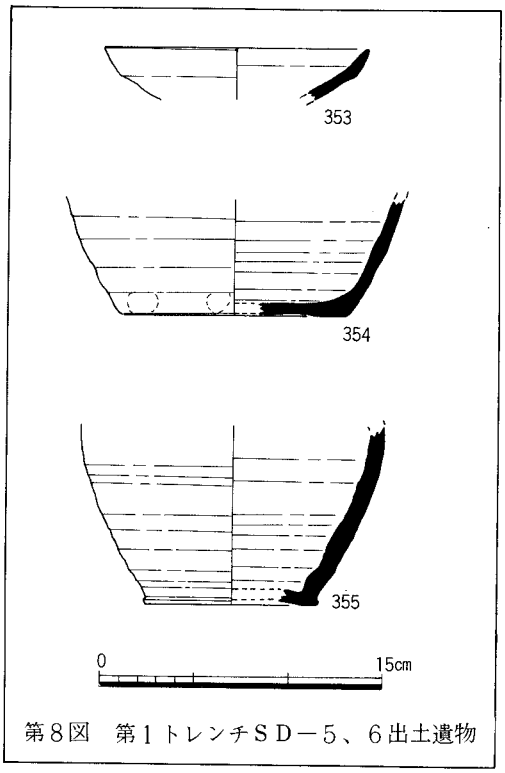
黒色系土師質土器椀〈353〉

肥厚し屈曲する口縁部を持つものである。

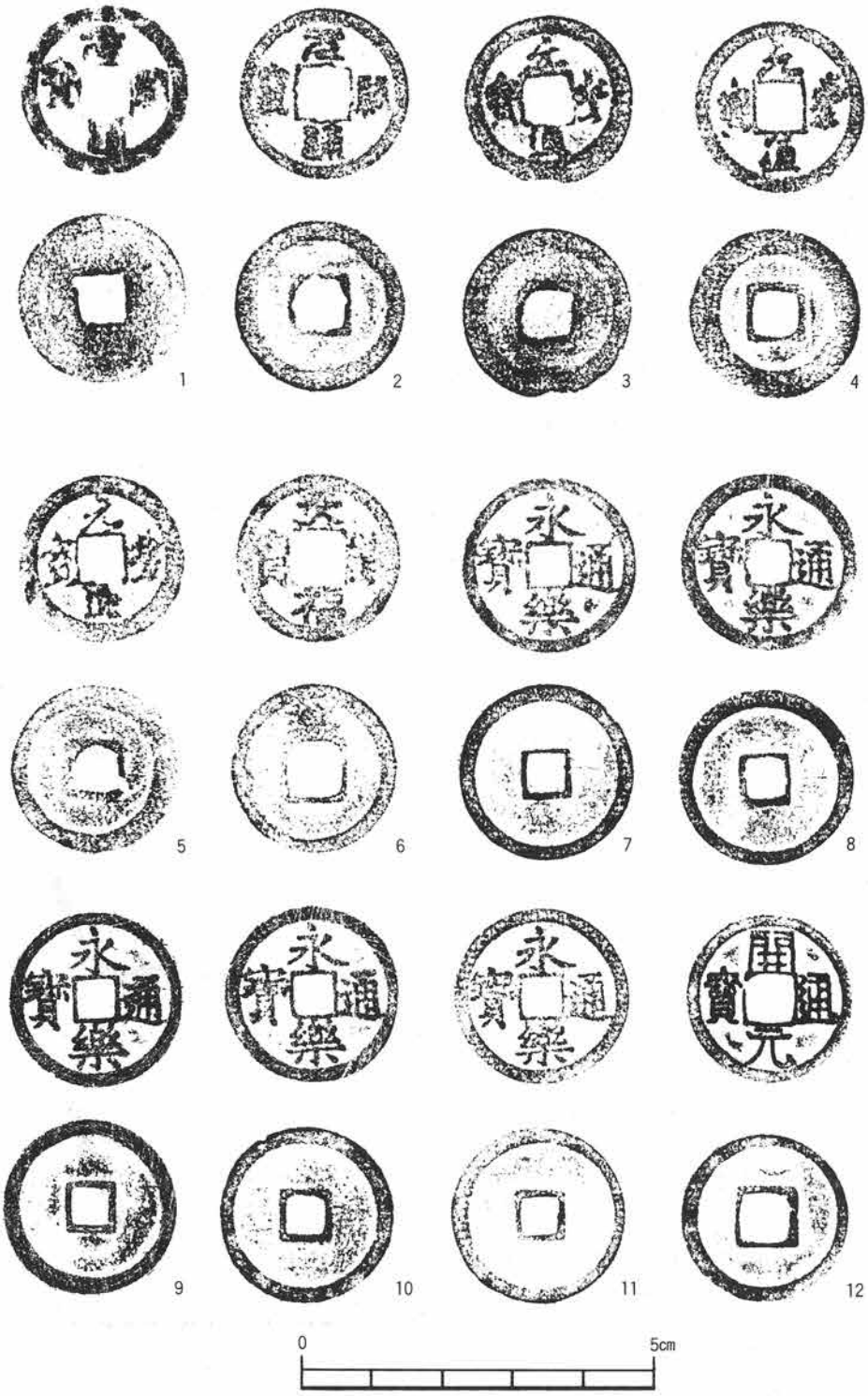
貨　幣（第８、９、10図）

全部で24点の銭が出土している。重なったひと塊として出土している状況から推測して紐通しされていたものと考えられる。

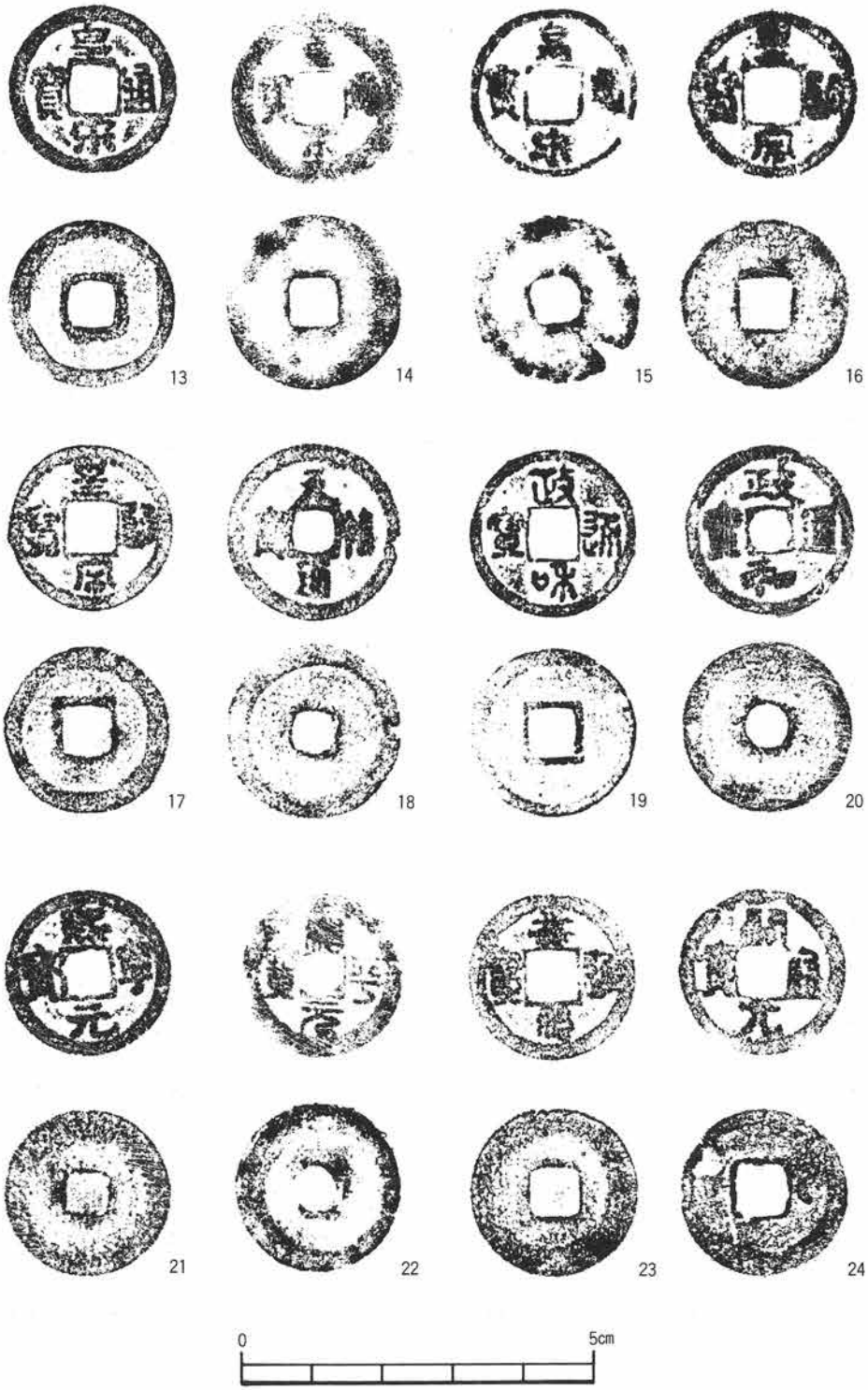
24点のうち北宋のものが16点、南唐のものが２点、明のものが５点、不明１点と宋・明貿易によってわが国にもたらされたものであると考えられる。残りのよいものも中にはあるが全体に磨耗したものが多い。（木戸）



第８図　第１トレンチＳＤ－５、６出土遺物



第９図　第１トレンチＳＤ－６出土銅銭



第10図　第１トレンチＳＤ－６出土銅銭

番号	出土地点	名　　称	初鋳年代	年代	重量（g）	材質
1		元裕通寶	北宋元裕８年	1093	3.69	銅
2		〃	〃　〃	〃	3.31	〃
3		元豊通寶	北宋元豊２年	1078	3.39	〃
4		〃	〃　〃	〃	3.45	〃
5		〃	〃　〃	〃	3.41	〃
6					2.14	〃
7		永楽通寶	明永楽４年	1368	3.44	〃
8		〃	〃　〃	〃	3.52	〃
9		〃	〃　〃	〃	3.42	〃
10		〃	〃　〃	〃	3.38	〃
11		〃	〃　〃	〃	3.53	〃
12		開元通寶	南唐即位４年（？）	966	2.95	〃
13		皇宋通寶	北宋寶元２年	1039	2.70	〃
14		〃	〃　〃	〃	4.03	〃
15		〃	〃　〃	〃	3.36	〃
16		〃	〃　〃	〃	3.03	〃
17		〃	〃　〃	〃	3.01	〃
18		天禧通寶	北宋天禧２年	1018	3.53	〃
19		政和通寶	北宋政和元年	1111	3.01	〃
20		〃	〃　〃	〃	3.55	〃
21		熙寧元寶	北宋熙寧元年	1068	5.03	〃
22		治平元寶	北宋治平元年	1064	3.29	〃
23		嘉裕通寶	北宋嘉裕２年	1057	2.90	〃
24		開元通寶	南唐即位４年（？）	966	2.86	〃

第11図　　出土銅銭一覧表

2．第2トレンチ

第2調査区は第6調査区と第3調査区の間、道路センター杭No.4から4＋20の間にトレンチを設定した。この調査区では遺構は全く確認することはできなかった。地盤は非常に粘質力の強い灰青色の粘土であった。

3．第3トレンチ

第3調査区は道路センター杭No.4＋20から4＋60の間にトレンチを設定した。この調査区は地山は非常に軟弱で湧水がひどいところであり調査に難渋したが、弥生時代末から古墳時代前期の遺構によって構成されていた。以下におもな遺構の遺物の説明をくわえる。

（1）遺　構（第12図）

堀立柱建物

ＳＢ－1

調査区のほぼ中央西側に位置する建物で、建物の規模は2間×2間(Ｐ－21～26)で構成されている。

ＳＢ－2

調査区の北西端に位置する建物で、建物の規模は1間×2間(Ｐ－16～20)で構成されている。

ＳＢ－3

調査区のほぼ中央に位置する建物で、建物の規模は1間×1間(Ｐ－7、6、27、28)で構成される。

溝

調査区全域で東西溝3条、南北溝2条の計5条の溝を検出した。

ＳＤ－1

全調査区を一貫して南北に流れる溝で調査区のほぼ中央から始まり第4トレンチにつながっている。これは現在の畦畔道沿いに走る水路にだぶるもので、出土遺物より中世末から近世末まで存続していたものと考えられる。

ＳＤ－2

調査区の北を東西に走る溝である。幅は約20cmである。途中をＳＤ－1に切られているが東端はいきどまり西端はやや北に曲がりながらトレンチ外に伸びる。埋土は暗黒褐色粘土

であった。

ＳＤ－３

調査区のほぼ中央を東から南にＬ字に走る溝である。幅は20cmから１ｍで南端はいきどまり、東端はトレンチ外に続く。

ＳＤ－４

調査区の南西を南北に走る溝で北に行くほど先細りになっている。埋土は淡灰褐色粘土であった。

ＳＤ－５

調査区のほぼ中央を南北に走る溝で３ｍ程検出した。北端はいきどまり、南端はトレンチ外につながっている。埋土は淡黒褐免粘土であった。

土　壙

土壙は全てで５基を検出した。以下に説明をくわえる。

ＳＫ－１

調査区の北端に位置するもので第４調査区にまたがっているもので、東西４ｍを測り不定形を呈する。

ＳＫ－２

ＳＤ－２とＳＫ－１との間に位置するもので、径１ｍを測る円形のもので、深さは40cmであった。

ＳＫ－３

調査区の北東に位置するもので、径１ｍの円形を呈するものと考えられるが半分がトレンチ外にてでいる。

ＳＫ－４

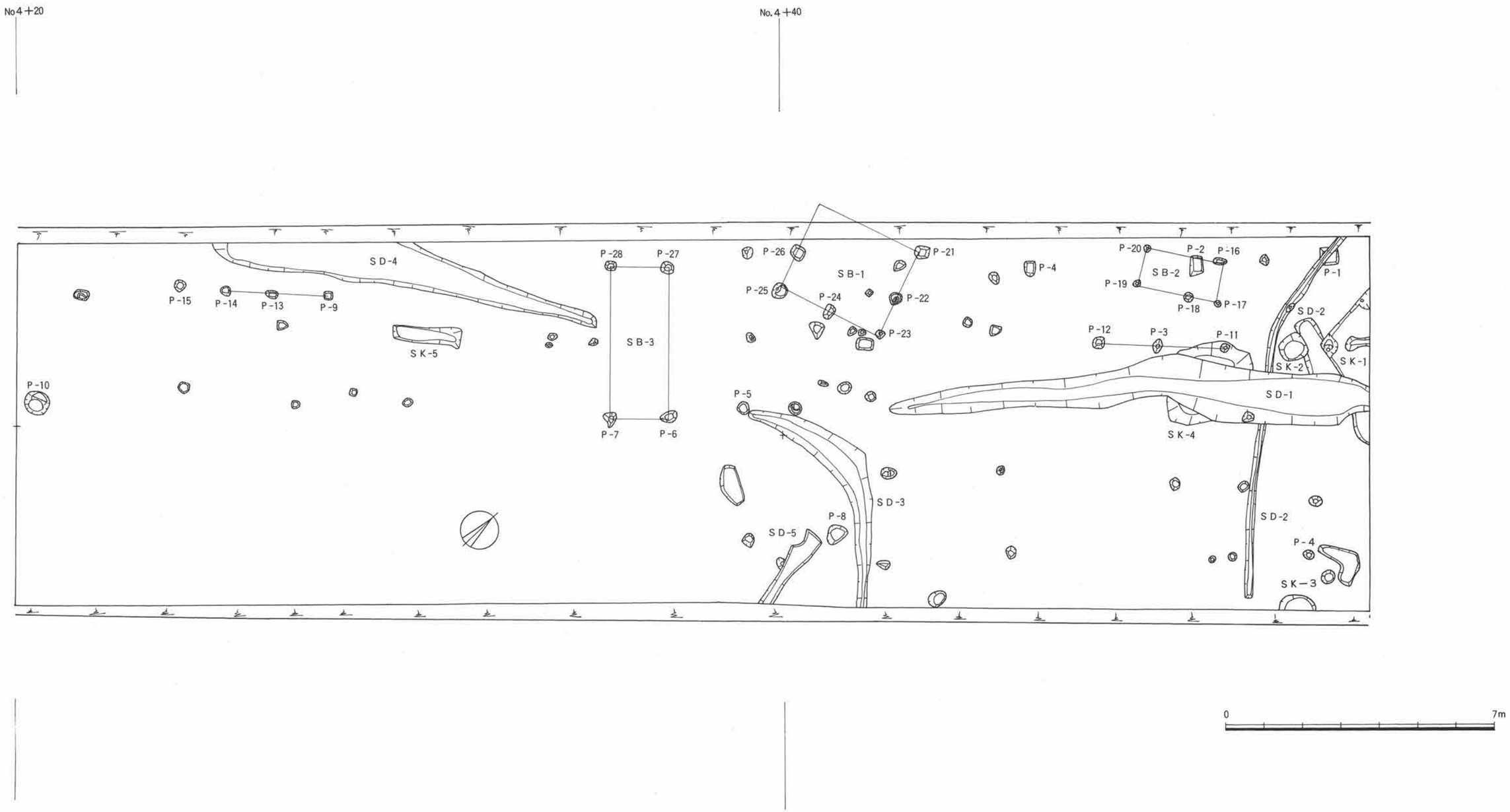
調査区の北側に位置するもので、径３ｍの円形を呈するものであるがそのほとんどをＳＤ－１によって切断されている。

ＳＫ－５

ＳＤ－４の東側に位置する。幅50cm、長さ２ｍの長方形を呈するものである。

柱穴状遺構

この調査区においては全部で75の柱穴が確認されているが、明確に建物を構成している柱穴以外のものについても列をなすものも含まれており、何れの時代になんらかの理由のもとに掘りこまれたものであることは確実であると考えられる。　（木戸）



第12図　第３トレンチ平面図

（２）遺物

包含層出土（第14図）

甕Ｅ〈37〉

口縁部は短く外方にのび、端部は少し上につまみ上げる。口縁部と胴部は内外面ともナデている。

壺Ａ〈36〉

頸部から斜め上方に立ち上がり、稜をつまみだした後にさらに外反し立ち上がる二重口縁の壺である。

石製品

砥石〈Ａ〉

長さ12.5×4.5㎝のもので、非常によく使用されており、中央部は磨滅により内湾するように窪んでいる。

ＳＤ－３（第13図）

甕Ｃ〈21〉

口縁部はゆるく外反してのびており、端面には凹がある。口縁部と胴部のつなぎは厚くなており、ナデて接合されている。胴部の外面はハケ目が施され、内面はヘラ削りが施されている。

甕Ｉ〈19、20、22〉

19は口縁部が斜め上方に立ち上がりその後ゆるやかに立ち上がるのもので、端部は外傾している。20は内湾して立ち上がり端部を横に強くつまみ出している。23は斜め上方に立ち上がった口縁をそのまま上方に立ち上がらせて、端部を斜め上方につまみだしているものである。

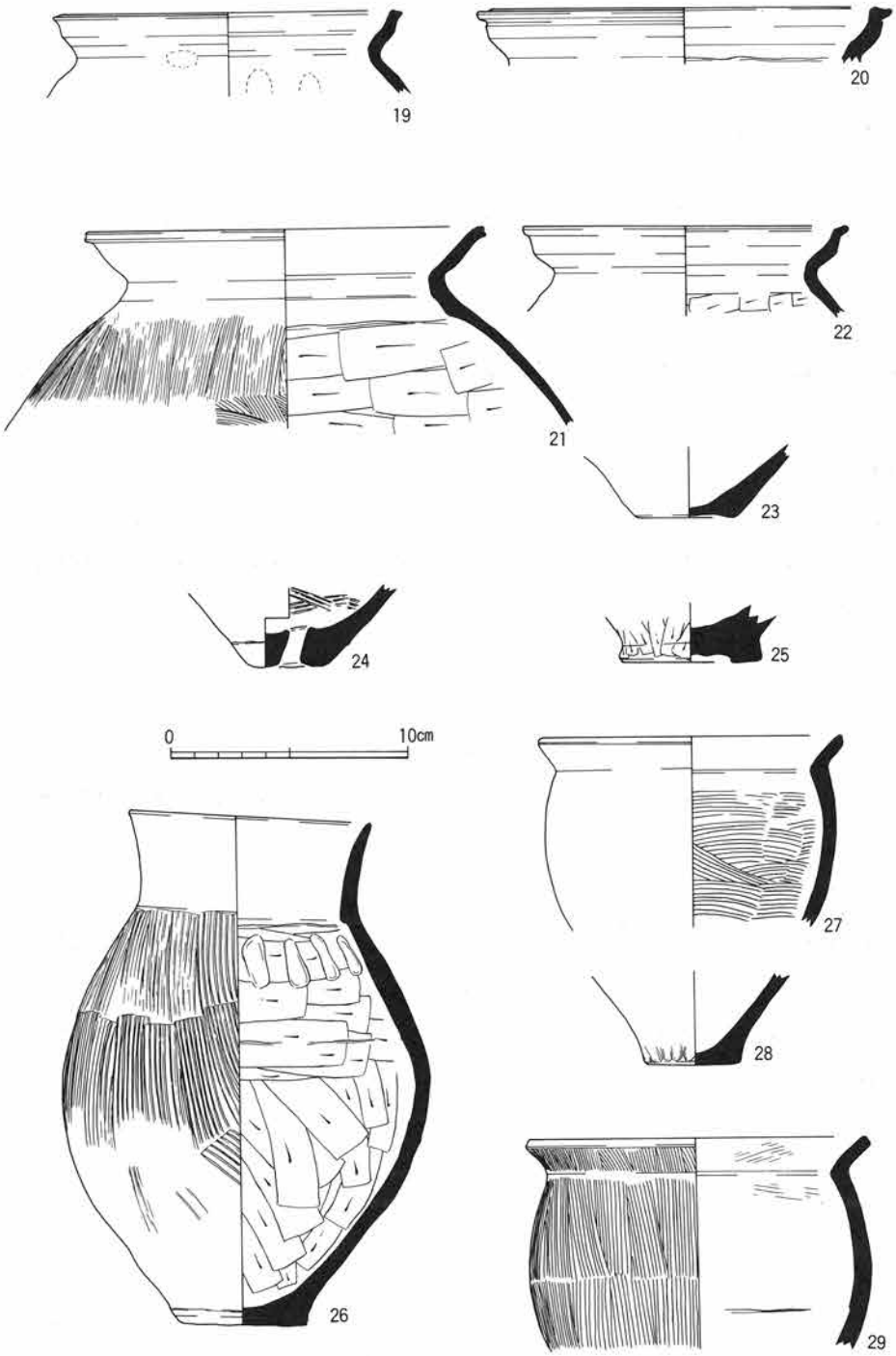
甑〈24〉

底部破片で、斜め上方に穿孔されている。

ＳＫ－２

壺Ｃ〈26〉

やや外反しながら上方に立ち上がり、端部を丸く収める口縁をもつもので胴部は卵形で底部は平坦である。口縁部は内外面とも横ナデで胴部の外面は縦方向のハケ、内面の上半部は横方向の下半部は斜め方向のヘラ削りを施している。また、口縁部と胴部の境には接



第13図　第３トレンチ出土遺物実側図

合痕が見られる。

甕〈27、28、29〉

27は短く斜め上方へ開く口縁部をもち、胴部内面は横方向のハケ目を施している。外面は全体にナデている。28は底部である。外面には底部整形時の指おさえの痕がみられる。29は短く斜め上方に開く口縁をもち、端部に面をもつ。口縁部外面は縦方向のハケ、内面はナデている。なお、胴部外面には煤が付着している。

ＳＫ－３（第14図）

壺Ａ〈30〉

斜め上方に開いた後に、稜をもって強く外反する二重口縁の壺である。

壺〈31〉

壺の底部で、円形で平坦を呈する。

ＳＫ－４

甕Ⅰ〈32〉

斜め上方に立ち上がった後に上へ立ち上がり、ナデることによって端部をつまみだしている口縁をもつものである。

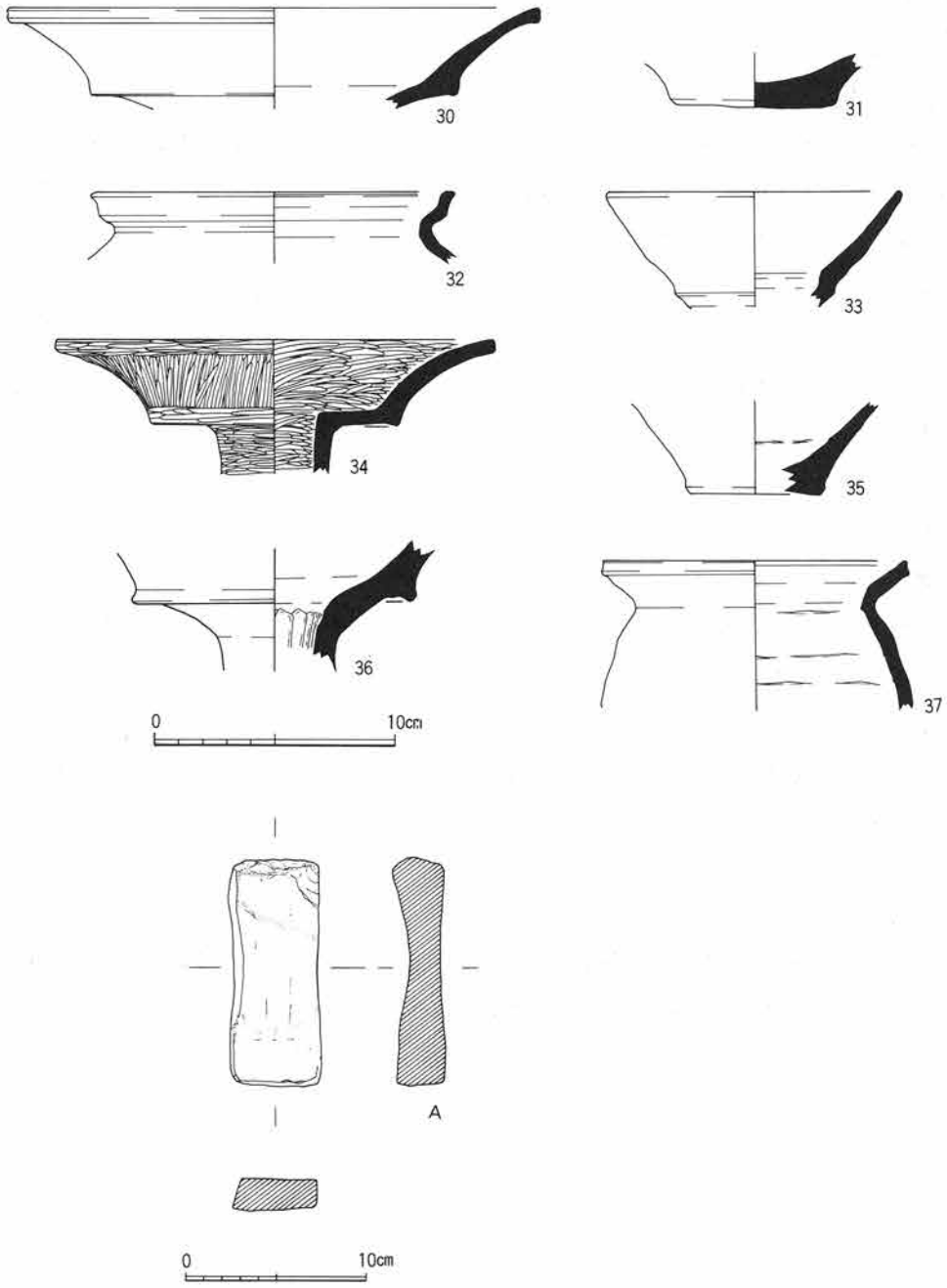
小型丸底壺〈33〉

口縁はほぼ直線的に外方にのび、体部は破損しているが、小さくつくと考えられる。口縁部径を大きく凌ぐ。外面には煤が付着している。

ＳＰ－５

壺Ａ〈34〉

頸部から真横にのびた後に、外反しながら立ち上がる二重口縁の壺である。口縁部端面外面と稜部には横方向のヘラミガキが施され、口縁部内面及び頸部内外面には横方向のヘラミガキが施されている。（森）



第14図　第３トレンチ出土遺物実側図

4．第4トレンチ

第4調査区は道路センター杭No.4＋60からNo.4＋90の間にトレンチを設定した。この調査区はおもに掘立柱建物と溝で構成された古墳時代前期の集落跡が検出された。以下におもな遺構と遺物の説明をくわえる。

（1）遺　構（第18図）

掘立柱建物

調査区の全般にわたって多数の柱穴を検出したが、調査区の制限もありその復元には非常に困難なものがあった。ここでは推定できた8棟の建物について記述する。

ＳＢ－1

調査区の北に位置するもので、南北2間×東西2間の規模を持つがやや東西の長さが長いものである。Ｐ－39には柱痕が存在していた。

ＳＢ－2

ＳＢ－1の南に位置するもので、南北2間×南西2間の規模を持つ方形のものである。Ｐ－34、35、37、38には柱痕が存在していた。また、Ｐ－32には柱が沈むのを防いだと考えられる転用の礎板が交互に引かれていた。これらの礎板状のものは当時の土壌が不安定だとみえ随所にみられた。

ＳＢ－3

調査区のほぼ中央、軸を同じくするようにＳＢ－7のすぐ南に位置している。建物の規模は南北1間×東西2間のもので東西に長い長屋風になっている。

ＳＢ－4

調査区の西端に一部分がかかるように位置するもので、東西3間×南北1間以上の規模を持つ東西が長い建物になると考えられる。

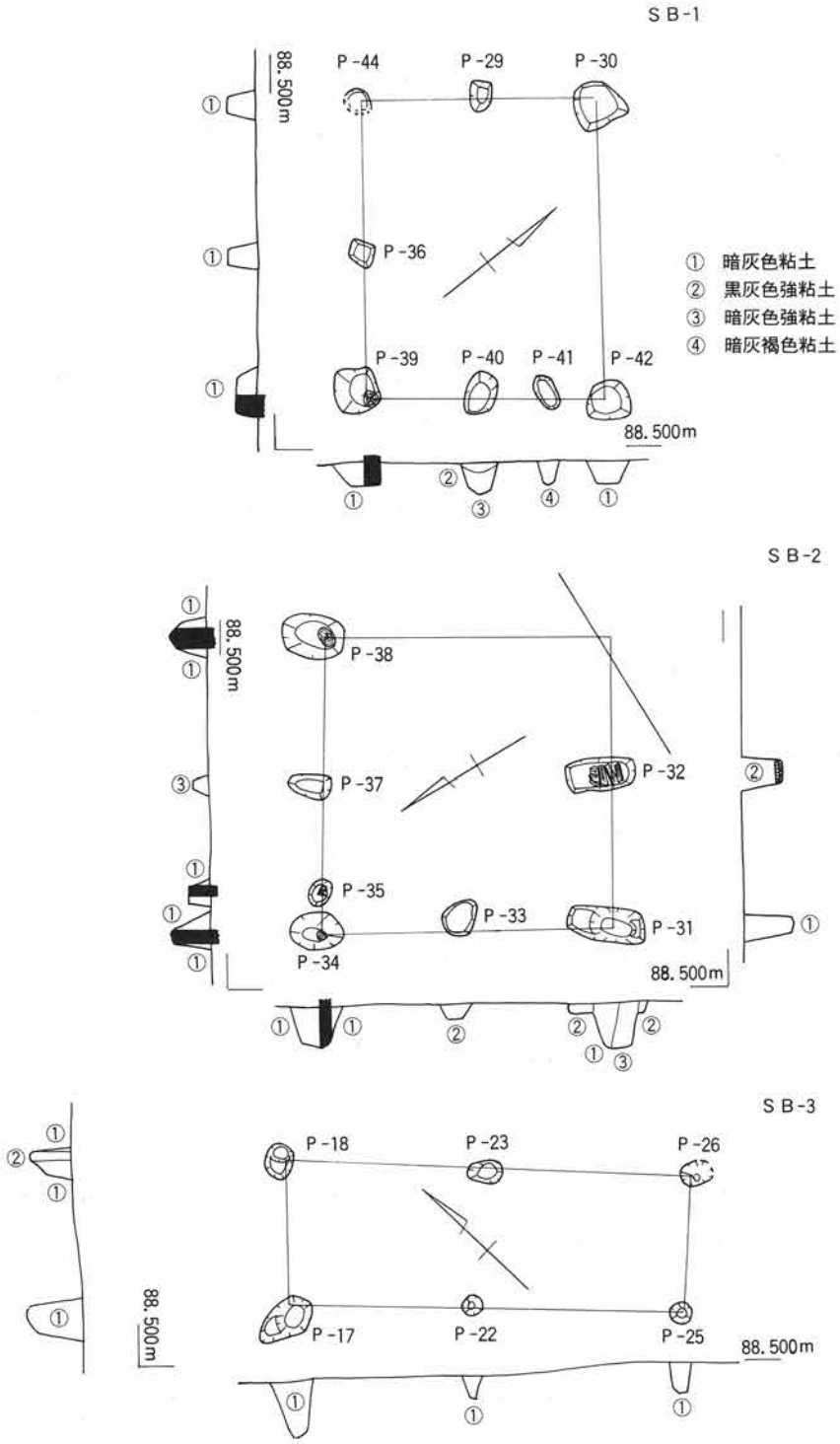
ＳＢ－5

調査区の南西端に位置するもので、南北2間×東西1間（但し北側では間に1間多い）の規模を持つ南北が長いものである。Ｐ－4、8に柱痕が存在していた。

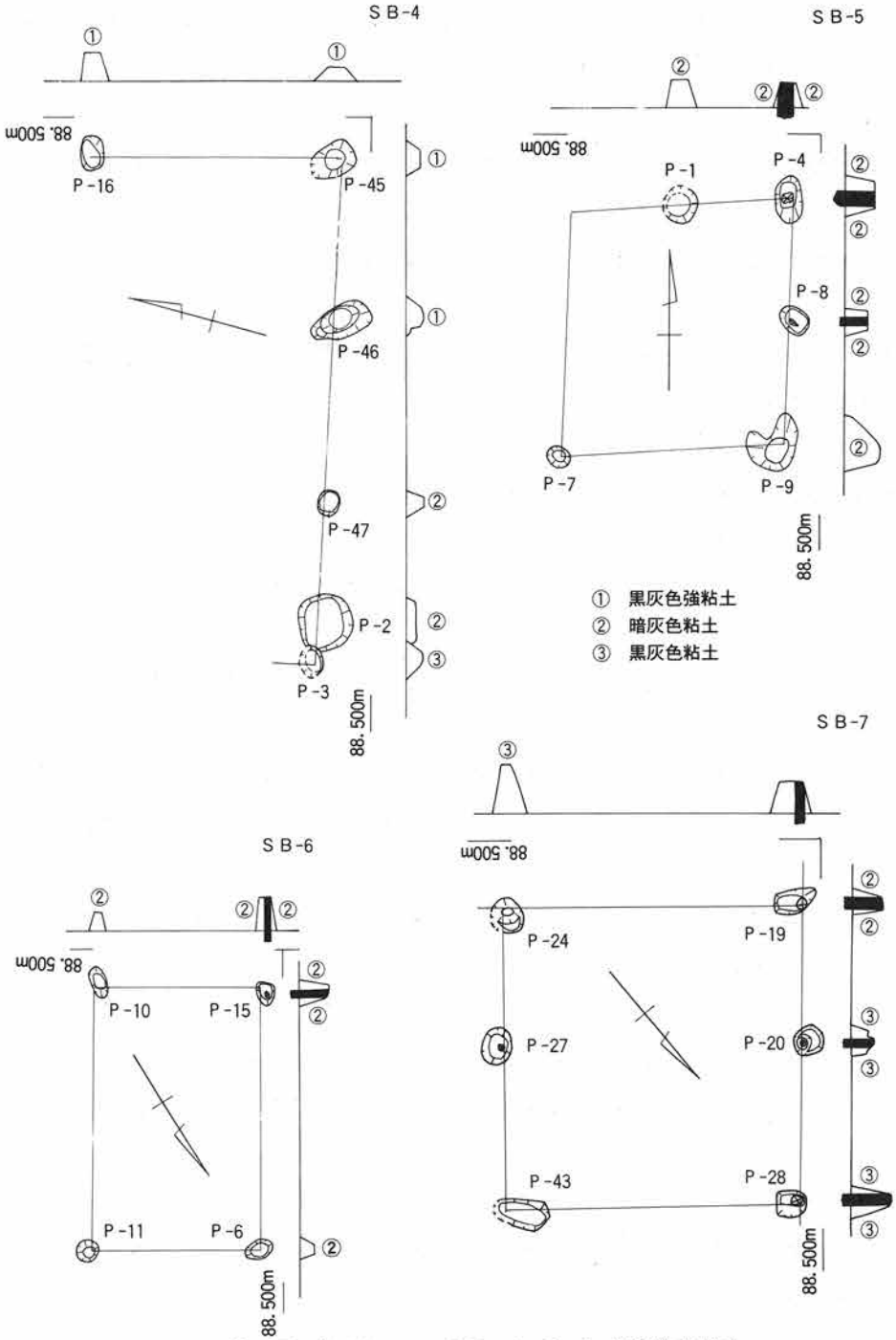
ＳＢ－6

ＳＢ－4とＳＢ－5の間に位置するものでＳＢ－3、7と同じ方位を持つものである。規模は南北間1間×東西1間で南北に長いものである。Ｐ－15に柱痕が存在していた。

ＳＢ－7



第15図　第４トレンチＳＢ－１．２．３建物平面図



第16図　第４トレンチＳＢ－４．５．６．７建物平面図

ＳＢ－２とＳＢ－３の間に位置するものでＳＢ－３と同じ方位を持つものである。規模は南北２間×東西１間で方形のものである。Ｐ－19、20、28に柱痕が存在していた。

ＳＢ－８

調査区の南東端に位置するもので規模は南北２間×東西２間のほぼ方形のものである。

溝

調査区全域で東西溝３条、南北３条の計６条の溝を検出した。

ＳＤ－１

調査区の中央を一貫して南北に流れる溝である。出土遺物から中世末から近世末まで存在したものと考えられる。

ＳＤ－２

調査区の中央を東西に流れるもので、西端をＳＤ－１に切られているがここでいきどまるものと考えられる。東端は調査区につきあたるところで直角に曲がりＳＤ－３につながる。幅は約40cmと狭く断面Ｖ字を呈する。埋土は暗灰色粘土であった。

ＳＤ－３

ＳＤ－２より北に直角に曲がりＳＤ－１につきあたるまでの分部の南北溝である。

ＳＤ－４

ＳＤ－３がＳＤ－１につきあたり、そこより直角に曲がり東端が調査区の外へ伸びる東西溝である。ＳＤ－２からここまで一貫したものと考えられるが、性格は不明である。

ＳＤ－５

ＳＢ－７の西に位置するもので、西は調査区外に伸びそこより東に４ｍほどいったところでいきどまる東西溝である。

ＳＤ－６

調査区の北西を南北に走る溝で５ｍ程検出した。北端は円形の水溜りでいきどまり、南は２ｍ程いったところからやや東に向きをかえいきどまる。ＳＫ－３に切られている。

土　壙

ＳＫ－１

調査区の南端に位置するもので第３調査区から続くものである。南北５ｍを測るものである。中央をＳＤ－１に切られている。

ＳＫ－２（第17図）

ＳＫ－１の範囲に位置するものであるが、ＳＤ－１より東側の部分をＳＫ－２として扱

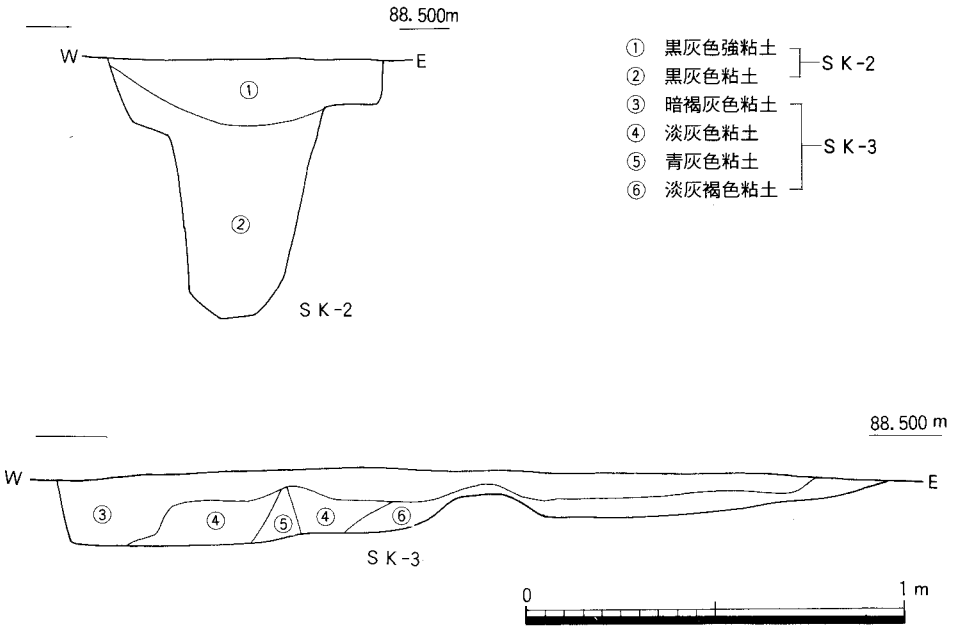
った。上部方形で下部円形の途中で２段になったもので、下部の径は約50cmで深さ約80cm、のもので埋土は上層が黒灰色強粘土で下層が黒灰色粘土であった。

ＳＫ－３（第17図）

調査区の北東に位置しＳＤ－６を切るもので、東西方向の長楕円を呈している。内部には４層の堆積がみられた。

柱穴状遺構

この調査区では全部で144個の柱穴が検出された。このなかには明確に建物を構成するものも含まれている。多くのものは埋土から（ほとんどが暗灰色粘土もしくは黒灰色粘土であった。）これらの建物と同じ時代に掘りこまれたものであると考えられるが調査区の制約もあって建物を構成することができなかった。柱穴の形は大小さまざまであるが円形、楕円形、角丸方形のものがほとんどであった。地山は現在その下を琵琶湖に向かって地下水が多量に流れており湧水の激しい軟弱なもので（礎板等から当時も軟弱であったと考えられる。）あるが、それが幸いして柱穴には多量の柱が残存していた。年輪年代測定を行なったが材質が全て杉と栗であった為データーは得られなかった。　（木戸）



第17図　第４トレンチＳＫ－２、３土層断面図

（２）出土遺物

ＳＤ－２（第19図）

甕Ｃ〈38〉

やや内湾ぎみに外方にのび、端部は若干内側に肥厚する口縁をもつものである。体部は外面を横方向のハケ目、内面をヘラ削りを施している。

甕Ⅰ〈39、40〉

39、40ともに斜め上方に立ち上がったのちに、そのまま上へ立ち上がったもので端部を横につまみ出す口縁部をもつものである。外部はハケ目を施している。

ＳＫ－１（第19図）

小型丸底壺〈41〉

ほぼ直線的に外方にのび端部は丸く収める口縁部と口縁部からそのまま緩く屈曲して胴部に至るものである。口縁部の最大径が胴部最大径を大きく凌駕している。

器台Ａ〈42〉

受部は斜め上方に立ち上がり、端部を上につまみ上げるものである。また受部と脚部は貫通している。受部外面下半は面取りされており、脚部には三方透かしがある。

鉢〈46〉

口縁部が二段に屈曲する鉢である。内外面とも磨滅が著しく調整は観察できない。

器台〈45〉

斜め上方に伸び、口縁端部を上下に拡張しているものである。

甕Ⅰ〈43、44、48〉

いずれも口縁部を斜め上方に一旦立ち上がったのちに、さらに上に立ち上がり端部をやや上方につまみ出すものである。43、44は内面にヘラ削りを施している。

ＳＫ－３（第19図）

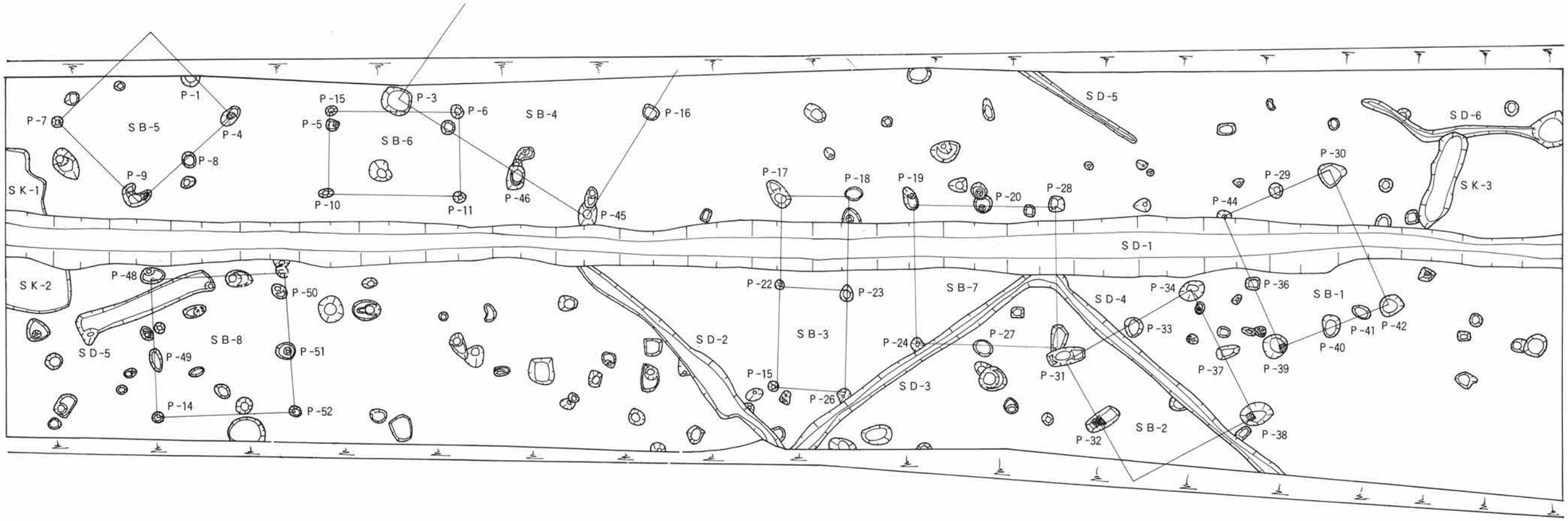
ミニチュア土器〈51〉

底部径2.6 cmを計るミニチュア土器で外面には脚部を造り出した時の指押さえの痕が残っている。底部内外面にはナデが施されている。

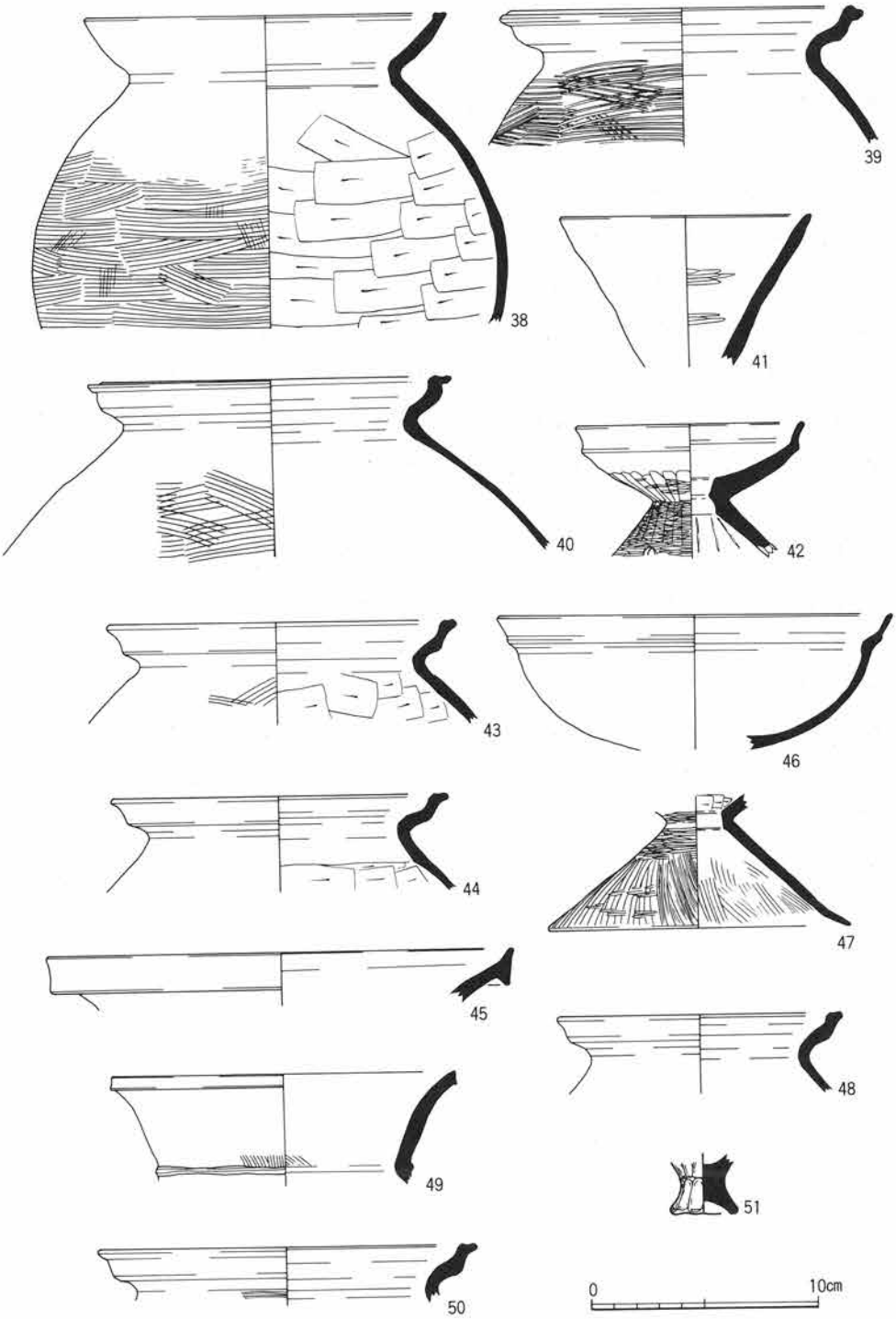
ＳＰ－32（第19）

甕Ⅰ〈50〉

斜め上方に立ち上がった後に、さらに上に立ち上がり端部を横につまみ出す口縁部を持つものである。（森）



第18図　第４トレンチ平面図



第19図　第４トレンチ出土遺物実測図

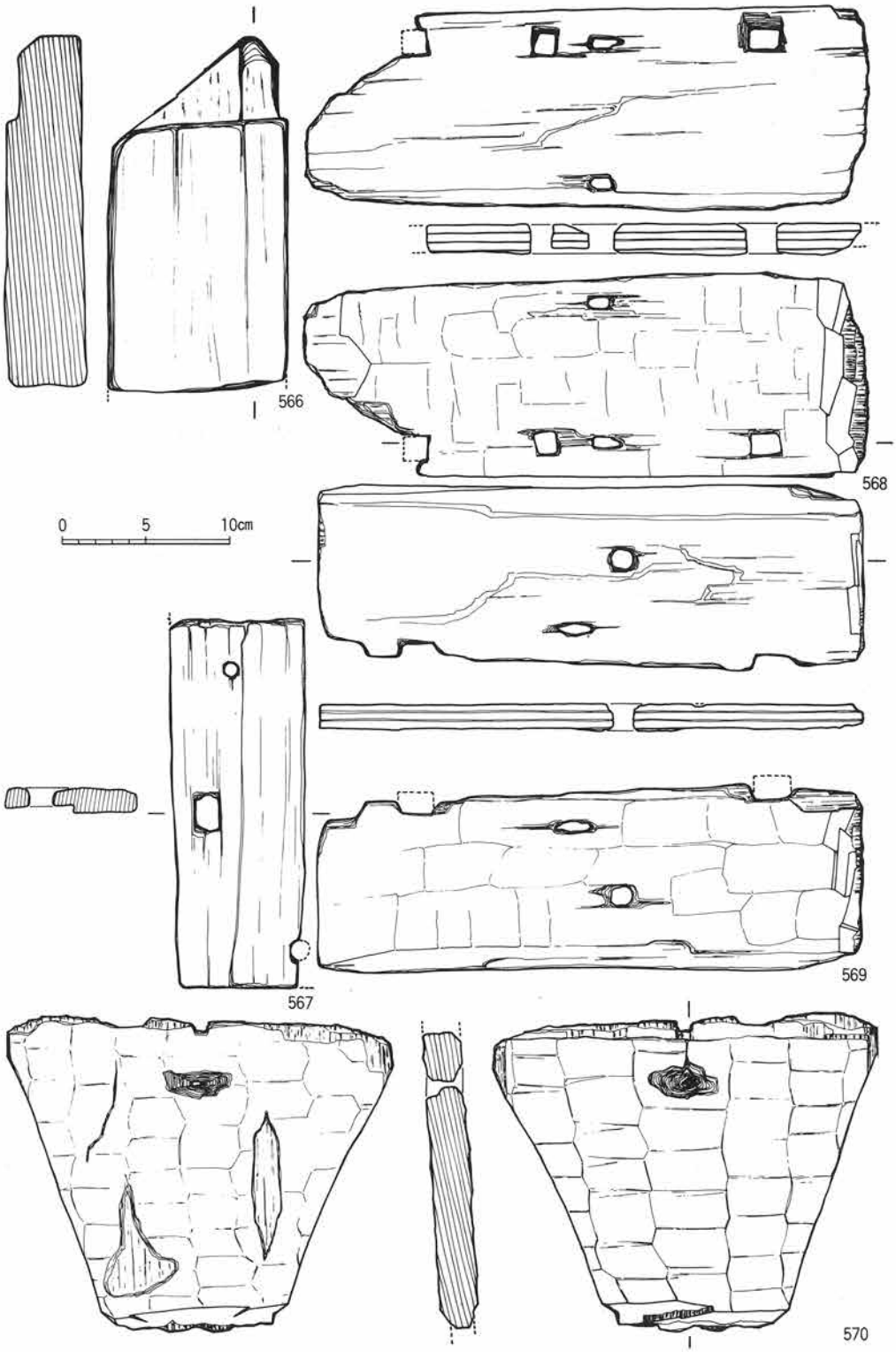
第４トレンチ出土木製品（第20図）

板状木製品（566～569）

566は厚さ５cmを計る板状のもので一方は欠損しているが、他方は端を斜めに切り落とし段をつくり組合せられるように加工してある。Ｐ－34より出土している。567は厚さ２cmを計る板状の木製品で中央に長方形のほぞ穴があけられ、両側に蓮かいに円形のほぞ穴があけられている。Ｐ－32より出土している。568は厚さ３cmを計る板状の木製品で両端ともに欠損している。側辺の片側には方形のほぞ穴があけられており、またその間のひとつには対になるようにやや小さい長方形の穴があけられている。片面には非常によく加工痕がのこっている。Ｐ－32より出土している。569は厚さ３cmを計る板状の木製品で中央には２つのほぞ穴があけられ、側辺には面側に方形のほぞ穴があけられている。片面には非常によく加工痕がのこっている。Ｐ－32より出土している。568と一連のものの可能性が高い。Ｐ－32より出土している。いずれも柱穴から出土しているが、これらは軟弱な土壌を考慮して柱が沈まないようにするため礎板として使用されていたものと考えられる。

鍬状木製品未製品（570）

厚さ３cmを計る鍬の未製品の一部と考えられるもので上下端はいずれも欠損しているため現状は台形を呈している。両面とも加工痕が非常によくのこっている。中央部片側よりに両側よりの穿孔が認められる。Ｐ－38より出土している。軟弱な土壌を考慮して柱が沈まないようにするために礎板として使用されていたものと考えられる。　（木戸）



第20図　第４トレンチ出土木器実測図

5．第5トレンチ

第５トレンチは道路センター杭No.４＋90からNo.５＋50の間にトレンチを設定した。この調査区はおもに弥生時代末から古墳時代前期の溝と堀立柱建物や柱穴群、井戸、土壙などで構成されていた。以下におもな遺構と遺物の説明をくわえる。

（１）遺　構（第23、24図）

堀立柱建物

ＳＢ－１

調査区の北端に位置する建物で、南北１間×東西１間の規模を持つもので南北がやや長い方形のものである。ＳＤ－25、21を切っている。

ＳＢ－２

調査区の中央よりやや北よりの西端に位置するもので、南北１間×東西１間の規模を持つもので南北に長い長方形を呈する。ＳＤ－12を切っている。

溝

ＳＤ－１

調査区の中央を一貫しつ流れるもので北から３分の１あたりから始まりさらに調査区そ外に伸びている。出土遺物から中世末から近世末まで存続していたものと考えられる。

ＳＤ－２

調査区の南端にやや幅広くＳ字に曲がるもので３ｍほど検出している。埋土は暗黒灰色粘土であった。

ＳＤ－４

調査区の南に位置するパイプ型のもので北で大きな土壙状になっておりそこより溝状に伸びる。ＳＤ－５、８、ＳＫ－２を切っている。埋土は暗黒灰色粘土であった。

ＳＤ－５

調査区の南を東西方向に走るもので、西端をＳＤ－８によって切られているがここでいきどまりであると考えられる。西はＳＤ－６を切り、調査区外に伸びている。埋土は褐灰色粘土であった。

ＳＤ－８

ＳＤ－４に切られるもので東西方向に走るもので東は調査区外に伸びる。

ＳＤ－９

調査区の南端、ＳＤ－４とＳＤ－６とに挟まれた位置に存在する土壙状ものである。埋土は暗灰色粘土であった。

ＳＤ－10（第21図）

調査区の中央を東西に走る大きな溝でＳＤ－11を切る形で存在している。

ＳＤ－11（第21図）

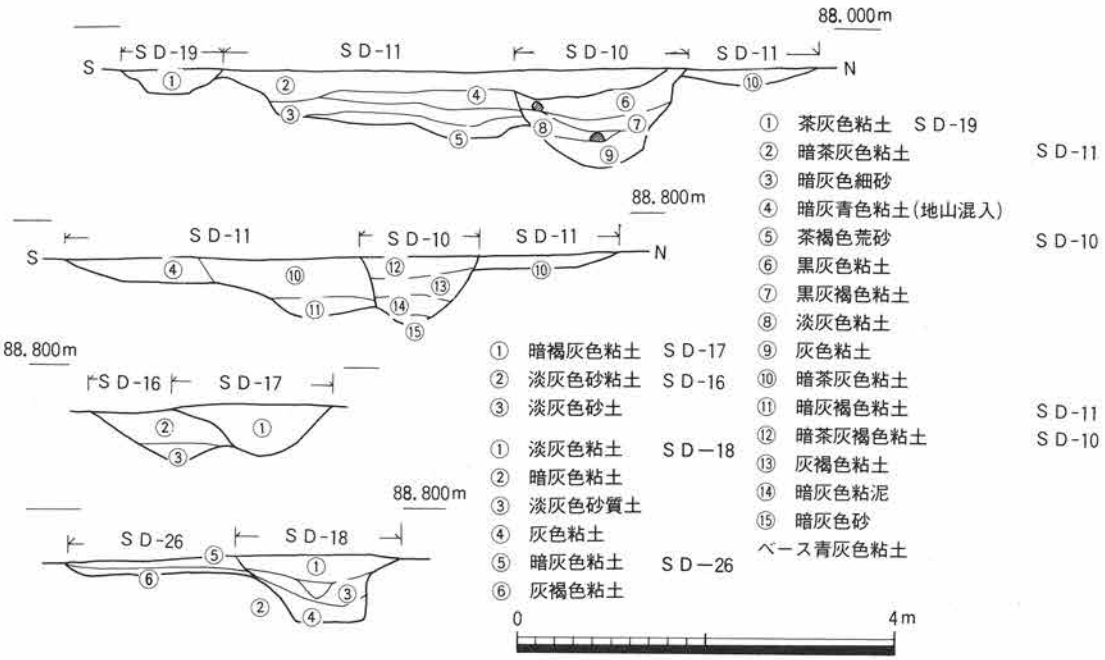
調査区の中央を東西に走るものでＳＤ－10、12、19、ＳＥ－２等によって切られている。ここよりは多数の土器と和製琴が出土している。

ＳＤ－12

調査区の北半を南北に走るもので、東西方向でトレンチに対して斜めに走る全ての溝を切っている。

ＳＤ－13

ＳＤ－11の北を同じ向きに東西に走るもので、真ん中あたりで二股に別れ途中をＳＫ－７によって切られている。



第21図　第５トレンチ溝土層断面図

ＳＤ－14

ＳＤ－15の西端を直行するように短く走るもので、断面Ｖ字を呈する。埋土は暗灰褐色粘砂であった。

ＳＤ－15

ＳＤ－11の北を同じ方向に走るものである。埋土は淡灰色粘砂であった。

ＳＤ－16、17（第21図）

ＳＤ－13の北を同じ方向に走るもので、途中でＳＤ－16を17が切っている。

ＳＤ－18（第21図）

ＳＤ－16をさらに北に同じ方向に走るもので、東端でＳＤ－30、26を切っている。

ＳＤ－19（第21図）

調査区の中央をトレンチに直行するように走る溝でＳＤ－12に切られＳＤ－11を切っている。

ＳＤ－20

調査区の北端を東西に走るもので、西端をＳＤ－１によって切られている。東端はトレンチ外に伸びている。埋土は暗灰色粘土であった。

ＳＤ－21

調査区の北を東西方向に走るものでＳＤ25、24を切っている。埋土淡灰色粘土であった

ＳＤ－22、23

ＳＤ－25を切り、ＳＤ－26に切られるもので平行に湾曲しながら北に走っている。いずれも埋土は暗灰色粘土であった。

ＳＤ－24

調査区の北西を東西に斜めに走るもので、ＳＤ－21に切られ、ＳＤ－24を切っている。埋土は暗褐灰色粘土であった。

ＳＤ－25

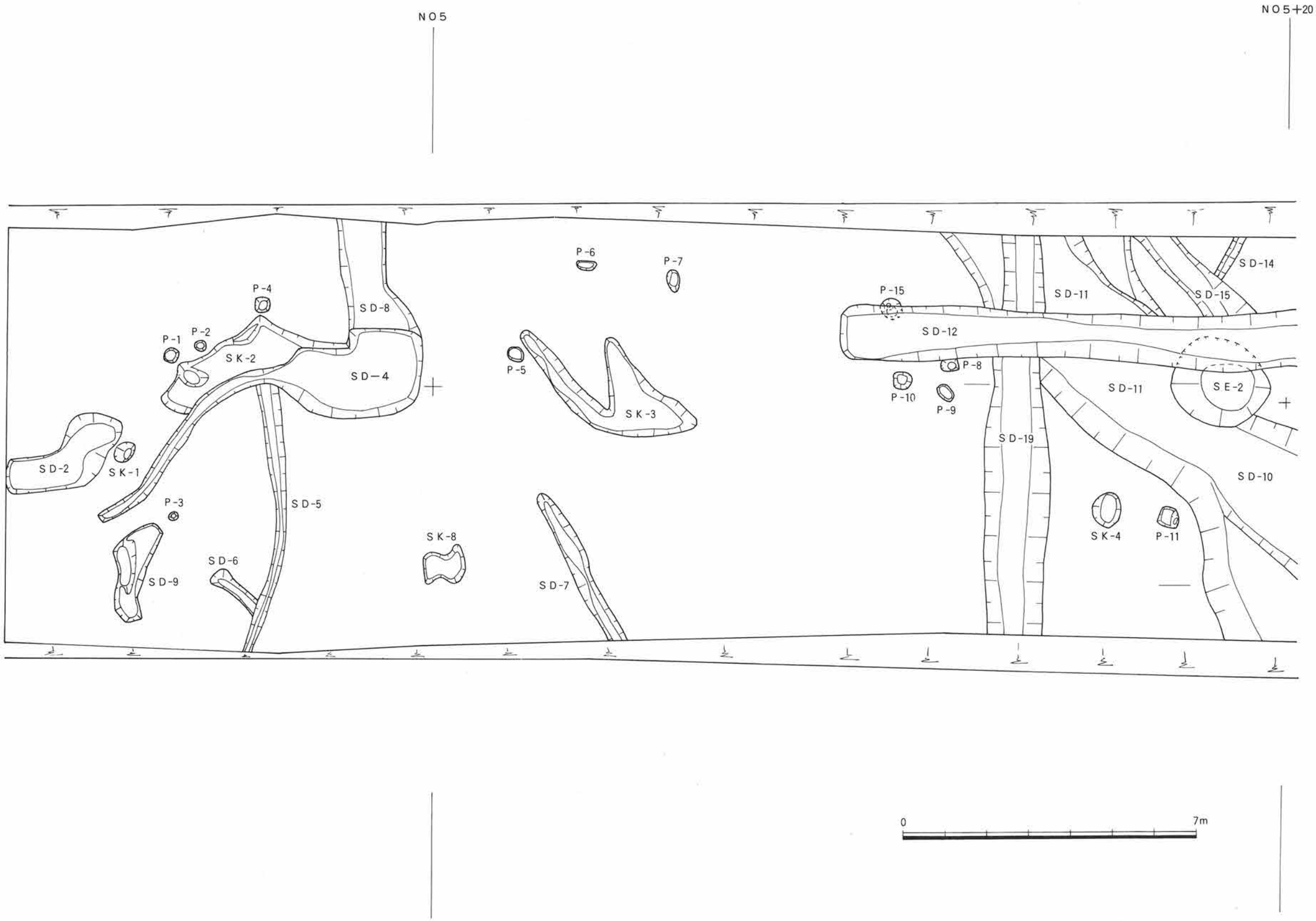
調査区の東北を斜めに走るもので、東端はかなり幅ひろになりそこより細い溝が北にのびている。ほぼ全てのものに切られている。埋土は褐灰色粘土であった。

ＳＤ－26

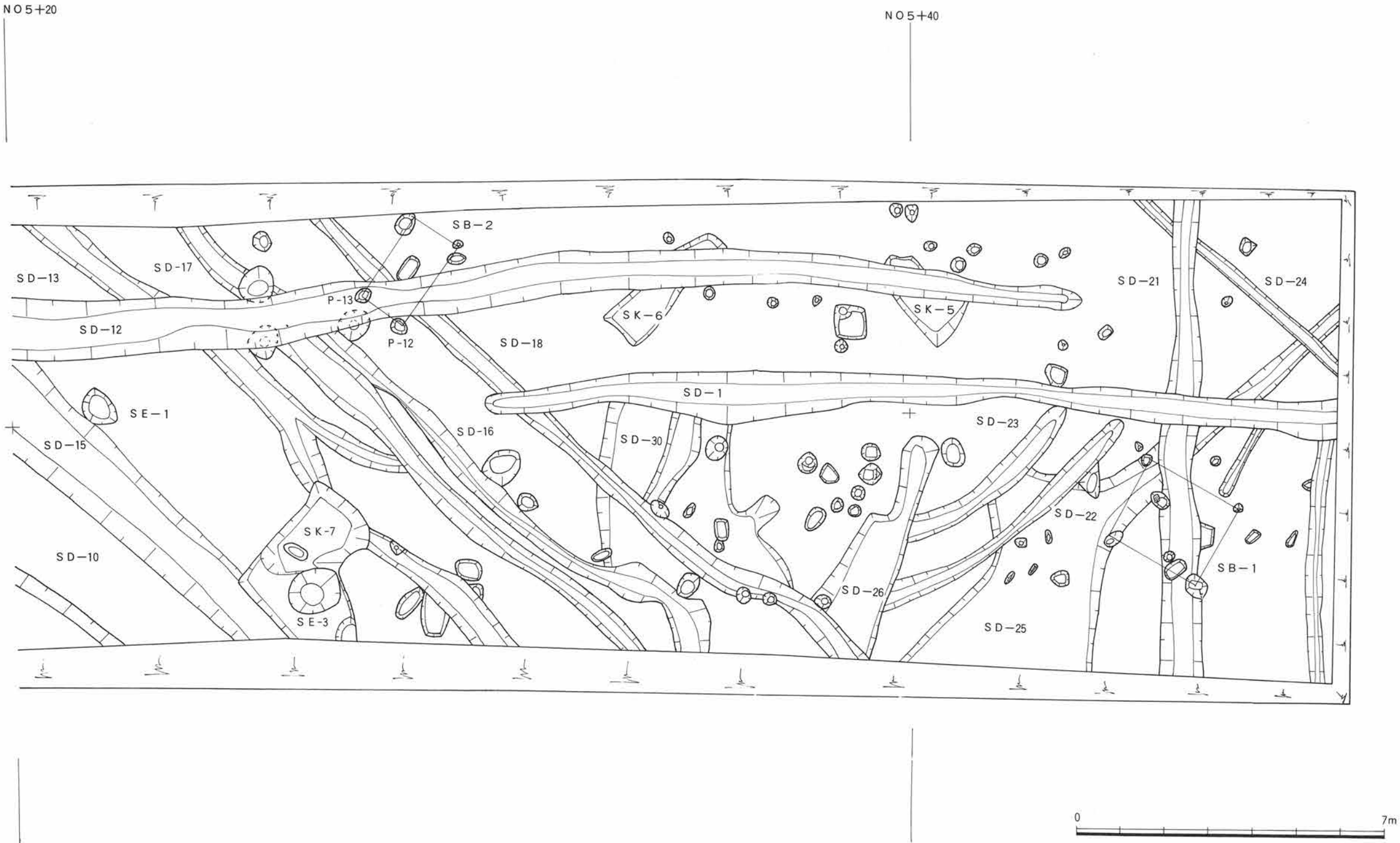
ＳＤ－18に切られ、ＳＤ－22を23切っているもので包丁形を呈するものである。

ＳＤ－30

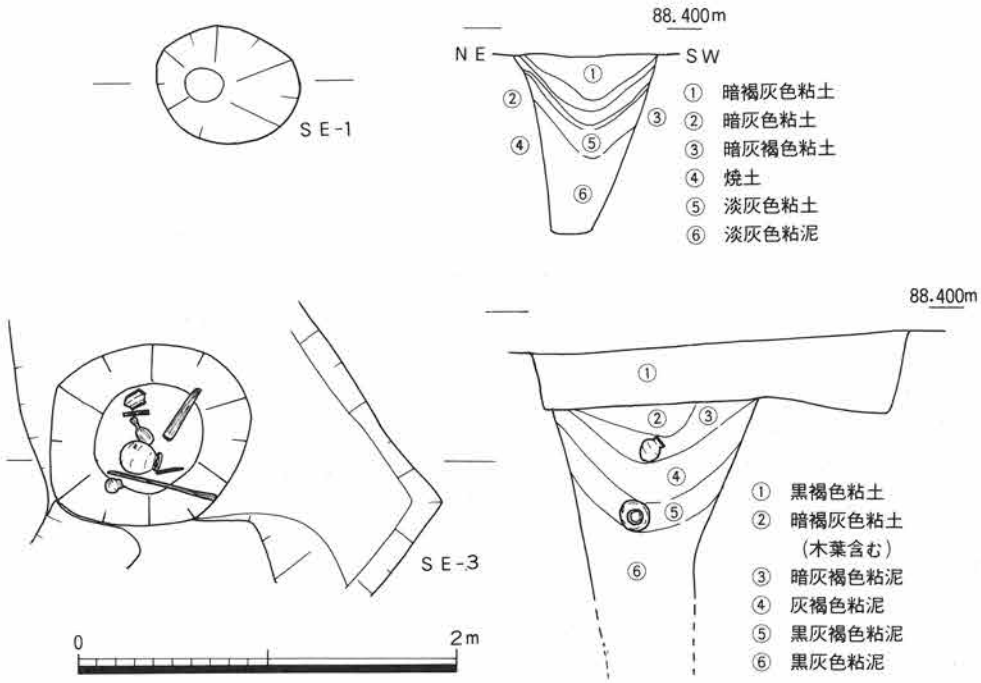
ＳＤ－１、18、16によって切られているもので東西方向に走るが、不整形を呈するものである。



第22図　第５トレンチ南半平面図



第23図　第５トレンチ北半平面図



第24図　第５トレンチＳＥ—1，3平面断面図

井　戸

ＳＥ－１（第22図）

ＳＤ－15の北側に位置するもので直径約80cmを測るもので、深さ１ｍを測った。埋土は６層で構成されており、堆積は途中に焼土を挟みながらレンズ状を呈していた。

ＳＥ－２

ＳＤ－11を切る形で存在する直径約３ｍを測る井戸で、深さ１ｍを測る。

ＳＥ－３

ＳＤ－11と13を切る形で存在するもので、直径約１ｍを測る。深さは３ｍほど掘り下げたが湧水と軟弱な地盤にさまたげられて最下部を確認することはできなかった。井戸の上部はＬ字型の土壙からなっている。埋土はレンズ状に堆積していたが、③層で近江型甕の完形〈321〉、小型丸底壷〈323、324〉と木製品、瓢箪が出土している。また、⑤層で近江型甕の完形〈317〉が出土している。また、⑥層からは〈317〉が出土した。

土　壙

土壙はこの調査区では全てで８基が検出されたが、形状はＳＫ－２や３のようにアメーバー状のものＳＫ－１や４のように円形のものＳＫ－５や６の方形のものと様々であった。

（木戸）

（2）遺　物

ＳＤ－２（第25図）

壷Ｂ〈52〉

外反しながら広がり、端部に面をもつ口縁の壷で頸部には刻み目突帯を一条めぐらせている。口縁部内面には縦方向のハケ目が、頸部内面には横方向のハケ目が施されている。

壷　〈57〉

57は壷の底部である。円形でやや上げ底の底部を形成している。

甕　〈54、55、56、58、59〉

54はほぼ直線的に外方にのび、端部を上方に少しつまみ上げて丸く収める口縁をもつ。胴部の内面には指頭圧痕が残る。55、56、58、59は甕の底部である。甕の底部はいずれも外面にハケ目をのこす。56は内面に板状工具による蜘の巣状の調整が残る。

ＳＤ－４（第25図）

壷Ｅ〈61〉

ほぼ直線的に外方に開く口縁をなし端部を若干上へつまみあげておわる。口縁部は縦方向のハケ目が施され、口縁端部付近をハケ目の後にナデている。また、頸部付近には口縁部にハケ目を施した際の工具の痕が強く残っている。

甕Ｃ〈60〉

直線的に外方に開き端部を上方につまみ上げて丸く収める口縁をもつ。口縁部は内外面ともにナデていて、両面に煤が付着している。

鉢Ｃ〈62〉

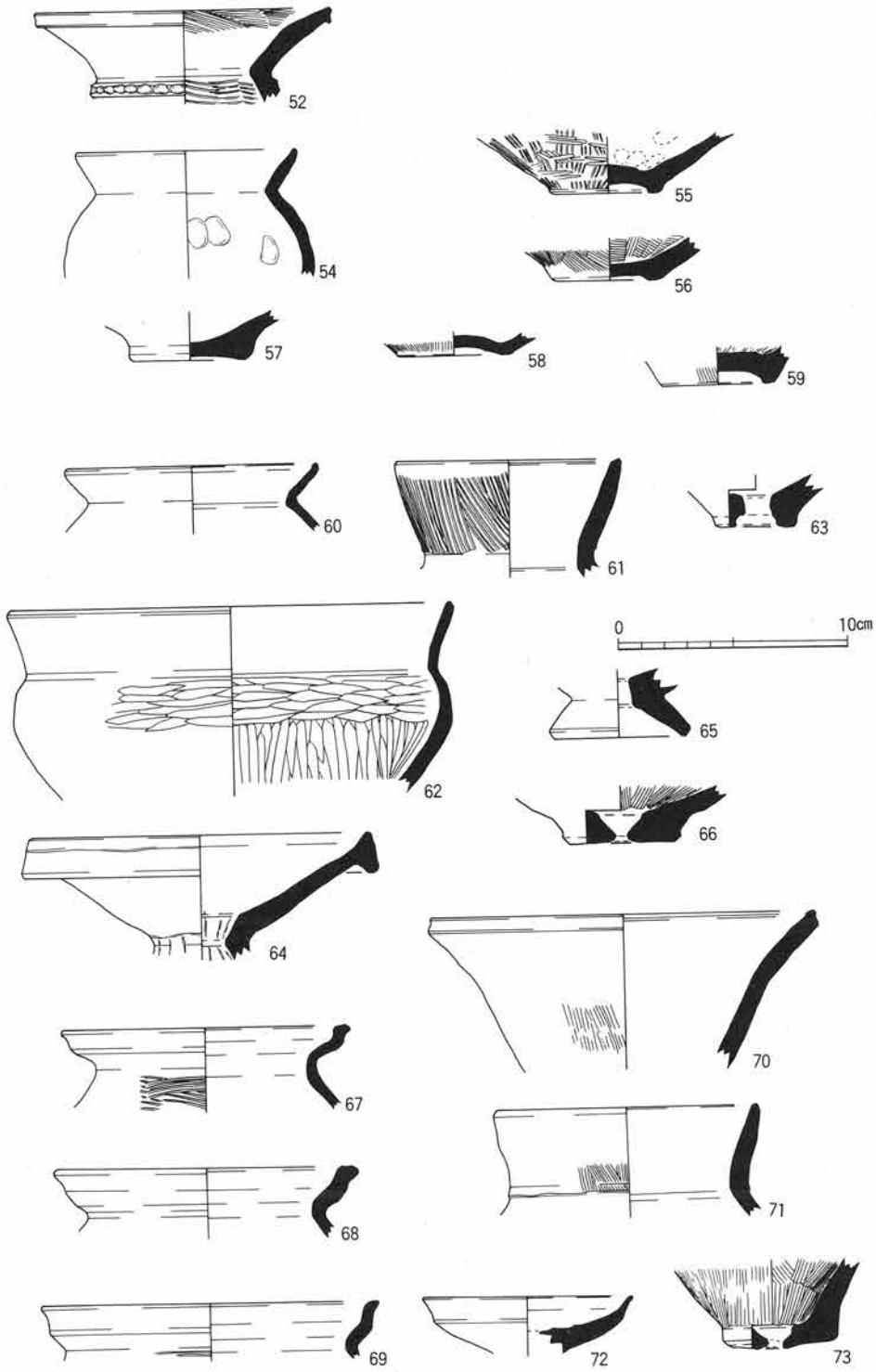
斜め上にほぼ直線的にのび端部を丸く収める口縁部をもち、胴部最大径が上位にくる鉢である。口縁部は内外面ともにナデている。胴部外面の上部は横方面のヘラ磨きだが下半は磨滅している。内面は上半が横方面のヘラ磨き、下半は縦方向のヘラ磨きを施しているヘラ磨きの単位はすべて大きいものである。また口縁部下半から胴部の外面には煤が付着している。

甑〈63〉

甕の底部に穿孔しているもので底部外面の孔のほうが広がっている。

ＳＤ－５（第25図）

器台Ａ〈64〉



第25図　第５トレンチＳＤ－２、４、５、８、12出土遺物実測図

受部は斜め上方に直線的にのび、端部は上下にそれぞれ拡張され、0.8 cmほどの口縁帯をつくり出す。受部と脚部は貫通するものである。口縁端部、受部内外面はいずれもナデている。また、受部から脚部にかけては成形の際の絞り痕が残っている。

器台 〈65〉

65は低脚の器台の脚部と考えられる。低径は5.8 cmである。底部は穿孔されている。当初、脚台付甕とも考えられたが、甕に穿孔し甑として用いるなら脚がついているのが解することができない。そこで類例を知らないが低脚器台と暫定的にしておきたい。

ＳＤ－８（第25図）

甑 〈66〉

底部内面側に大きく穿孔され、甑として用いられたもので内面には縦方向のハケ目施されている。

ＳＤ－９（第26図）

手焙り形土器〈82〉

ドーム状に立ち上がる笠部分の前縁部である。２条の細い突帯を貼り付け、その間に２個１単位の円形浮紋を貼り付けている。また、側面にはヘラ状工具による４条の直線紋がみられる。

ＳＤ－12（第25図）

壷Ｅ〈70〉

口縁部は中位よりやや外反して外方に開き、端部は上方につまみあげている。外面は縦方向のハケ目を施した後に横ナデを施している。内面は横ナデである。

壷Ｆ〈71〉

口縁部が直線的に直立するものである。口縁部は磨滅しているが、下半部に縦方向のハケ目を残している。

甕Ｉ〈67、68、69〉

67、69は斜め上方に立ち上がった後に上方に立ち上がり、端部を斜め上方につまみだす口縁をもつ。67は胴部外面に横方向のハケ目が施され煤が付着している。68は口縁が斜め上方に立ち上がり、そのまま角度を変えて斜め上方に立ち上がり端部は横につまみだす。受口状口縁部の立ち上がりはなだらかで明確な稜を持たず、全体にずんぐりとしている。

器台Ａ〈72〉

受部は見込み部に段をもって立ち上がり、端部を上方にナデることによりつまみ上げて

いる。受部は磨滅しているが、一部にヘラ磨きを残している。受部と脚部は貫通している

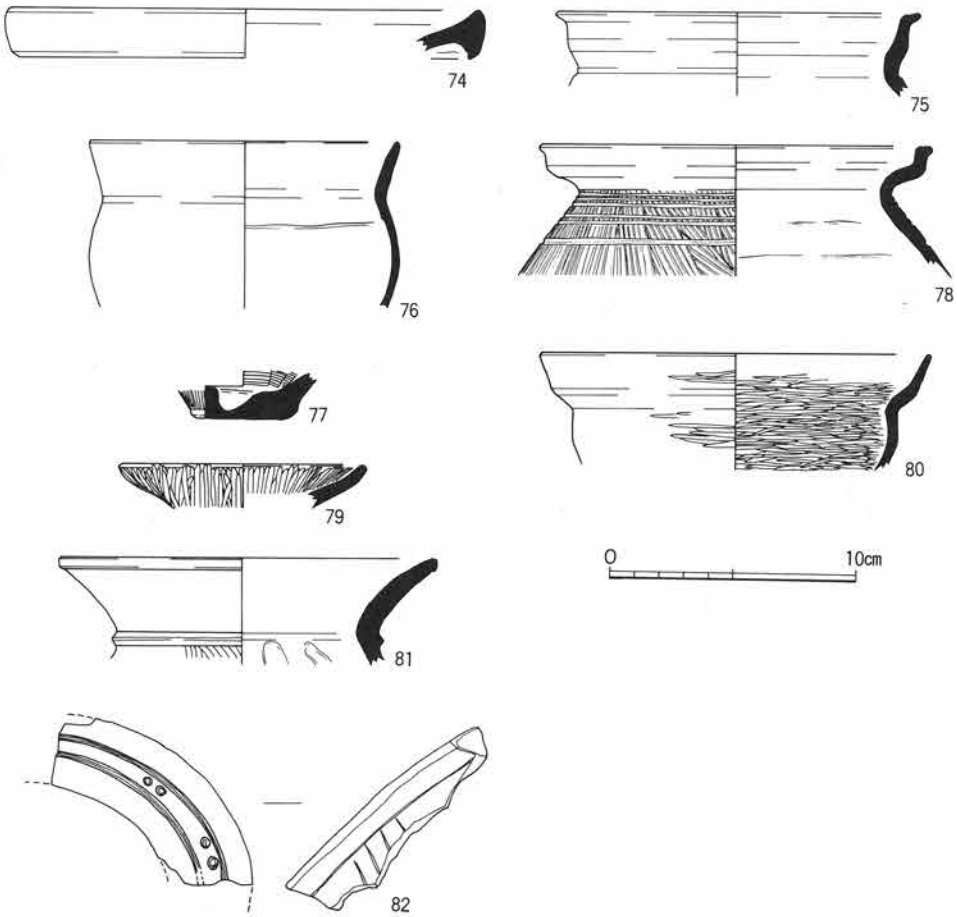
甑　〈73〉

底部内面側に広く穿孔されているもので、内外面に縦方向のハケ目が施されている。

ＳＤ－15

甕Ⅰ〈75〉

やや斜め上方に立ち上がった後にそのまま真上に立ち上がり、端部を斜め上につまみだす口縁をもつが他の受口状口縁のものよりも直線に近く立ち上がるものであり内外面はナデている。



第26図　第５トレンチＳＤ－９、15、19、21、23、24、26出土遺物実測図

器台A〈74〉

受部は直線的にのび端部を上下に拡張し口縁帯をつくり出すものである。口縁部だけの破片であるが、第5トレンチSD－5出土のもの（第25図64）と同一のものと考えられるため、受部脚部が貫通するタイプのものであろう。

SD－19（第26図）

鉢　〈76〉

やや特異であるが鉢に分類した。口縁部は外方に直線的にのび端部は丸く収める。胴部最大径は中位にある。口縁部、脚部ともに内外面はナデられている。さらに、両面ともに煤が付着している。

SD－21（第26図）

甑　〈77〉

底部の内面から穿孔しかけてやめているため孔は貫通していない。一応甑として分類したが孔が貫通していないので甑としての機能は果たしていない。内外面ともハケ目である

SD－23（第26図）

甕I〈78〉

口縁は斜め上方に立ち上がった後に真上に立ち上がり、端部を横につまみ出すものである。胴部外面は縦方向のハケ目を施した後に、ヘラ描直線紋を肩部に6条施している。胴部内面はナデている。また、口縁部から胴部にかけ外面に煤が一面に強く付着している。

SD－24（第26図）

鉢C〈80〉

口縁部が二段に屈曲し外方にひらく鉢である。内面は丁寧にヘラ磨きが施されている。外面にもヘラ磨きが施されている。

器台〈79〉

受部は途中で内側に屈曲し端部は丸く収める。受部は内外ともに丁寧に縦方向のヘラ磨きを施す。受部が貫通するかどうかは不明である。

SD－26（第26図）

壷B〈81〉

外反しながら広がる口縁をもつもので、口縁部の内外面及び、胴部内面はナデており胴部外面は縦方向のハケ目である。頸部には断面三角形の突帯を一条貼っている。また、外面は一部黒変し内面には煤が付着している。

ＳＤ－10（第27、28、29図）

壷Ｅ〈100〉

ほぼ直線的に外方へ開き、端部は丸く収める口縁をもつものである。頸部には山形の突帯を１条貼り巡らす。突帯の直ぐ上位にはナデが施されている。

壷Ａ〈97、102、108〉

97は二重口縁壷の頸部から口縁部が横に開く部分である。内外面ともナデている。102は口径が30.2cmの大型品である。口縁部は中程に方形の突帯をつくり出した後に更に外方に開き、端部は面をなしている。内面には横方向のハケ目が施されている。108は頸部である。頸部から胴部に変わるところに突帯を一条めぐらせている。頸部の内外面にはヘラ削りが施されている。

壷Ｃ〈98〉

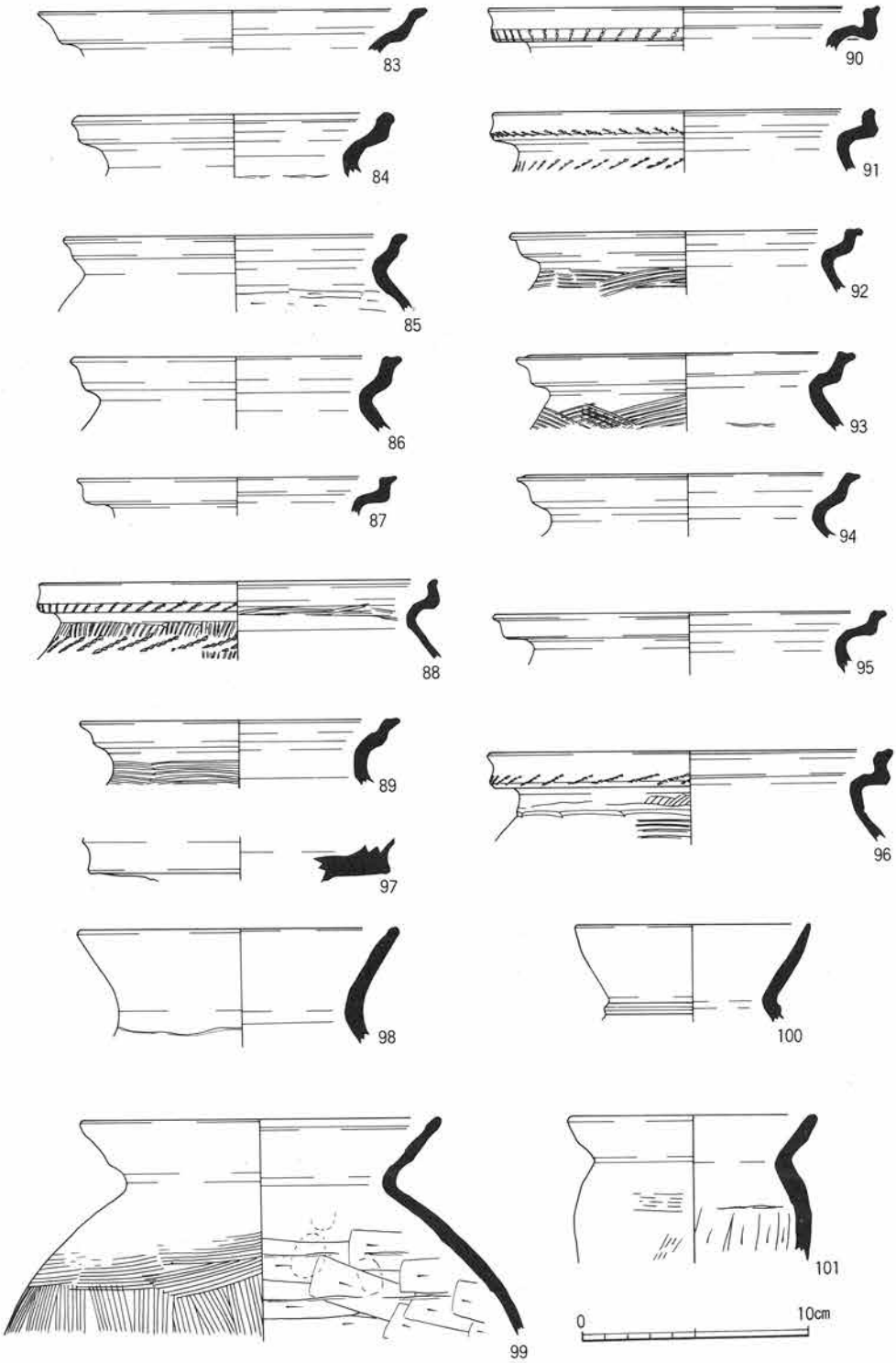
ほぼ直線的に外方へ開き、端部は丸く収める口縁部をもつものである。口縁部は内外面ともにナデている。

甕Ｃ〈99〉

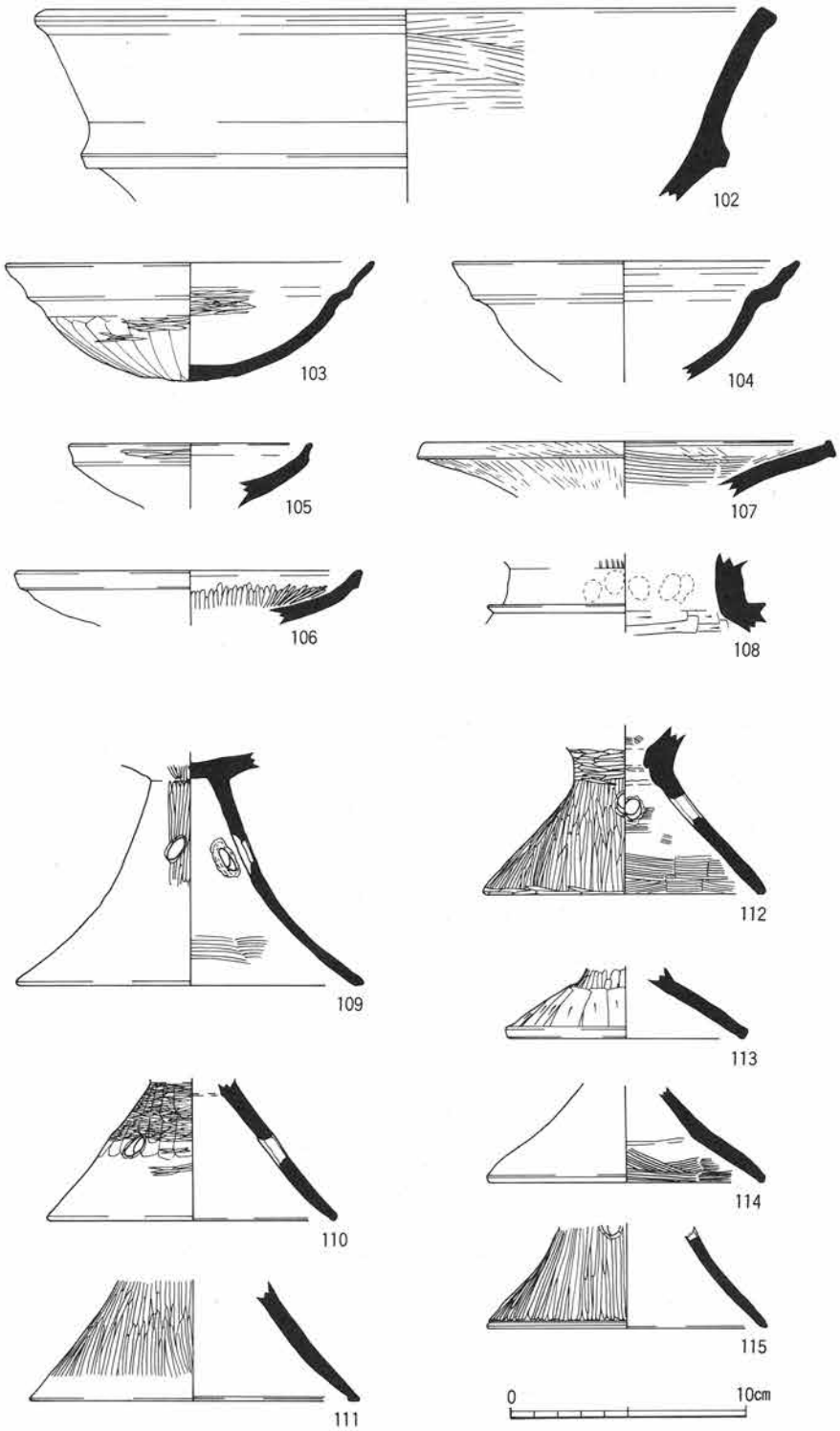
口縁部は外方に直線的に開き端部を丸く収める。口縁にはナデた時の段が残っている胴部外面は上半を横方向のハケ目を施した後に肩部はナデている。中位は縦方向のハケ目を施している。なた、胴部内面はヘラ削りがされていて、一部には指ナデの痕が認められる

甕Ｉ〈83～96〉

83、86、94、95は口縁部が斜め上方に立ち上がった後にさらに角度を変えて斜め上方に立ち上がり、端部をつまみ出しているものである。89は胴部外面に横方向のハケ目が施されている。85は口縁部が斜め上方に立ち上がった後に上方に立ち上がり、ナデることによって端部をつまみだしているもので胴部内面には横方向のヘラ削りが施されている。87は口縁部が横へひらいた後に上え立ち上がり、端部を横につまみだしているものである。84は口縁部が斜め上方に立ち上がった後に上に立ち上がり端部はそのまま丸く収める。91は口縁部が横にひらいた後に内傾しながら立ち上がり、端部はつまみ出さずに山形をなしている。口縁部の下半に左上がりの櫛描列点紋がめぐらされている。さらに、肩部にも右上がりの櫛描列点紋が施されている。88、90、96は口縁部が横に開いた後にやや内傾して立ち上がり、端部は斜め上方につまみ出すものである。特に、90、96は強くつまみ出したために端部に凹ができている。また、88は口縁部下半に右上がりの櫛描列点紋が施されて、胴部上半には縦方向のハケ目を施しその一部だけ横ナデを施しナデた上に右上がりの櫛描



第27図　第５トレンチＳＤ－10出土遺物実測図



第28図　第５トレンチＳＤ－10出土遺物実測図

列点紋を施している。90、96も口縁部下半に櫛描列点紋を施している。96はさらに胴部外面に縦と横のハケ目を施し、ヘラ描沈線を1条断続的に巡らしている。92、93は口縁部が斜め上方に立ち上がった後にほぼ上方に立ち上がる。端部は強く横につまみ出されているそのため、口縁端面には凹が生じている。92の胴部には横方面のハケ目が施されている。体部には煤が付着していた。93の胴部には右上がりのハケ目が施された後に左上がりのハケ目が施されている。体部には煤が付着していた。

甕 〈101〉

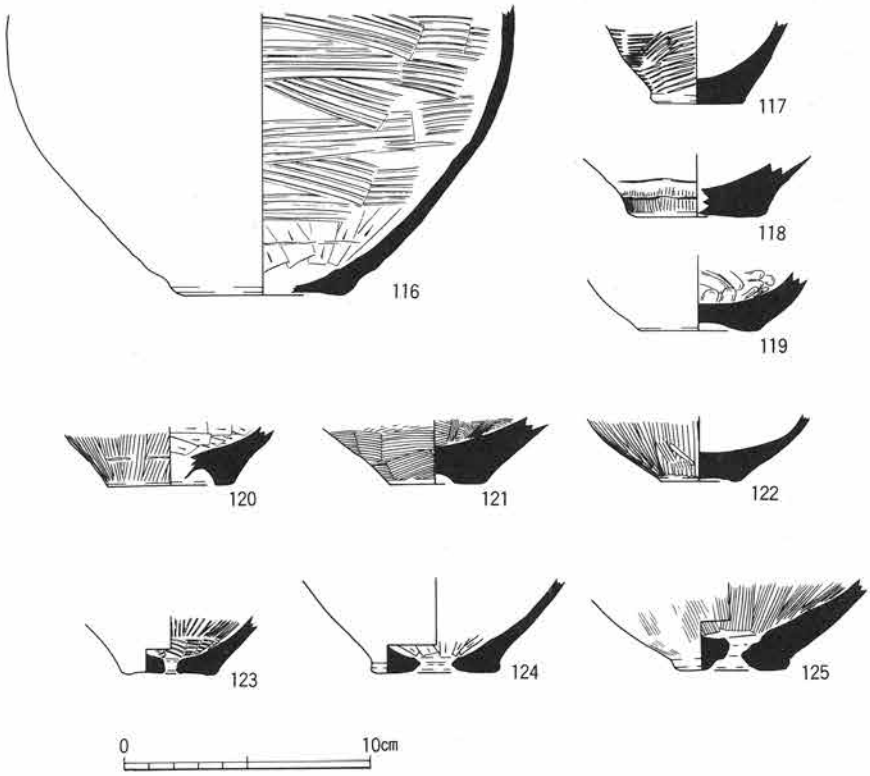
口縁は直線的に外方へ開き、端部を丸く収める。口縁部は強く二段にナデているので、ナデの境が稜として残っている。胴部の外面は磨滅しているが一部にハケ目がのこている また、胴部内面の下半は縦方向にヘラ削りを施している。全体としてもろく口縁部は変形している。

鉢C〈103、104〉

103、104ともに口縁が二段に屈曲して外方に開く鉢である。 103は口縁部から胴部にかかる部分の内面に横方向のヘラ磨きを施している。また、胴部外面は面取りをおこなったあとに横方向のヘラ磨きを施している。104は内外面全体にナデを施している。

器台〈105～107、109～115〉

105は端部をつまみ上げていて端部外面には横方向のヘラ磨きが施されている。106は内湾しながら広がり、端部は外側向きに面を作っている。受部端部内面及び外面はナデであり、また受部内面は丁寧なヘラ磨きが施されている。以下は脚部である。109はなだらかにひらく脚をもち、杯部から脚部までつくり出し、中を粘土でつめる円盤充塡である。脚よりから詰めた粘土をヘラ状工具で削りとって成形している。脚の外面には縦方向のヘラ磨きが、内面には横方向のハケ目が施されている。脚には四方に透かしがあり、脚端部付近は黒変している。112は器台の脚であり、脚は直線的に開く。受部と脚とが貫通しているもので四方に透かしがある。受部から脚部にかけての屈曲部は内面には紋り痕が残るが外面は横方向にヘラ磨きが施されている。また脚外面は縦方向のヘラ磨きが丁寧に施されていて、脚端部になると今度は横方向のヘラ磨きが施されている。全体として丁寧に調整がされている。また、脚の内面には横方向のハケ目が施されている。 110はほぼ直線的に伸びる脚をもち、三方に透かしをもつ。外面は透かし穴から上位にかけて面取りを行なったのちに、横方向に丁寧なヘラ磨きが施されている。脚部の上部の破損部分の観察と脚部の丁寧な調整から考えると受部と脚部とが貫通するタイプの器台と考えられる。 111はほぼ



第29図　第５トレンチＳＤ－10出土遺物実測図

直線的に開く脚をもち、脚端部は平たく面をもつ。脚部外面は全体に縦方向のヘラ磨きを施し、脚の端部のみを後からナデている。内面には一面に煤が付着している。 113は脚の中位で屈曲して開き端部に面をもつ。外面には縦方向のヘラ磨きを行なった後に下半部のみを縦方向にヘラ削りしている。114も113同様に中ほどで屈曲して開く脚をもつ。

脚の外面と内面の上半はナデ、脚下半はハケ目を施している。 115はほぼ直線的に開く脚をもち三方に透かしがある。脚外面は縦方向のヘラ磨きが施されて内面はナデてある。また、内外面の一部には煤が付着している。

壷・甕底部〈116～122〉

116は壷の胴部から底部である。 内面には横方向のハケ目が施され、 底部付近には縦方向のヘラ削りが残っている。底部はしっかりとした平底である。117と118はしっかりとした平底で、特に117の外面には叩きの痕が残っているので甕の底部と考えられる。119と122

は緩やかな上げ底であり、122の外面には縦方向のハケ目を施した後に一部ヘラ磨きがみられる。120、121は底部輪台となっている。120は外面を縦方向のハケ目が、内面には横方向のヘラ削りが施されている。121は内外面ともにハケ目が施されている。

甑〈123～125〉

123は底部内面を板状工具で止めながらナデている。124は底部内面を板状工具で放射状にナデている。そして、底部を薄く仕上げて両面からヘラ状工具で削り取るようにして穿孔している。外面の一部には黒斑がみられる。125は内外面ともに縦方向のハケ目が施されている。底部には内外からヘラ状工具により掻き取るようにして穿孔されている。

ＳＤ－11上層（第30、31図）

壷Ａ〈146、148〉

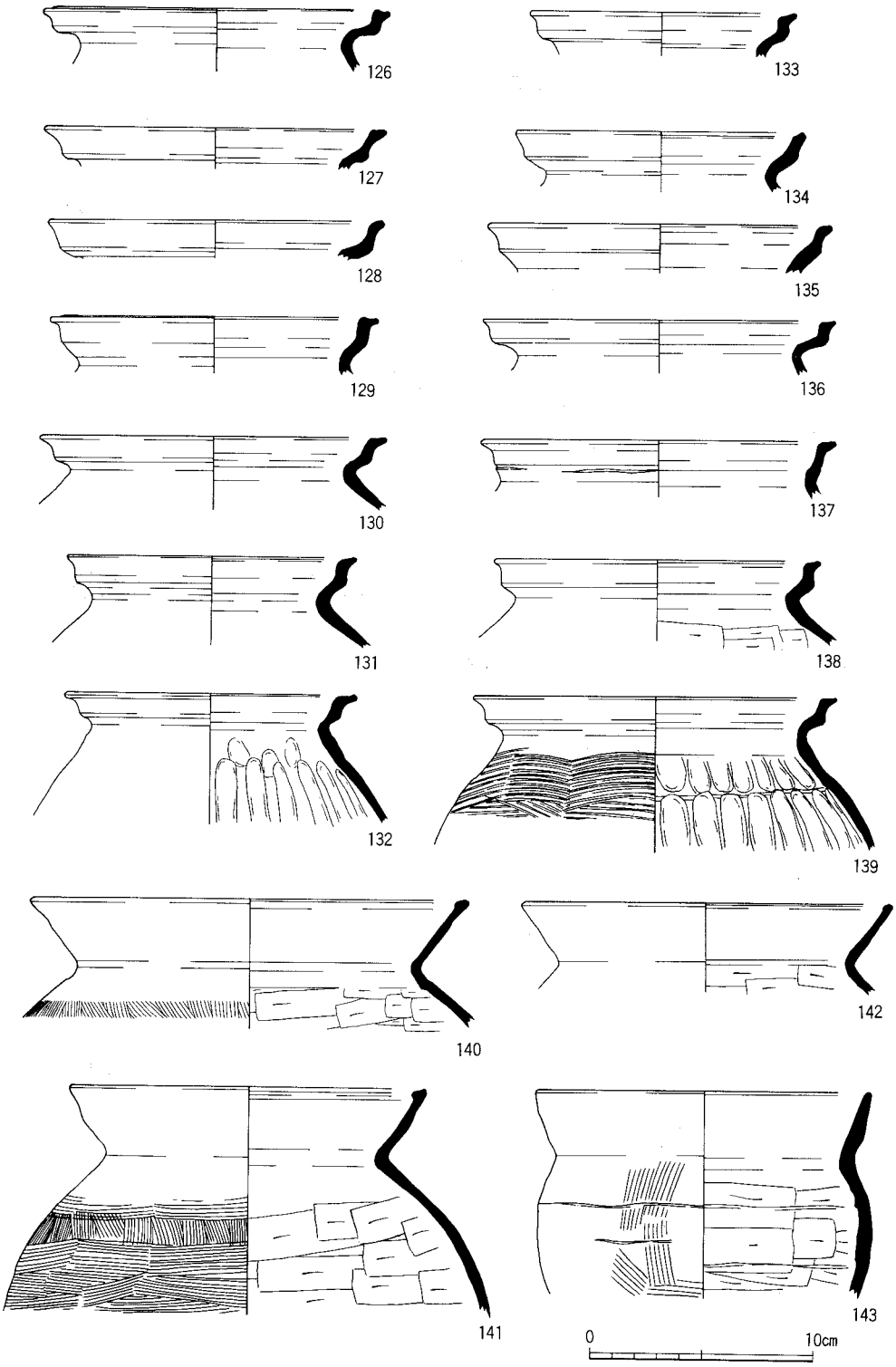
146は頸部からそのまま少し斜め上方に立ち上がり、そこから稜をなして屈曲しほぼ直線的に外方に開き端部は丸く収める二重口縁の壷である。頸部外面の上半は横方向に丁寧なヘラ磨きが、下半は面取りのような荒い縦方向のヘラ磨きが施されている。また、口縁部内面は横方向のヘラ磨きが、頸部内面には横方向のヘラ磨きが施されている。外面の一部は黒変している。148は口縁部は途中で二段屈曲して端部は丸く収める。口縁部内外面は横方向にヘラ磨きをするが、外面の中央部はヘラ磨きの後にナデている。

壷Ｅ〈145、147〉

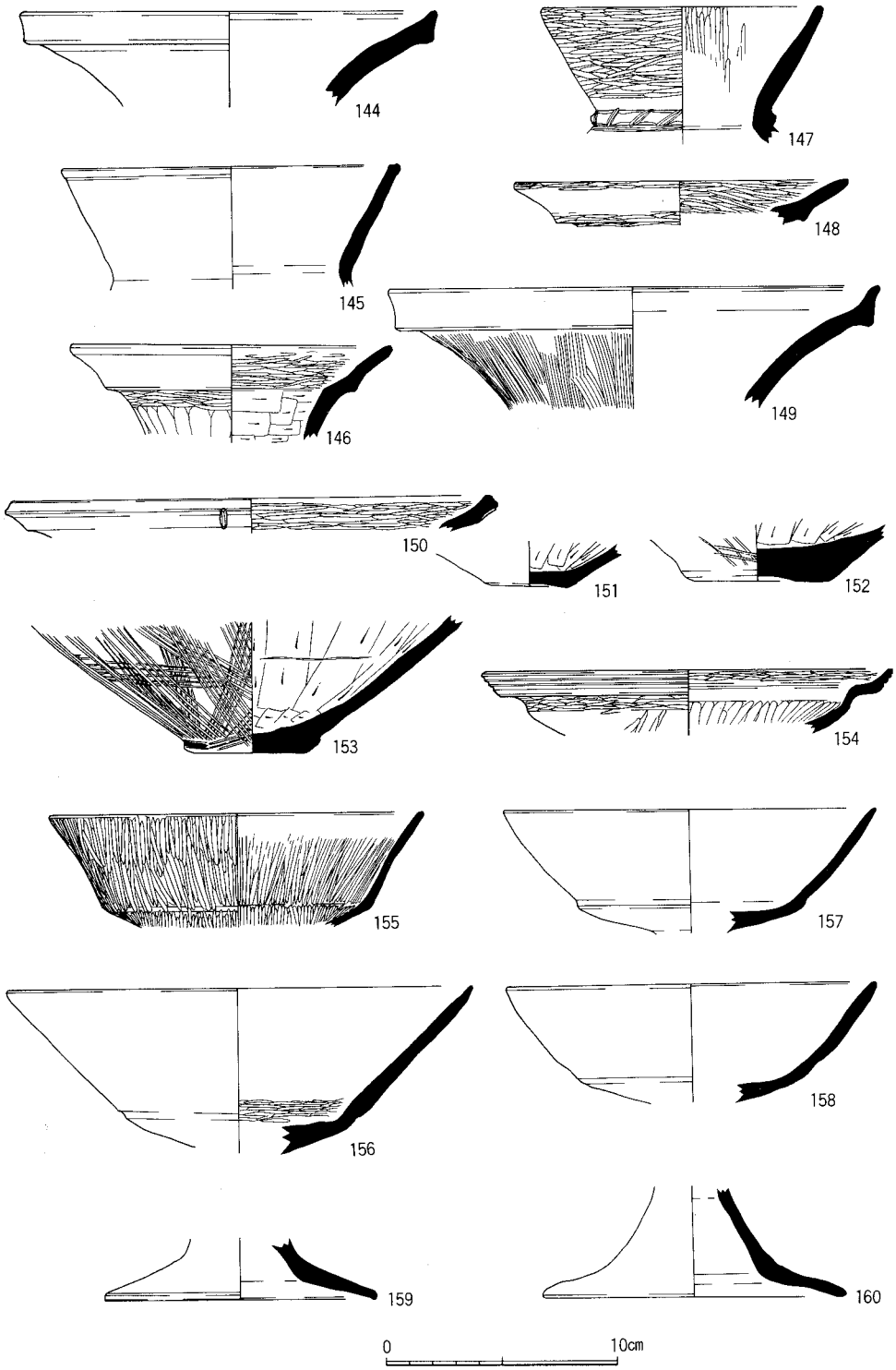
145は直線的に外方へのびる口縁をもち端部はやや外方へつまみだし気味である。147は直線的に外方にのび、端部は丸く収める。頸部にはヘラ状工具で２条１単位で刻み目を入れた突帯を１条貼りめぐらせている。口縁部内面には縦方向のヘラ磨きが施されているまた、口縁部外面には横方向のヘラ磨きが丁寧に施されている。頸部付近にはヘラ磨きの後にナデられているが、これは突帯を貼るために成形したためと考えられる。

甕Ｃ〈140～142〉

140直線的に外方へ開いた口縁の端部を内側に肥厚するものである。口縁部の内外面はナデている。胴部外面は縦方向のハケ目を施した後に口縁部に近いところをナデている。胴部内面は口縁部から胴部への変換部付近はナデているが、それ以下は横方向のヘラ削りを施しているため、その部分以下が段をなして器壁が薄くなっている。141は内湾気味にのびた口縁部の端部を内側に肥厚させている。口縁部の内外面はナデている。胴部外面は縦方向のハケ目を施した後に一部をのこして横方向のハケ目を施し、最後の肩部をナデている。また胴部内面は肩部より下位に横方向のヘラ削りを施している。また胴部の内外



第30図　第５トレンチＳＤ－11上層（②⑩）出土遺物実測図



第31図　第５トレンチＳＤ－11上層（②⑩）出土遺物実測図

面に煤が付着している。142はほぼ直線的に開く口縁の端部を内側に肥厚させておわる。胴部内面は横方向のヘラ削りが施されている。口縁部の内外面には煤が付着している。

甕Ⅰ〈126～139〉

126、129、130、132、139は斜め上方に立ち上がった後に上方に立ち上がり、端部を横へつまみ出す口縁をもつものである。132は胴部内面に指ナデの痕がみられる。さらに内外面には煤が付着していた。139は胴部外面には横方向のハケ目の後に円弧状にハケ目を施している。また内面には肩部付近には指押さえの痕があり、それ以下には下から上へかきあがるような指ナデの痕が残っている。これも内外面に煤が付着している。127、135は斜め上方に立ち上がった口縁は、そのまま上に立ち上がり強くナデることによって端部が横へ拡張されるものである。131、133、136、138は斜め上方につまみあげる口縁をもつものである。138は胴部内面に横方向のヘラ削りが施されている。131、136、138、の外面には煤が付着している。128は横に開いた口縁部が、その後上に立ち上がりやや外開きになっておわり端部を丸く収めるものである。134は斜め上方に立ち上がった後に屈曲して外方へ開き端部は山形になるものである。137は斜め上方に立ち上がり、そのまま端部を横へ強くつまみ出している。

甕〈143〉

口縁は直線的に若干開く程度で立ち上がり、端部は丸く収める。胴部はあまり丸みをもたずに底部へ向かう。胴部には粘土紐をつぎたした痕が残り、外面にはハケ目を内面には横方向のヘラ削りを施す。外面には煤が付着している。全体的につくりが雑である。

壺・甕底部〈151～153〉

151、152は緩やかな上げ底である。両者ともに内面にはヘラ削りがみられる。151は甕152は壺の底部と考えられる。153は平底である。外面にはハケ目が、内面にはヘラ削りが施されている。特に底部内面には板状工具で蜘の巣状にかきとった痕が認められる。

高杯A〈155、158〉

いずれも杯部が屈曲した後に直線的に開き、端部を丸く収めるものである。特に155は杯部の内外に縦方向のヘラ磨きを丁寧に施している。そして、口縁部付近の内面を後にナデている。156は杯部内面の屈曲部に横方向のヘラ磨きを行なっている。157、158は杯部内外面ともにナデをおこなっている。

高杯脚〈159～160〉

脚部はなかほどで屈曲してさらに外方に開くものである。159は内外ともナデている。

160の内面は板状工具によりナデている。脚部のみで杯部の形態は不明である。

高杯杯部〈154〉

杯部は二段に屈曲して立ち上がり、口縁部外面に3条の擬凹線を施している。杯部外面の口縁部の下部には横方向のヘラ磨きが、口縁部内面には横方向のヘラ磨きが、杯部内面には縦方向の形態などから日本海沿岸地域のものと考えられる。京都府青野西遺跡土壙6出土遺物（小山雅人「青野西遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第4冊財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1985）に類例が身受けられる。

器台〈144、149、150〉

141、149はともに受部はやや外反しながら開き、端部を上方へ拡張して口縁帯をつくり出している。149の外面には縦方向のハケ目が施されている。150は口縁内部に横方向のヘラ磨きを施し、外面には棒状浮紋を貼り付けている。144、149は伊香郡与呉町坂口遺跡（田中勝弘・用田政晴・吉田秀則『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅸ』滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会　1984）でみられるものである。

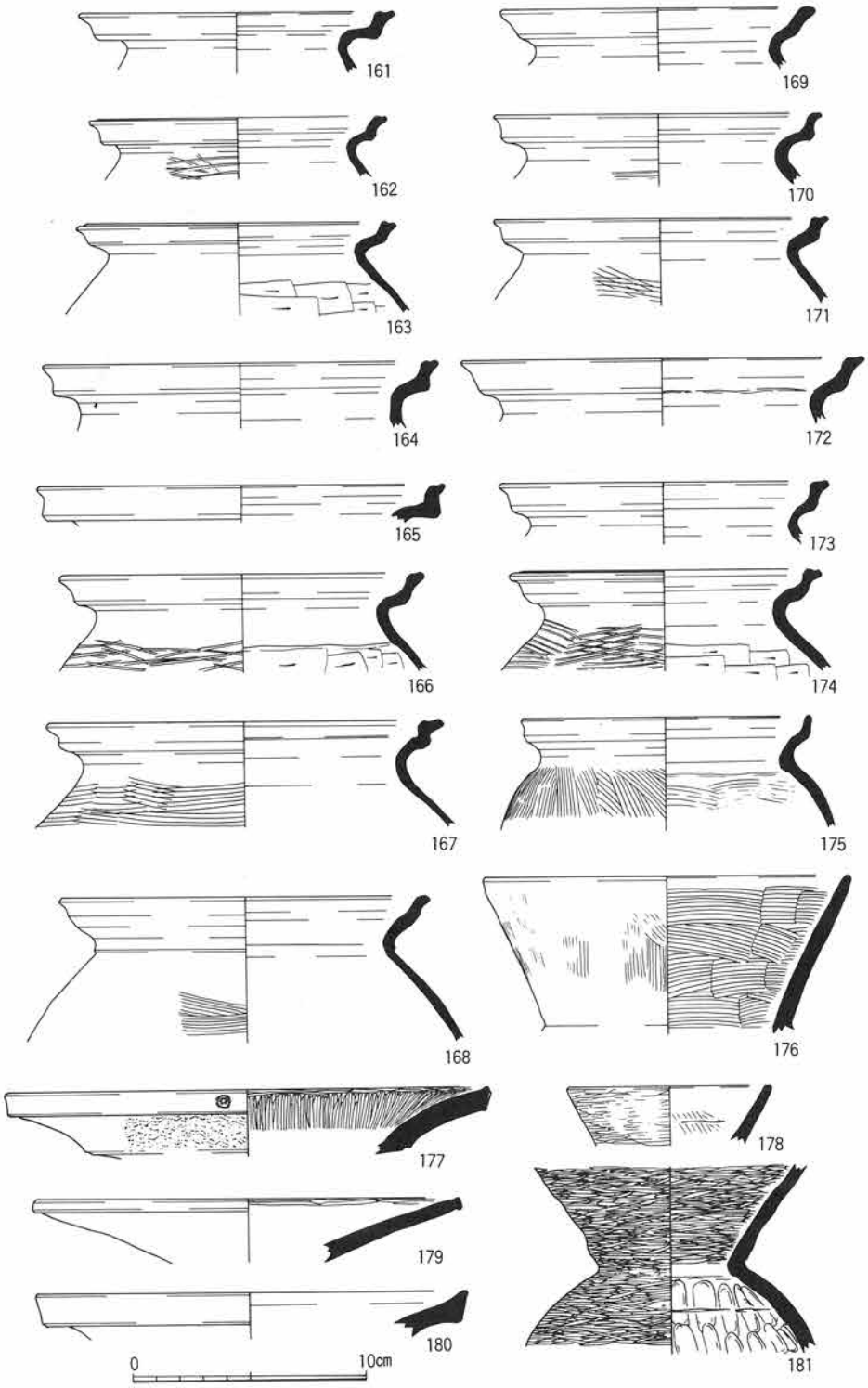
ＳＤ－11中層（第32、33図）

壺Ａ〈177、183、184〉

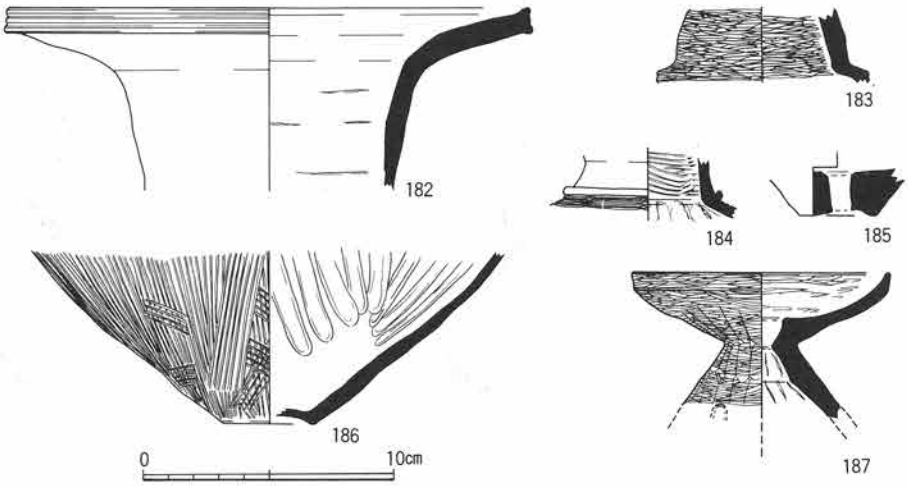
177は二重口縁の壺で、口縁端部を上下に少し拡張させて面をつくる。その端面には円形浮紋が貼り付けられている。内面は端部を横の、それ以外は縦方向のヘラ磨きが施されている。口縁端面はナデてあり、口縁部外面には櫛描波状紋が施されている。口径は20、4cmであり、暗灰褐色を呈しており長石を含むものである。183、184は壺の頸部である。

甕Ⅰ〈161～174〉

162、163、171、174は斜め上方に立ち上がった後に上方に立ち上がり、端部を横強くつまみだしている。そのため口縁部端面に凹をもつ。162は胴部外面にヘラ描沈線紋が施されている。体部には煤が付着していた。163は胴部内面をヘラ削りしている174は胴部外面にハケ目を施し、内面は横方向にヘラ削りを行なっている。体部外面には煤が付着していた。161、165は横に開いた後に上に立ち上がり端部をやや斜め上方につまみ出す口縁をもつ。164、166、168、169、170、172、173は斜め上方に立ち上がった後に上方に立ち上がりナデを行なうことによって端部を引き出しているものである。166は胴部外面の口縁に近い部分をナデて、その下をヘラ状の工具によって施紋している。体部外面には煤が付着していた。内面は横方向にヘラ削りをおこなっている。168、170は胴部外面にハケ目を施している。



第32図　第５トレンチＳＤ－11中層（③④）出土遺物実測図



第33図　第５トレンチＳＤ－11中層（③④）出土遺物実測図

甕　〈175〉

斜め上方に立上がり途中で屈曲して真上に立上がり、端部はそのまま丸く収める。胴部外面には一面に縦方向のハケ目を施し、内面は横方向にハケ目を施した後にナデている。

甕底部〈186〉

薄い上げ底となっている。外面は一面に縦方向のハケ目が施されている。内面は指で器壁を削り取った痕がみられる。体部の内外面には煤が付着していた。

器台〈179、180、182〉

直線的に外方に開く受部をもち、端部は少し上下に拡張し、面をもたせておわる。受部内面には横方向のヘラ磨きを施した後にナデ消している。180 は端部を上方へ拡張して口縁帯をつくり出している。内外面ともにナデている。182 は途中で屈曲して外方に開き、端部を上下にやや拡張して面をつくる。そしてこの面には２条の擬凹線が施されている。内外面ともにナデている。口径は21cmで色調は淡赤褐色である。擬凹線が施されていることから日本海側の影響が強いと考えられ、近江では少ないものである。

器台Ａ〈187〉

受部は緩く弧を描いて立ち上がり端部をつまみ上げる。受部と脚部は貫通していて、脚部には三方透かしがみられる。受部、脚部ともに外面は縦方向にヘラ削りを行い器形を整えた後に横方向にヘラ磨きを丁寧に行なっている。受部内面は横方向のヘラ磨きの後にナデている。脚部内面上部には粘土を紋った時の痕があり、その上から指でナデている。

ＳＤ－11下層（第34～38図）

壺Ｂ〈227～229、231〉

227は外反する口縁の端部を下方へやや拡張し面をつくり出しているもので、頸部には山形の突帯を１条貼り巡らせている。口縁部外面はナデており、内面は横方向のヘラ磨きを施している。外面の一部に煤が付着している。228は口縁部を緩く外反させ端部は平たく面をなす。口縁部外面は縦方向のハケ目を施した後に上半はナデている。胴部外面は雑なハケ目が見られる。口縁部内面は、横方向のハケ目を施した後に横方向にヘラ磨きを行なっている。胴部内面は横方向のヘラ削りである。229は口縁部が中程で屈曲し外方へ開き端部を上方へ開き端部を上方へつまみ上げる。口縁部外面は縦方向で、内面は横方向のハケ目をそれぞれ施す。231は緩く外反する短い口縁を持ち端部は丸く収める。口縁部は内外面ともにハケ目を施した後にナデているが、綺麗にナデていないので一部にハケ目が残っている。

壺Ｃ〈235〉

ほぼ直線的に外方にのび、端部を丸く収める口縁を持ち、ほぼ球形に近い胴部を持つと考えられる。口縁部外面は、縦方向のハケ目を施した後に上半をナデている。胴部外面の上半は縦方向のハケ目が、中央は横方向のハケ目が施され、その上から荒いヘラ磨きが部分的に行われている。口縁部内面は横方向のハケ目で、頸部付近は横方向のヘラ削りが行われている。そして、粘土紐の接合部分には指頭圧痕が多くのこっており、さらに胴部中央付近にかけては指で器壁を掻き揚げるようにナデている。

壺Ｅ〈226、230、232～234、238〉

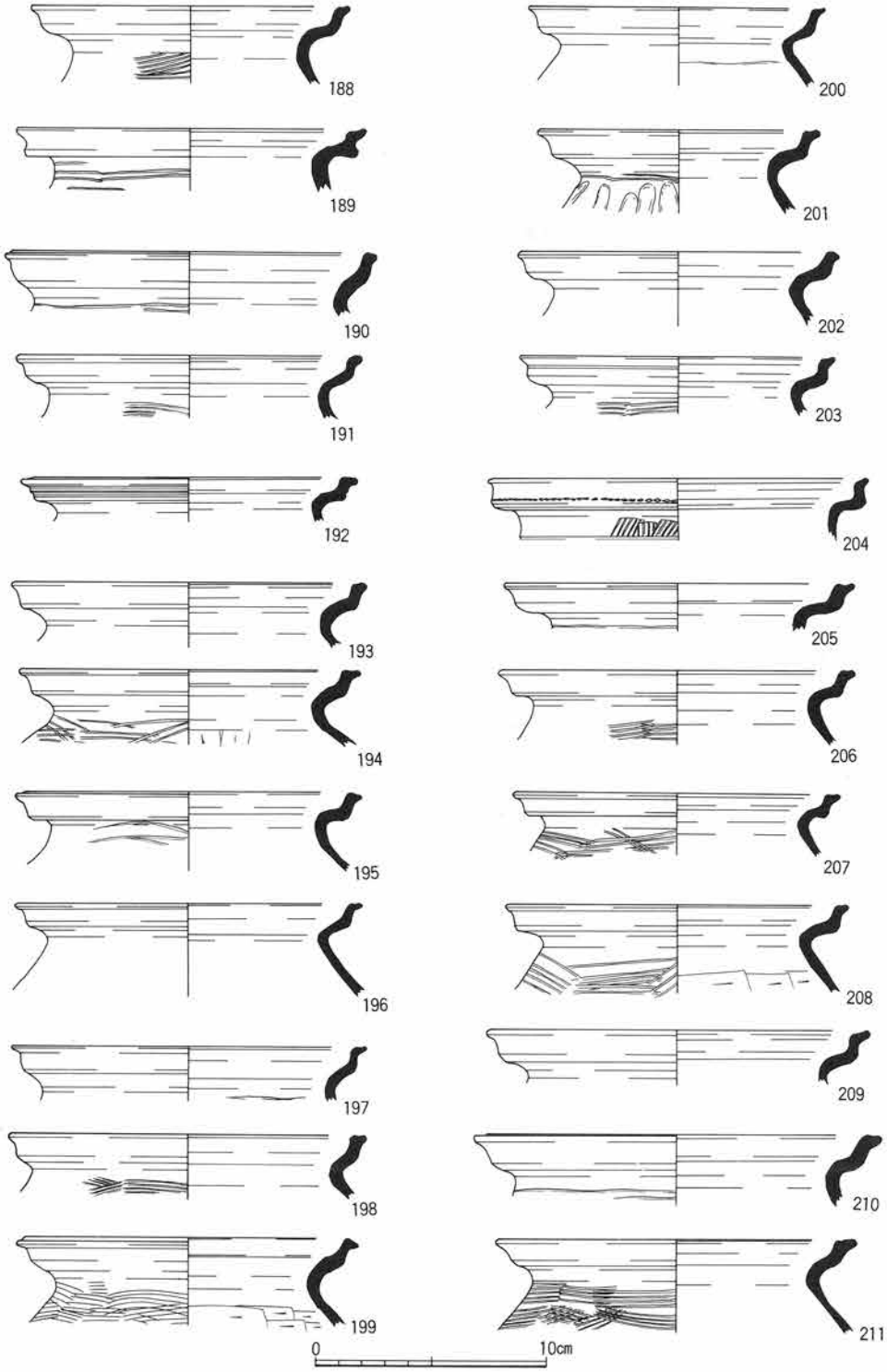
いずれも、ほぼ直線的に外方にのび端部を丸く収める口縁部を持つものである。232は口縁部外面に縦方向のハケ目を、内面には横方向のハケ目をそれぞれ施している。238ははは口径7.4㎝の小型のもので外面には指頭圧痕が残る。233と234は口縁部内面に横方向のヘラ磨きを丁寧に施している。

壺胴部〈241〉

東海地方を中心に分布するパレススタイルの壺の胴部と考えられる。頸部に方形の突帯を１条貼り巡らせている。胴部外面には、斜め方向にハケ目を施した後に櫛描直線紋と櫛描波状紋をそれぞれめぐらせている。

甕Ｂ〈222〉

屈曲気味に外方に伸び、施部を上方へつまみ上げる口縁を持つ。胴部内面は横方向にヘ



第34図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図

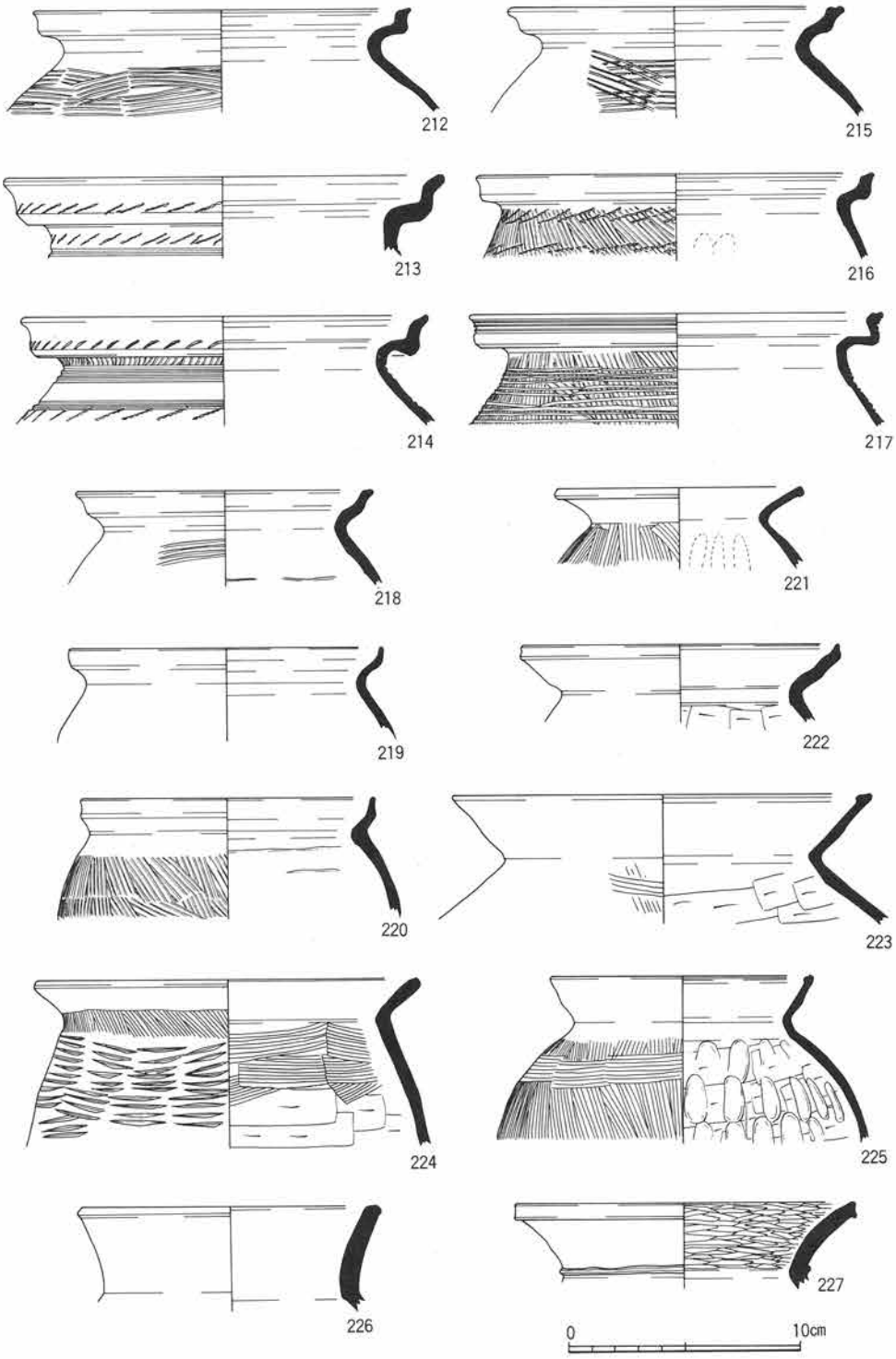
ラ削りを行なっている。外面には煤が付着している。

甕C〈223、225〉

223はほぼ直線的に外方に開き端部を内側に肥厚させる口縁部を持つものである。口縁は内外面ともにナデられている。胴部外面はハケ目の後にナデている。内面は横方向のヘラ削りが行われている。口縁部外面と胴部内面に煤が付着している。225もほぼ直線的に外方にのび、端部を内側に肥厚する口縁を持つ。胴部の外面は縦方向のハケ目を施した後に一部に横方向のハケ目を施している。内面は横方向にヘラ削りを行なった後に、指押えを入念に行なっている。

甕I〈188～218〉

斜め上方に立ち上がった後に、さらに上方に立ち上がり端部横もしくはやや上方につまみ出す口縁のタイプとして188、191、194、196、197、199、200、203、207、209、210、211、215がある。このうち188、203、211、215は胴部外面にハケ目が施されており、191、194、207はヘラ状工具で施紋されている。199は胴部外面に主に横方向に雑なハケ目が施されていて、内面には横方向のヘラ削りが行われている。189、192、195、204、213、214、217は横にひらいた後に上へ立ち上がり、端部を横もしくは斜め上へつまみ出す口縁をもつものである。189、195の口縁には2条の擬凹線がみられる。204の口縁部下半にはヘラ状工具による削突列点紋が巡り、胴部外面にはハケ目が施されている。213は口縁部下半と頸部に右上がりの櫛描列点紋が施されている。214は口縁下部にヘラ状工具による刻み目を巡らせている。214は口縁下部にヘラ状工具による刻み目を巡らせている。さらに口縁部直下には縦方向のハケ目を施した後にナデてわずかにハケ目を残して3条と2条の櫛描沈線を施す。下段の沈線に一部重なるようにして右上がりの櫛描列点紋を巡らせている。217は口縁部に4条の櫛描沈線紋を巡らせている。胴部外面には主に縦方向のハケ目を施した後に、横方向にヘラ描沈線紋を施している。次に190、193、198、201、202、205、206、208、212、218は斜め上方に立ち上がった後に上方に立ち上がり、ナデることによって端部を引き出す口縁を持つ一群である。198、206、212、218は胴部外面に荒いハケ目を施している。208はヘラ状工具で胴部外面に施紋し内面には横方向のヘラ削りを行なっている。201は胴部外面に上から下への指ナデの痕が残っている。216は斜め上方に立ち上がった痕に上方へ立ち上がり、そのまま内傾した面をもって終わる口縁を持つ。胴部外面には斜め方向のハケ目を施した後に、右上がりの櫛描列点紋を2段施している。



第35図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図

その他の甕〈219～221、224〉

219と220は斜め上方へ立ち上がったのち真上に立ち上がり端部を丸く収める口縁をもち、このうち220は胴部外面に斜め方向のハケ目を一面に施している。221は胴部からほぼ直角に屈曲し外方へのびる口縁をもち端部は下方に肥厚して終わる。胴部外面には主に縦方向のハケ目を施す。224は短く外反し端部を丸く収める口縁を持つ。頸部の外面にはハケ目で形を整えている。そして胴部外面には、ほぼ水平に荒いタタキが施されている。内面には横方向にヘラ削りを行なった後に上部には、横方向のハケ目でヘラ削りを施している。

小型丸底壺〈236、237〉

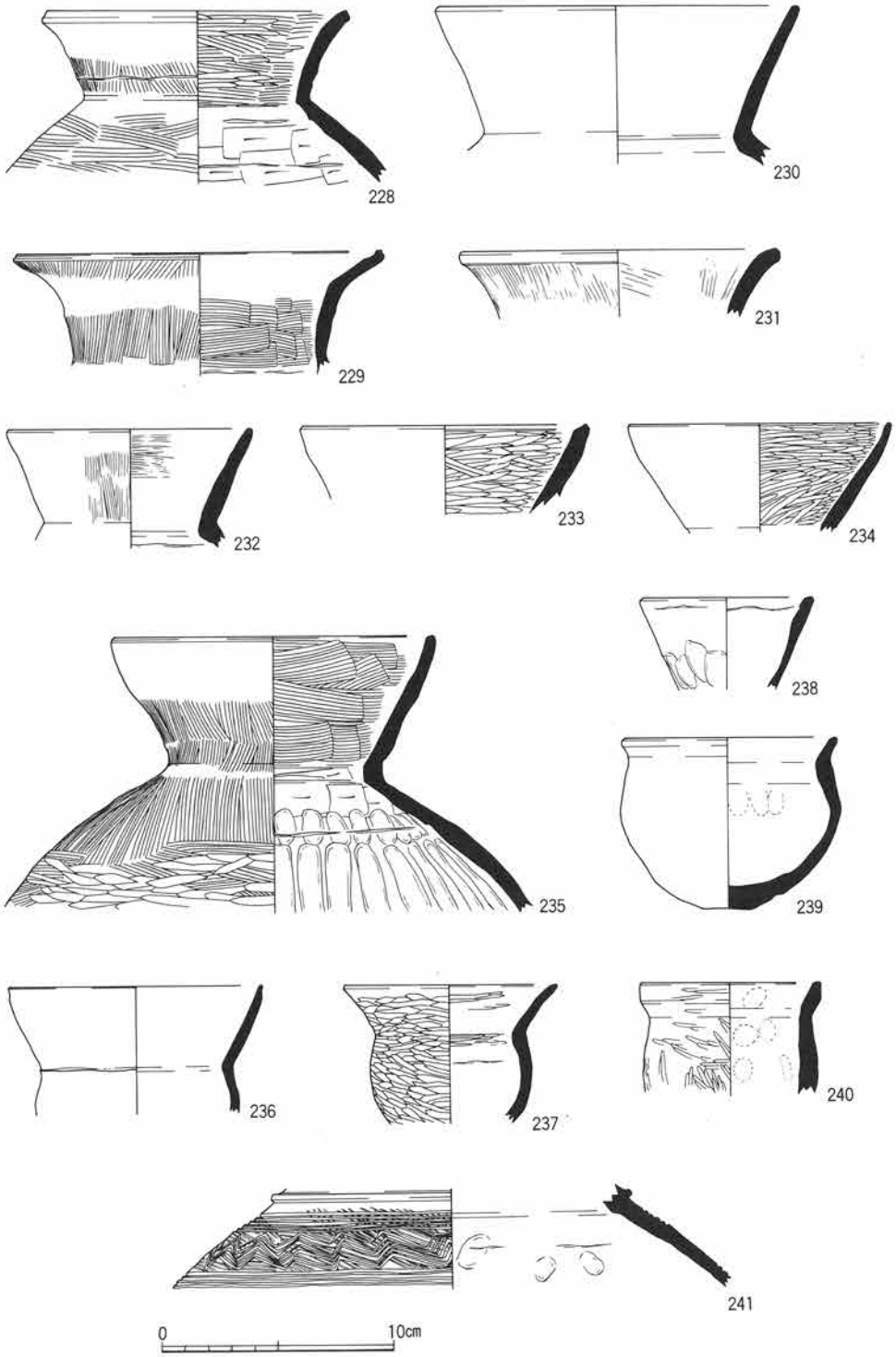
236は直線的に開き先細りの端部を持ち、口縁径と胴部最大径がほぼ等しいものである237はやや外面気味の口縁を持つ。口縁部から胴部にかけての一面に横方向のヘラ磨きを施す。また内面にも一部ヘラ磨きが認められる。口縁径が最大径を上回っている。尚、口縁部は不整形で歪んでいる。

その他の壺〈239、240〉

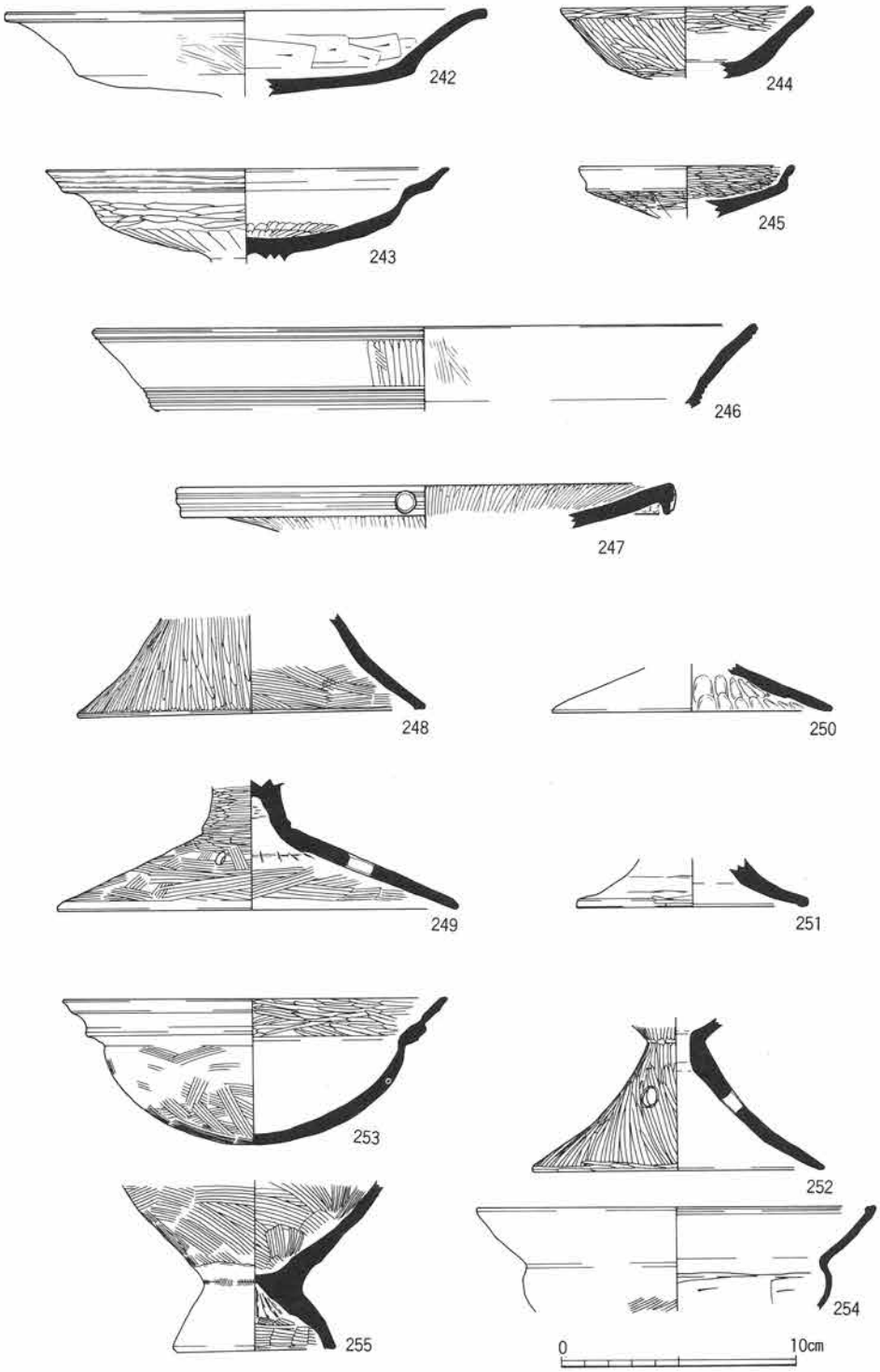
239は口縁部が短く外反する手ずくねの壺で、胴部内部に指圧痕を残す。内外面全体はナデられている。また、外面の一部には黒変が認められる。240はほぼ真っすぐに立ち上がり端部は面を成している。外面にはヘラ磨きが一部みられ、内面には指圧痕が残っている。

高杯〈242、243、246、249〉

242は杯部の中程で屈曲して外反しながら立ち上がるものである。杯部の側面はヘラ削りの後にナデている。杯部の下部はヘラ削りの後にナデている。また内面はヘラ削りを施し口縁部をナデている。243は口縁部が2段に屈曲して立ち上がるもので、口縁外面には擬凹線が施されている。杯部外面のなかほどには横方向のヘラ磨きが、下半部には幅広のヘラ磨きがそれぞれ施されている。また杯部の底部付近には放射状のヘラ磨きが施されている。246は口径28.6cmの大型の高杯である。杯部外面には縦方向のヘラ磨きが施されて行おり、口縁端部と屈曲部にそれぞれ櫛描沈線を施している。内面には一部ハケ目が残っている。249は脚部上部から屈曲して大きく開くもので、端部は丸く収める。透かしは三方である。脚部上部の上に立ち上がる部分は外面に横方向に丁寧にヘラ磨きが施されている。大きく開く部分は内外面ともにハケ目が施されている。端部は内外面ともにナデている。



第36図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図



第37図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図

器台〈244、245、247〉

244は受部が途中で屈曲し直線的に立ち上がるもので、外面は端部と下部に横方向のヘラ磨きが、その他は斜めにヘラ磨きが施されており内面もほぼ一面にヘラ磨きされていたと考えられるが、下半は剝離しており観察が不可能である。245は受部の端部を上方につまみ上げるもので、つまみ上げられた端部の外面は強くナデている。受部内外面はともに非常に丁寧にヘラ磨きされている。247は受部の端部を下方に拡張し口縁帯をつくり出し擬凹線が施されている。また受部内外面は丁寧にヘラ磨きされている。

鉢〈253、254〉

253は二段に屈曲する口縁を持つ鉢で、口縁部は強くナデてある。胴部外面はハケ目が施してあるが上半は一部磨滅している。口縁部内面にはヘラ磨きが施され、胴部内面はナデてある。254はほぼ直線的に外方へのび端部を内側に肥厚させて面をつくる口縁を持つ胴部は口縁から大きく曲がり底部に至る。胴部外面の一部にハケ目が残り、内面はヘラ削りである。

壺・甕の底部〈255～261〉

このうち255は台付甕の底部で、脚台内湾していて端部は面をなして接地している。胴部から底部にかけての内外面にはハケ目が施されており、また脚の内面の端部付近には板状工具により断続的にナデている。256は壺の胴部下半以下のもので、やや上げ底となっている。外面はほぼ横方向のハケ目を施した後に、部分的にヘラ磨きをおこなっている。内面は底部に近い部分でハケ目を、それ以外ではヘラ削りを行なっている。

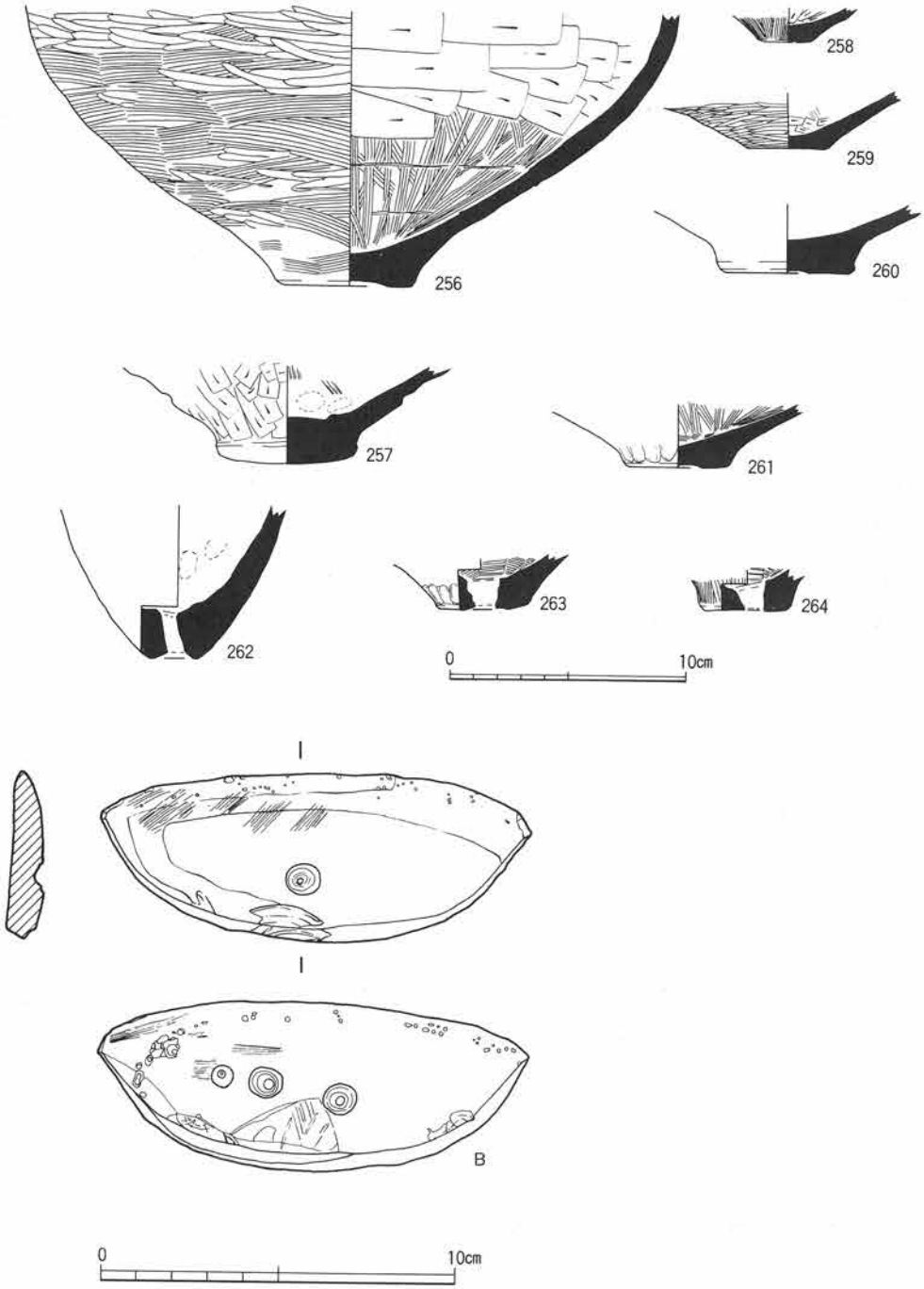
甑〈262～264〉

いずれも底部に穿孔されている。262の体部は砲弾形をしていると考えられるが、あまりみない形である。263と264の底部内面は板状工具で蜘の巣状にナデてある。

石製品

石包丁〈B〉

長辺12cm、幅4.8cmのもので刃部には、斜め方向の磨製痕が顕著にみられる。片側に1箇所、反対側に3箇所に穿孔しかけて途中でやめて貫通していない孔があけられている。側面は両面とも、磨製による削痕が目立って認められる。また、全体の形状は整っており整形のための研磨は丁寧に行われている。刃部には一部、刃こぼれが認められる。石材は硬質粘板岩を使用している。色調は淡青緑色を呈している。



第38図　第５トレンチＳＤ－11下層（⑤⑪）出土遺物実測図

ＳＤ－16（第39図～第40図）

壺Ｂ〈277〉

外反して上方にのび、端部を下方に拡張して面をもたせる口縁を持つ。頸部には不整形な突帯を一条廻らせている。口縁部の内外面はナデている。

壺Ｅ〈279〉

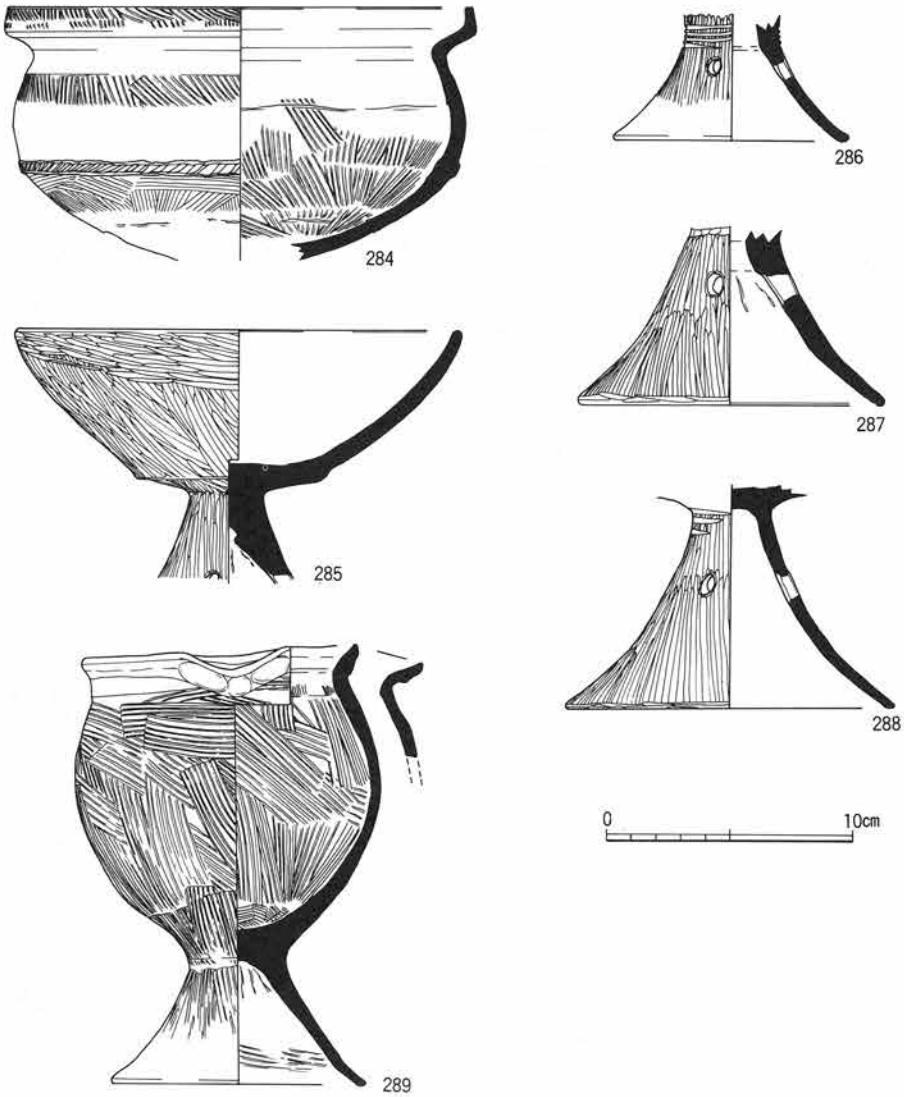
直線的に外方にのびる口縁をもち、端部は平たく面を持つ。端部付近は強くナデてあり凹が生じている。

甕Ｉ〈265～271〉

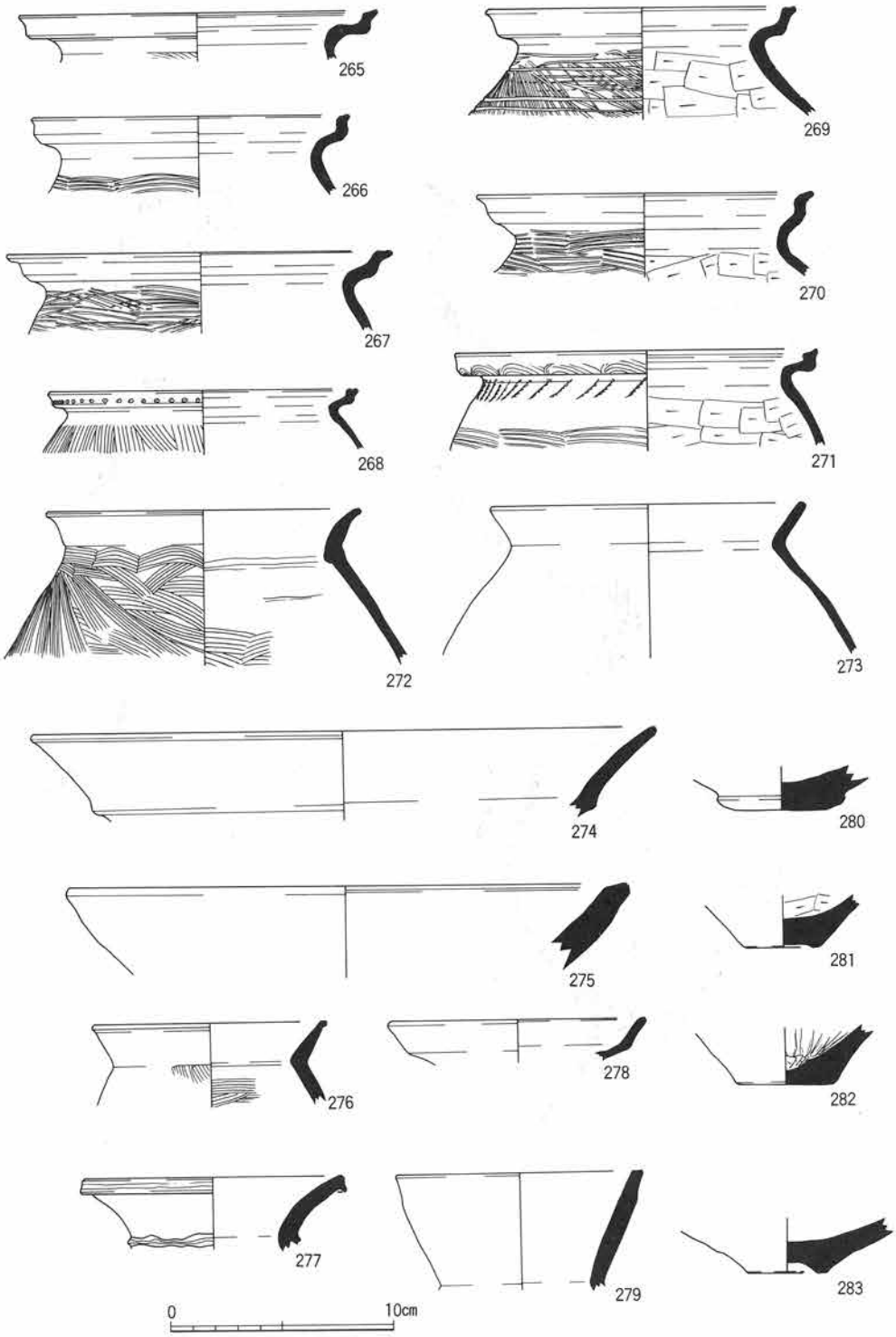
266～270は斜め上方に立ち上がった後に上方に立ち上がり、端部を横か斜め上方につまみ出す口縁をもつものである。266 は胴部外面に孤を描いたハケ目が施してある。267 は粗いハケ目とヘラ状工具による施紋が施されている。268 は口縁部の下半にヘラ状工具による列点紋が施されており、胴部外面には縦方向のハケ目が施されている。269 は胴部の外面にヘラ状工具により雑にハケ目と沈線が施紋されている。内面には横方向のヘラ削りが施されている。また、外面には煤が付着している。270 は胴部外面はほぼ横方向のハケ目が、内面は横方向のヘラ削りが施されている。265､271 は横にひらいた後にうえ立ち上がり、端部を斜めうえにつまみ出す口縁をもつものである。271 は口縁部外面に円孤紋が、肩部に右上がりの櫛描列点紋が施されている。内面は横方向のヘラ削りが行われている。

その他の甕〈272、273、276、289〉

272 は短く外反し端部を丸く収める口縁部をもつ。口縁と胴部の接合部はかなり肥厚している。胴部外面にはハケ目が施されている。また胴部内面にはハケ目のハケ目の後にナデられている。外面には煤が付着している。273 は短く外方にひらき、端部を丸く収める口縁を持つ。276 は胴部から鈍い稜をもって外方にのび、端部を横につまみ出す口縁をもつものである。口縁部の内外面はナデている。内面にはハケ目が施されている。口径が10.2cmの小型品で、胎土には0.5～3㎜の長石、石英、雲母の粗い砂粒を含み、暗赤灰色を呈している。289 は脚付片口甕とでもいうべきものである。短く肥厚した口縁が外方にひらき、口縁部を一部分を指でつまみ出して口をつくり出している。胴部は内外ともに一面に荒いハケ目を施している。脚は直線的に下方にひらいた後に端部付近で屈曲して外方にひらくものである。脚部内外面はハケ目を施したあとにナデを施している。この器種についてはあまり他に類例をみないものである。



第39図　第５トレンチＳＤ－16出土遺物実測図



第40図　第５トレンチＳＤ－16出土遺物実測図

高杯〈274、275、285、288〉

274は杯部の途中で屈曲し外反するものである。275は椀形の杯部と考えられる。285は内湾しながら立ち上がるしっかりとした杯部を持ち、端部は丸く収める。脚部は三方透かしである。杯部外面の口縁部付近は横方向の、それ以外は斜め方向のヘラ磨きが丁寧に施されている。脚部外面には縦方向のヘラ磨きが施されている。288はなだらかに外反しながら開く脚て、三方透かしを持つ。脚部の外面には縦方向のヘラ磨きが施され、脚の端部外面には横方向のヘラ磨きが施されている。

器台〈278、287〉

278は受部の端部をつまみあげるもので、内外面ともにナデている。287は器台の脚部で、受部との間が貫通するもので、脚部には三方透かしが施されている。脚部はなめらかに外方にひらき、途中でやや外反する。端部内面には沈線を一条施している。外面は縦方向のヘラ磨きで、端部は横方向にヘラ磨きを施している。

鉢〈284〉

斜め上方に立ち上がった後に、やや内傾して立ち上がり端部は平らに面をもつ口縁をもち、口縁部外面にはハケ目が認められる。また、胴部やや下方に台形の突帯を貼り付け、上からヘラ状工具により刻目を入れている。胴部外面はハケ目を施したのちに、中央部と底部付近をナデている。また胴部内面下半にはハケ目が残っている。さらに胴部下半には煤が付着している。

ＳＥ－１（第41図）

壺〈296〉

壺の底部と考えられるものであるが、平底のもので内外面にハケ目が認められる。

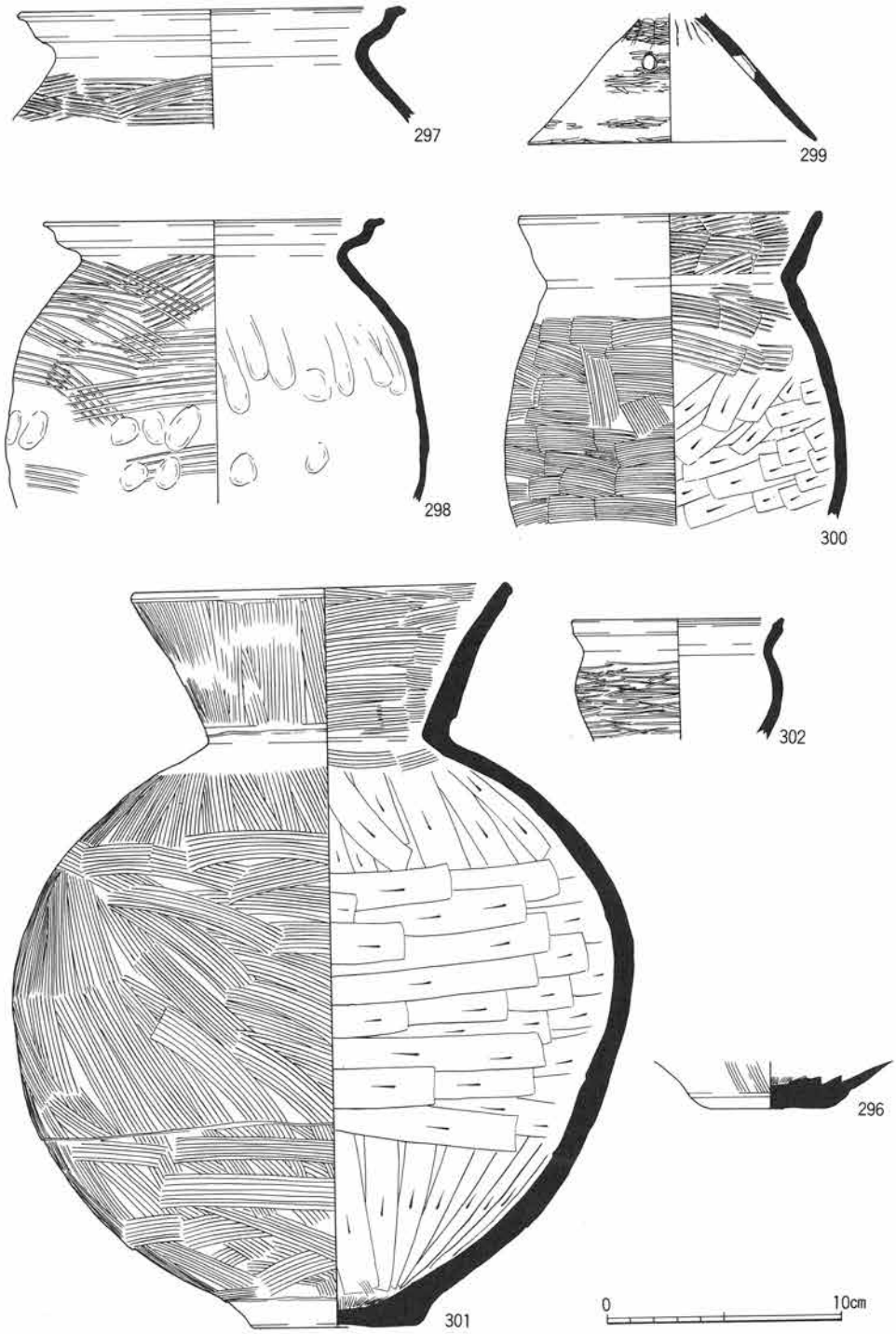
ＳＥ－２（第41図、第42図）

壺Ｂ〈310〉

外反しながら開く口縁部を持つものである。端部は丸く収める。口縁外部は縦方向のハケ目を施した後に、端部付近をナデている。口縁部内面は横方向にヘラ磨きを施している

壺Ｃ〈301〉

ほぼ直線的に外方に開き、端部に面を持つものである。胴部は球形をなし底部はやや上底ぎみの平底である。口縁部外面は縦方向のハケ目、胴部外面もハケ目を施している。口縁部内面は横方向のハケ目を施し、胴部内面の上半と下半は縦方向の、中程には横方向のヘラ削りを施している。頸部にはナデた際の凹が残っている。



第41図　第５トレンチＳＥ－１、２出土遺物実測図

その他の壺〈314〉

口縁部がゆるやかなS字形を呈して上方に立ち上がるものである。端部には小さな面を持つものである。外面にはハケ目を施したあとにナデを施している。内面は全体にナデている。

甕Ⅰ〈297、298、303～309、312、316〉

297、298、304、306 は斜め上方に立ち上がった後に上へ立ち上がり、端部を横もしくは斜め上方へつまみ出す口縁を持つものである。297 は胴部外面にハケ目にハケ目を施している。298 は胴部外面には粗いハケ目を施し胴部中程には指頭圧痕が残る。胴部内面には指で器壁を削りとった痕が認められる。304、306 は胴部外面にハケ目を施す。303、309、312 は横へひらいた後に上へ立ち上がり、端部を横へつまみ出す口縁を持つものである。303 は口縁下部に櫛描列点紋を、頸部に三条の櫛描直線紋を施している。312 は口縁部下半にヘラ状工具により施紋している。305、307、308、316 は斜め上方に立ち上がった後に上へ立ち上がり、ナデることによって端部を引き出させるものである。307、308、316 は胴部外面にハケ目を施している。

その他の甕〈300〉

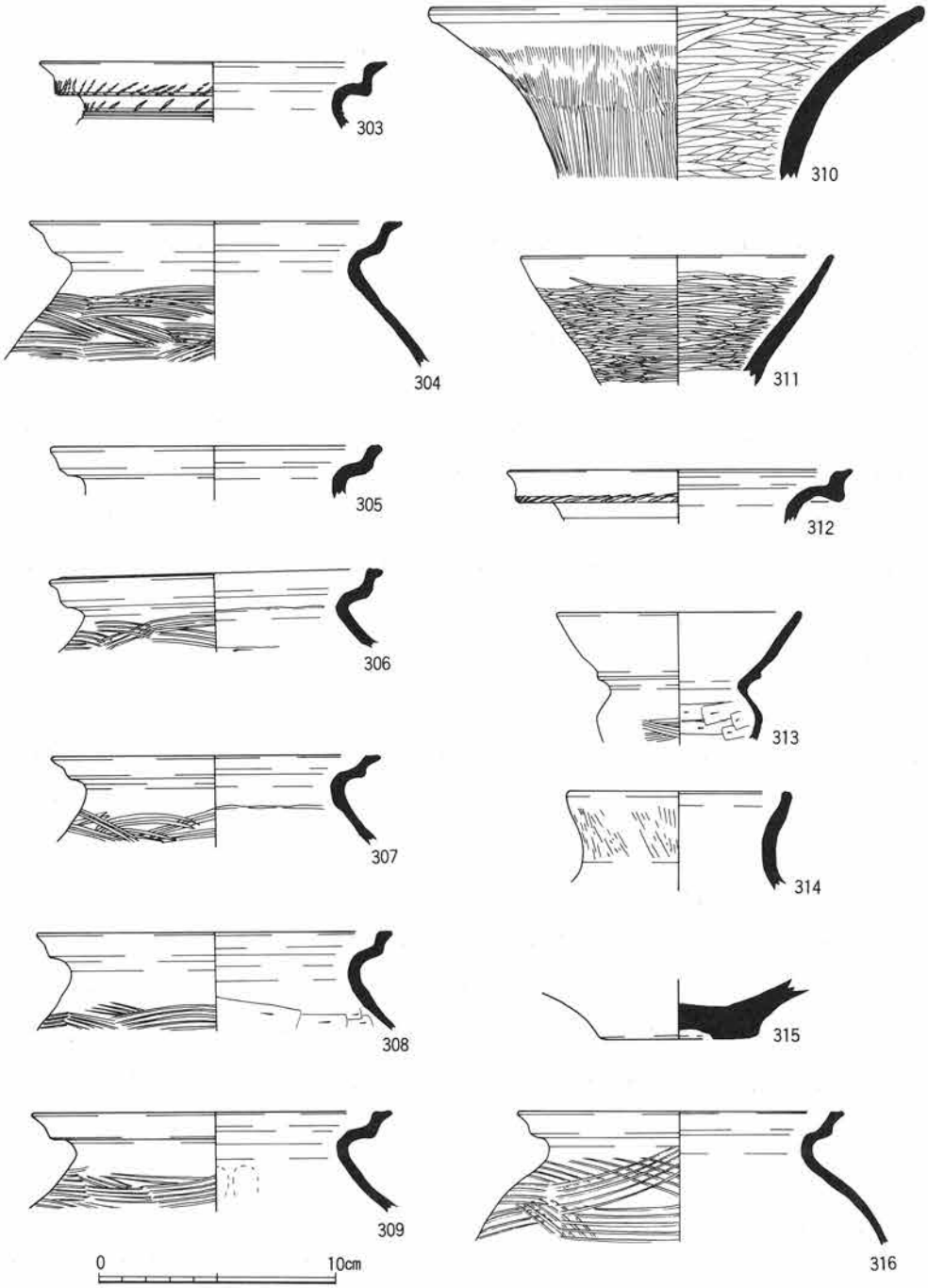
口縁部は直線的に外方へ伸び、胴部は卵形をしている。口縁部外面は強くナデているため、ナデの際の凹が生じている。胴部外面は横方向のハケ目を施している。口縁部内面と胴部上半にはハケ目を施している。口縁部内面と胴部上半にはハケ目を、中央部以下にはヘラ削りをそれぞれ施している。

小型丸底壺〈302、311、313〉

302 は外方に短く伸びた口縁の端部を上方へつまみ出すものである。胴部外面にはヘラ状工具により調整している。口径と最大径がほぼ等しい。311 は直線的に外方へ大きく開く口縁を持ち、小さな胴部を持つと考えられる。内外面とも横方向に丁寧なヘラ磨きが施されている。313 は短く外反させた後、段をもってそこから大きくほぼ直線的に開く口縁部を持つものである。胴部外面にはハケ目が、内面にはヘラ削りが施されている。口径が胴部最大径を上回るものである。

高杯〈229〉

直線的に外方へ開く脚を持ち、端部を丸く収める。三方透かしである。外面は一部面取りを行なった後に、横方向のヘラ磨きを施しその上からナデている。315 は壺の底部で、中央部が上げ底となっている。



第42図　第５トレンチＳＥ－２出土遺物実測図

ＳＥ－３（第43図）

甕Ｃ〈319、322〉

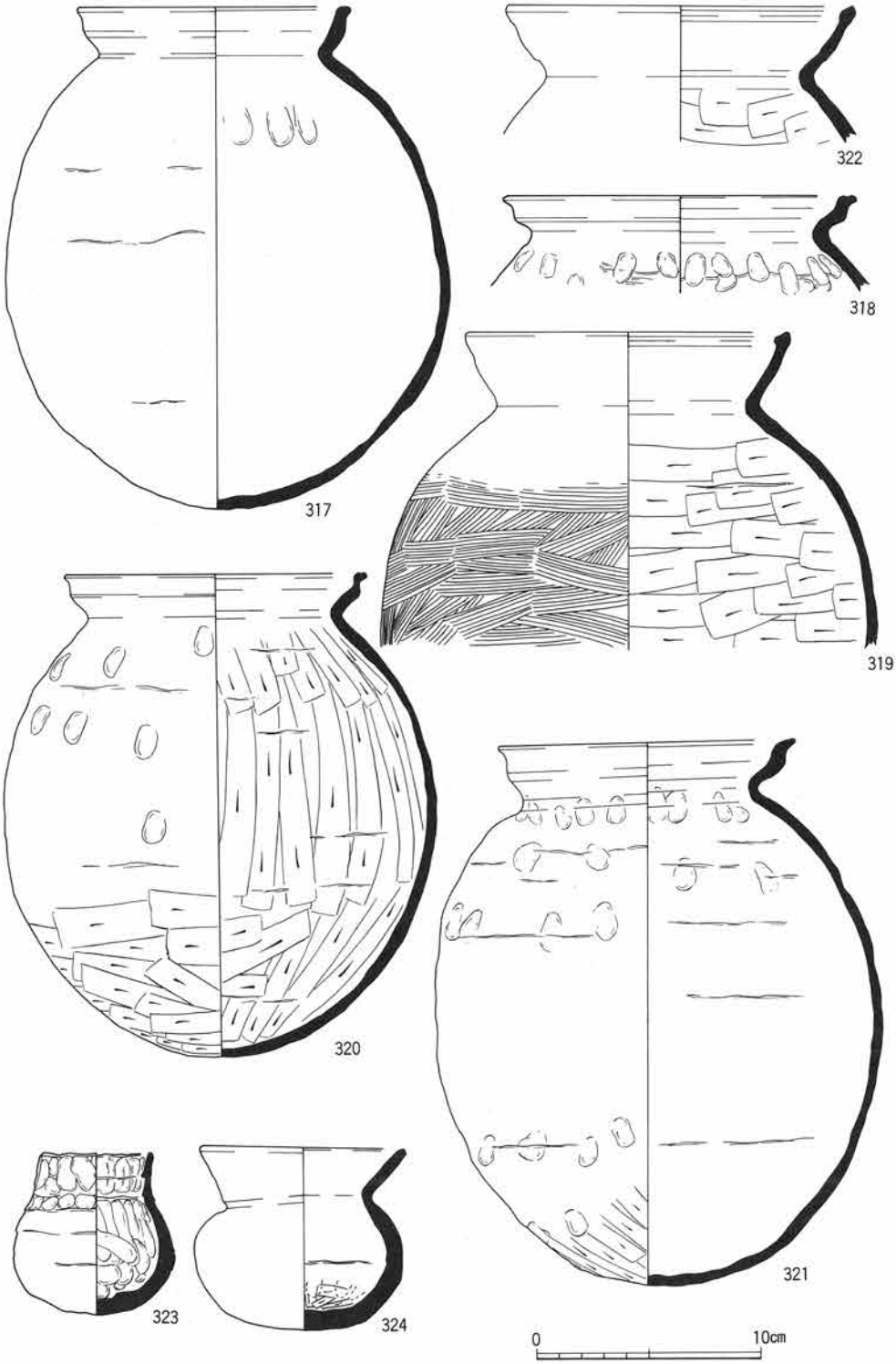
319は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、端部を内側に肥厚させる口縁を持つもので端面は内傾する。胴部外面はハケ目を施しているが、上半はそのあとナデ消している。胴部内面は横方向にヘラ削りを施している。内外面ともに煤が付着している。322はほぼ直線的に外方に伸び端部を内側に肥厚させる口縁部を持つものである。口縁部には強く横ナデが施されている。また胴部内面にはヘラ削りが施されている。ともに最下層より出土している。

甕Ｉ〈317、318、320、321〉

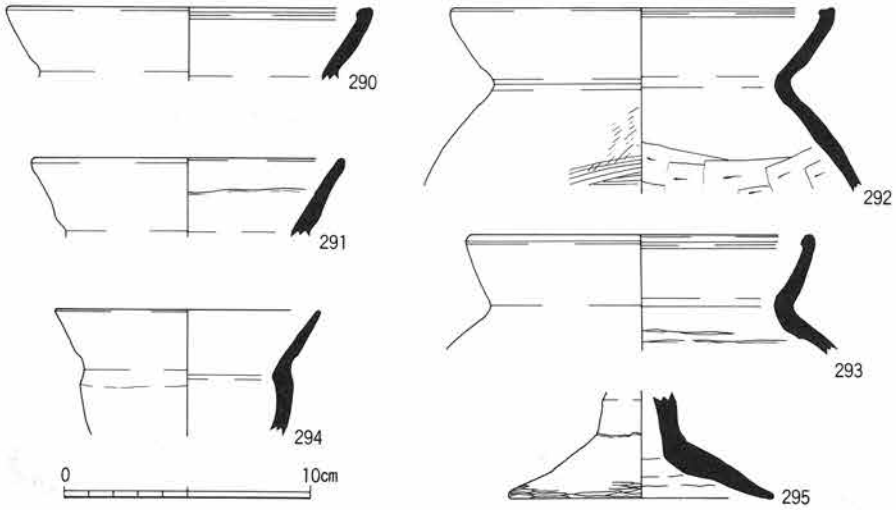
317は口縁は斜め上方に立ち上がった後にゆるく屈曲して上方に立ち上がり、ナデることにより端部をつまみ出すものである。胴部は卵形でやや縦長である。外面はナデが一面に施されている。内面はヘラ削りの後にナデている。完形で出土しており、器高は21.7cmである。内外面ともに煤が付着しているが、底部付近には特に強く付着している。①層より出土している。318は斜め上方に立ち上がった後に上方へ立ち上がり、端部を横へつまみ出す形の口縁をもつものである。胴部内外面には指頭圧痕を残る。最下層より出土している。320は口縁は斜め上方に立ち上がった後に上方へ立ち上がり、強くナデることにより端部を横につまみ出している。胴部はほぼ球形をなす。胴部外面はヘラ削りを行なった後に下半をのこしてナデている。内面は一面に縦方向のヘラ削りが施されている。完形で出土しており、器高は20.9cmである。⑤層より出土している。321は口縁が斜め上方に立ち上がった後に上方へ立ち上がり、端部を斜め上方につまみだしている。胴部は縦長の卵形をしている。外面は底部付近にヘラ削りをのこすが、他はナデている。粘土のつなぎ目が残る。底部には煤が付着している。これも完形で出土しており、器高は23.6cmである。⑥層上層より出土している。

小型丸底壺〈322、324〉

323はほぼ上方に立ち上がる口縁を持つものである。口縁は成形時の指頭圧痕が顕著に残り、口縁内面にはその後、板状工具でナデていて、その時の痕が強く残っている。胴部外面は板ナデを、内面には指ナデが施されている。器高７cmの手つくねである。324は直線的に外方に伸びる口縁を持ち、端部は丸く収める。口縁部内外面と胴部外面、内面上半はナデている。底部内面はヘラ削りが認められる。口径と胴部最大径はほぼ等しく、器高は7.9cmである。いずれも①層より出土している。



第43図　第５トレンチＳＥ－３出土遺物実測図



第44図　第５トレンチＳＫ－７出土遺物実測図

ＳＫ－７（第44）

甕Ｃ〈290、292、293〉

いずれもやや内湾気味にのび、端部を内側に肥厚させる口縁を持つものである。292 は胴部外面上部をナデて以下を横方向のヘラ削りしている。外面には煤が付着している。

高杯〈295〉

中程で大きく屈曲して外方に開き、端部を丸く収める脚部を持つものである。口縁部は内外面ともナデを行なっているが、口縁部は下部は特に強くナデているために凹が生じている。外面は一部黒変している。また、口径が胴部最大径を上回るものである。

包含層出土土器（第45図）

壺Ｂ〈328〉

やや外反しながら開き端部に面をもたせ。面を強くナデているものである。口縁端部には棒状浮紋を施している。胴部外面上部にはヘラ状工具による沈線が施されている。

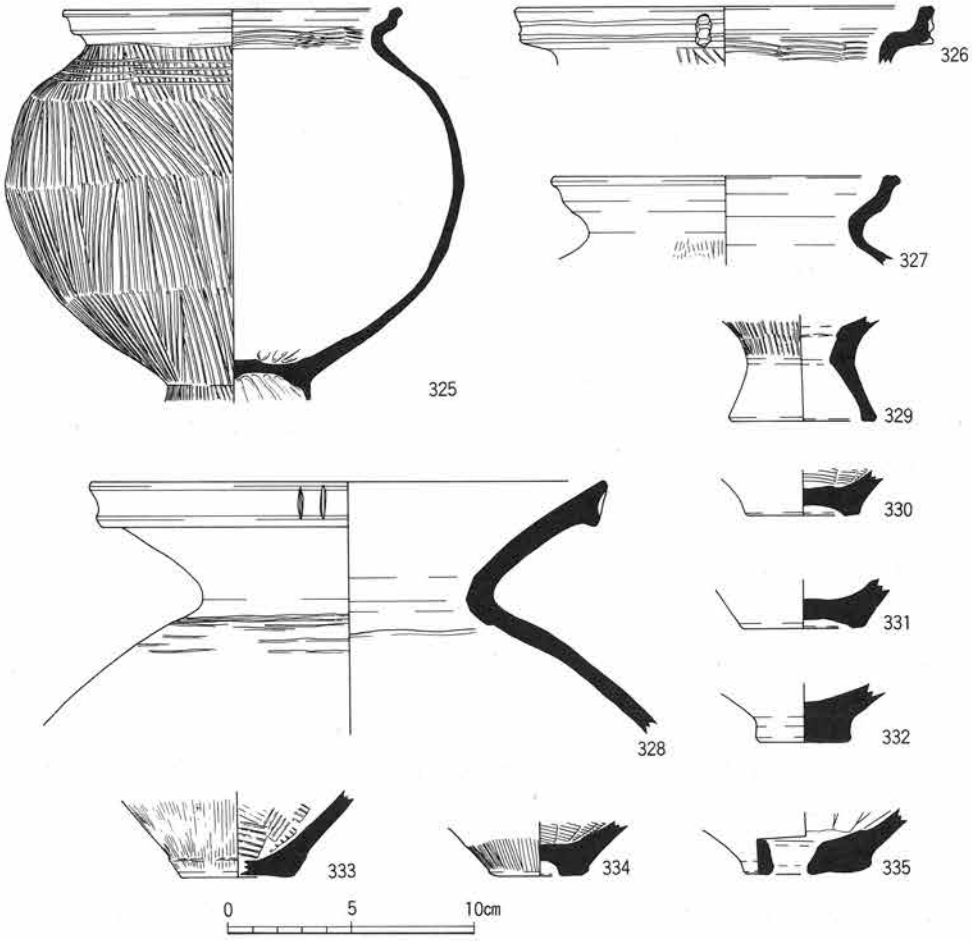
甕Ｈ〈325〉

脚台付の甕で、口縁は斜め上方に立ち上がった後に上方へ立ち上がりナデることにより端部をつまみ出している。胴部は横長の楕円形を呈していて、外面には４段に分けてハケ

目が施されている。また、肩部にはヘラ状工具による沈線が四条施されていて胴部内面はナデている。脚台部外面には縦方向のハケ目が施されて、内面は指でナデられている。

甕Ⅰ〈326、327〉

326は横へ開いた後に上方に立ち上がり、ナデることにより端部を横へつまみ出す口縁部を持つものである。口縁部外面には2条のヘラ描沈線が巡り、棒状浮紋が施されている頸部には内外面にハケ目が施されている。327は斜め上方に立ち上がった後にさらに上方に立ち上がりナデることにより端部を横へつまみ出す口縁を持つものである。胴部外面にはハケ目を施している。

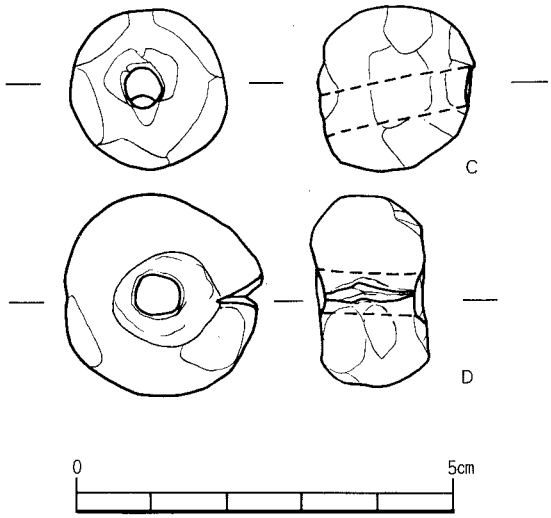


第45図　第5トレンチ遺構面出土遺物実測図

第５トレンチ出土土製品（第46図）

土錘（C、D）

Cは球形をなす土錘で、斜めに穿孔されている。外面には成形痕が残っていた。ＳＤ－10より出土している。Dは円形をした土錘で、真っすぐに穿孔されている。一部には刻み目が施されているが、これは孔に通した糸を結び固定するものと考えられる。ＳＤ－25より出土している。



第46図　第５トレンチ出土土錘実側図

第５トレンチ出土木製品（第47図～第49図）

農具〈576、577、579〉

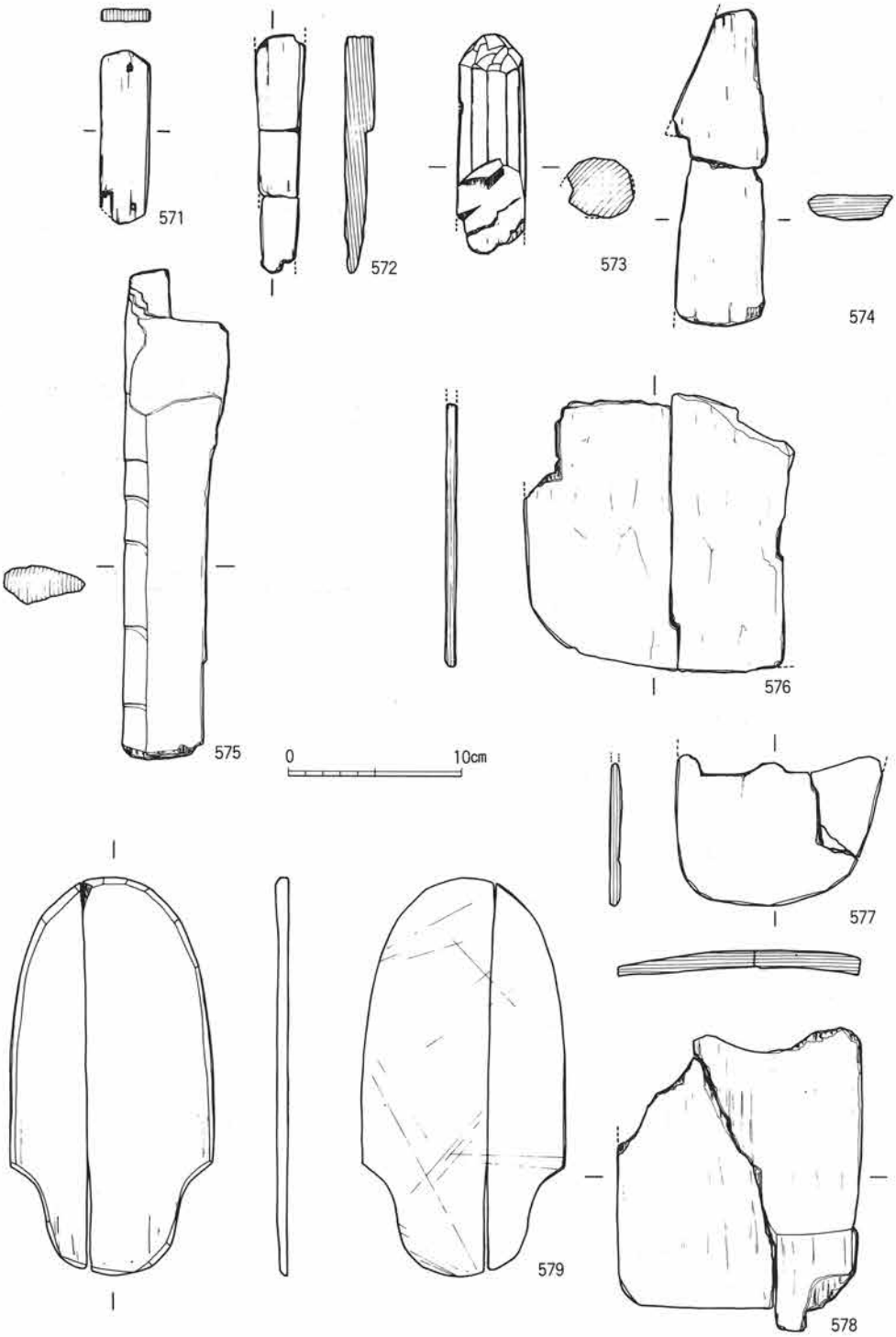
576、577はともに中程で折れているので全体の形態は不明であるが、鍬か鋤かは判断できないがどちらかの農耕具であると考えられる。579は柄孔を欠いているが、鍬と考えられる。周囲に面取りを施しているが、特に先端部を入念におこなっている。鉄器を先端に装着するためと考えられるが、その痕跡は認められない。576、577はＳＤ－11より、579はＳＤ－12より出土した。

機織具〈582、583〉

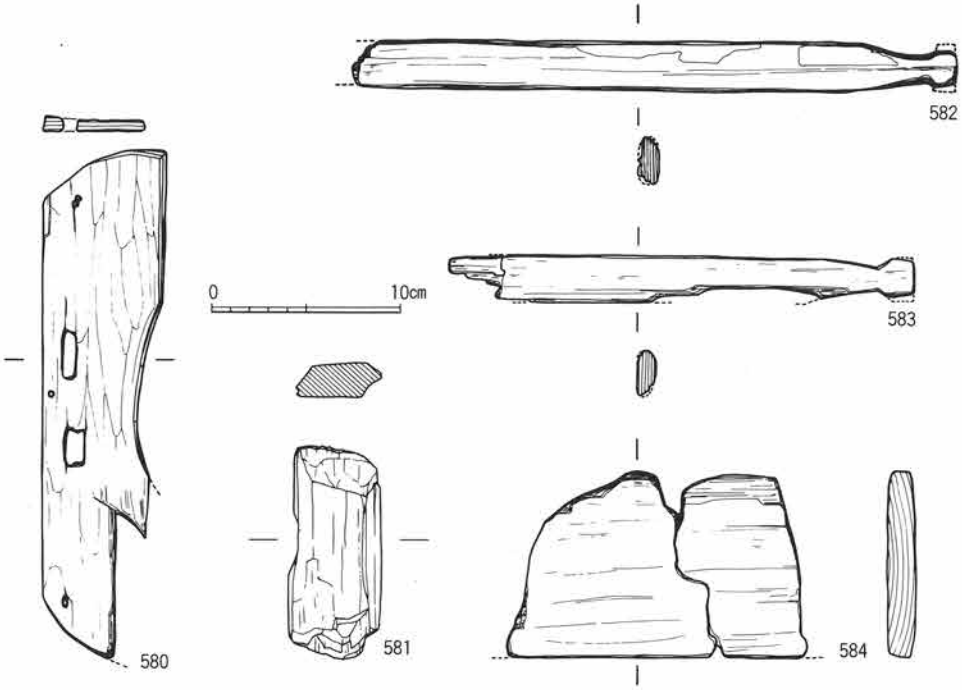
ともに、片方の端は欠損しているが残存部は先端部からやや下がったところを両辺ともに削りとって刻み目を入れている。両者ともに機織具の部品と考えられる。582、583はＳＥ－２より出土した。

その他の用途品〈571～575、578、580、581、584、585〉

571は両端に一箇所ずつ小さな穴が開けられた札状のものであるが用途は不明である。ＳＤ－10より出土した。572、574、575、578、581、584はそれぞれ加工痕が認められるものである。572、574、575、578はＳＤ－11より、581、584はＳＥ－２より出土した。585は先端にえぐりを入れることによって他の部材と組合せ、またほぞ溝に他の板材をはめこんで使用されたものである。和琴と並び折り重なってＳＤ－11より出土しているため共鳴箱の一部と考えられたが詳細は不明である。（森）



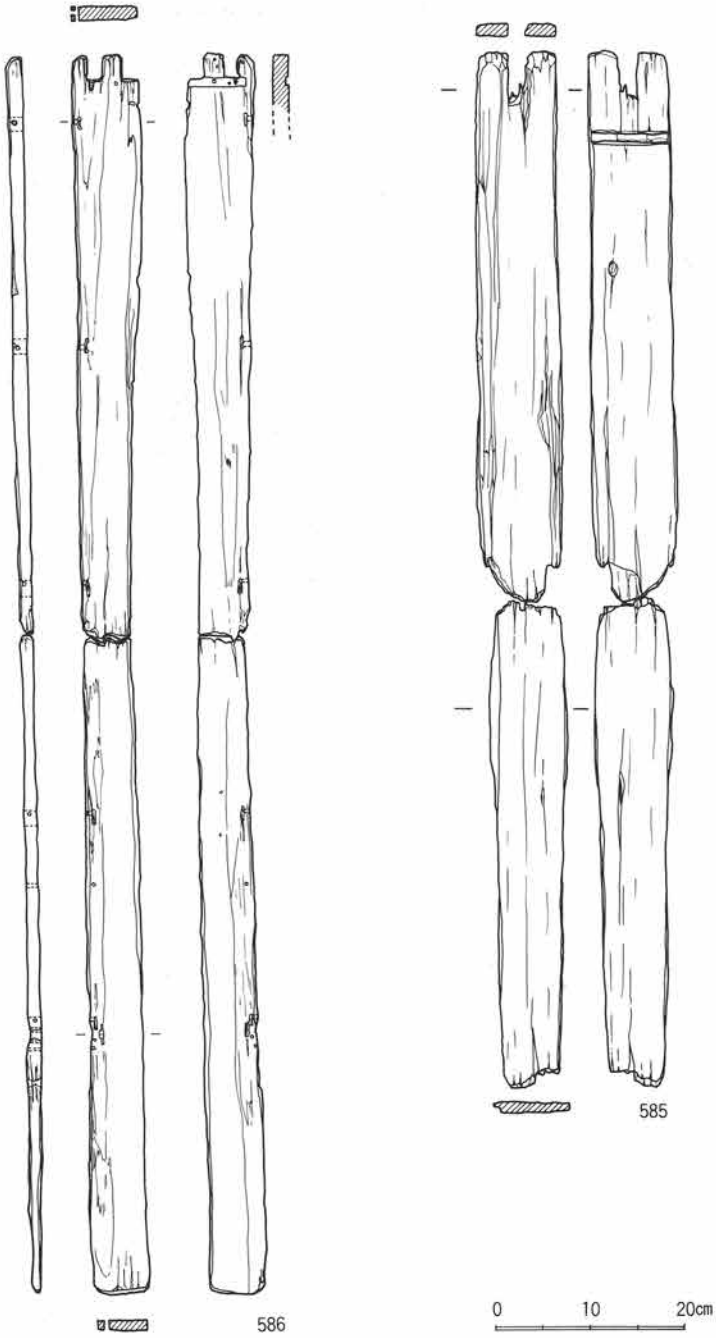
第47図　第５トレンチ出土木製品実測図



第48図　第５トレンチ出土木製品実測図

楽器〈586〉

和琴の一部である。ＳＤ－11のほぼ中央で真ん中で折れて重なり合うようにして出土したもので琴板の左半分の部分にあたると考えられる。琴板は全長130㎝を計る。全体に中央でやや内反りになっている。琴尾に存在する龍角の突起は推定５本と考えられるうちの２本が現存している。琴板の側辺部には結縛用の穴が等間隔に５箇所認められることから共鳴槽の付いた構造琴と考えられる。この結縛用の穴には皮綴じの紐が残っており強く締め付けられたせいか紐幅に琴板が凹んでいる。この結縛用の孔が穿たれている部分の琴板の側面から直径約２㎜程度の孔があけられ皮綴じの上から木釘が打ちこまれ琴板と共鳴槽とを接合するさいにより接合の度合いを強くしたものと考えられる。また琴尾の突起付近の裏側には、板をはめこんだと考えられるほぞ溝が認められる。これも共鳴槽の小口板をはめこむためのものと考えられる。なお、和琴に関してはこの笠原南遺跡の北に存在する服部遺跡より出土した和琴が非常に有名であるが、このほかにも森浜遺跡、中沢遺跡とともに県下にはあと４、５点は出土していると考えられるがいずれも弥生時代末から古墳時代にかけてのものである。またこれらに続くものと考えられる平安時代の琴が最近蒲生町杉ノ木遺跡からも出土している。いずれも溝から出土しているところが興味深い。(木戸)



第49図　第５トレンチ出土木製品実測図

6．第6トレンチ

第６トレンチは第１トレンチと第２トレンチの間、道路センター杭No.３＋80～No.４までの間を設定した。調査区における遺構の密度は低く、僅かな柱穴群と素堀りの井戸と土壙が検出されるにいたった。以下にそれらの内容を記述する。

（１）遺　構（第51図）

井　戸

ＳＥ－１（第50図）

調査区の北西端に位置する円形の土壙でやや浅いが形状から井戸と判断して調査を行なった。平面は径約80cmの五角形を呈し、深さは約80cmを計った。途中二箇所にテラス状の段を有する。埋土は上より３層（①黒灰色粘土、②黒灰色粘泥、③暗灰色粘土砂）の堆積からなっており、最下層に至り湧水を認めた。

土　壙

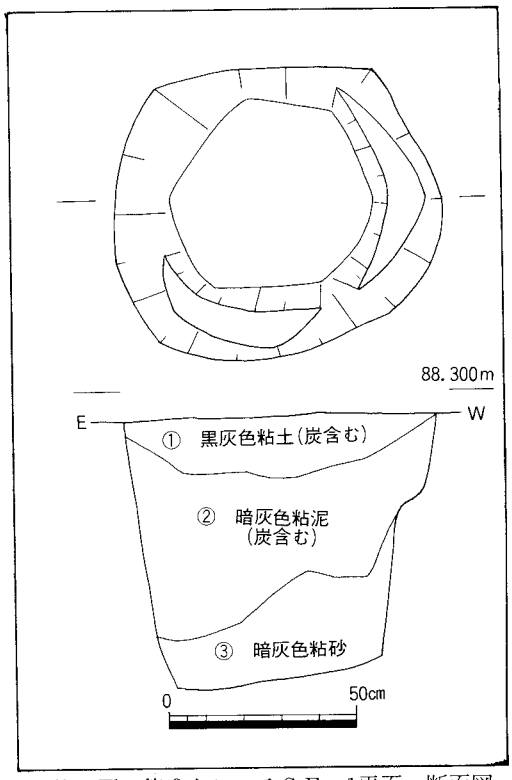
ＳＫ－１

調査区の西辺に位置し、角丸の三角形状を呈するものと考えられるが西端は調査区外に伸びている。埋土は暗灰色粘泥であった。

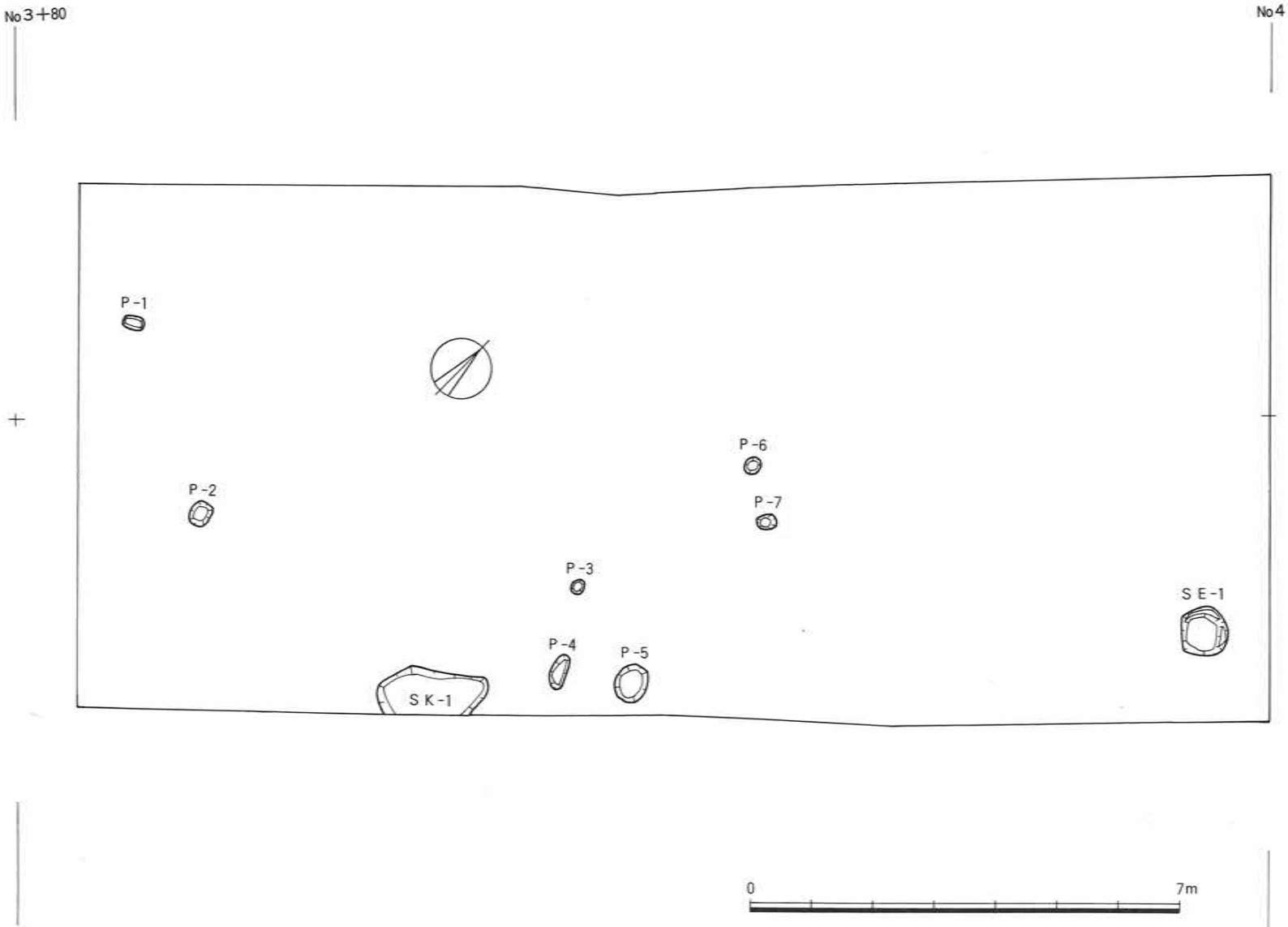
柱穴状遺構

ＳＰ－１～７

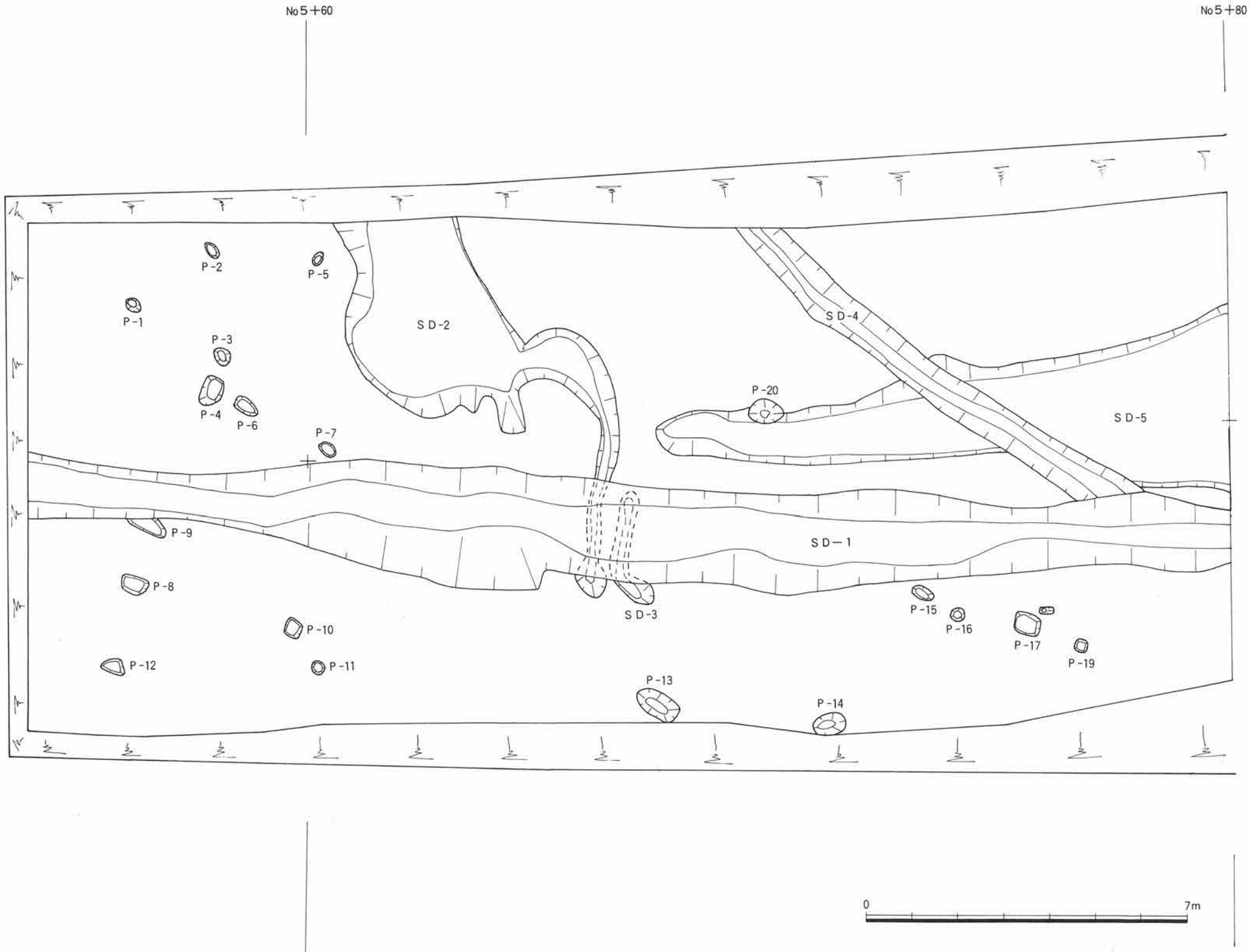
調査区の範囲という制約もあり明確に建物を構成することはできなかったが、いずれかの時代の建物の柱跡と考えられる。柱穴は大きさが20cm前後の円形もしくは楕円形のもので構成されている。深さはおおよそいずれも20cm前後である。埋土は全て暗灰色粘泥であった。　（木戸）



第50図　第６トレンチＳＥ—1平面・断面図



第51図　第６トレンチ平面図



第52図　第1トレンチ 平面図

〔昭和61年度発掘調査分〕

1．第1トレンチ

第1トレンチは道路センター杭No.5＋50～5＋80の間にトレンチを設定した。この調査区はおもに弥生時代末から古墳時代前期のものと考えられる。溝と柱穴群で構成されていた以下にそのおもな遺構について記述を加える。

（1）遺　構（第52図）

溝

ＳＤ－1

調査区の中央を南北に一貫して流れている溝である。出土遺物から中世末から近世にかけて存続していたものと考えられる。

ＳＤ－2

調査区の中央よりやや南を東西方向に流れる溝で、西は調査区の外にのびるが東は湾曲しながら細い溝になりＳＤ－1にきられていきどまる。埋土は暗灰色粘土であった。

ＳＤ－4

調査区の西北をトレンチに対し斜めに走る溝で、幅は約1ｍで断面Ｖ字を呈する。西はしはトレンチ外にのび、東はＳＤ－1によってきられている。

ＳＤ－5

調査区の北から南北方向に走る溝で、北に行くほど幅広になっている。途中をＳＤ－4によってきられている。埋土は黒紫灰色粘土であった。

柱穴状遺構

明確に建物を構成するものは認められなかったが、いずれもある時期の建物を構成していたものと考えられるものである。以下に群ごとにわけて列記する。

ＳＰ－1～11

調査区の南半の空間地に存在する柱穴群で径約10～20cmの楕円形を呈するものが多い。埋土は何れも暗灰色粘土であった。

ＳＰ－11～20

調査区の北半の空間地に存在する柱穴群で径約10～40cmの円形もしくは楕円形を呈するものが多い。埋土はＳＰ－20が暗緑灰色粘土で、それ以外は暗灰色粘土であった。(木戸)

2．第2トレンチ

第２トレンチは道路センター杭No.5＋80からNo.6＋10までの間を設定し調査を実施した。調査の結果、弥生時代末から古墳時代前期にわたる溝、土壙、柱穴などの遺構が検出された。以下にそのおもなものについて記述を加える。

（２）遺　構（第54図）

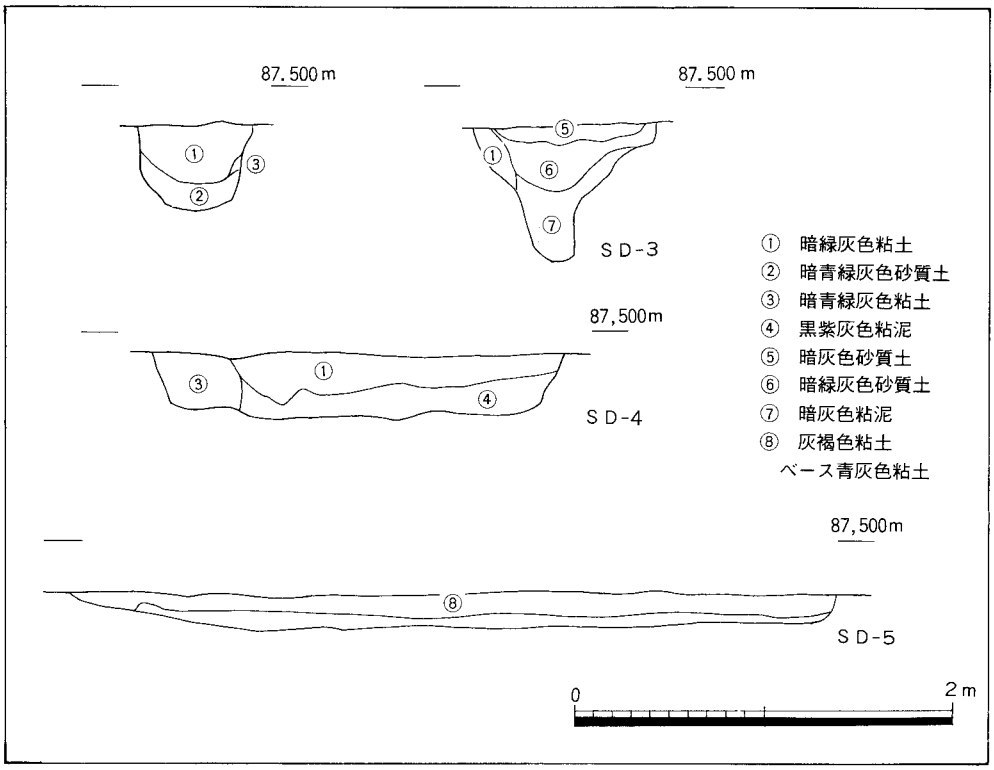
溝

ＳＤ－１

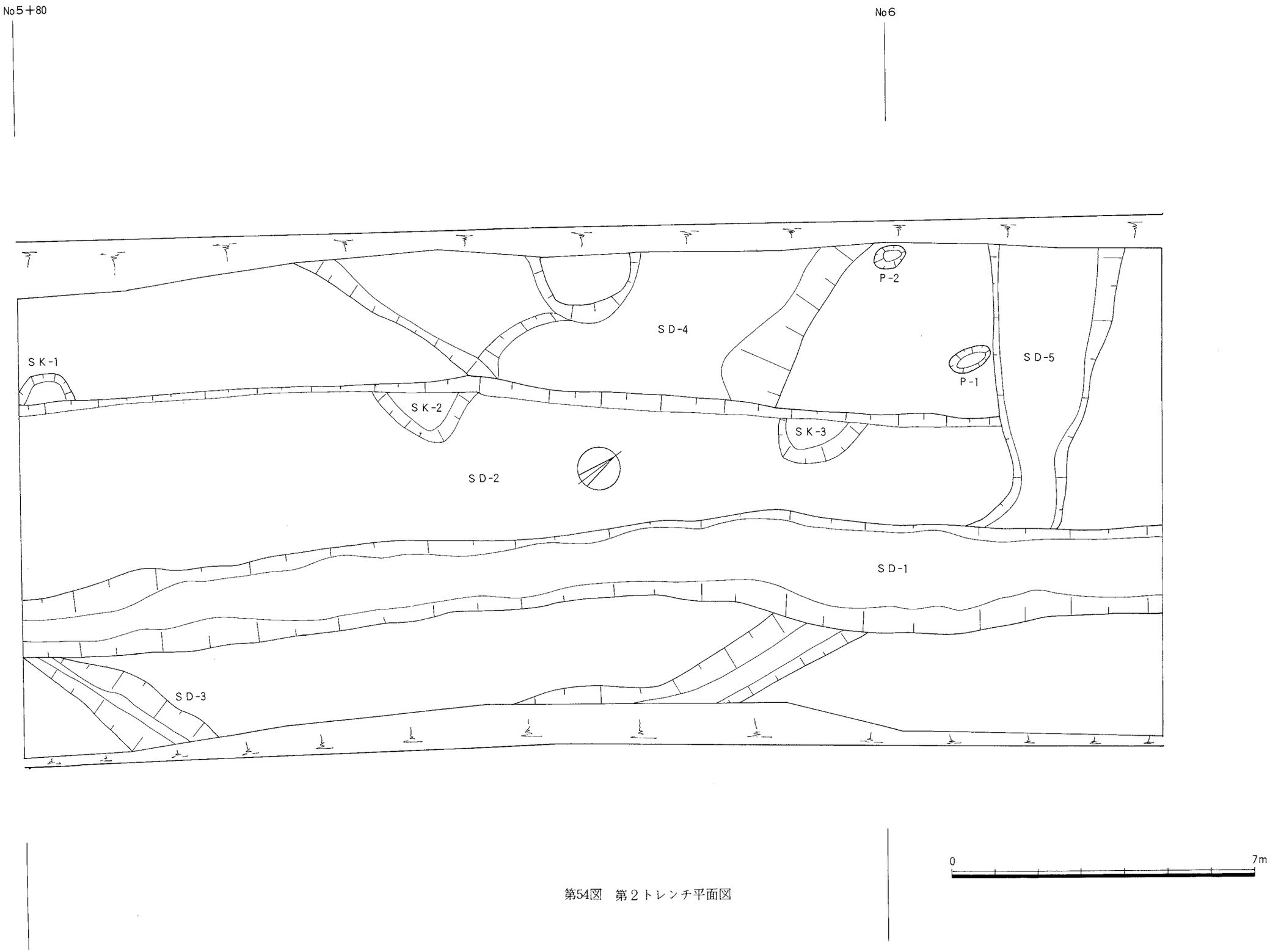
調査区の中央を一貫して南北に走る溝である。出土した遺物から中世末から近世後半にかけて存続していたものと考えられる。

ＳＤ－２

調査区の中央、ＳＤ－１の西側を南北に走る溝である。東の肩はＳＤ－１の影響で検出することはできなかった。また、北端はＳＤ－５によってきられている。埋土は黒紫灰色粘土であった。



第53図　第２トレンチ溝土層断面図



第54図　第２トレンチ平面図

ＳＤ－３（第53図）

調査区の南東の隅を横切るように東西に斜めに走る溝である。断面はＶ字を呈する。埋土は４層（上から⑤暗灰色砂質土、⑥暗緑灰色砂質土、⑦暗灰色粘泥、①暗緑灰色粘土）で構成されていた。

ＳＤ－４（第54図）

調査区の西辺の中央にＬ字に曲がるように走る溝である。溝の両端はトレンチ外にのびている。また、Ｌ字に曲がったコーナーはＳＤ－２によってきられている。断面は長方形を呈する。埋土は３層（①暗緑灰色粘土、④黒紫灰色粘泥、③暗青緑灰色粘土）で構成されていた。

ＳＤ－５（第54図）

調査区の北西からトレンチに平行に東西に走った後、屈曲してトレンチ東辺の中央に至たる。この先は調査区外にのびるがＳＤ－３につながっている可能性がある。途中をＳＤ－１によってきられている。埋土は２層（⑧灰褐色粘土、③暗青緑灰色粘土）で構成されていた。

土　壙

ＳＫ－１

調査区の南端で、ＳＤ－２の西肩に位置する直径約２ｍの土壙である。形状は円形を呈するものと考えられるが、ＳＤ－２によってきられているため半円形を呈する。埋土は灰色粘土であった。

ＳＫ－２、３

調査区の中央を南北に走るＳＤ－２の溝の底に位置するものである。いずれも直径約２ｍで、ＳＤ－２の下端にそうようにある。形状は半円形を呈する。埋土はいずれも、黒灰色粘土であった。

柱穴状遺構

ＳＤ－１、２

いずれもＳＤ－４、ＳＤ－２、ＳＤ－５とに挟まれた空間地に存在する柱穴で、直径約１ｍほどの楕円形を呈している。埋土はいずれも暗灰色粘土であった。　（木戸）

（2）出土遺物

ＳＤ－５（第55図）

甕１〈348〉

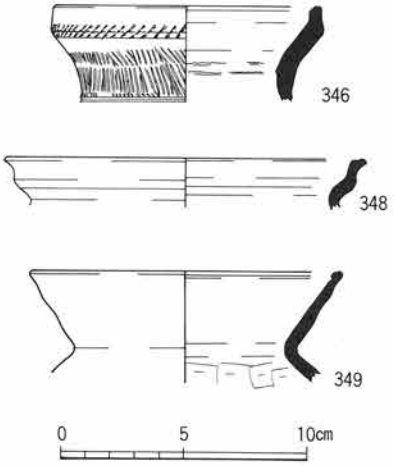
口縁部は稜に丸みをもたせて立ち上がり、端部をやや上方につまみだすものである。

甕Ｃ〈349〉

ほぼ直線的に外方へのび、口縁部を内側に肥厚させる。また口縁部にはナデたときの稜線が若干残る。内面はヘラ削りである。

壺〈346〉

頸部から外方へのび、口縁はやや内傾して立ち上がる。口縁部端は少し平坦面をのこし内傾している。口縁部外面の下半部に櫛描列点紋が施されている。頸部には粗くハケ目調整が施され、沈線が現存しているところで１条施されている。（森）



第55図　第２トレンチ出土土器実測図

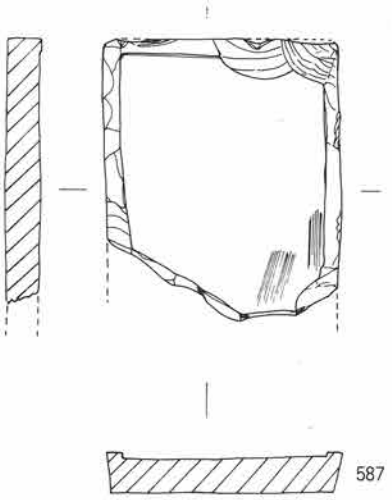
ＳＤ－１（第56図）

石製品

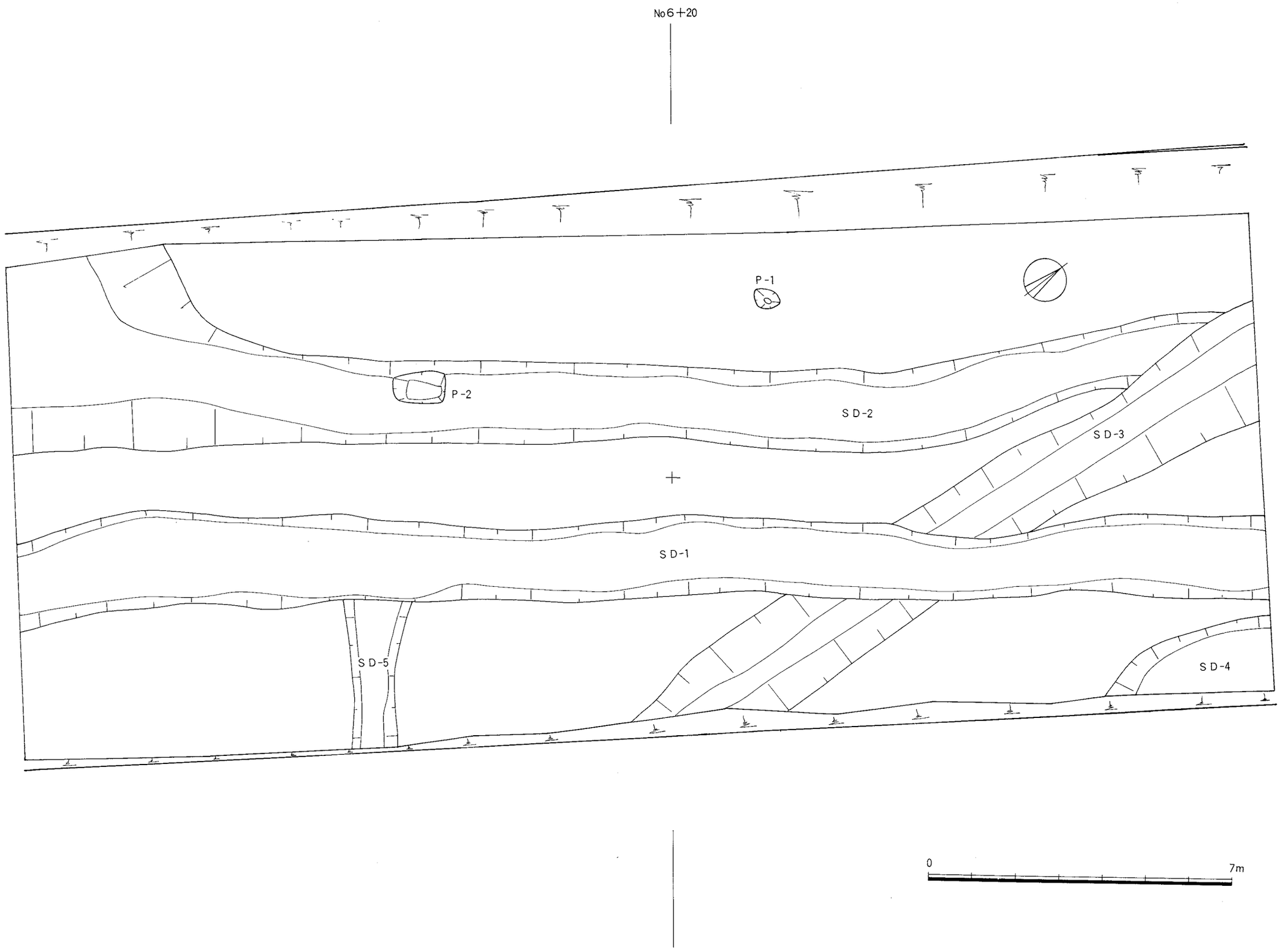
硯〈587〉

幅9.3cm、長さ11cm以上、厚み1.5cmをはかる長方形の硯である。下半部のほとんどと上面の縁の部分を欠損している。海の部分は凹がみられずほぼ平坦であるが、かなり使用されていたと考えられる擦痕が無数に残っている。

材質は正確には不明であるが、黒緑色系の粘板岩であると考えられる。（木戸）



第56図　硯実測図　Ｓ＝½



第57図　第３トレンチ平面図

3．第3トレンチ

このトレンチでは南北方向に走る溝２条、東西方向に走る溝３条、柱穴２個が検出されたこれらの遺構は出土遺物からおおよそ弥生時代末のものと考えられる。以下にこの調査区で検出された遺構と遺物について記述をくわえる。

（１）遺　構（第57図）

溝

ＳＤ－１

調査区の中央を調査区と平行に南北に走るもので、途中でＳＤ－２、３を切っている。幅約２ｍを測る。出土遺物から中世末から近世末まで存続した溝であると考えられる。

ＳＤ－２（第59図）

調査区の中央を調査区と平行に走るもので、北端をＳＤ－３によって切られている。南端はやや広がりながらトレンチ外に伸びている。幅は約１.８ｍ深さは約40cmを測り、埋土は４層からなっていた。

ＳＤ－３（第59図）

調査区の北半を南北に斜めに走るもので、両端ともトレンチ外に伸びている。幅は約２ｍで深さは約80cmを測った。埋土は６層からなっていた。

ＳＤ－４

調査区の北東端に位置する溝である。このＳＤ－４は第４トレンチのＳＤ－４の南端にあたる。

ＳＤ－５

調査区の中央東側を東西に走るもので西側をＳＤ－１によって切られている。東端はトレンチ外に伸びる。

柱穴状遺

ＳＰ－１

調査区の西、ＳＤ－２の西側に広がる広場に位置するもので、小円を呈する。

ＳＰ－２

形状が長方形を呈するもので、ＳＤ－２の上面より切っている。　（木戸）

（２）出土遺物

ＳＤ－２（第58図）

甕Ⅰ〈336～338〉

336はヘラ描刺突紋を、337は櫛描列点紋、338は櫛描波状紋を口縁部下半に施す。337は肩部にも櫛描列点紋を施している。

壺B〈339、340〉

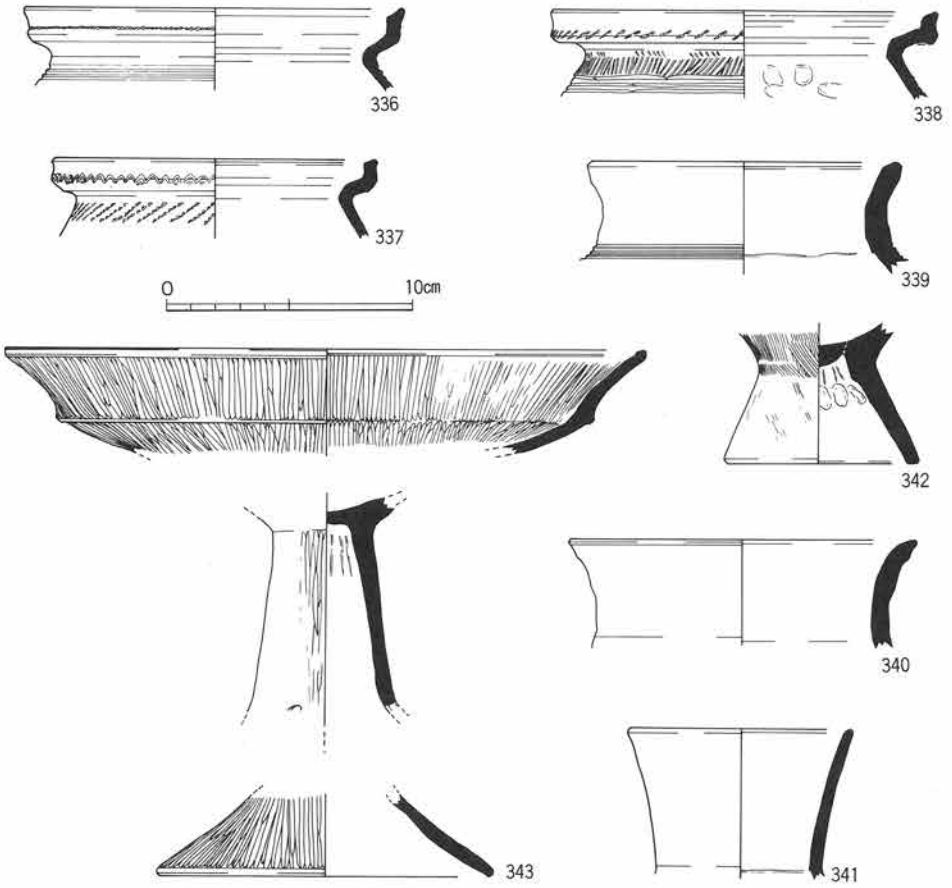
339は肩部に4条の櫛描沈線を施しているが、ともに外反する口縁を持つ。

甕　〈342〉

台付甕の底部で脚部まで作った後に中心を粘土で充塡している。

高杯A〈343〉

杯部内外面及び脚部外面を丁寧にヘラミガキしている。杯部は中位で段をもって外反し三方透かしの脚部を持つ。　(森)



第58図　第3トレンチ出土遺物実測図

4．第4トレンチ

第４トレンチにおいては調査区を東西、南北に走る溝が５条検出されている。これらの遺構は出土遺物から古墳時代前期前後頃のものと考えられる。以下に検出された遺構と遺物について記述をくわえる。

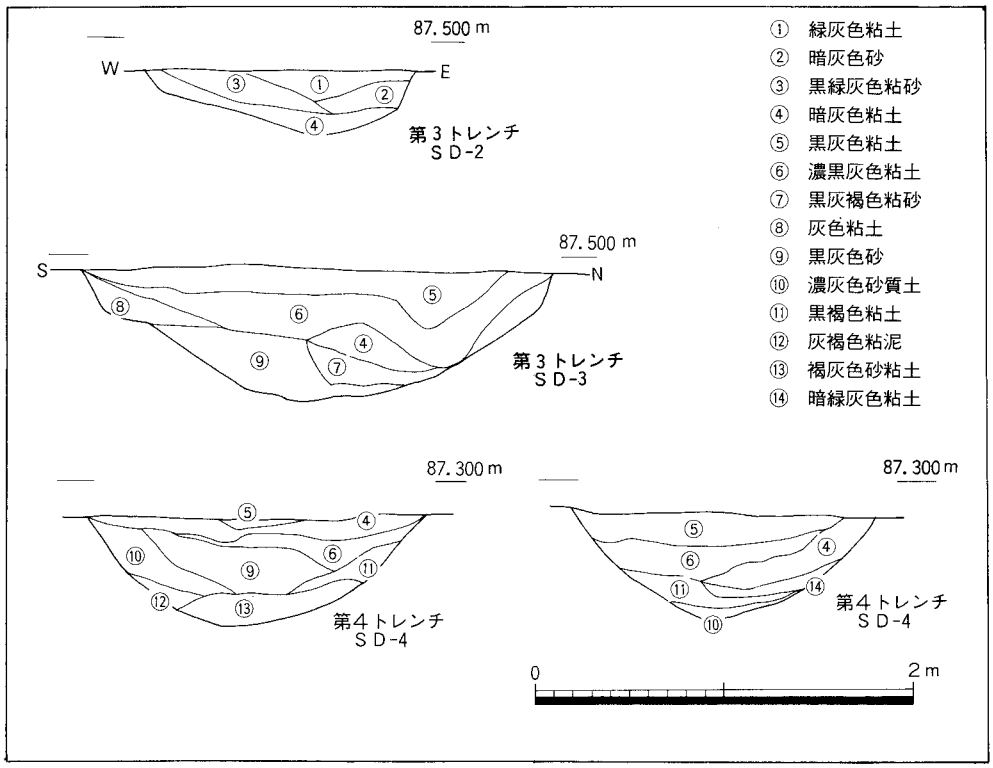
（１）遺　構（第60図）

ＳＤ－１

調査区の中央をトレンチと平行に一貫して走る溝である。出土した遺物から中世末から近世末まで存続していたものと考えられる。

ＳＤ－２

調査区の北側をトレンチに直行するように東西に走るもので、西端はＳＤ－４によって切られている。東はＳＤ－１にきられ、ＳＤ－５を切ってトレンチ外に伸びる。埋土は黒灰色粘土であった。



第59図　第３・４トレンチ溝土層断面図

ＳＤ－３

調査区の南西端を斜めに横切るもので、南端は第３調査区のＳＤ－３からの続きであり、西端はトレンチ外に伸びる。幅は約３ｍとやや広い。

ＳＤ－４（第59図）

調査区の中央を南北に斜めに走る溝である。幅は約２ｍと広く、深さは約１程を測った南端は第３調査区のＳＤ－４につながっており、北端はＳＤ－２を切ったあとトレンチ外にのびる。埋土は深いところで８層の堆積でなっており、浅いところでは６層の堆積でなっていた。

ＳＤ－５

調査区の東北端に位置するもので弧を描くように走る溝で両端ともトレンチ外にのびている。埋土は灰褐色粘土であった。（木戸）

（２）出土遺物

ＳＤ－４（第61図）

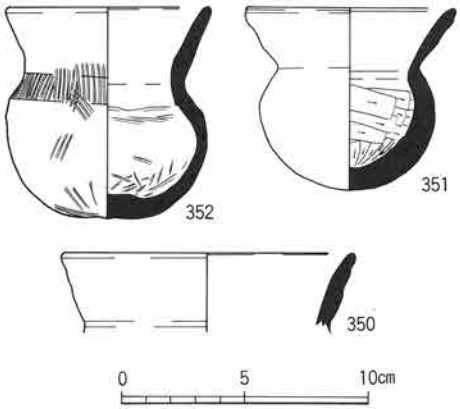
甕Ｃ〈350〉

やや外反して外方向にのび、端部は丸くおさめる。口縁部には強いナデがみられる。

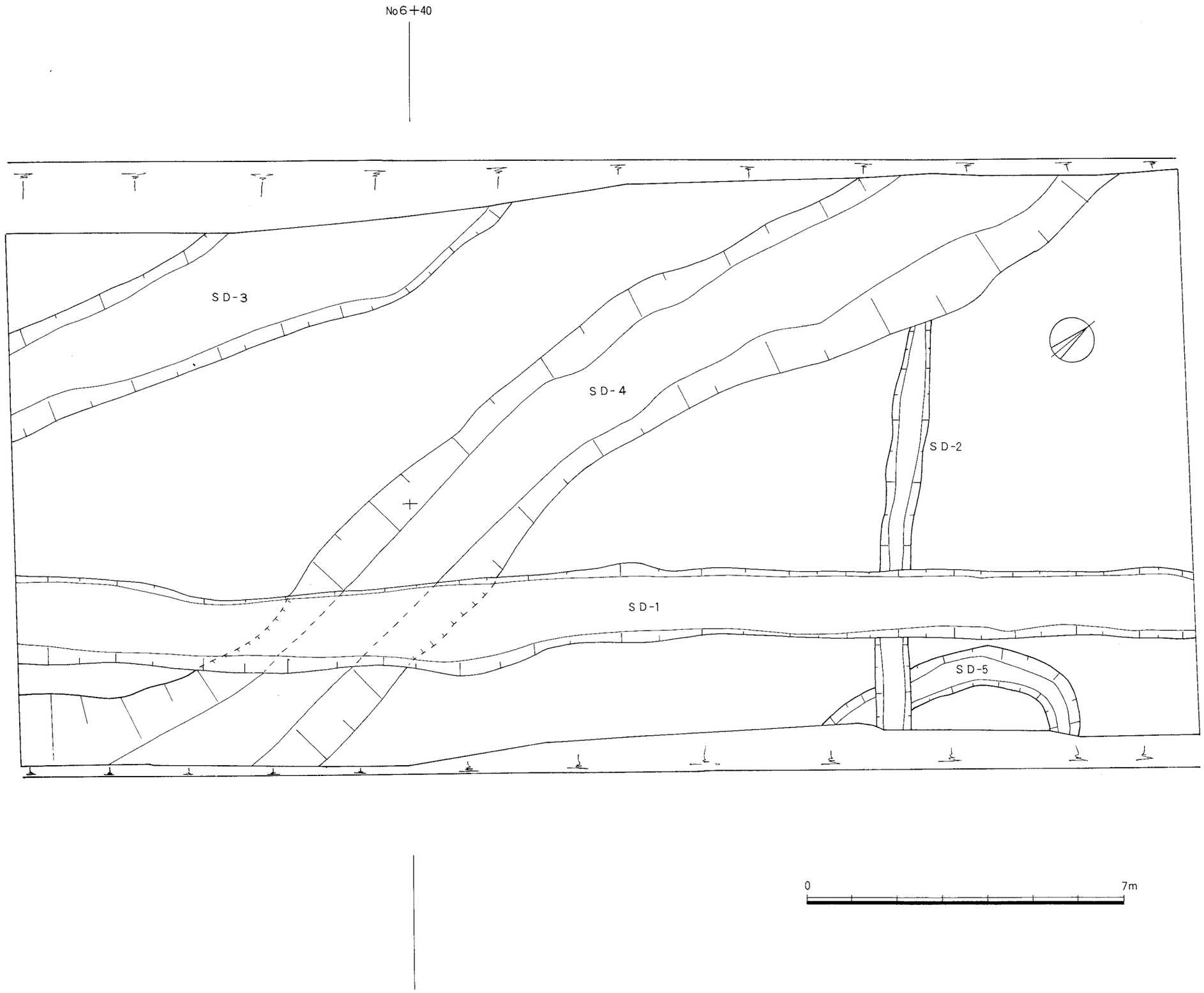
小型丸底壺〈351、352〉

351は外方にのびる口縁部から、丸みの強い肥厚な胴部へ続く。胴部内面はヘラ削りである。胴部最大径よりも口縁径のほうが大きい。

352も外方にのびる口縁部をもつが、胴部はやや偏平である。口縁部から胴部にかけての外面にはハケ目がみられ、底部内面には板状工具の痕がみられる。胴部最大径と口縁部径はほぼ等しく、また胴部高と口縁部高もほぼ等しい。（森）



第60図　第４トレンチ出土土器実測図



第61図　第４トレンチ平面図

5．第5トレンチ

第5トレンチは道路センター杭No.1＋45からNo1＋80までを設定して調査を実施した。調査の結果、溝で囲まれたなかに柱痕を遺した多数の柱穴とともに掘立柱建物が発見された調査区による制約があるが豪族の館の一角を検出したものと考えられる。以下にそのおもな遺構について記述をくわえる。

（1）遺　構（第65図）

掘立柱建物

この調査区ないにおける確実に掘立柱建物と判断されるものを全部で11棟検出した。

ＳＢ－１（第63図）

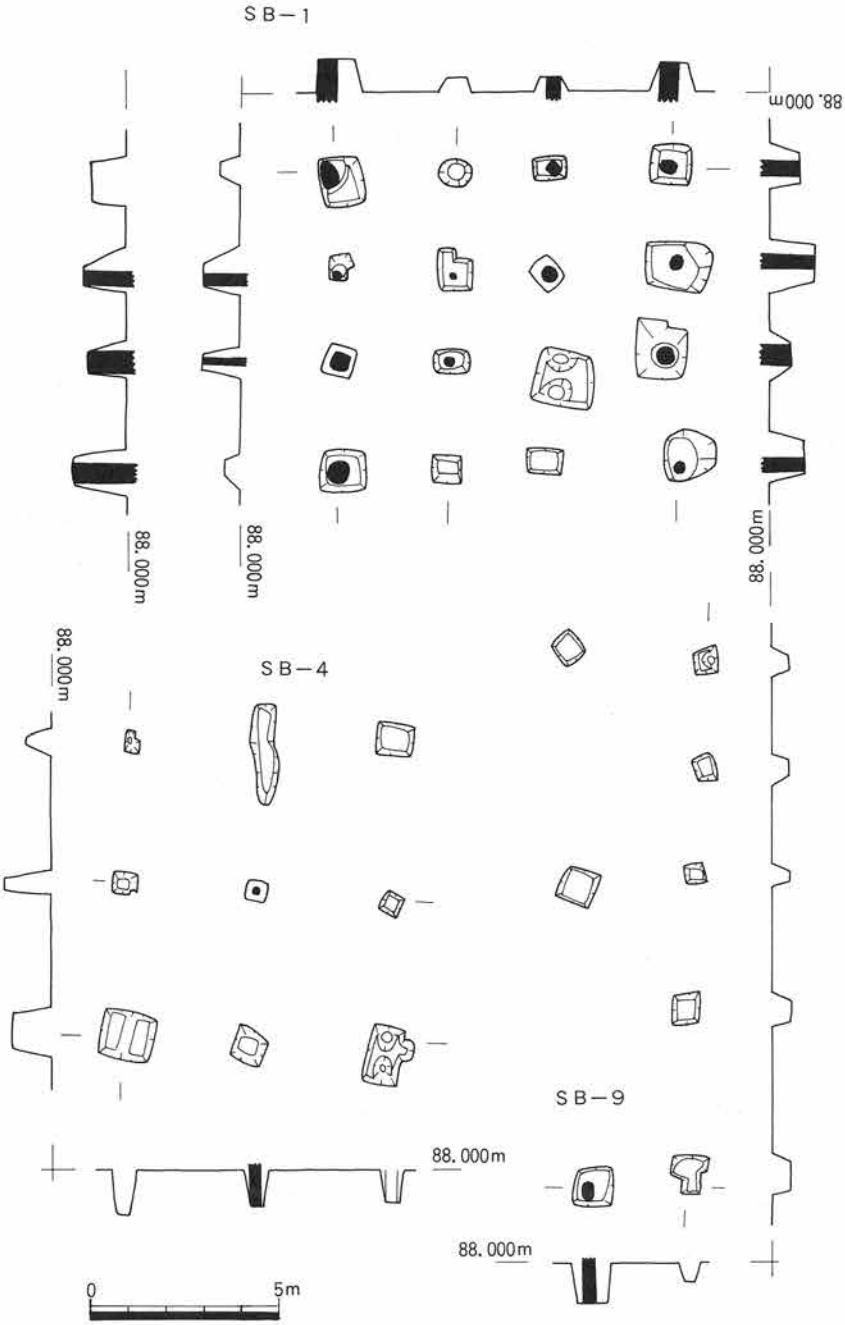
調査区の南で検出した桁行３間以上×梁間３間の東西棟である。方位は北より東に振っている。寸法は桁行・梁間ともに総長4.5m、柱間1.5m等間隔で各５尺と推定される。柱掘形は丸柱を遺すものが一辺0.6mで基本とするが、その間に存在する角柱を遺すものは0.4mと小さいものである。角柱は断面長方形するもので、丸柱は６面から８面に面取りされていた。共に材質は檜である。角柱は抜柱ではなく束柱の可能性がある。柱穴のうち４本を除いて他のすべてのところに柱痕を留めていた。ＳＤ－１、２との距離や方向などの位置関係や柱痕の依存状況、他の建物の切合い状況から判断して一番新しい（排絶時期）建物と判断される。

ＳＢ－２

ＳＢ－１の西半で検出した桁行１間以上×梁間２間の東西棟である。方位はＳＢ－１とほぼ同じである。寸法は桁行総長4.5m柱間2.1m（７尺）＋2.4m（８尺）、梁間柱間１.５m（５尺）であった。柱掘形は一辺70cmの隅丸方形のものがほとんどであった。柱痕は留めていなかった。方向は同じであるが、ＳＢ－１の柱穴によりＳＢ－２の柱穴が切られていることからＳＢ－１よりも古い時期に存在した建物であると判断できる。

ＳＢ－３（第64図）

ＳＢ－１の南西隅に位置する部分で検出した桁行３間以上×梁間１間の東西棟である。方位はＳＢ－１、２とほぼ同じである。寸法は桁行総長4.8m以上柱間1.8m（６尺）、梁間総長3.3m（11尺）であった。柱掘形は一辺約30cmの方形のもので構成されていた。柱痕は留めていなかった。ＳＢ－１と方向が同じで切りあっている柱はないが、位置的に重なるためＳＢ－２と同時期に存在し一緒に群を構成するものと考えられる。



第62図　第５トレンチ建物平面図

ＳＢ－４（第63図）

ＳＢ－１の南西で検出した桁行２間×梁間２間の東西棟である。方位はＳＢ－１よりやや西よりである。寸法は桁行総長3.9cm柱間2.1m（７尺）＋1.8m（６尺）、梁間総長3.3m柱間1.5m（５尺）＋1.8m（６尺）であった。柱掘形は一辺20cm～40cmの方形のもので構成されていた。柱痕は留めていなかった。一部の柱穴がＳＤ－２によってきられていること、Ｐ－２がＳＢ－１のＰ－４によってきられていることからＳＢ－１より古い建物であると判断できる。

ＳＢ－５

ＳＢ－４の北側で検出した桁行２間×梁間１間の南北棟である。方位はＳＢ－４とほぼ同じである。寸法は桁行総長2.7m柱間1.5m（５尺）＋1.2m（４尺）、梁間柱間1.8m（６尺）であった。柱掘形は一辺30cm～50cmの方形のもので構成されていた。柱痕は留めていなかった。方位がＳＢ－４とほぼ同じであることと位置的なことから同時期に存在し一緒に群を構成するものと考えられる。

ＳＢ－６（第64図）

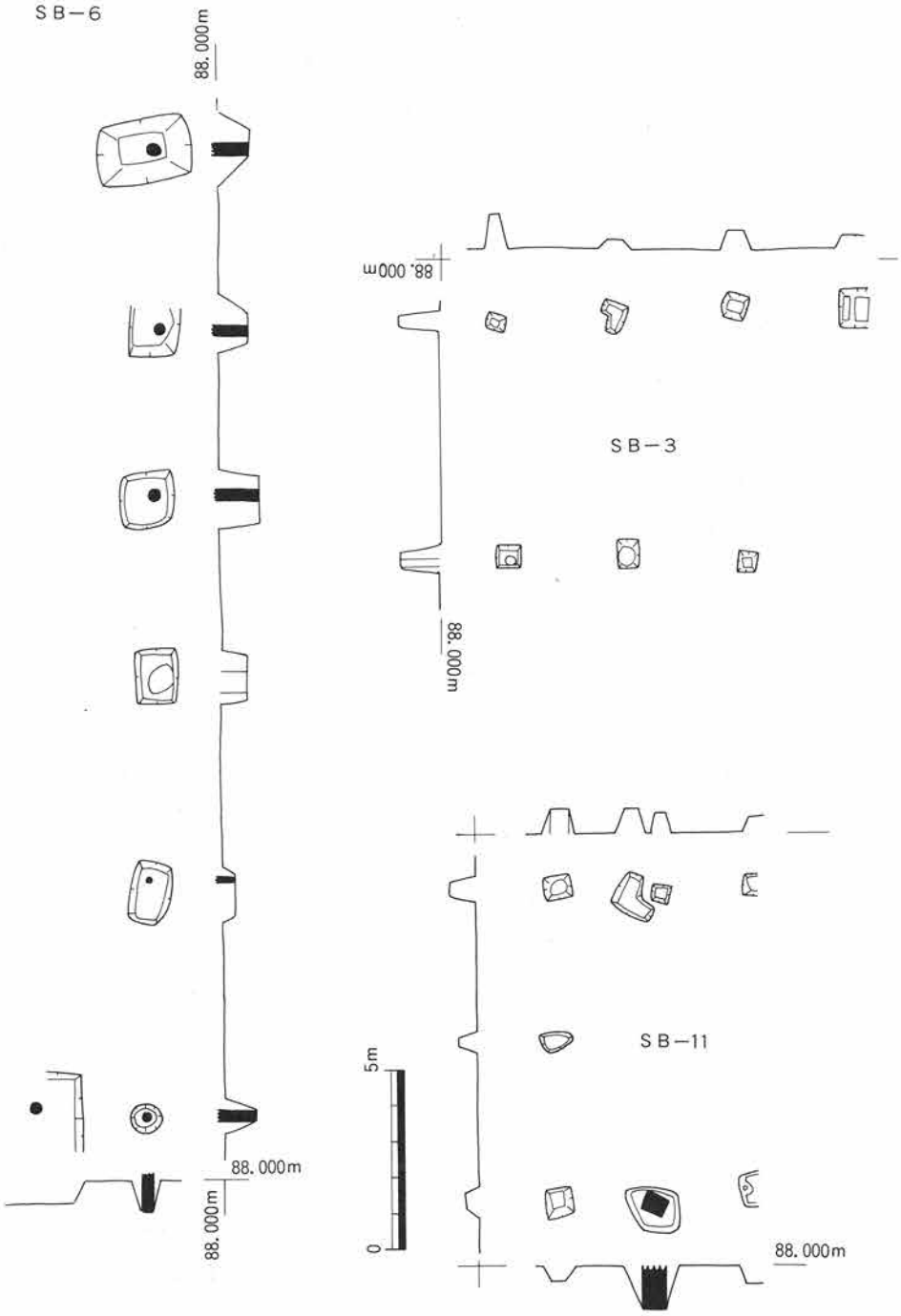
調査区の中央、ＳＢ－１の北に広がる空間地で検出された。桁行５間×梁間１間以上の南北棟である。方位はＳＤ－１よりわずかに東に振っている。寸法は桁行総長13.5m柱間2.4m（８尺）＋2.4m（８尺）＋2.7m（９尺）＋2.7m（９尺）＋3.3m（11尺）、梁間柱間1.5m（５尺）であった。柱掘方は70cm～90cmの隅丸長方形のもので構成されていた。柱痕は径20cmの面取りされた柱痕が６本検出された。柱痕が依存していること、ＳＤ－１とほぼ方位が同じであることから一番新しい建物の一群と考えられる。

ＳＤ－７

ＳＤ－６のほぼ中央で検出した桁行１間以上×梁間２間の東西棟である。方位はＳＢ－４とほぼ同じである。寸法は桁行柱間1.6m、梁間総長６m柱間３m（10尺）＋３m（10尺）であった。柱掘形は一辺60cmの隅丸方形のもので構成されていた。柱痕は留めていなかった。ＳＢ－４、５と同時期に存在し一緒に群を構成するものと考えられる。

ＳＢ－８

ＳＢ－７の北に位置するところで検出した桁行２間以上×梁間２間の東西棟である。方位はＳＢ－３とほぼ同じである。寸法は桁行柱間1.5m、梁間総長4.2m柱間2.1m（７尺）等間であった。柱堀形は40cmの方形のもので構成されていた。柱痕は留めていなかった。方位からＳＢ－２、３と同時期に存在し一緒に群を構成していたものと考えられる。



第63図　第５トレンチ建物平面図

ＳＢ－10

調査区の北西で検出した桁行１間以上×梁間４間の東西棟である。方位はＳＢ－９とほぼ同じである。寸法は桁行柱間1.8m、梁間総長7.8m柱間2.1m（７尺）＋2.4m（８尺）＋2.4m（８尺）＋0.9m（３尺）であった。柱掘形は一辺30cm～70cmの方形のもので構成されていた。柱痕は留めていなかった。

ＳＢ－11（第64図）

調査区の中央で検出した桁行１間以上×梁間６間の南北棟である。方位はＳＢ－６とほぼ同じである。寸法は梁間総長13.8m柱間2.1m（７尺）＋2.4m（８尺）＋2.1m（７尺）＋1.8m（６尺）＋2.4m（８尺）＋3.0m（10尺）であった。柱掘形は30cm～50cmの方形のもので構成されていた。柱痕は留めていなかった。

溝

ＳＤ－１

調査区の南端を東西に走る溝である。幅は約２ｍで深さは約20cmであった。この溝の東端のトレンチ沿で墨書土器とともに多量の土器が出土している。

ＳＤ－２、３

ＳＤ－１の中央よりやや西よりのところから直行するように取りついて南北に走る溝である。ＳＤ－２はＳＢ－１の建物を囲うようにＳＢ－５の横でクランクして、さらに真っすぐに北に伸びる。クランクしてからをＳＤ－３としてとりあつかった。位置、方向から考えてＳＤ－１と同時期でＳＢ－１６等の最後の段階の建物に伴うものと考えられる。これらの溝や建物の方向は磁北から西に大分振っており現行水田の条里に沿っている。

ＳＤ－４、５

調査区のほぼ中央で南北に走る溝であるが、途中でＴ字に分岐する。ＳＤ－３や全ての建物によって切られている。方位はほぼ磁北を向いており、条理制以前の南北地割に沿う溝であると考えられる。

ＳＤ－６

調査区の中央よりやや北よりを南北に走る溝である。南をＳＤ－１に切られ終わっている。北はトレンチ外に伸びる。ＳＤ－４と同じように磁北を向いている。

ＳＤ－７、10

調査区の北をトレンチに対して東西に走る溝である。ＳＤ－７は東がトレンチ外にのび西はＳＤ－３によって切られている。ＳＤ－10はトレンチに対して東西に走る溝で東西に

突きっている。中央でＳＤ－３が直行するように切っている。

ＳＤ－11

ＳＤ－７のやや南をトレンチに対して東西に走り、東の壁際で直角に曲がり北行するものである。途中をＳＤ－３、ＳＤ－７によって切られている。

井　戸

ＳＥ－１

ＳＤ－11の北側に位置する素堀の井戸である。形状は径約１ｍの円形を呈していた。深さは約１ｍであった。

土　壙

ＳＫ－１

ＳＤ－６とＳＤ－３の間に挟まれた空間地に存在する土壙でＳＤ－６によって切られている。形状はアメーバ状を呈していた。　（木戸）

（２）遺　物

包含層出土遺物（第66図）

土師器杯〈366～368〉

いずれも回転台成形のもので粘土紐を巻き上げた後、巻き上げ痕に沿うように横ナデを施すものである。366はやや大型製品である。367はやや広い平底の底部になっており口縁部下で段になり端部が肥厚する口縁部を呈する。368は小さな未調整の湾曲した底部のもので、口縁部は丸くおさめる。

土師器椀〈369～372〉

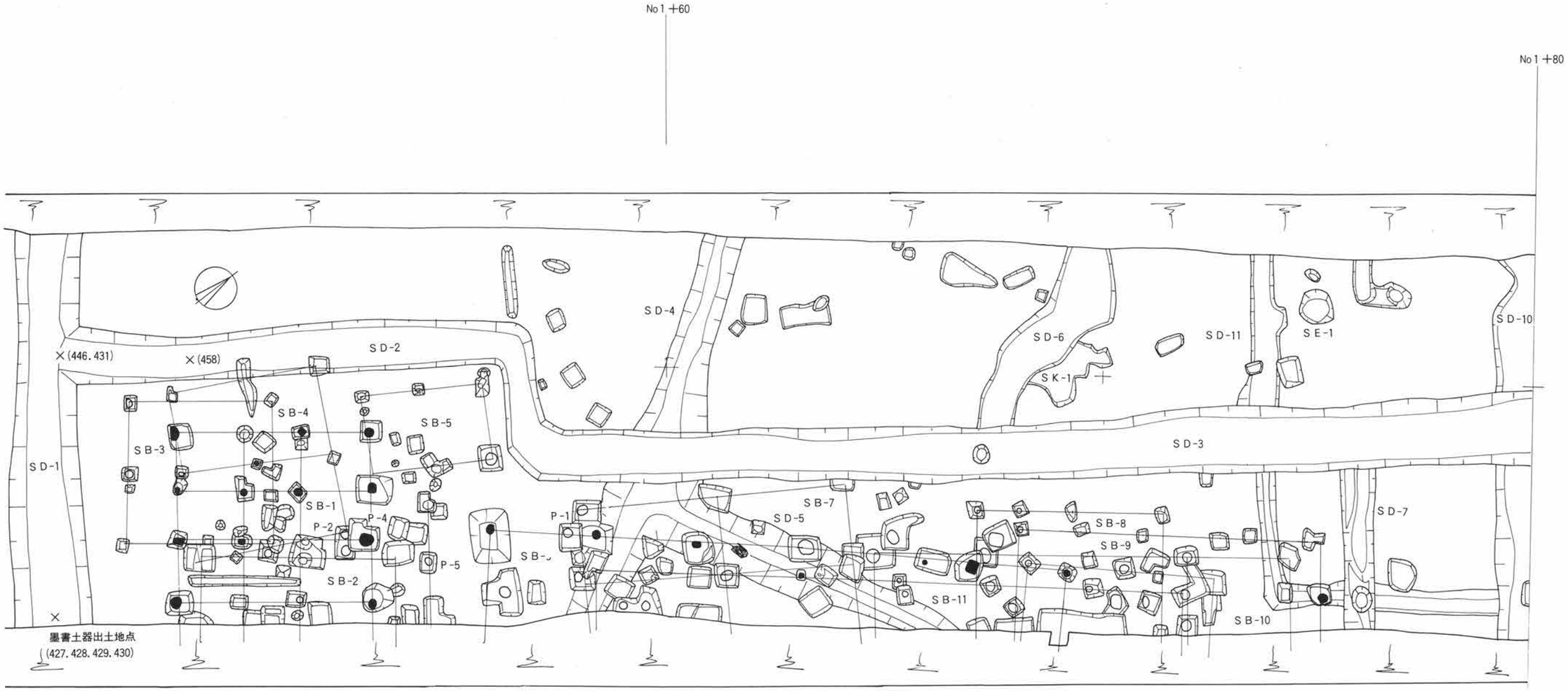
いずれも回転台成形による粘土紐巻き上げによって成形されるものの底部のみと考えられる。

糸切り底須恵器杯〈385、386〉

いずれも底部を静止糸切りした須恵器の杯の底部である。体部はロクロ横ナデによって調整されている。色調は青灰色を呈している。湖西地方を中心に広く分布しているものである。

須恵器杯蓋宝珠部〈373～375〉

373は頂部が若干窪む平坦な宝珠である。374は頂部が飛出した笠形を呈する宝珠である。375はやや頂部が飛出した平坦な宝珠である。



第64図　第５トレンチ平面図

須恵器杯蓋〈376～384〉

376、378は器高が高く体部が丸く、口縁端部が真っすぐに立つものである。377、379は平坦な頂部から屈曲するように口縁部を突出させ口縁端部を外側にひらかせるものである。381、383、384は平坦な頂部から斜めに下りる口縁部をつくり、口縁端部を真っすぐにたたせるものである。381はやや頂部が突出した平坦な宝珠を付けている。380、382は平坦な頂部から斜めに下りる口縁部をつくり、口縁端部を尖らせ内傾させるものである。

須恵器高台付杯〈387～400〉

いずれも、小さく低い貼付けられた高台を有しているものである。高台径からほぼ8cmのもの〈387、391、392、394、395、397、398〉とほぼ10cm〈388、389、393、396、399〉と15cm近いもの〈390、400〉とに分けられる。

須恵器皿〈53〉

ヘラ切りされた後、ナデ仕上げをおこなった広い底部のもので、器高は低く口縁部が外にくの字に開くものである。端部は面を持つ。

須恵器広口壺〈408〉

頸部から張出した肩部胴部にかけての破片である。幅の広い横ナデによって成形されている。

須恵器短頸壺〈409〉

張出した肩部から内傾し短い頸部から口縁部を形成して端部を丸くおさめるものである。

須恵器壺底部〈410～411〉

いずれも、壺の底部と考えられ410はやや斜めに張出した高台が貼りついているものである。411は、はの字に貼出した高台を有するものである。412は無高台の平底のものである。

緑釉陶器椀〈413、414〉

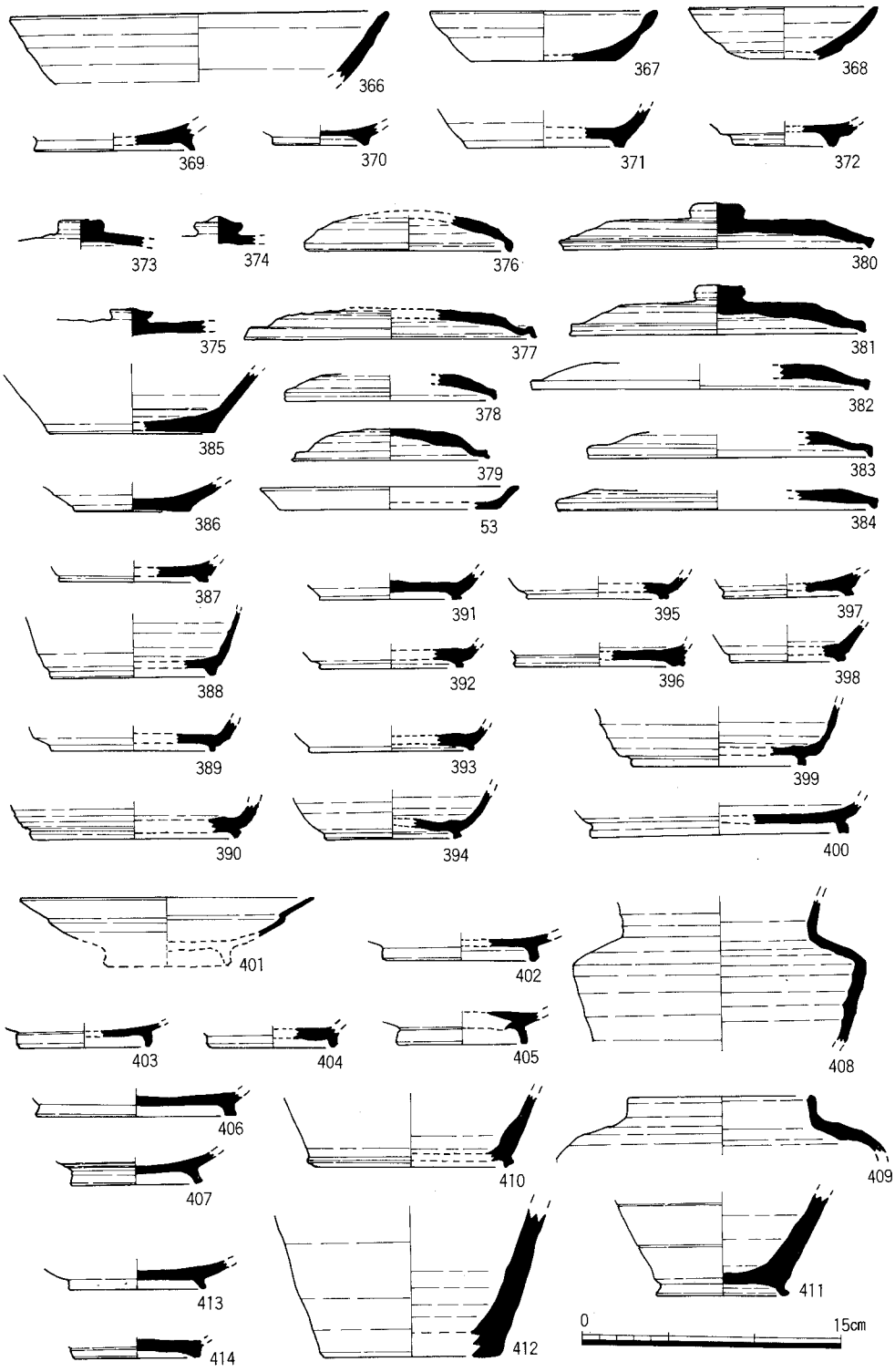
いずれも、椀の高台である。413は内外面ともにヘラ磨きされた後、全面に淡緑色の釉をかけられたもので尾張系産のものと考えられる。

灰釉陶器皿〈401〉

段皿の口縁部である。ケズリにより成形されたのち刷毛により釉がぬられている。

灰釉陶器椀底部〈402～407〉

402、403、404、405は張付高台が三日月形を呈するもので黒笹90号窯相当と考えられる。406、407は貼付高台がはの字に張出すもので折戸53号窯相当と考えられる。



第65図　第５トレンチ包含層出土遺物実測図

ＳＤ－１（第67、68図）

土師器杯〈415～418、450〉

いずれも、いわゆる回転台土師器である。粘土紐の巻き上げによる成形によってつくられた体部に横ナデを施したもので、体部全体に段が残っている。未調整の底部から斜め上方に立ち上がってやや外反するように口縁部をひらかせるもので端部を丸くおさめるものである。

土師器皿〈419、420、451〉

いずれも回転台成形によるもので平坦な広い底部から、419は斜め上方に口縁部が立ち上がったもので端部を丸くおさめる。420、451はやや内湾するように口縁部が立ち上がるもので端部をまるくおさめる。

土師器鉢〈421、449〉

回転台成形によるもので、やや狭い底部から大きく内湾するように立ち上がらせた口縁部をもつもので421は端部の内面に稜をもつように肥厚させ、449は端部を外方につまみ出す。

土師器甕〈452、453〉

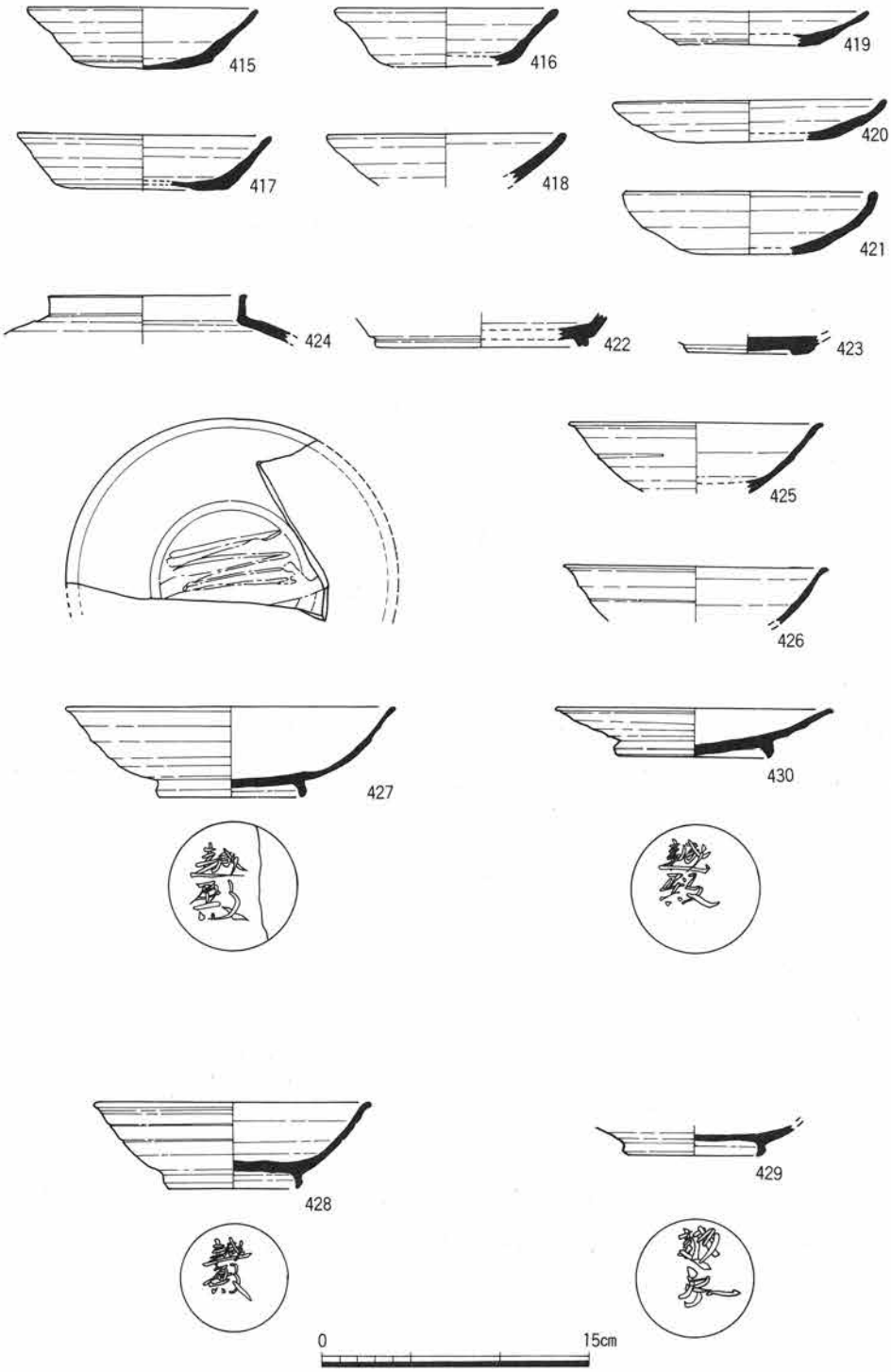
452は小型のものでくの字を呈する口縁部をもつもので端部は内側につまみだされている。内面は横方向のハケ目が施されており、外面は縦方向にハケ目が施されている。453は球形の体部からくの字にひろがる口縁部をもつもので、端部に面をもつものである。内面は乱ハケ目が施されており、外面は体部上半から頸部までを斜め方向のハケが施され下半は縦方向のヘラケズリが施されていた。

須恵器杯蓋〈431～437〉

431は平坦な頂部から外反するように立ち上がらせて、面をもたせ真っすぐにたたせた端部をもつものである。転用硯として使用している。また、外面頂部左側に「縣大家」と墨書されていた。432～434はやや湾曲した体部から内湾するように口縁部を形成するもので、端部に面をもたせ内傾させるものである。432には頂部がやや突び出す笠形をした宝珠を貼付けているものである。435～437は平坦な体部から面をもって尖った口縁端部を内径させるものである。435は頂部に平坦な宝珠を貼付けている。転用硯として使用されている。

須恵器杯〈422、438～444〉

438～442は平底の底部から口縁部を真っすぐにたちあがらせるものである。いずれも丁寧な横ナデによって成形されている。422、443、444は底部に貼付け高台を有するものであ



第66図　第５トレンチＳＤ－１出土遺物実測図

る。

須恵器広口壺〈455〉

斜めに立ち上がった体部が肩で鋭い稜を形成して、くの字に曲がるものである。貼り付けられた頸部からは大きく開く口縁部がのびるものである。途中に2条の沈線が巡る。高高は、はの字に開く。

須恵器長頸壺〈454、456〉

いずれも長頸壺の口縁部で長い頸部から開く口縁部が外方に開き、そこから端部が面をもって上方に立ち上がるものである。

須恵器短頸壺〈424〉

張りだした体部から直立するように頸部を短く立ち上がらせたもので、端部を外方につまみださせるものである。

軟質緑釉陶器椀〈423〉

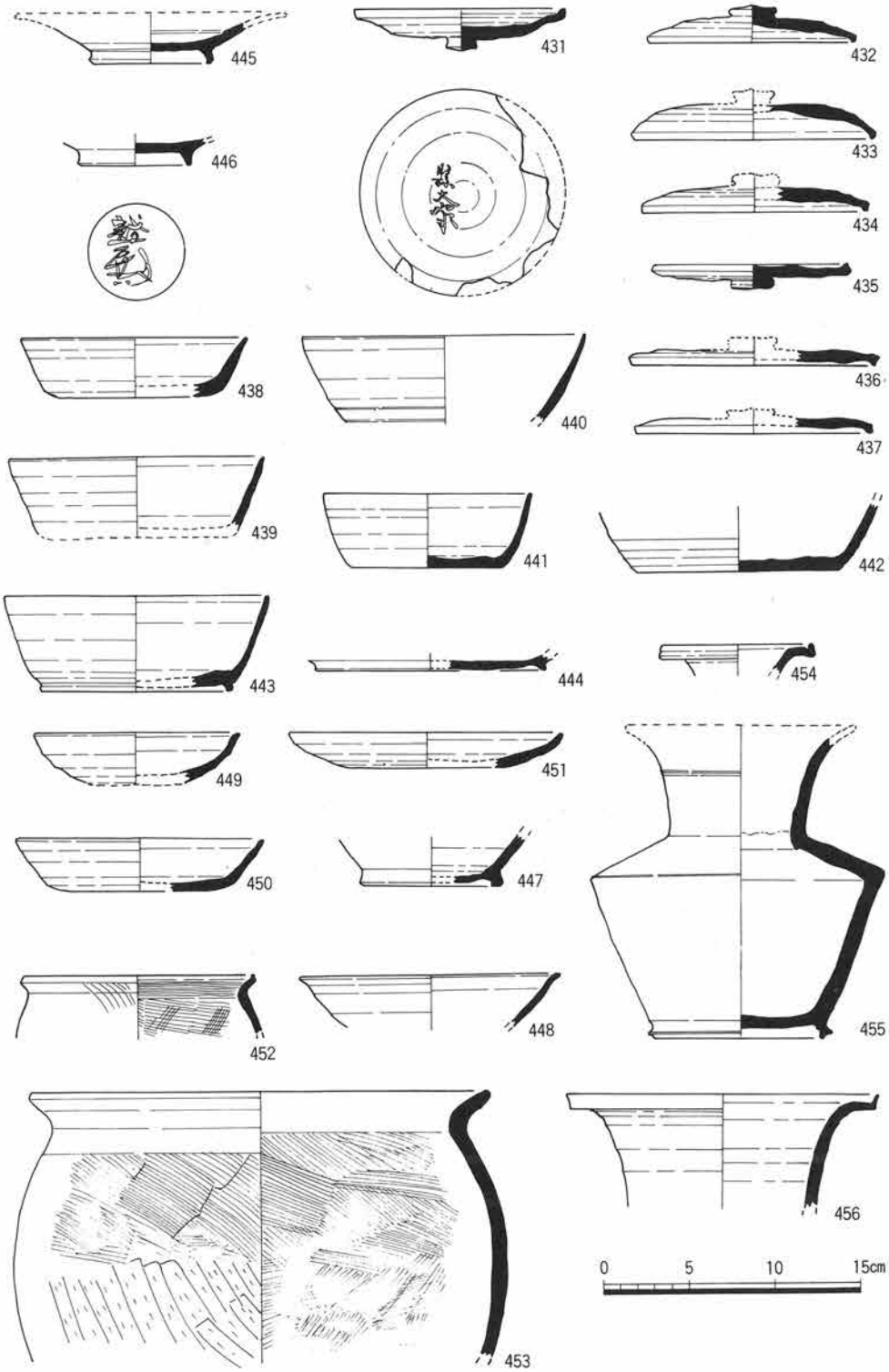
いわゆる幅が厚く低い蛇の目高台を有するものである。素地は淡白褐色の軟質のもので淡緑の釉がかかっている。京都系のものと考えられる。

灰釉陶器椀〈425～429、446、448〉

425、426、427、428、429、448はいずれも貼付けの三日月形高台を有するもので、強いロクロ横ナデによって成形されたやや内湾しながら立ち上がる体部から、端部を外方に外反するさせ丸くおさめるものである。いずれも淡緑色の灰釉が塗られている。427は内面見込みに筆により横方向に釉が塗られている。また、427、428には底部高台内面に「越殿」と丁寧な書体で墨書されていた。429には底部高台内面にやや崩れた書体で「越家」と墨書されていた。446には底部内面に「越殿」と墨書されていた。いずれも黒笹90号窯相当と考えられる。

灰釉陶器皿〈430、445〉

430は底部から斜め上方に立ち上がる底部に貼付けられた三日月形高台を有するものである。強い横ナデによる成形による段を明瞭にのこしている。口縁部はやや外反させながら外方につまみ出して丸くおさめるものである。内外面の縁に淡緑色の灰釉が塗られている。底部高台の内面にはやや荒い書体の「越殿」の墨書が施されている。445は貼付けられた三日月形の高台を有する段皿の底部である。いずれも黒笹90号窯相当のものと考えられる。



第67図　第５トレンチＳＤ－１出土遺物実測図

ＳＤ－２（第68図）

須恵器杯蓋〈466〉

ヘラ切りされて平坦な頂部からロクロ成形による横ナデにより調整され、内湾するように屈曲させた口縁部から口縁端部をやや外開き気味につまみだすもので口縁端部に面を持つものである。頂部には平坦な宝珠つまみを貼り付けている。

須恵器杯〈460～465〉

460は大きく「ハ」の字に開く口縁部を有するものでロクロ成形による横ナデにより調整されているものである。462～464はいずれも杯の底部である。いずれも高台が貼り付けられているが少しずつ細部の形が異なっている。462はやや「ハ」の字に開き端部を内側につまみだしている。463は「ハ」の字に開き端部を外方につまみだしている。464は短く真っすぐに立つもので端部が窪んでいる。

底部糸きり須恵器杯〈461、465〉

いずれも底部を糸きりによって切り離されたもので、平坦な底部は体部からケズリ出されている。

須恵器壺〈467、468〉

いずれも口縁部で、「ハ」の字に開く頸部から467は受け口状に一度外方につまみだされた口縁部はそこから真っすぐ上方につまみだされて縁を作っている。468は口縁部外方につまみだしやや幅の広い縁を作り出しているものである。色調はいずれも暗灰色を呈する。

軟質緑釉陶器椀〈459〉

幅が広く厚く低い蛇の目高台を有するものである。素地は淡白褐色を呈するもので軟質焼成のため磨滅著しく緑釉は禿げている。京都系のものと考えられる。

灰釉陶器椀〈457、458〉

いずれも三日月形の高台を有するもので、体部は強いロクロによるヘラ削りによって成形されている。458の高台見込み部分には一部を欠損しているが「越口」の墨書が認められる。

ＳＤ－３（第68図）

土師器杯〈478～483〉

いずれもロクロ回転台によって成形されたものであるが、形態から３つに区別できる。478、479は平坦で小さな底部から「ハ」の字に上方に体部が伸びるもので口縁端部を丸く収める。480、483はやや丸い底部から内湾するように体部が立ち上がり口縁端部を丸く収

めるものである。482、483は広い平坦な底部から屈曲するように短い体部を立ちあがらせるもので口縁端部をつまみだしている。

土師器杯高台付き〈485～486〉

いずれも「ハ」の字に開く貼り付け高台付きの土師器の杯の底部であると考えられる。

土師器皿〈484〉

ロクロ回転台により成形された皿で、平坦で広い底部から内湾するように短く体部をたちあがらせるものである。

土師器甕〈488、489、585〉

585、488は屈曲して外方に開く口縁から端部を上方に強くつまみ出されたものであり端部に面を持つ。外面は縦方向の細かなハケ目を施し内面は横方向のハケ目を施している。外面と口縁部内面に煤が付着している。489は受け口状に口縁部が立ち上がるもので端部は真っすぐに立ち上がり丸く収めるものである。

黒色土器鉢高台付き〈487〉

高台付きの鉢の底部と考えられる。内外面ともにヘラ研きが施されている。外面は淡褐色を呈し、内面はカーボンが付着している。

須恵器杯蓋〈476、477〉

いずれも平坦な頂部からやや下方に屈曲して口縁端部を小さくつまみ出すもので端部に面を持っている。

須恵器杯〈471～474〉

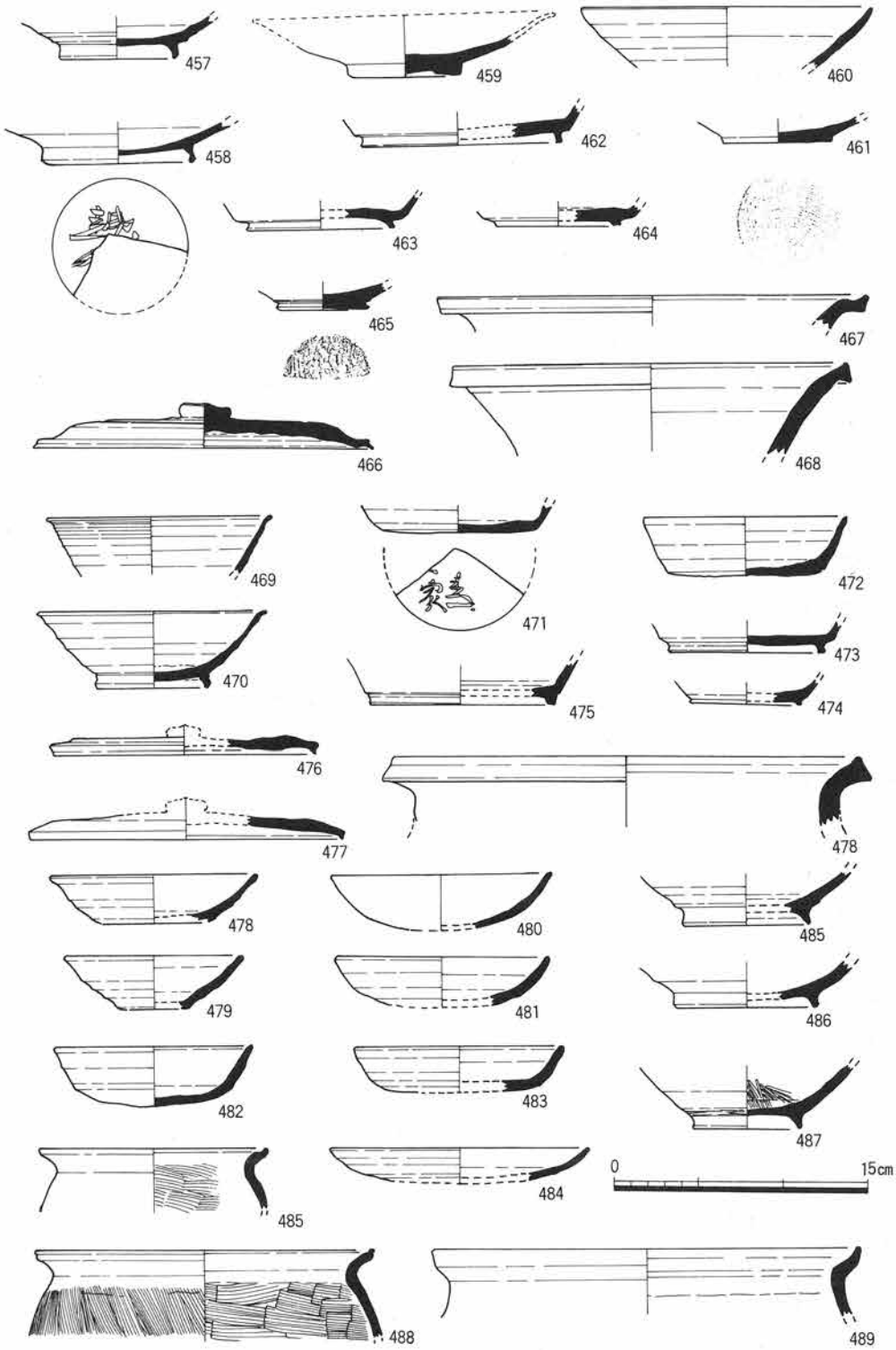
471、472は高台のないものである。平坦な底部からほぼ真っすぐに立ち上がる体部を有し端部を鋭く収めるものである。471の底部には「越家」と墨書されていた。他はいずれも高台付きのものであるが473は「ハ」の字に開くもので端部を外につまみだしている。474は足の短いものである。475は真っすぐに立ち端部が窪むものである。

須恵器甕〈478〉

頸部から屈曲して外方につまみだされた口縁部をもう一度面を成形して内側におり曲げ端部を内側につまみだすものである。

灰釉陶器碗〈469、470〉

いずれも強いロクロによるヘラ削りにより体部を成形されて底部に三日月高台を有する碗であるが、やや内湾気味に立ち上がる体部から口縁部が外方に開き口縁端部を折り曲げるように外方につまみだすものである。



第68図　第５トレンチＳＤ－２．３出土遺物実測図

ＳＤ－４（第69図）

土師質土器〈497〉

不調整の底部から斜め上方に立ち上がる口縁をもつもので端部を丸く収める。口縁部を一度だけ横ナデを施している。内面見込みには横方向のハケ目が残っている。おおよそ、13世紀代のものと考えられ混入遺物と考えられる。

ＳＤ－７（第69図）

軟質緑釉陶器椀〈490～493〉

いずれも、幅が厚く低い蛇の目高台を有するものである。素地は淡白褐色の軟質のもので淡緑色の釉がかかっている。京都系のものと考えられる。

ＳＤ－８（第69図）

土師土器皿〈496〉

平坦な底部から屈曲するように斜め上方に口縁部が立ち上がるもので端部を外方につまみだすものである。体部はロクロ回転台による横ナデによって成形されている。

須恵器短頸壺〈494〉

真っすぐに立つ胴部から一度肩部で強い稜を持ち、強い横ナデによる成形により内傾するように立ち上がらせたのち頸部を短く真っすぐに立ち上がらせて端部を外方につまみだすものである。

ＳＤ－10（第69図）

須恵器壺〈495〉

壺の底部と考えられるものである。底部は篦起こしの痕が認められる。体部は内外面ともに強い横ナデによって成形されている。

ＳＰ－１（第69図）

須恵器杯蓋〈498〉

平坦な項部から一度屈曲させ口縁部を形成させて、口縁端部を端部に面を持つように真っすぐにたちあがるようにつまみだすものである。欠失しているが天項部には宝珠つまみがついていたものと考えられる。柱掘形から出土している。

ＳＰ－２（第69図）

須恵器杯蓋〈499〉

平坦な項部から一度屈曲させて口縁部を形成して、口縁端部を端部に面を持つように真っすぐにたちあがるようにつまみだすものである。

ＳＰ－３（第69図）

須恵器杯蓋〈500〉

宝珠つまみのあった痕跡のある天頂部から湾曲するように体部を形成させ、口縁部で一度屈曲させ口縁端部をつまみだすものである。頂部には丁寧な「林家」の墨書が認められる。

ＳＰ－４（第69図）

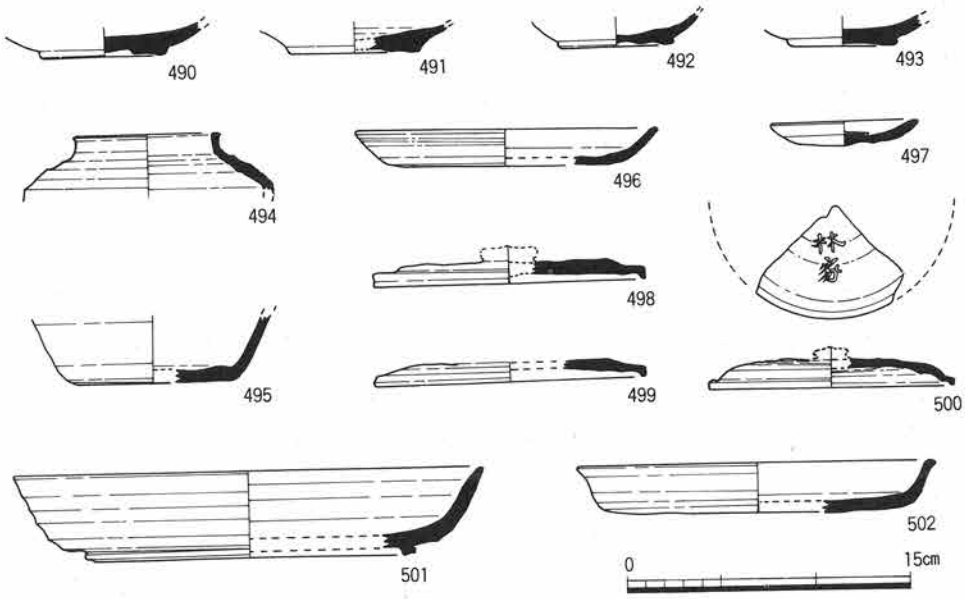
須恵器大杯〈501〉

ヘラケズリされ平坦な底部から体部を斜め上方にたちあがらせ口縁端部を鋭くつまみだすものである。高台は平坦で短いものが貼り付けられている。体部は強いロクロ横ナデにより成形されている。

ＳＰ－５（第69図）

須恵器杯〈502〉

ヘラキリされた平坦で広い底部から短く斜め上方に立ち上がらせ、口縁端部を外方につまみだすものである。体部は強いロクロ横ナデにより成形されている。　（木戸）



490～493：ＳＤ-7　494，496：ＳＤ-8　497：ＳＤ-4　495：ＳＤ-10
498：ＳＰ-1　499：ＳＰ-2　500：ＳＰ-3　501：ＳＰ-4　502：ＳＰ-5

第69図　第５トレンチ出土遺物実測図

6．第6トレンチ

第６トレンチは道路センター杭No.1＋45からNo１＋35までを設定して調査を実施した。調査の結果、第５調査区から続くと考えられる掘立柱建物群とその外郭を流れる溝群、また、大外を囲う溝が検出された。以下にそのおもな遺構と遺物について記述を加える。

（１）遺　構（第71図）

柵列

ＳＡ－２

調査区の北東で検出した南北列で一部をＳＢ－12に切られる４間分の柱穴を確認した。

ＳＡ－３

調査区の中央で検出した東西列でＳＤ－２の間を繋ぐように１間分の柱穴を確認した。門の可能性がある。

掘立柱建物

この調査区においては確実に掘立柱建物と判断されるものを全てで８棟検出した。

ＳＢ－12（第70図）

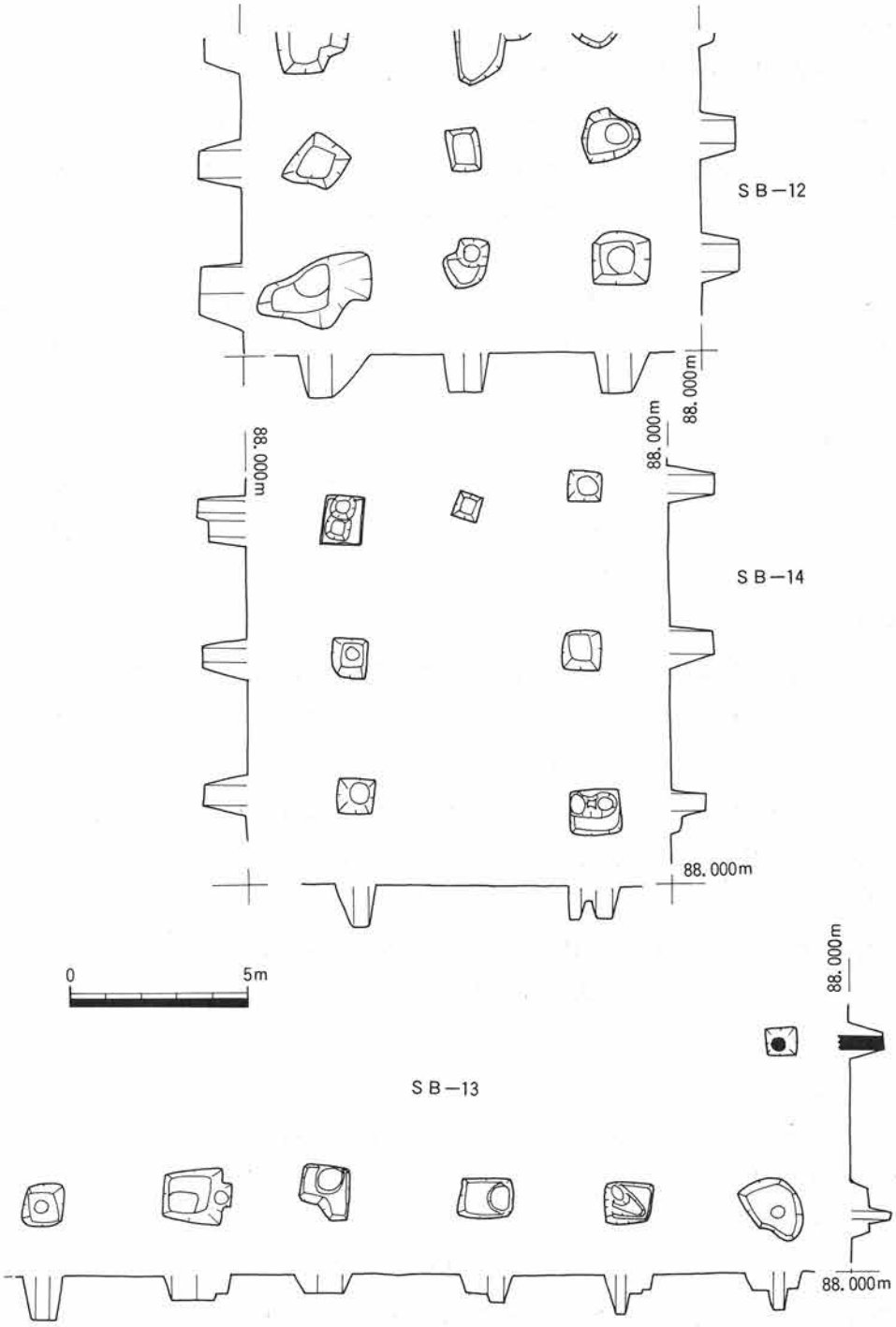
調査区の北西で検出した桁行２間×梁間２間のもので構造から倉庫と考えられる。寸法は梁間総長4.5m、柱間2.4m（８尺）＋2.1m（７尺）で桁行総長3.6m、柱間1.8m（６尺）＋1.8m（６尺）であった。柱掘方は一辺80cm位の方形のものがほとんどであったが一部柱の抜き痕が認められる。よって、柱痕は認められなかった。ＳＢ－14と同じ方位を持っている。

ＳＢ－13（第70図）

調査区の東端で検出した桁行１間以上×梁間５間の東西棟である。方位はＳＡ－２とほぼ同じである。寸法は桁行総長10.5m、柱間北から2.1m（７尺）＋1.8m（６尺）＋2.4m（８尺）＋2.1m（７尺）＋2.1m（７尺）で梁間柱間2.1m（７尺）であった。柱掘方は方形ないし長方形のものがほとんどであった。柱痕は１本だけ認められた。

ＳＢ－14（第70図）

調査区の北端で検出した桁行２間以上×梁間２間の東西棟である。方位はＳＢ－12とほぼおなじである。寸法は桁行総長4.5m以上、柱間西より2.4m（８尺）＋2.1m（７尺）以上、梁間総長3.3m、柱間北より1.5m（５尺）＋1.8m（６尺）であった。柱掘方は一辺50cm～70cmの方形のものであった。柱痕はみとめられない。



第70図　第６トレンチ建物平面図

ＳＢ－14

調査区の北端で検出した桁行２間以上×梁間２間の東西棟である。方位はＳＢ－12とほぼ同じくしている。寸法は桁行総長4.5m、柱間西から2.4m（８尺）＋2.1m（７尺）で梁間総長3.3m、柱間南より1.8m（６尺）＋1.5m（５尺）であった。柱掘方は全て50cm～70cmの方形のものであった。柱痕は認められなかった。

ＳＢ－15

桁行１間以上×梁間２間の東西棟である。寸法は桁行柱間2.1mで梁間総長4.5m、柱間南から2.4m（８尺）＋2.1m（７尺）であった。柱掘方は30cm前後の方形ないし円形のものであった。柱痕は認められなかった。

ＳＢ－16

桁行１間×梁間１間の東西棟である。方位はＳＢ－18、19とほぼ同じくしている。寸法は桁行総長2.4m（８尺）、梁間総長1.5m（５尺）であった。柱掘方は30cm位の方形、円形のものであった。柱痕は認められなかった。

ＳＢ－17

桁行１間×梁間１間の南北棟である。寸法は桁行総長2.1m（７尺）、梁間総長1.8m（６尺）であった。柱掘方は30cm位の方形、長円形のものであった。柱痕は認められなかった。

ＳＢ－18

桁行２間×梁間１間の東西棟である。寸法は桁行総長3.6m、柱間西より1.5m（５尺）＋2.1m（７尺）で梁間総長1.8m（６尺）であった。柱痕は認められなかった。

ＳＢ－19

桁行１間以上×梁間１間の東西棟である。寸法は桁行柱間2.1m（７尺）＋梁間総長2.4m（８尺）であった。柱痕は認められなかった。

溝

ＳＤ－１

ＳＢ－18に重なるように東西に走る溝である。幅は約0.6mで、東は調査区外に伸びるが約3.3m程検出した。

ＳＤ－２

ＳＤ－１のやや南を同じ様に東西に走る溝でＳＢ－18とＳＤ－３によって切られている幅は約0.5～１mで、東は調査区外に伸びているが5.5m程検出している。

ＳＤ－３

ＳＤ－２の南を東西方向に調査区に対してやや振るように走る溝である。幅は0.6mで東は調査区外に伸びているが5.5m程検出している。

ＳＤ－４、６、７、８

いずれも長さは違うが、調査区の南側を調査区と平行に南北に走る溝である。幅はいずれも0.7mを計る。

ＳＤ－９

調査区の南西端に位置する溝であるが、先がやや北に曲がったところでＳＤ－４、６、８によって切られている。

ＳＤ－10

調査区の南端を東西に走る溝の肩の部分を検出している。館跡の南限界を示すものと考えられる。（木戸）

土壙

ＳＫ－１

ＳＤ－３によって切られ、ＳＤ－７を切る長円形の土壙である。

（２）遺　物

包含層出土遺物（第72図）

土師器杯〈509〉

回転台成形による杯の底部である。色調は淡褐色を呈する。

須恵器杯蓋〈512～514〉

512は器高が高く狭いヘラ削りされた頂部から、体部が斜めにさがったところから稜を持つように内側に口縁部をおり曲げるもので、端部を鋭く収める。513は平坦な頂部から短く斜めに下がった体部から口縁端部を真っすぐに立ちあがらせるものである。514はやや丸みを帯びた頂部から体部を一旦屈曲するように形成したのち、口縁部を真っすぐに立ち上がらせるものである。

須恵器高台付杯〈515～519〉

いずれも、小さく低く貼り付けられた高台を有しているものである。高台の形と高台径から、径約７cmで丸く収め端部を外方につまみ出すもの（516）と径約９cmで方形で端部が平坦なもの（518）と径11cmで方形で端部が平坦なもの（515、517）と径約19cmで丸く収め

端部を外方につまみ出すもの（519）とに分けられる。

須恵器広口壺〈520～523〉

520は大きく外方に広がる口縁部から端部を面を持つように真っすぐに立ち上がらせるものである。521は大きく外方に広がる口縁から面を持つように口縁端部を垂下させ玉縁状にしたものである。522は足状の貼り付けられた高台を有する底部である。523は平坦な底部を有するものである。

灰釉陶器皿〈503、504〉

やや内湾するもの（503）と外反するもの（504）でいずれも端部を丸く収める。体部はヘラケズリによって成形されている。

灰釉陶器椀底部〈505、506、507、510〉

いずれも高台が三日月形を呈するものである。505の高台内見込みには「越一」とみられる墨書が認められる。

灰釉陶器壺底部〈511〉

やや厚い体部から外方に張りだした足状の貼り付け高台のついた壺の底部と考えられる。

黒色化土師質土器皿〈525〉

斜め上方に立ち上がり口縁端部を丸く収めるものである。口縁端部を一度横ナデしている。外面には成形時の指頭圧痕が残っている。内面には花弁状のら旋ミガキが施されている。

黒色化土師質土器椀〈524、525〉

底部と口縁部の一部である。

信楽焼陶器甕底部〈528〉

色調淡褐色を呈するもので、外面底部近くは板状のものによるケズリが認められる。他は内外面ともに指によるナデが施されている。

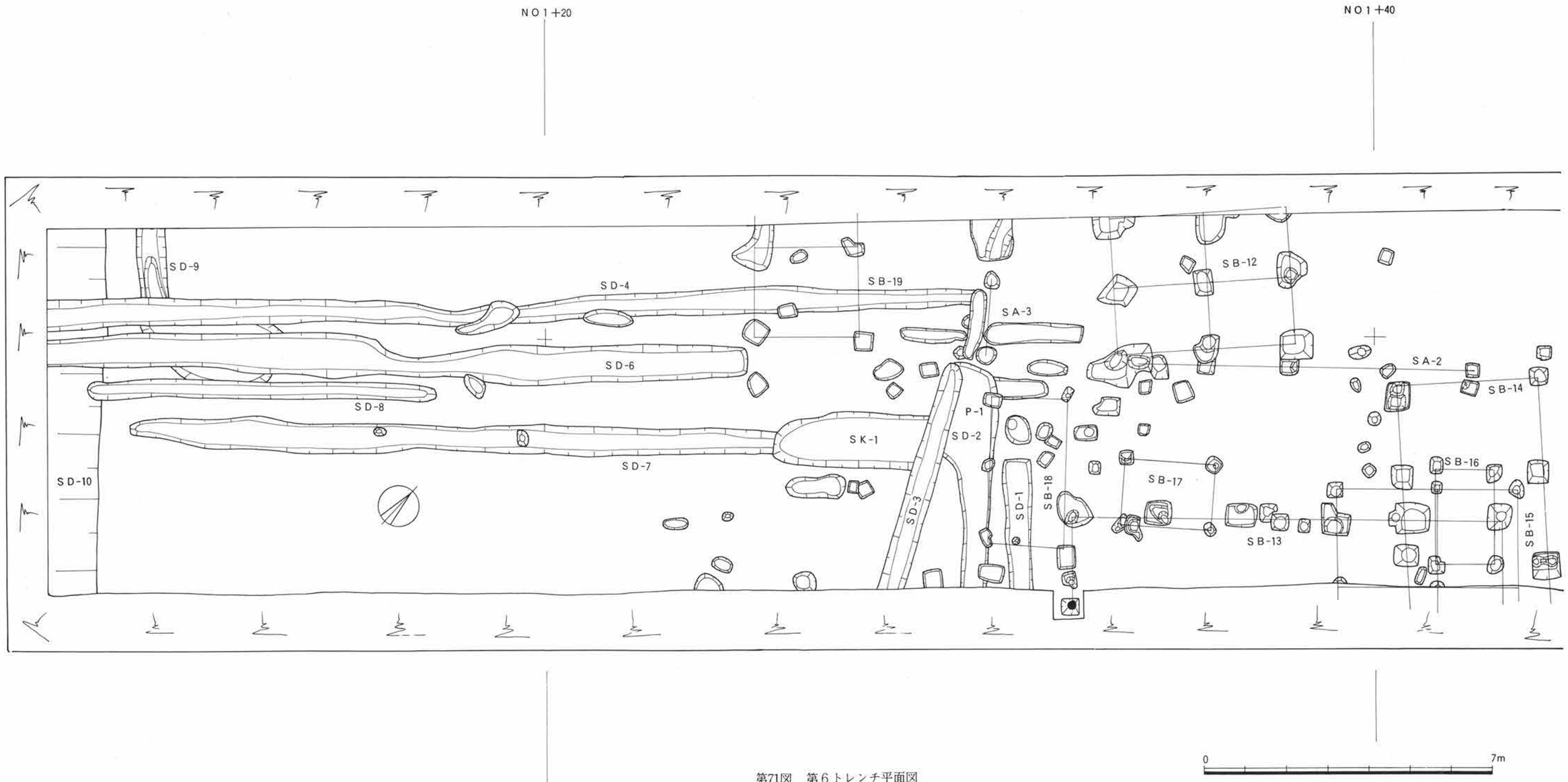
白磁壺底部〈527〉

平坦な底部から丸みを帯び外反する体部を持つものである。内外面ともにヘラケズリにより成形されている。外面の底部近くまで白い釉によって施釉されている。

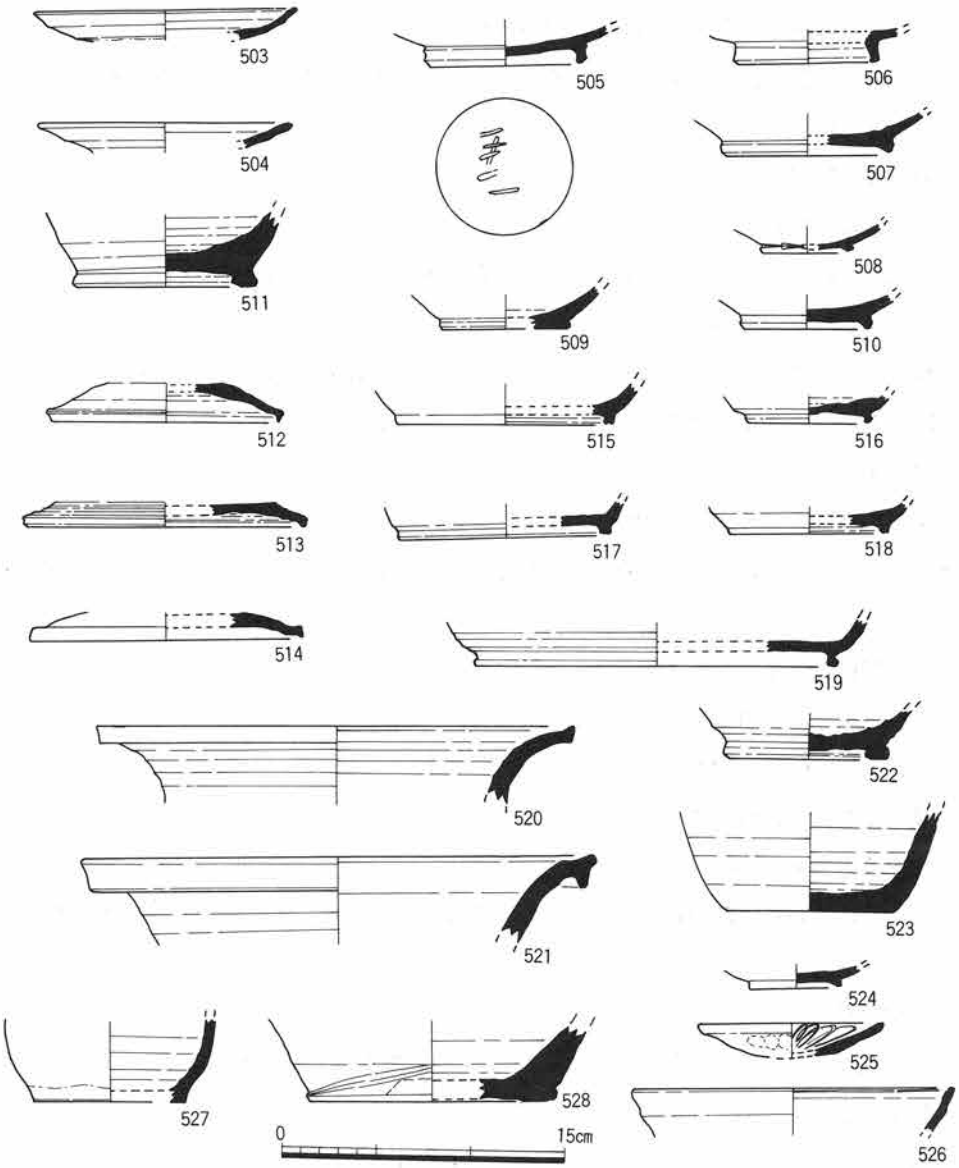
ＳＤ－１（第73図）

転用硯〈531〉

三日月高台を有する灰釉陶器椀の底部を硯に転用したものである。高台見込みに多量の墨痕が認められる。



第71図　第６トレンチ平面図



第72図　第６トレンチ包含層出土遺物実測図

ＳＤ４（第73図）

平瓦〈544〉

瓦の端の部分で外面を荒い縄目、内面細かな布目で成形している。遺跡全体で数点瓦の破片と考えられる遺物を採取していることから一部瓦葺きであった可能性も考えられるが全体量からは少なく判断できない。

ＳＤ－６（第74図）

土師器椀〈537〉

回転台成形による粘土巻き上げによって成形されたものの底部と考えられる。

土師器高杯〈542、543〉

脚部を面取りした高杯の脚部である。内面には最上部を横方向のヘラ削りされたあと、中段は縦方向の紋りの痕が認められ、下段では指頭圧痕が認められる。

黒色土器椀〈539、541〉

色調淡褐色を呈し、胎土金雲母を多量に含むもので内面から外面の口縁部にかけてカーボンの吸着が認められる。内面は口縁端部に一条の沈線と細かなヘラによる磨きが認められる。

須恵器杯蓋宝珠つまみ〈530〉

全体に平坦で天頂が凹む宝珠つまみである。

須恵器高台付杯〈538〉

径７㎝を計る方形でまっすぐな高台を有する杯の底部である。

須恵器壺底部〈540〉

平坦な底部から体部が真っすぐに立ち上がるものである。横ナデによって成形されている。

灰釉陶器皿〈534、535〉

一段段になって外方に開く段皿（534）とやや内湾ぎみに立ち上がるもの（535）である。

灰釉陶器椀〈536〉

内湾するように立ち上がる体部に「ハ」の字に外方に踏張るように開く高台を有するものである。

ＳＤ－７（第73図）

灰釉陶器椀〈532〉

内湾するように立ち上がる体部に「ハ」の字に外方に踏張るように開く高台を有するも

のである。

ＳＤ－８（第73図）

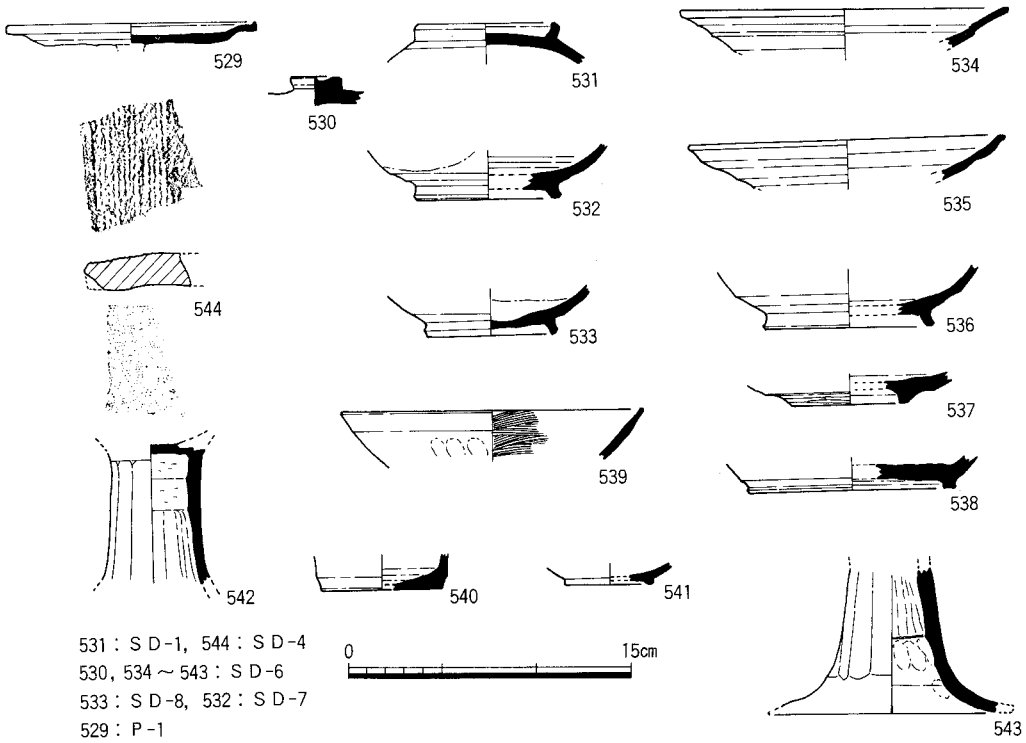
灰釉陶器椀〈533〉

内湾するように立ち上がる体部に三日月形を呈する高台がつく灰釉陶器の椀である。

ＳＰ－１（第73図）

転用硯〈529〉

平坦な頂部から一度屈曲するように体部を折れまがらせ、口縁部を形成し端部を真っすぐに立ち上がらせる須恵器杯蓋である。内面には墨痕が認められ硯に転用されたものと考えられる。（木戸）



第73図　第６トレンチ出土遺物実測図

7．第7トレンチ

第7トレンチは道路センター杭No.1＋80からNo2＋20までを設定して調査を実施した。調査の結果、第5調査区から続くと考えられる。溝跡と掘立柱建物や土壙とその外郭を流れる溝跡が検出された。以下にそのおもな遺構と遺物について記述を加える。

（1）遺　構（第75図）

掘立柱建物

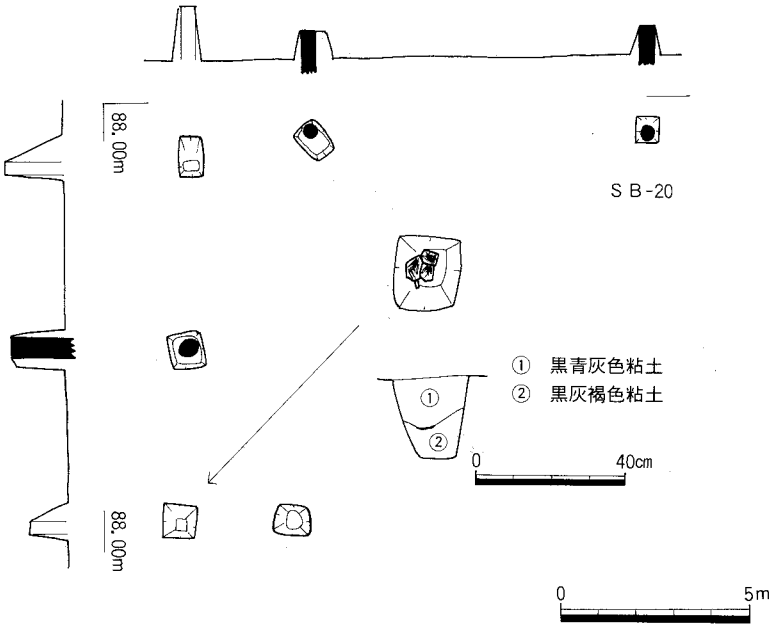
ＳＢ－20（第74図）

調査区のほぼ中央で検出した桁行2間以上×梁間2間の東西棟である。寸法は桁行総長5.1m（17尺）で梁間総長3.9m、柱間1.8m（6尺）＋2.1m（7尺）であった。柱掘方は30cm位の方形のもので構成されていた。柱痕は3本検出されている。

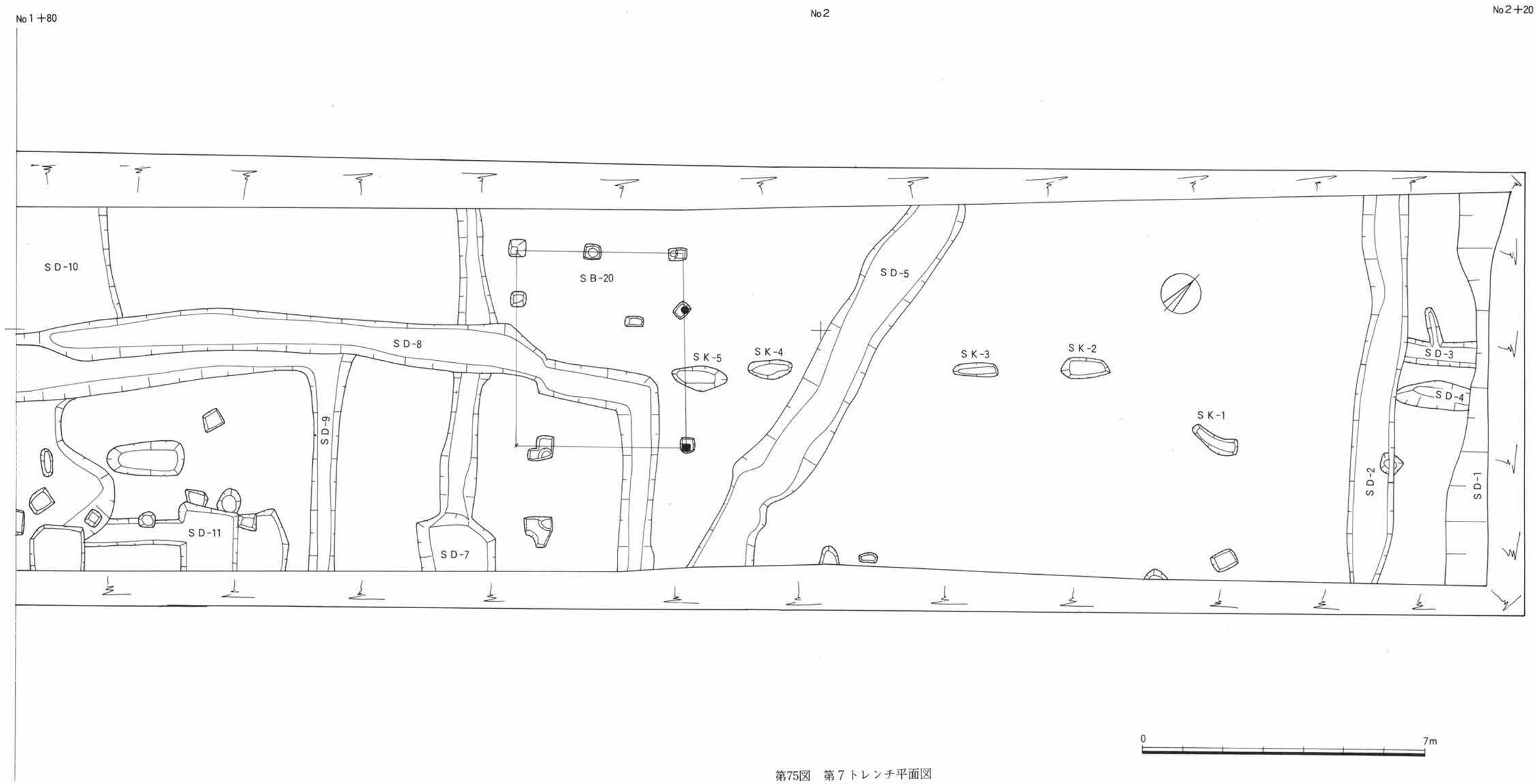
溝

ＳＤ－1

調査区の北端に調査区と直行するように東西に走る溝の肩を検出した。第6調査区のＳ



第74図　第7トレンチ建物平面図



第75図　第７トレンチ平面図

D－10と同じように館跡を区切る周囲の大きな溝の北辺と考えられる。

ＳＤ－２

ＳＤ－１の南側を同じように東西に走る幅約１ｍの溝である。出土遺物から中世代の遺構と考えられる。

ＳＤ－３、４

ＳＤ－とＳＤ－２によって切られる短い南北方向に走る溝である。

ＳＤ－５

調査区の中央を斜めに横切るように南北方向に走る幅約1.5mの溝である。真北に走る方位から条里制以前の溝跡と考えられる。

ＳＤ－７

ＳＢ－20の南を添うように東西に走る溝である。途中をＳＤ－８によって切られている。両端とも調査区外に続くが、東端では水溜状に方形の土壙になっている。

ＳＤ－８、９

第６調査区のＳＤ－３から続く建物を囲う溝の続きであるが、途中でＳＤ－９とＳＤ－８とに別れ各々ともに東に直角に曲がっている。

ＳＤ－10

調査区の南端に第６調査区との間を東西に走る幅の広い溝である。

ＳＤ－11

調査区の南東の隅に位置する溝で直角に曲がるコーナー部分が検出されている。

土壙

ＳＫ－１～５

調査区のほぼ中央をほぼ一列に等間隔に掘られた土壙で、径１ｍの長楕円を呈しているものである。性格はよくわからない。（木戸）

（２）遺　物

包含層出土遺物（第76図）

土師器杯〈564〉

丸い底部から体部を湾曲するように立ち上がらせ、斜め上方に口縁部つまみ出し端部を丸く収めるものである。体部はヨコナデを施している。

土師器椀〈563〉

軟質の土師器であり、長石を主とした細砂粒を全体に含んだ胎土である。

須恵器杯蓋〈545～549〉

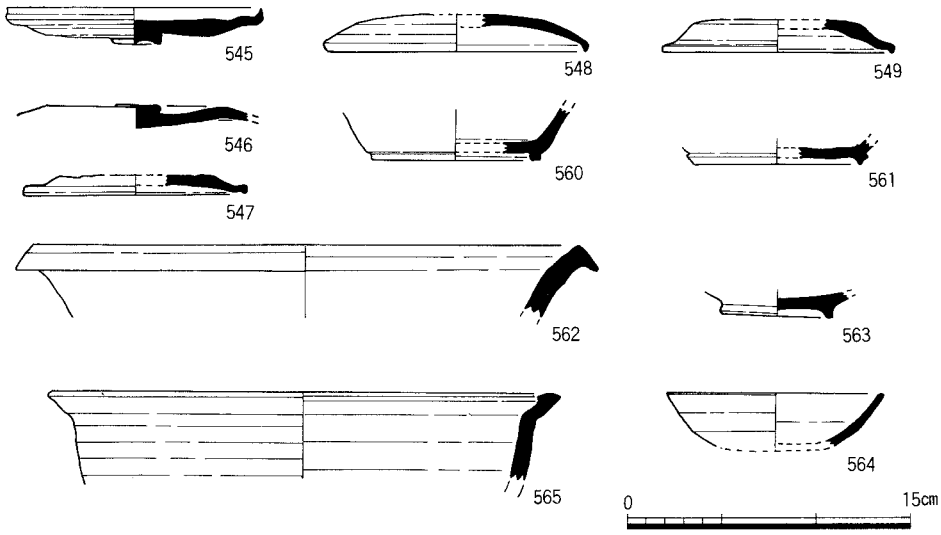
545は転用硯である。天頂がへこむ宝珠つまみのついたやや窪んだ頂部からななめ下に体部が垂下し、口縁部を直角に下り曲げるもので端部を鋭く収める。内面に墨跡が認められる。546は天頂が平坦な宝珠つまみのついた、おおきく窪んだ頂部をもつものである。547、器高が低く平坦な頂部から一度屈曲するように口縁部を形成して口縁端部を少しだけつまみ出すものである。549はやや器高が高く、平坦な頂部から体部が屈曲するように垂下し口縁部を形成するもので口縁端部を少しだけつまみだすものである。

須恵器広口壺〈562〉

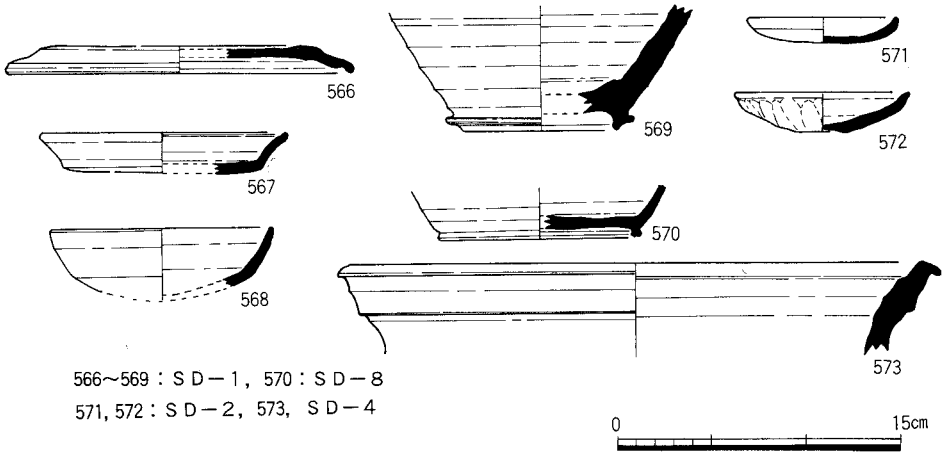
大きく斜め上方に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部を「く」の字に外方に折曲げ縁を形成するものである。

瀬戸縁折皿〈565〉

斜め上方に立ち上がった体部から、手の字に口縁を一旦ひらかせ縁を内側におり曲げるものである。



第76図　第７トレンチ包含層出土遺物実測図



第77図　第７トレンチ出土遺物実測図

ＳＤ－１（第77図）

土師器皿〈567〉

広く平坦な底部から屈曲して内湾するように外方に立ち上がる口縁部をもつもので端部を丸く収める。口縁内面には一条の沈線が廻る。外面は横ナデされ内面はヘラミガキされている。

土師器杯〈568〉

丸い底部から内湾するように立ち上がる体部から、口縁部を真っすぐに立ち上がらせ口縁端部を丸く収めるものである。内外面ともにヘラミガキされた後、横ナデが施されている。

須恵器杯蓋〈566〉

平坦でおおきな頂部から、斜めに体部が垂下し口縁端部を小さく折曲げるものである。

須恵器壺底部〈569〉

ロクロにより成形された厚い体部の小さな底部に足状の外方にそっぽを向く高台を貼り付けた壺である。

ＳＤ－２（第77図）

土師質土器皿〈571、572〉

571は不調整の丸い底部から、やや内湾するように口縁部を屈曲させるもので端部を丸く

収めるものである。口縁部を一度だけ横ナデしている。572は尖底の底部から斜め上方に体部を立ち上がらせ口縁部を屈曲させるもので端部をやや外方につまみだしている。体部を指頭圧痕で成形し、口縁端部を一度横ナデしている。

ＳＤ－４（第77図）

信楽焼甕〈573〉

外方に開く口縁部を玉縁状に折り曲げ、口縁端部を外方につまみ出すように折り曲げるものである。

ＳＤ－８（第77図）

須恵器高台付杯〈570〉

底部高台径10cmを計るもので台形状のやや外方につまみ出す高台を有するものである。

（木戸）

Ⅴ．笠原南遺跡の理解と今後のために

笠原南遺跡が本県道による試掘調査によって発見されるまでは、このあたりの地は旧野州川の河川敷で当時においても住むには適さないと考えられていて、古代の集落跡が存在するとは考えられてはいず、発見されることもなかった。昭和58年度から４年間に亘る調査の結果、有史以前と有史以後の大きくみて２つの時代の集落によって笠原南遺跡は構成されていたことが判明した。

報告書を閉じるにあたってはここで得られた成果をこれらの２つの時代の集落に区切ってその構成を見て、笠原南遺跡の理解と地域史の解明のために最大限の成果と問題点をあげ結びとしたい。（木戸）

１．弥生時代終末～古墳時代初頭の笠原南遺跡

（イ）検出遺構から

今回の調査では、結果的にみて調査区が遺跡のほぼ中央を縦断した形となっている。集落の北端は古代野州川を北にみて川の左岸敷の砂レキ氾濫堆積が広範囲に続く部分から湿原に変わる地点を経て川にほぼ平行に走り集落の内と外を区切る溝が数条認められた。南端についても同じような集落を区切る溝が認められている。東西の端の状況については調査区の制約から明らかにすることはできなかった。集落全体の状況としては周りに溝をめぐらせたものか、両端を溝で挟まれた中州状のところに立地しているものと考えられる。

集落の範囲はおおよそ直径300ｍの範囲におさまるものと考えられ、集落の規模としては近隣の服部遺跡等と比較してもさほど大きくない。時期的にみても存続期間は短く短命な集落であったと考えられ、基村的な性格をもつものではなく枝村的な性格を持つものであったと考えられる。また、方形周溝墓のような墓は全く検出されておらず、墓は集落内には存在せず西あるいは東の集落外を墓域としていると考えられるが、詳しくは今後の調査を待たなければならない。

集落内においては井戸、土壙、溝や多数の柱穴が検出されたが、柱穴には豊富な地下水と土壌によって多数の柱痕が遺存していた。年輪年代測定は出来なかったが、材質鑑定から檜は非常に少なく杉と栗ばかりで構成されていることがわかり、周辺の木の植生を考えることができる。また、柱穴の底には柱の沈みを抑えるために未製品の農具やほぞ穴のあいた板材等を礎板としていたところもあった。建物は全て掘立柱建物で構成されていたと考えられるが、調査区の限界から建物が確実に完結すると認められるものがなく集落ない

の建物規模、配置などを類型化するにはいたらなかった。

守山市域、特に湖岸近くの集落においては非常に早い時期から掘立柱建物を導入した集落が多いようである。大きな視野での全体の時間の流れのなかでは竪穴式住居から掘立柱建物へと建物形態が移行していくのであろうが、個々のその様相は時期的に早い時期から掘立柱建物を採用する集落が極致的に集中する場合、早い時期から両者が併存して現われている場合、遅い時期に掘立柱建物が出現し両者が併存して転換していく場合、遅い時期に一斉に掘立柱建物に転換してしまう場合等、各々の集落の地理的条件、人為的条件、政治的要因等さまざまな要因によってその導入形態が違うはずである。笠原南遺跡ひとつをとってそれを解明することは不可能であるが、近江においてもこのような視野から古代集落研究において、今後早急にまず集落の成立年代を確定させ集落内での掘立柱建物の群と配置と規模の類型化を行い比較検討し解明する必要があると考える。　　（木戸）

（ロ）出土遺物から

調査の結果、昭和60年度調査区の第５トレンチを中心に多量の古墳時代初頭の土器が出土した。ここでは本遺跡における古式土師器についての成果と問題点について述べておきたい。器種構成としては、図示しえた遺物のうち甕が57%、壺が17%、高杯が６%、器台が８%、鉢が２%、甑が３%、その他（甕及び壺の底部など）が７%となっており、甕が全体の過半数を占めている。また甕のうち近江地方の在地土器である受口状口縁甕が、甕の70%を占めており、畿内地方の「く」の字口縁を持つ、通常の布留式の甕は10%となっている。笠原南遺跡では古墳時代になっても、受口状口縁甕に代表される在地の土器が衰退、消滅し、布留式の「く」の字口縁甕に取って変わるということはなく、いまだ受口状口縁甕が土器群の主流となっている。搬入品も東海系の壺が数点と日本海沿岸地域系の高杯が少量認められるだけである。

次に受口状口縁甕（甕Ⅰ）についてであるが、口縁の形態としては斜め上方に立上った後に上方に立上り、端部を横へつまみ出すタイプのものが主流をなしている。口縁部の屈曲して立上る部分は弥生時代の第Ⅴ様式段階の時のようにしっかりと稜をもって屈曲してはおらずなだらかなものとなっている。また口縁部外面の文様にしても、庄内併行期までにみられた櫛描列点紋や、さらに省略されたヘラ描沈線紋を残すものは少なく、大多数は無紋でナデのみで終っている。内面の調整について特徴的なことがある、それは湖南地方のうちでも野州川流域では、受口状口縁甕の内面は圧倒的多数はヘラ削りが認められず、ナデが主流である。たとえば①守山市金ヶ森西遺跡、②同山賀西遺跡、③同赤野井遺跡、④同下ノ

郷遺跡などでこの様相がうかがえる。ところが笠原南遺跡では受口状口縁甕の20%が内面ヘラ削りを施している。湖西や湖北などでは内面ヘラ削りがかなり認められるが、これは北陸地方などの影響と考えられる。これに対し笠原南遺跡では、湖南地方の中にあって極めて高い割合でヘラ削りを行なっているといえる。なぜこのような現象が見られるのだろうか。ここで、第5トレンチＳＥ－3出土土器に注目してみたい。

第5トレンチＳＥ－3出土土器は第43図に示してあるが、317・318・319が第4層、320が第3層、321・322が第2層出土となっている。出土層位からは、317→320→321という変遷がたどれる。口縁部のみに注目すると317が型式学的には新しく考えられるが、胴部は317→320→321と長胴化していることからも、この順序の変遷を考えたい。320に注目してみると胴部の内面一面と外面下半にヘラ削りを施している。第4層の段階ですでに内面ヘラ削りを通常とする布留式甕が存在していることから、布留式の浸透後に体部だけ布留式の影響を受けた受口状口縁甕が存在すると考えることができる。第4層では内面ヘラ削りをしない受口状口縁甕と内面ヘラ削りする布留式甕が共伴している。このあり方がこれまでの湖南地方の遺跡での主たるパターンであった。このように考えると、少ない資料ではあるが、湖南地方では内面ヘラ削りする受口状口縁甕は、やや後出して出現した可能性がある。しかしながら第2層では再び内面ヘラ削りしない受口状口縁甕があるので即断はできない。

また、もう一つの考え方としては、通常内面ヘラ削りが認められない受口状口縁甕も本来はヘラ削りを行なっていたという考え方ができる。当該期の受口状口縁甕はほとんどが破片となって出土していて、完形で出土する例は少ない。これは体部が薄くて割れやすいことから来ているのだろう。体部をここまで薄くつくるには、ヘラ削りの技法が用いられたと考えて然るべきではなかろうか。そしてヘラ削りの後にナデを後に施さなかったものがヘラ削りを残したままで存在したと考えられる。

いずれにしても内面ヘラ削りの受口状口縁甕の出土例を湖南地方の中で集積する必要がある。そして良好な一括資料の抽出を行い、他の甕との関係、技術的検討などが今後のこの時代の土器研究の課題としてあげられる。（森）

2．平安時代前期の笠原南遺跡

（イ）検出遺構から

今回の調査では、結果的にみて調査区が館跡と考えられる遺構の中央を南北に縦断した形となっている。遺構の東西においては、東はまだより建物の密集している地域につなが

っていると考えられ西については遺構の密度の状況から遺跡の端に近いあたりと考えられる。また、遺構の南北については、ともに館跡の両端を限定すると考えられる。現行条里に添う東西方向の幅広い溝の肩が検出されている。これにより館跡の範囲はおおよそ1丁四方の範囲が考えられる。

溝囲いの敷地のなかには切りあいと建物の方向から5時期の建物跡[5]が考えられる。遺物が検出されていず成立年代を限定することはできないが、一番古いと考えられるⅠ期の遺構には条里制施行以前のいわゆる南北方向に走る溝が3条確認されている。Ⅱ期の遺構には、Ⅰ期の溝を潰して現行条里よりやや西にふった形で配置され掘立柱建物が確認されたⅢ期の遺構には、現行条里とほぼ同じ方向をもった掘立柱建物群を配置し始めⅣ期で建て代えを行い、Ⅴ期にいたって溝囲いをもった大きな掘立柱建物を配して、柱を遺したままで廃絶している。遺跡はⅤ期の溝から出土した遺物から8世紀後半～9世紀後半の少なくとも100年以上は存続していたと考えられる。建物は主屋、脇屋、倉等で構成されていたが調査区の限界から配置を明らかにすることはできなかった。建物は全て掘立柱建物で、時期が下がるにつれて柱と掘形は大きなものになっていた。柱は直径20～30cmの多角形に面取りされた円柱もしくは角柱で構成されており、材質は杉と檜であった。遺跡からは数点の瓦が出土しているが、これだけでは瓦葺きかどうかは判断できなかった。

遺跡の位置は野州郡条里11条12里に位置し、すぐ東を現在も基道として多くの車たちが行き交っている古道と考えられる道によって、南は古代南北地割りが今も残る赤野井遺跡、北は服部遺跡をとおって木簡の出土した西川原森ノ内遺跡に通じている。また、これらの遺跡は等間隔にも存在している。

近年、山尾幸久氏[6]は中主町[7]西河原森ノ内遺跡で出土した木簡の考察により和名類聚抄に記載のある野州郡の郷の比定をされている。それによると迩保郷は旧北島村・兵主村に、服部郷は旧中州村・速野村に、明見郷は旧玉津村・小津村に、敷智郷は旧河西村に、山本郷は義王村・中里村に、篠原郷は旧篠原村に、三上郷は旧三上村・野州村に比定されるようであるが、このうち南北があるとされている明見郷は従来までは野州郡志[8]のように三宅村もしくは赤野井村に比定されていたところを玉津村、小津村とされているが、上記のことを踏まえると南は栗太郡と境をなす境川から荒身を含む野州川までの範囲を考えるのがよいようであり、南北にわかれていたとするならば笠原南遺跡は明見北郷に位置するといえる。また、遺跡の存在する小字は上一木、下一木であるが、周辺の字には少領、見栗等も認められている。これらをもってすぐに遺跡の性格を論ずることはできないが、以上の

ように遺跡の立地、規模、遺構の構成、墨書土器や転用硯等の出土遺物から考えるといわゆる官衙、荘園管理を行なっている豪族の居館として笠原南遺跡は性格づけを行なうことができると考えられる。（木戸）

（ロ）

出土遺物から

出土遺物の大半は遺構面直上の包含層とⅤ期に属する掘立柱建物の外を廻る溝ＳＤ－１～ＳＤ－３より出土している。遺物は全て土器で構成されており若干の時期幅がある。よって、その遺物の下限の時期をもって遺跡の廃絶を決めることができる。ここでは、墨書された黒笹90型式の灰釉陶器を主とする一群に求めることができる。しかし、溝の上限の遺物についてをⅤ期の成立年代とみなすかⅡ期の成立年代とみなすかは、即断するだけの根拠に乏しい。Ⅱ期とするならばこのあたりの条里制の施行は８世紀後半と考えられ、Ⅴ期とするならば８世紀後半を遡る結果となる。いずれにせよ、この点については今後の課題となるところであろう。遺物の内わけとしては、供膳形態がその大半で煮沸形態と貯蔵形態はごく一部であった。供膳形態のうち、杯は高台付きの須恵器と無高台の須恵器、須恵器を写したと考えられる土師器、黒色土器で構成されていた。碗は灰釉陶器、京都系緑釉、尾張系緑釉で構成されていた。皿は灰釉陶器、土師器で構成されていた。煮沸形態としては、土師器の甕が出土していた。貯蔵形態としては、須恵器の壺、甕が出土していた。

他に「越殿」「越家」「縣大家」「林家」等の墨書土器が出土している。[⑤]詳しい考察については稿を別に譲るが、ここではこれらのうち、「越」「縣」「林」を館に住む人の名を表わすと考えて建物の所有を表わしたものとしておきたい。特に「越」は灰釉陶器だけにかぎられており、近江に灰釉陶器が入り始めたばかりのころのものであることを考えると当時の貴重さがうかがえる。硯は全て転用硯であった。墨書名と書体からすくなくとも４人の、筆をとり字をかかなければならなかった官人がいたことがうかがえる。

以上が遺物からの成果であるが、この時期の遺物についての研究は、御多分にもれず近江においては大きく立ち遅れているためここでも詳しく比較検討をすることはできない。

今後笠原南遺跡の土器がこれらの研究の手助になることを心から願う。（木戸）

註

① 『金ヶ森西遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1980

② 『県営灌がい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－１』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1986

③ 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ－１』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1986

④ 『守山市文化財調査報告書第26冊』守山市教育委員会　1987

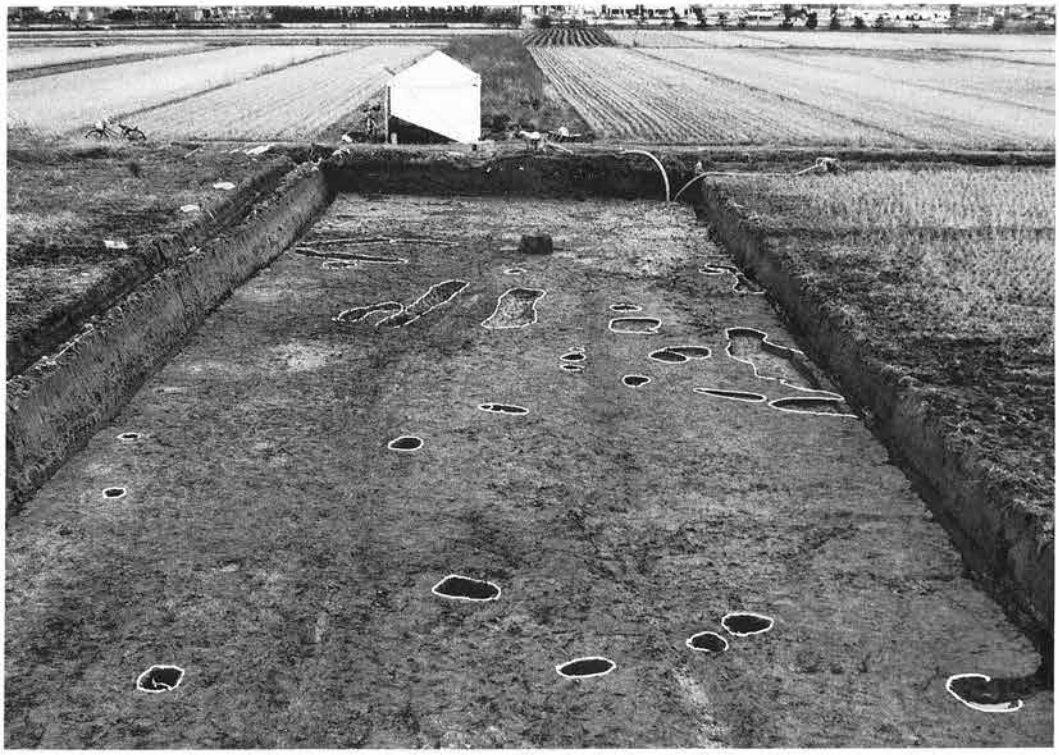
⑤ 木戸雅寿「笠原南遺跡出土の墨書土器について」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要３』滋賀県埋蔵文化財センター　1988刊行予定参照

⑥ 山尾幸久「第３章古代の野州　第一節古代野州の概観」『野州町史　第一巻　通史編１』野州町　1987

⑦ 『西川原森ノ内遺跡　第３次発掘調査報告書』中主町文化財報告書第12集　中主町教育委員会・中主町埋蔵文化財調査会　1987

⑧ 『野州郡志』

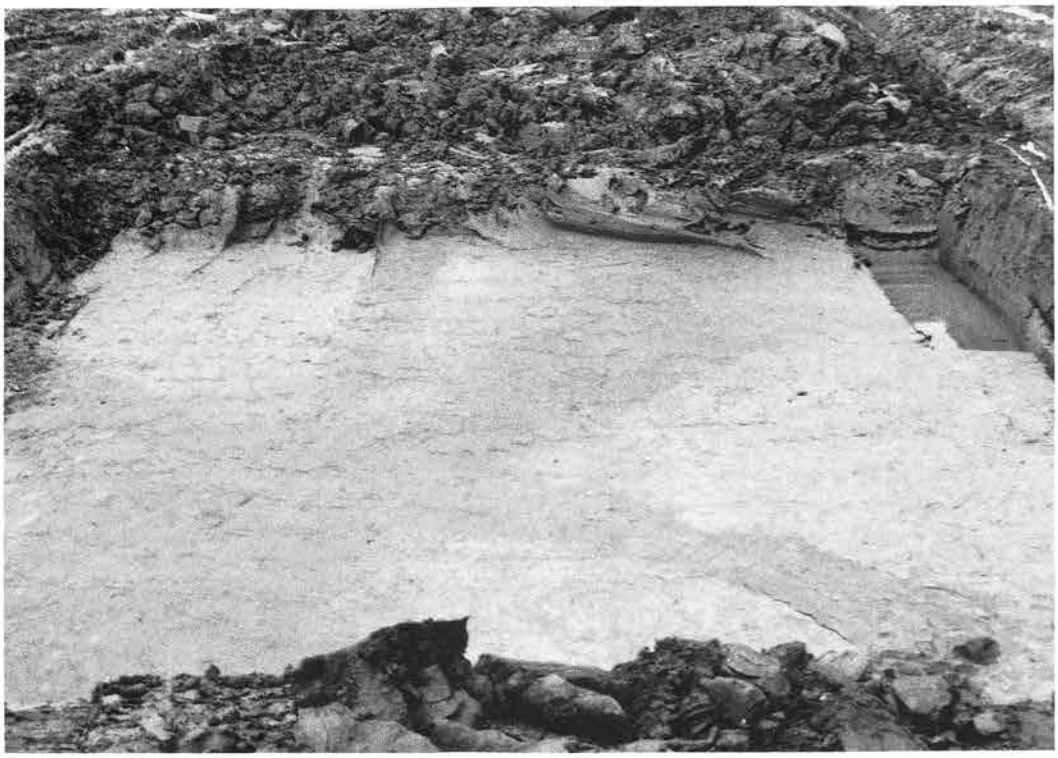
図　　版



昭和60年度第１トレンチ下層全景（北より）

第１トレンチＳＤ－６　（東より）

昭和60年度第２トレンチ北半全景（南より）

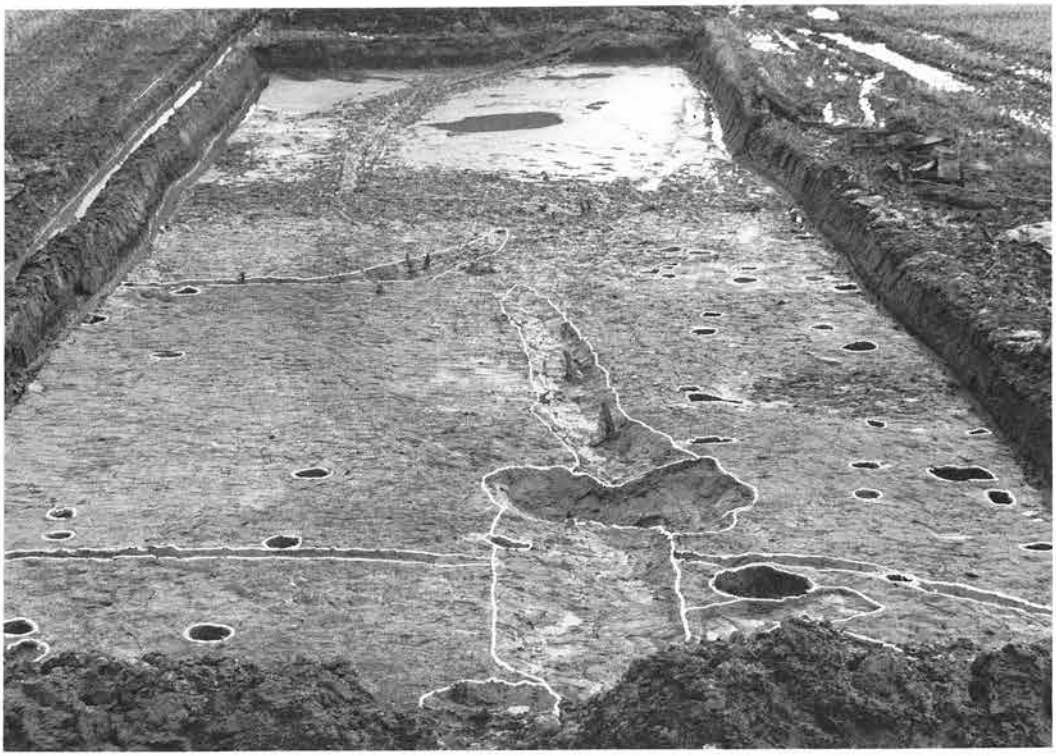


昭和60年度第２トレンチ南半全景（南より）

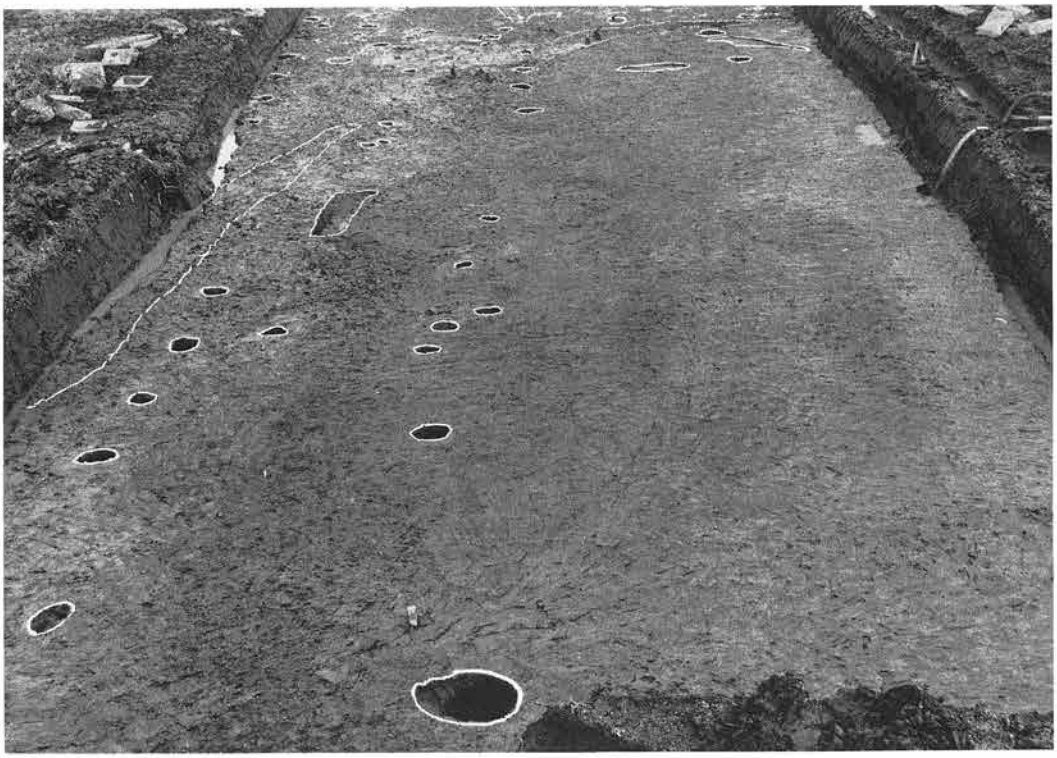
昭和60年度第６トレンチ南半全景（南より）

昭和60年度第６トレンチ北半全景（北より）

図版 四



昭和60年度第３トレンチ北半全景（北より）



昭和60年度第３トレンチ南半全景（南より）

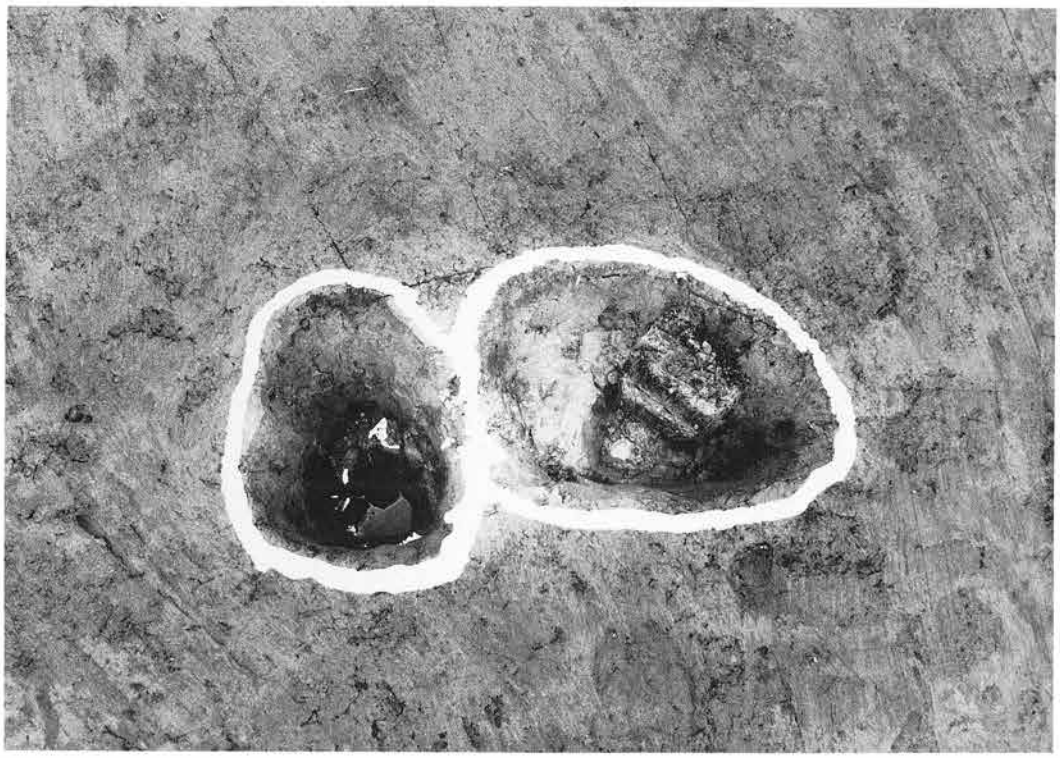
第３トレンチＳＫ－２土器出土状況

第３トレンチＳＰ－５土器出土状況

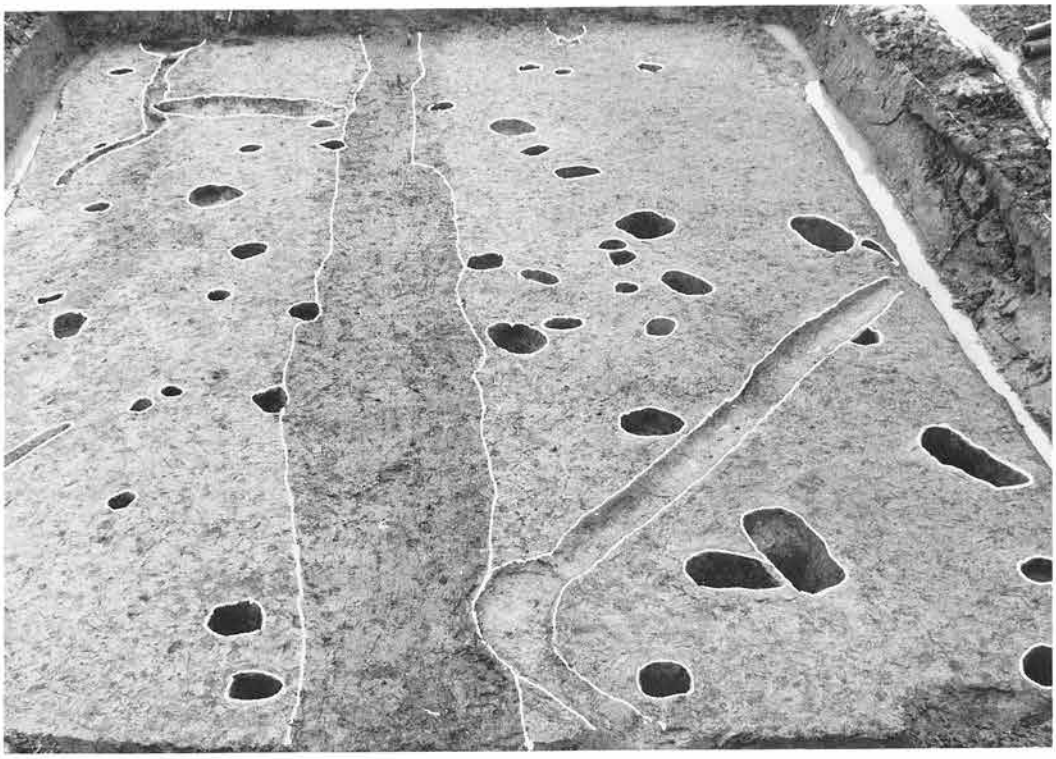
昭和60年度第４トレンチ南⅓全景（南より）

第４トレンチ柱穴群近景（南より）

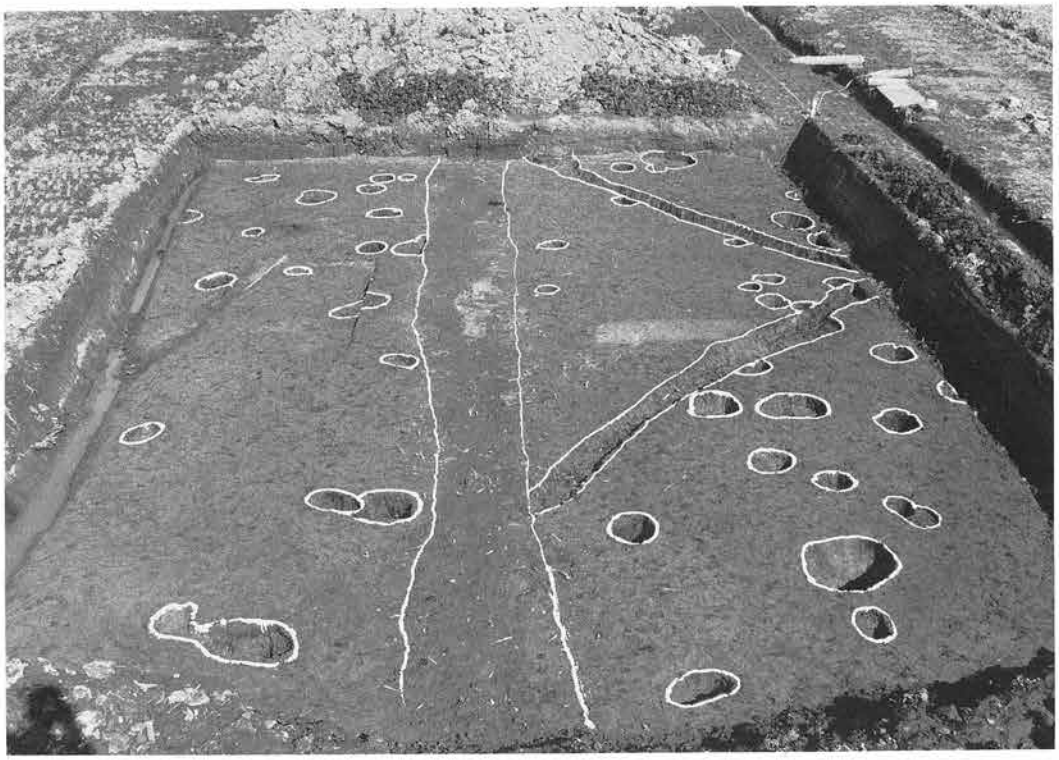
第４トレンチＳＰ－４柱痕検出状況



第４トレンチＳＰ－５・15　柱痕検出状況



昭和60年度第４トレンチ北⅓全景（北より）

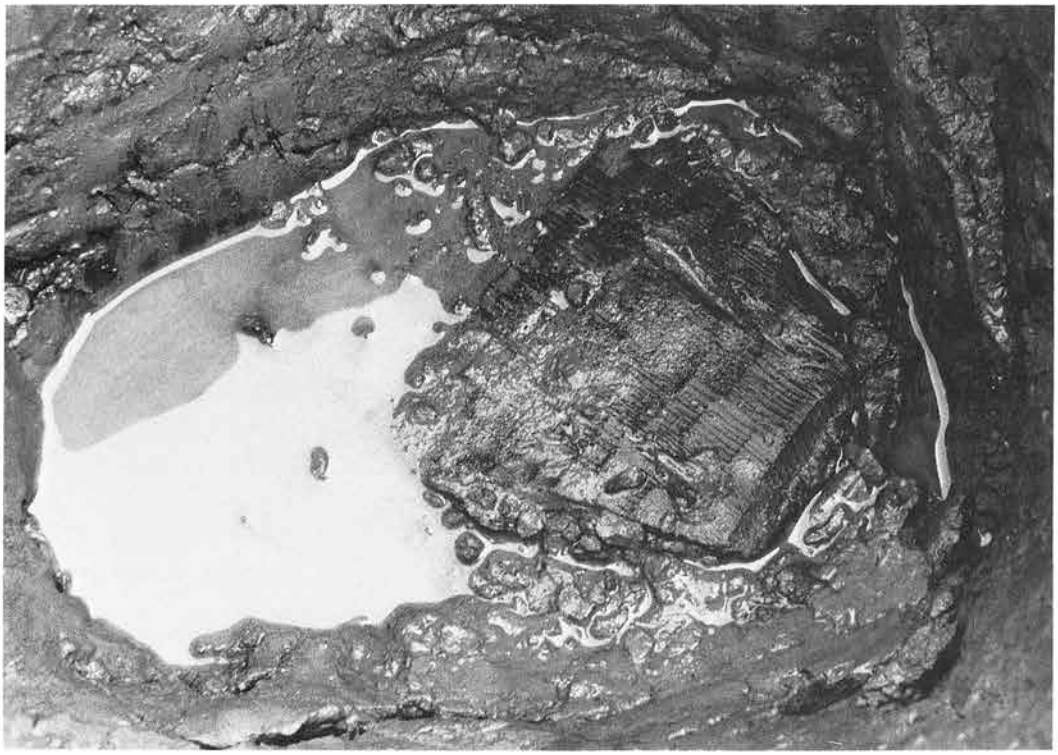


昭和60年度第４トレンチ中央部全景（南より）

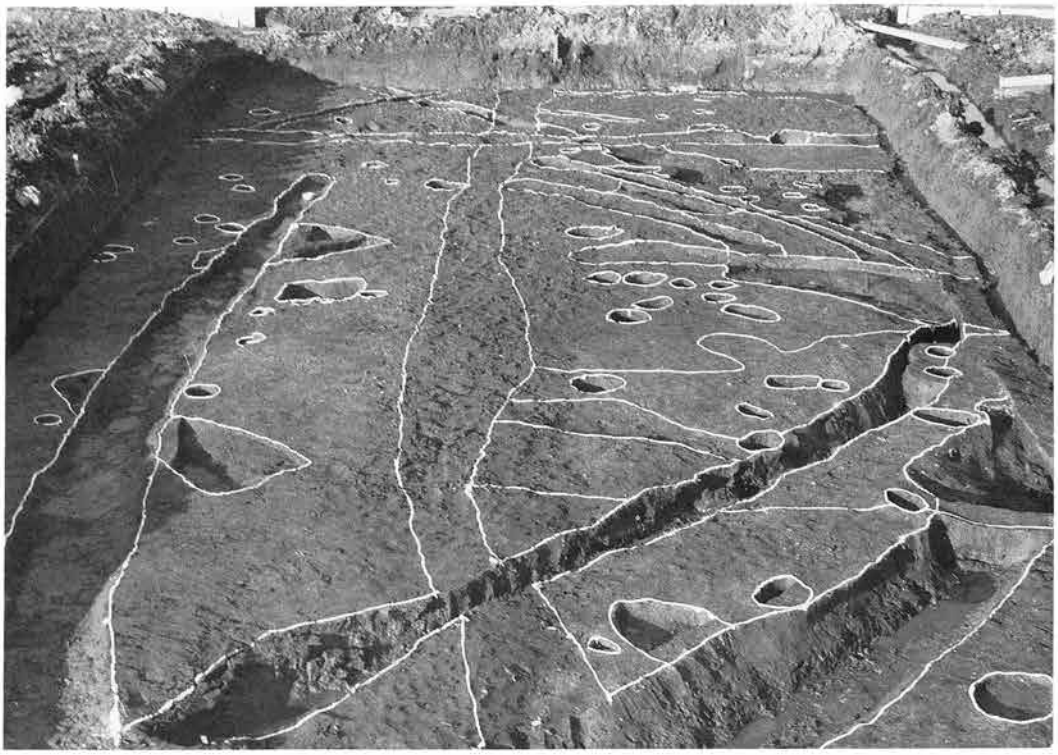
第４トレンチＳＰ－32礎板検出状況

第４トレンチＳＰ－34礎板検出状況

第４トレンチＳＰ－38礎板検出状況



第４トレンチＳＰ－38礎板検出状況

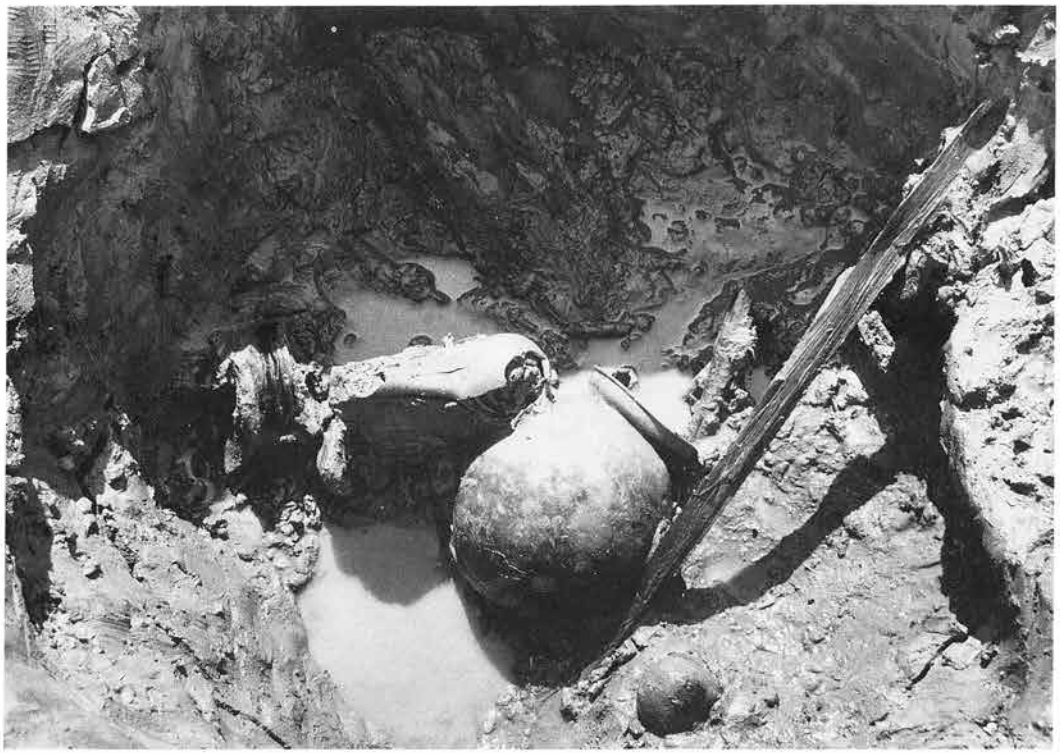


昭和60年度第５トレンチ北¼全景（南より）

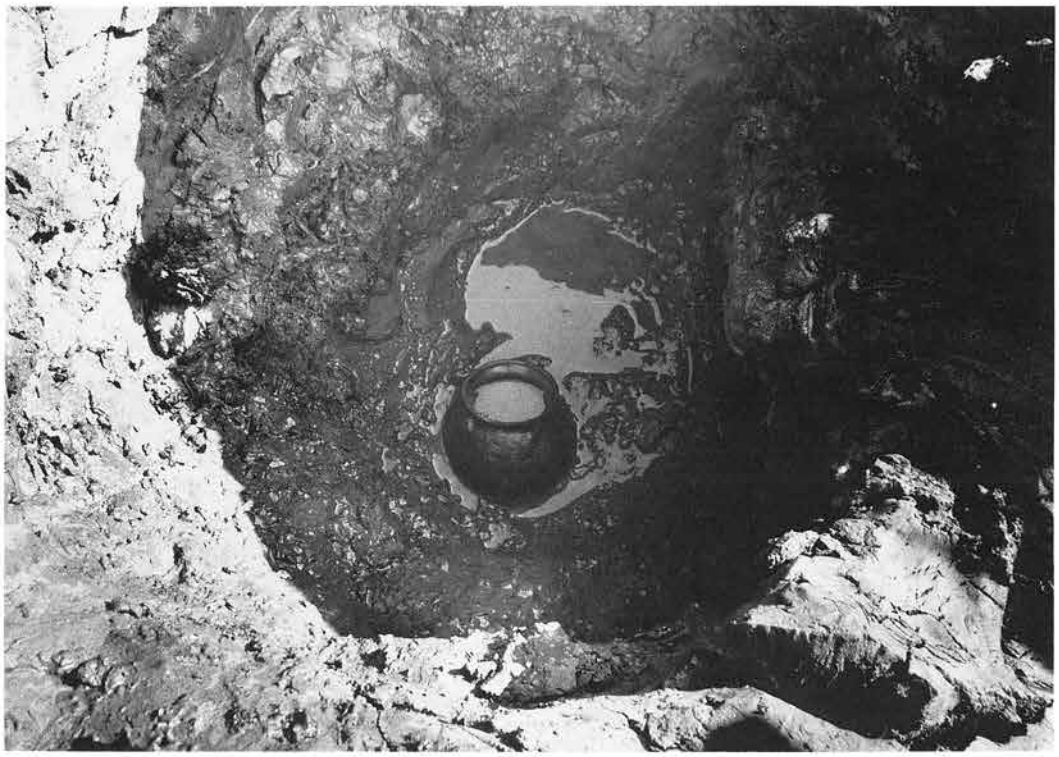
昭和60年度第５トレンチ北²⁄₄全景（南より）

第５トレンチＳＤ－11土器出土状況（西より）

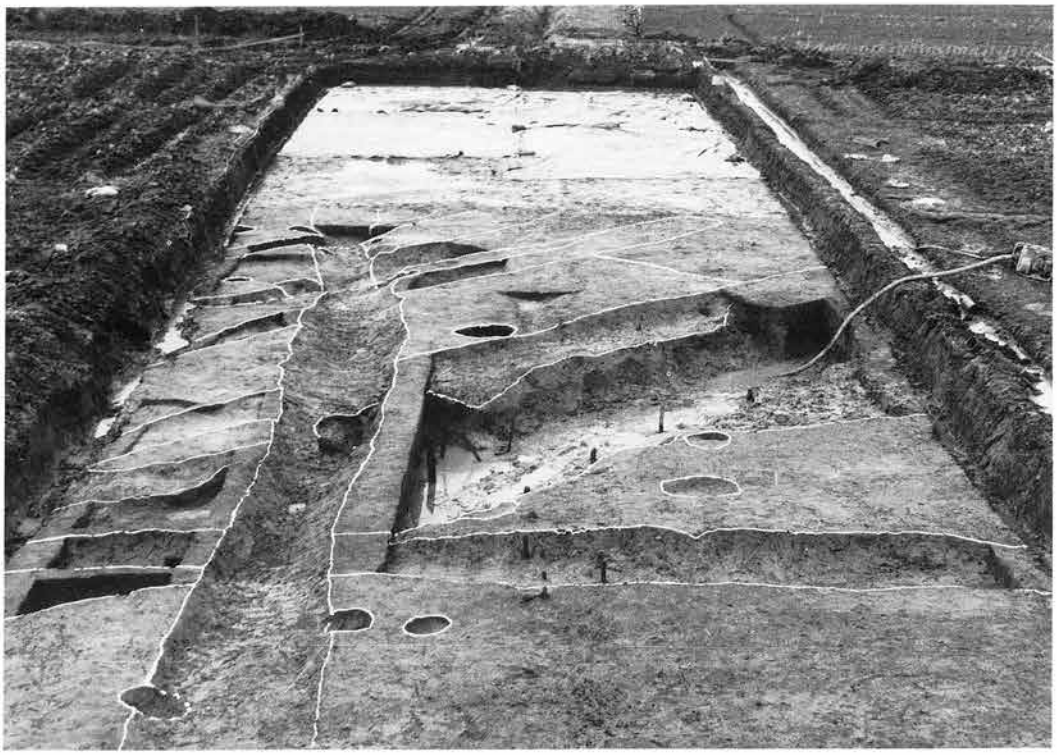
第５トレンチＳＤ－11土器出土状況（南より）



第５トレンチＳＥ－３上層土器出土状況



第５トレンチＳＥ－３中層土器出土状況



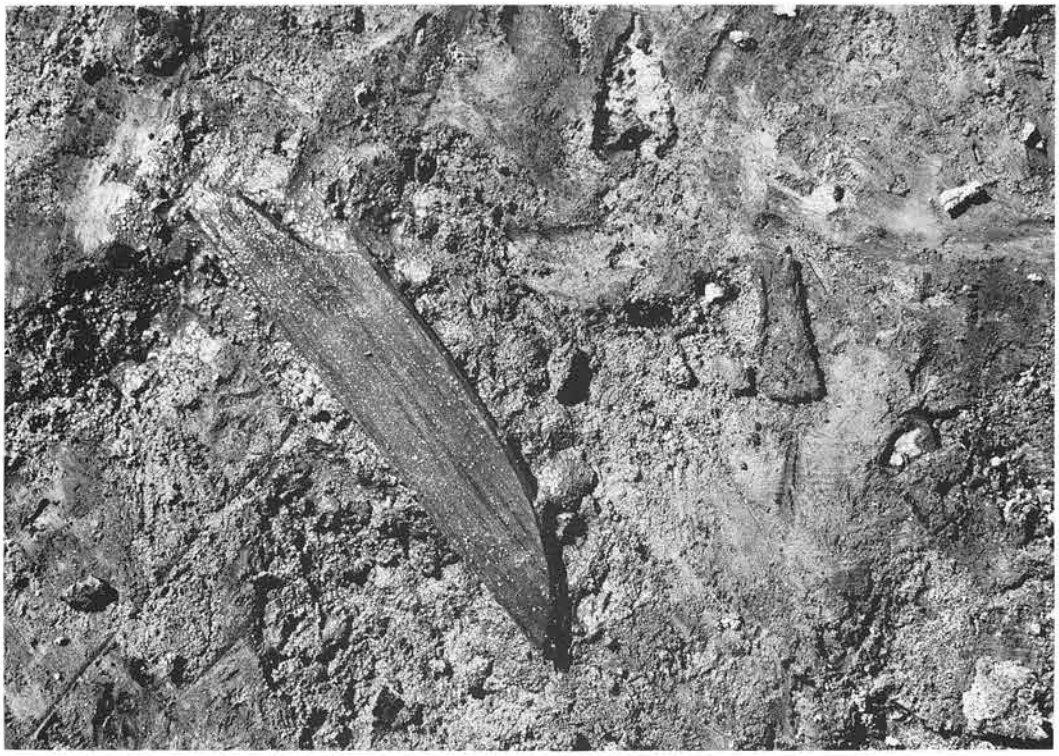
昭和60年度第５トレンチ中央部（南より）

第５トレンチＳＤ群（西より）

第５トレンチＳＥ－２土器出土状況

第５トレンチＳＥ－２土層断面

第５トレンチＳＤ－12木製品出土状況

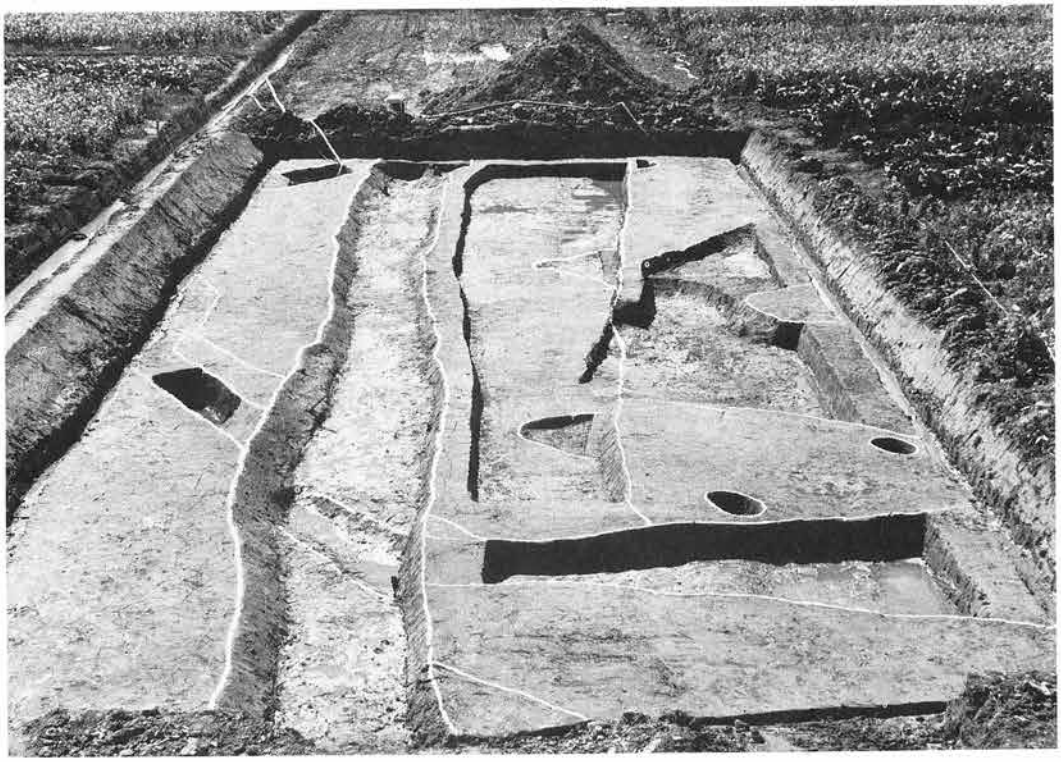


第５トレンチＳＤ－12木製品出土状況

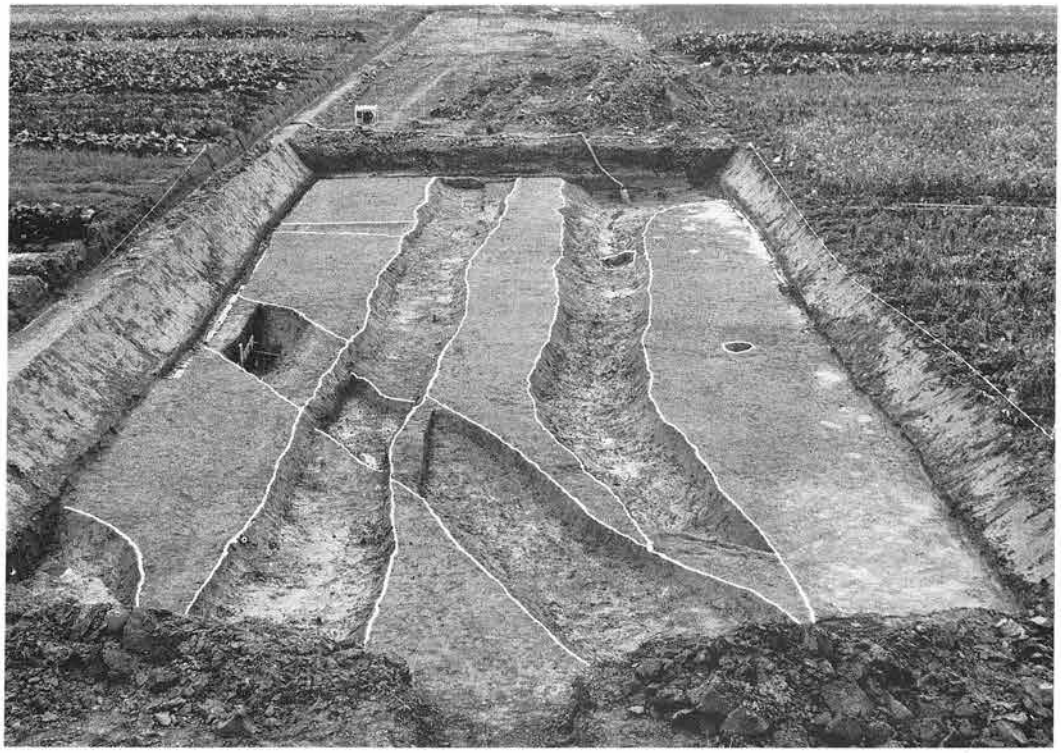
第５トレンチＳＤ－11和琴出土状況

第５トレンチＳＤ－11　鍬出土状況

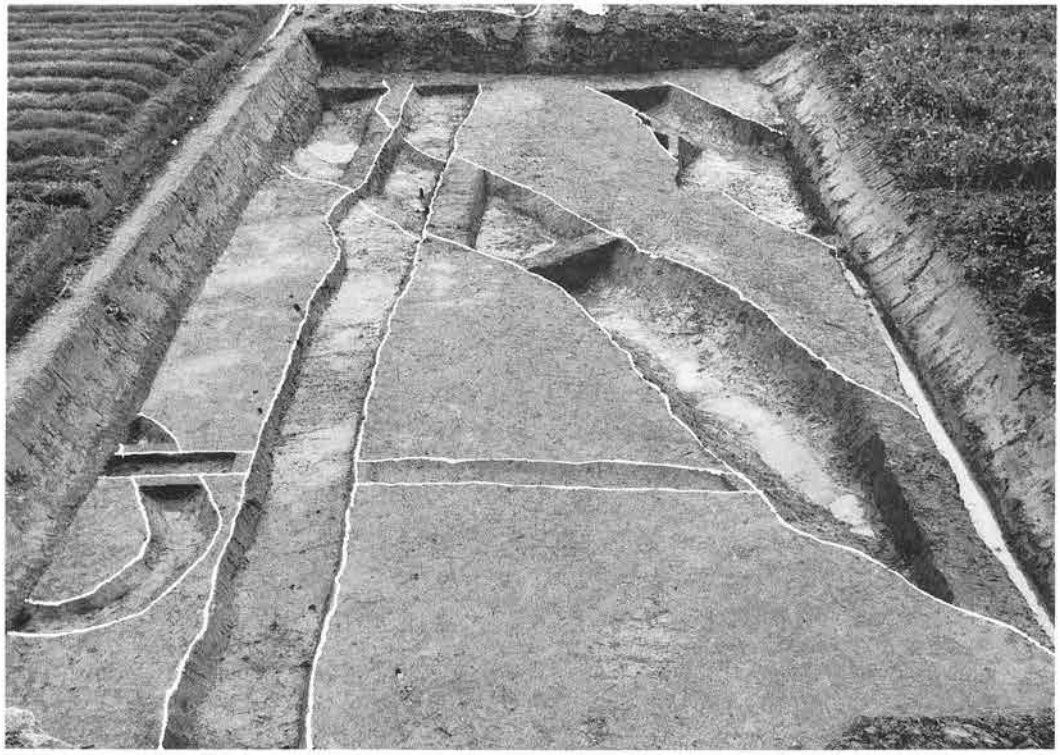
昭和61年度第１トレンチ全景（北より）



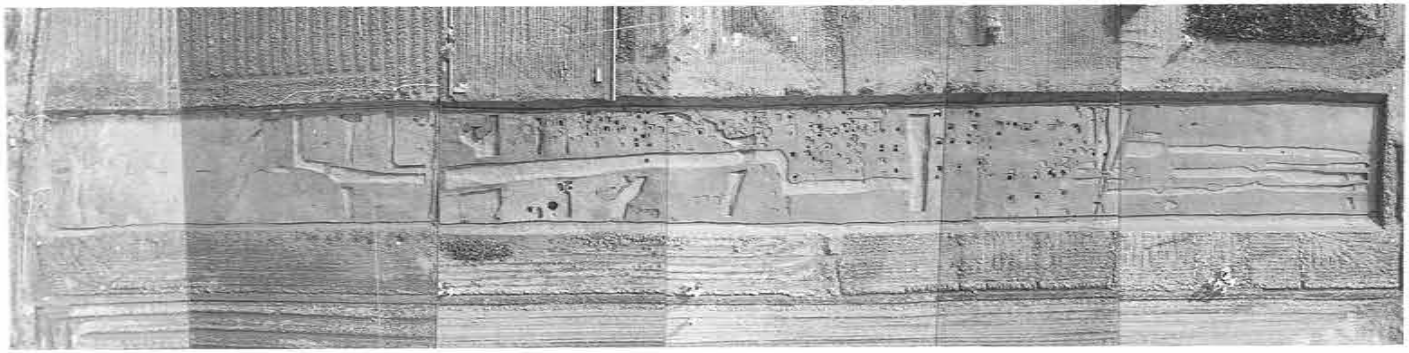
昭和61年度第２トレンチ全景（北より）

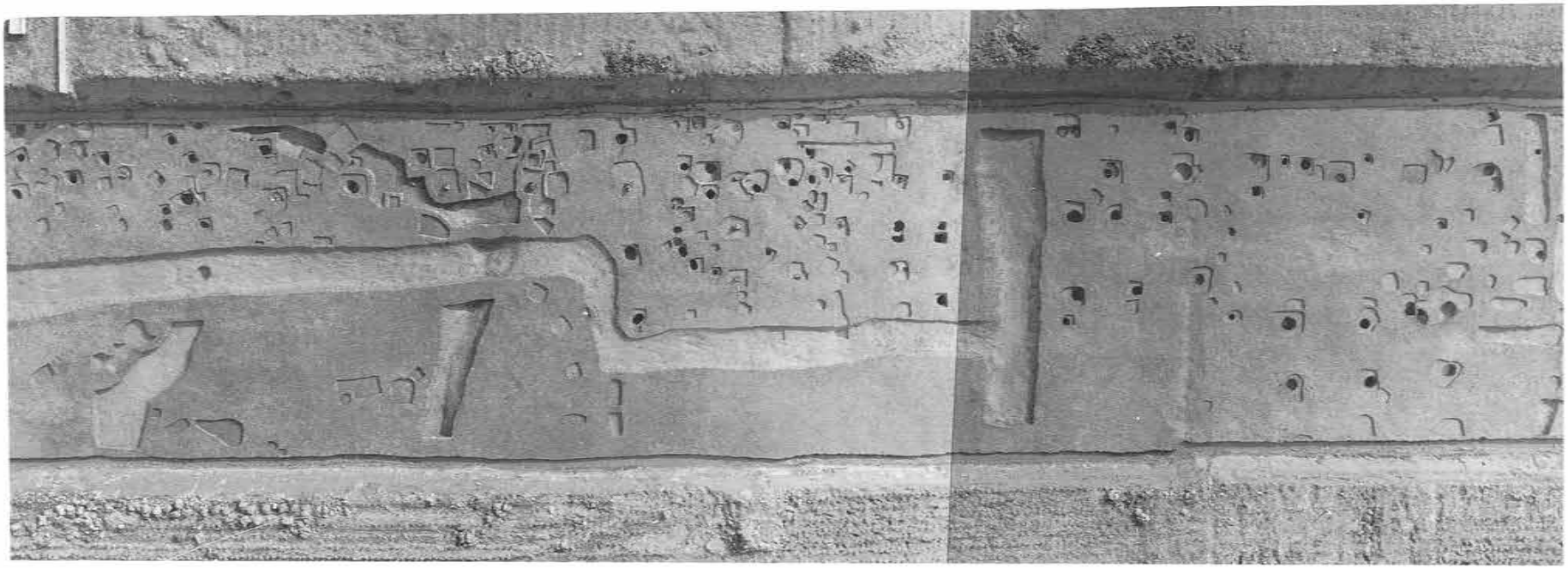


昭和61年度第３トレンチ全景（北より）



昭和61年度第４トレンチ全景（北より）





昭和61年度　第５～第７トレンチ全景

第５トレンチＳＢ－１ 全景（東北より）

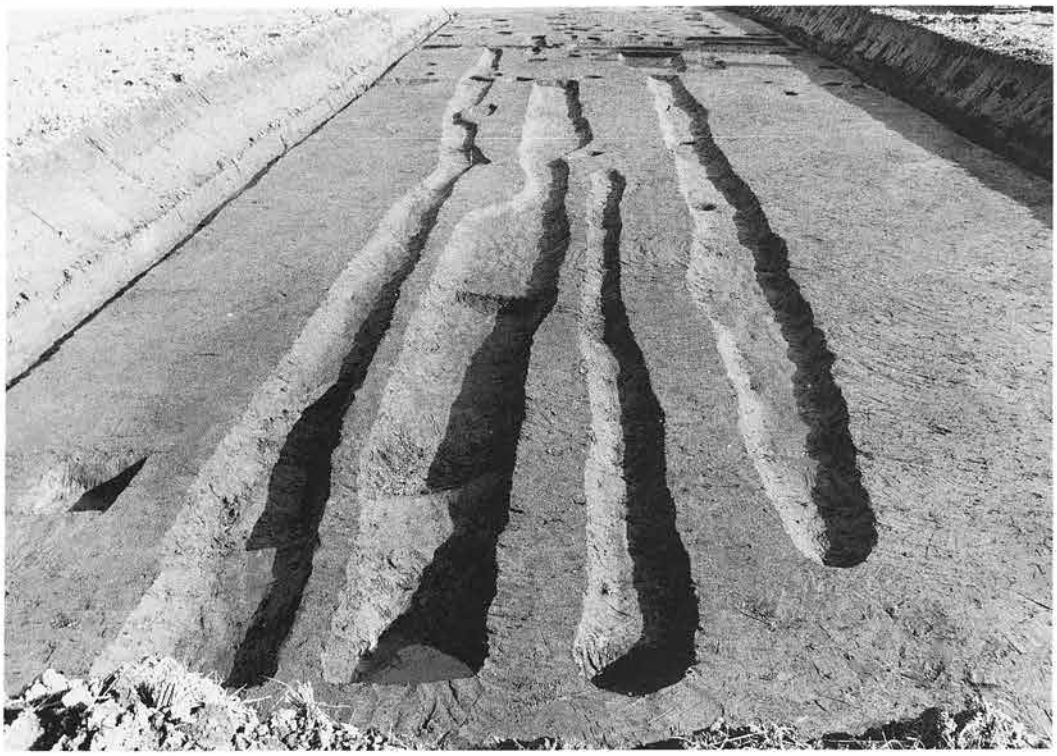
第５トレンチＳＢ－１ 全景（北より）

第５トレンチＳＢ－１ 全景（北東より）

第５トレンチ柱列検出状況

第５トレンチＳＢ−12全景（南西より）

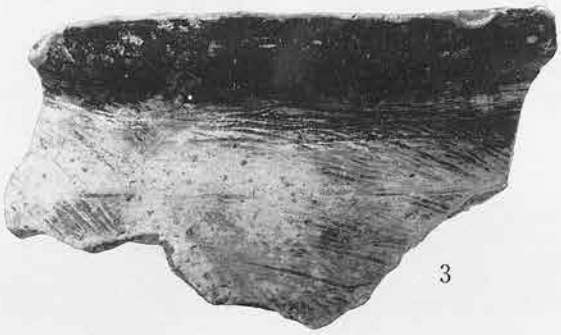
第６トレンチＳＤ−３近景（西より）

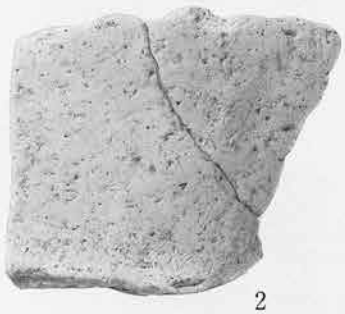


第６トレンチＳＤ群全景（南より）

第７トレンチ全景（南より）

図版二五　出土遺物


3


2

1

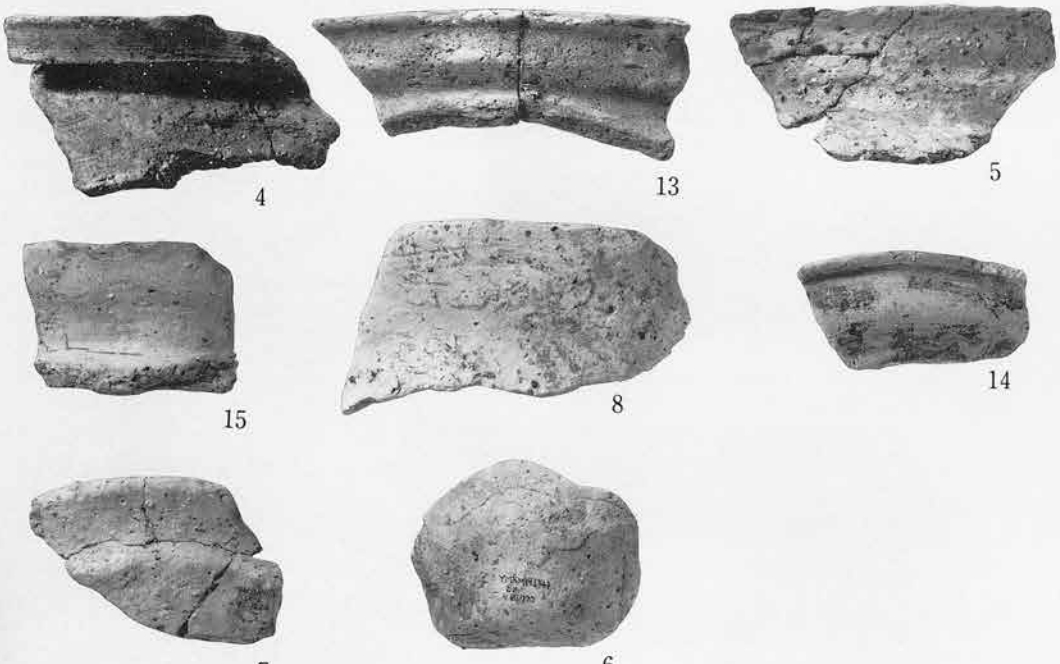
11

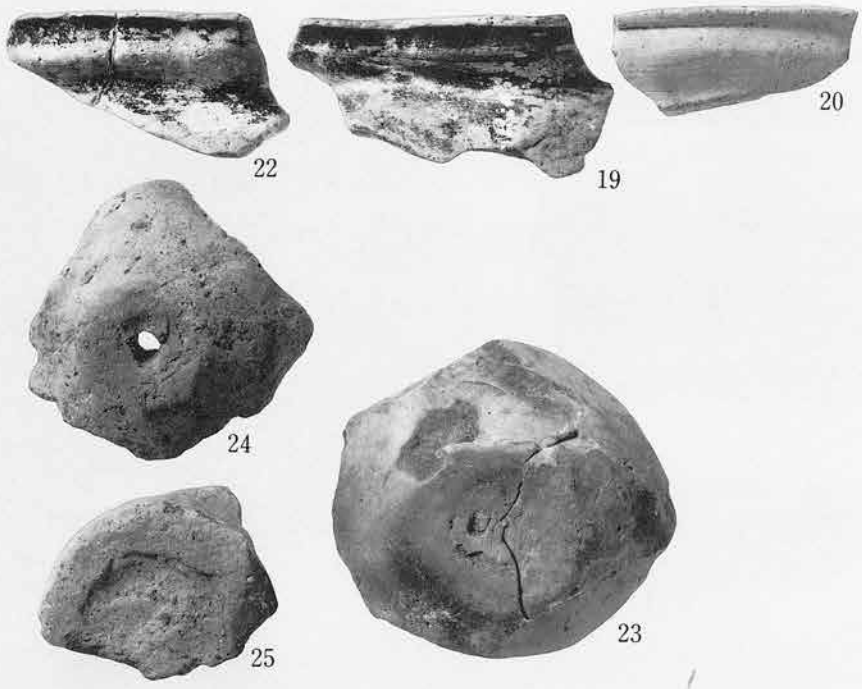
9

12

10

図版二六　出土遺物





16

27

21

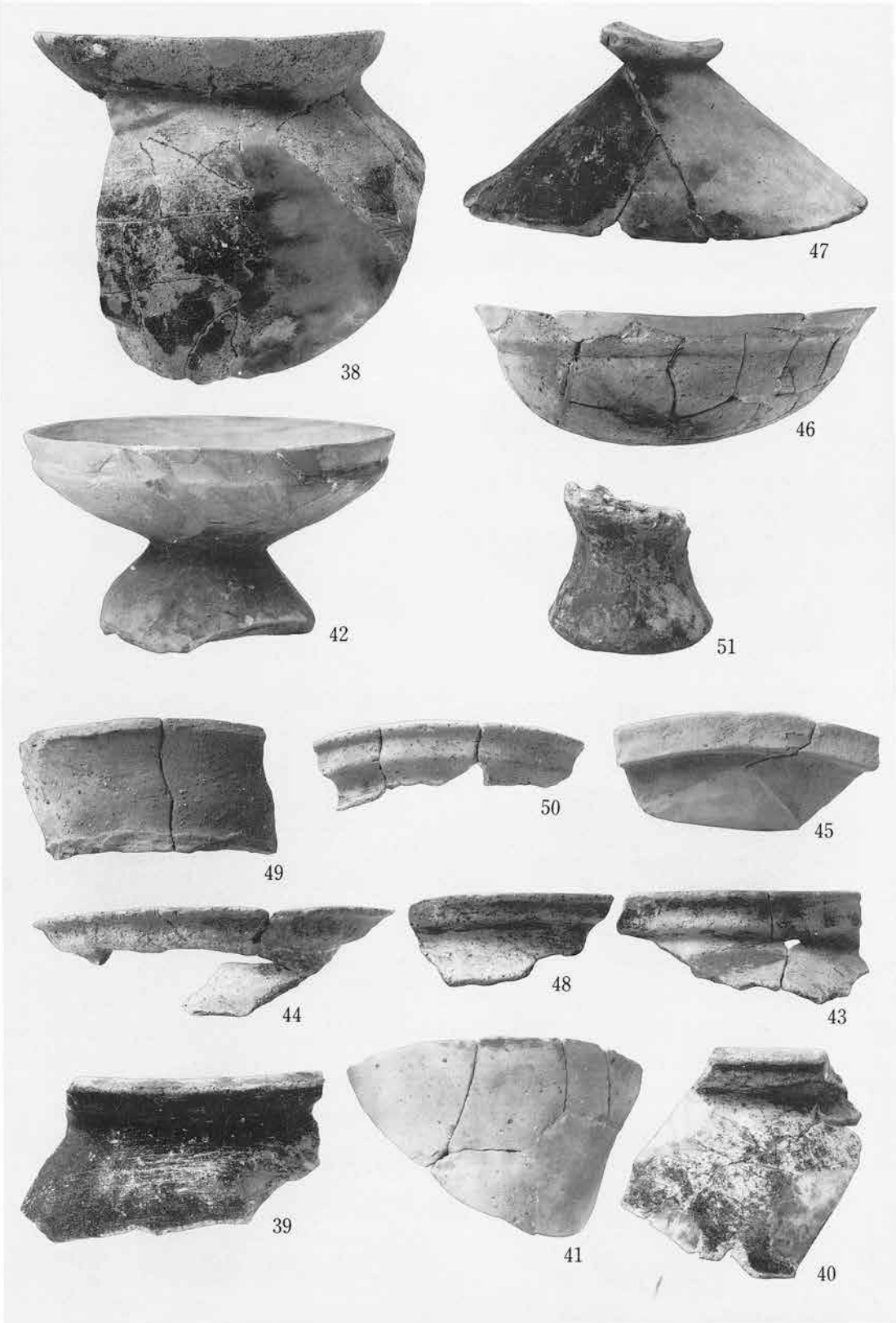
26

28

36

34

図版二八　出土遺物



52

55

59

58

57

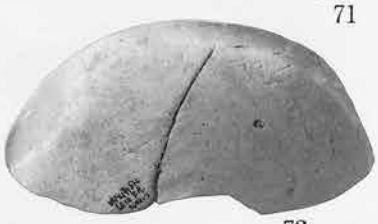
68

69

70

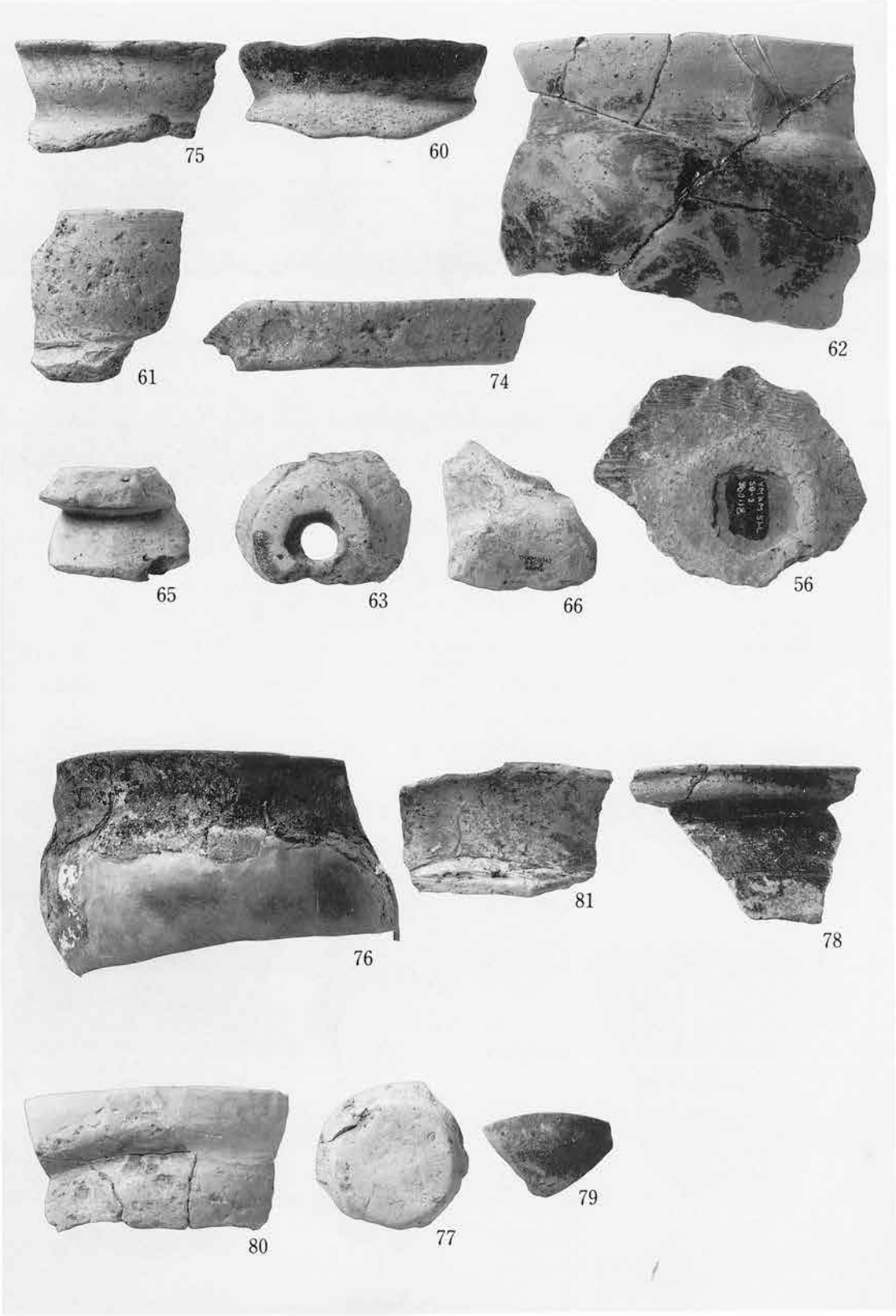
71

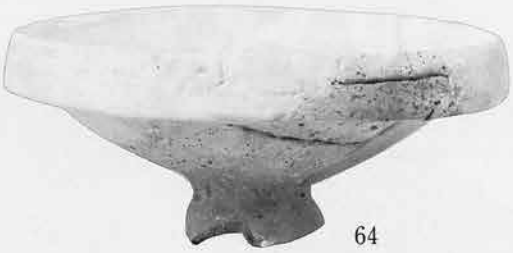
67


72

73

図版三〇　出土遺物




64

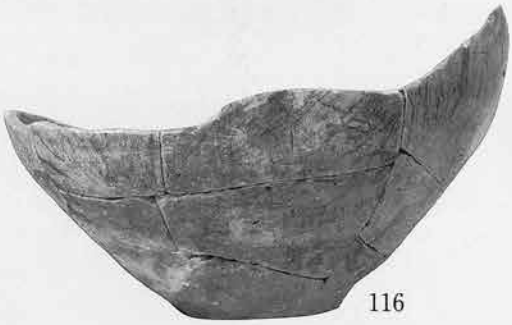
82

103

108

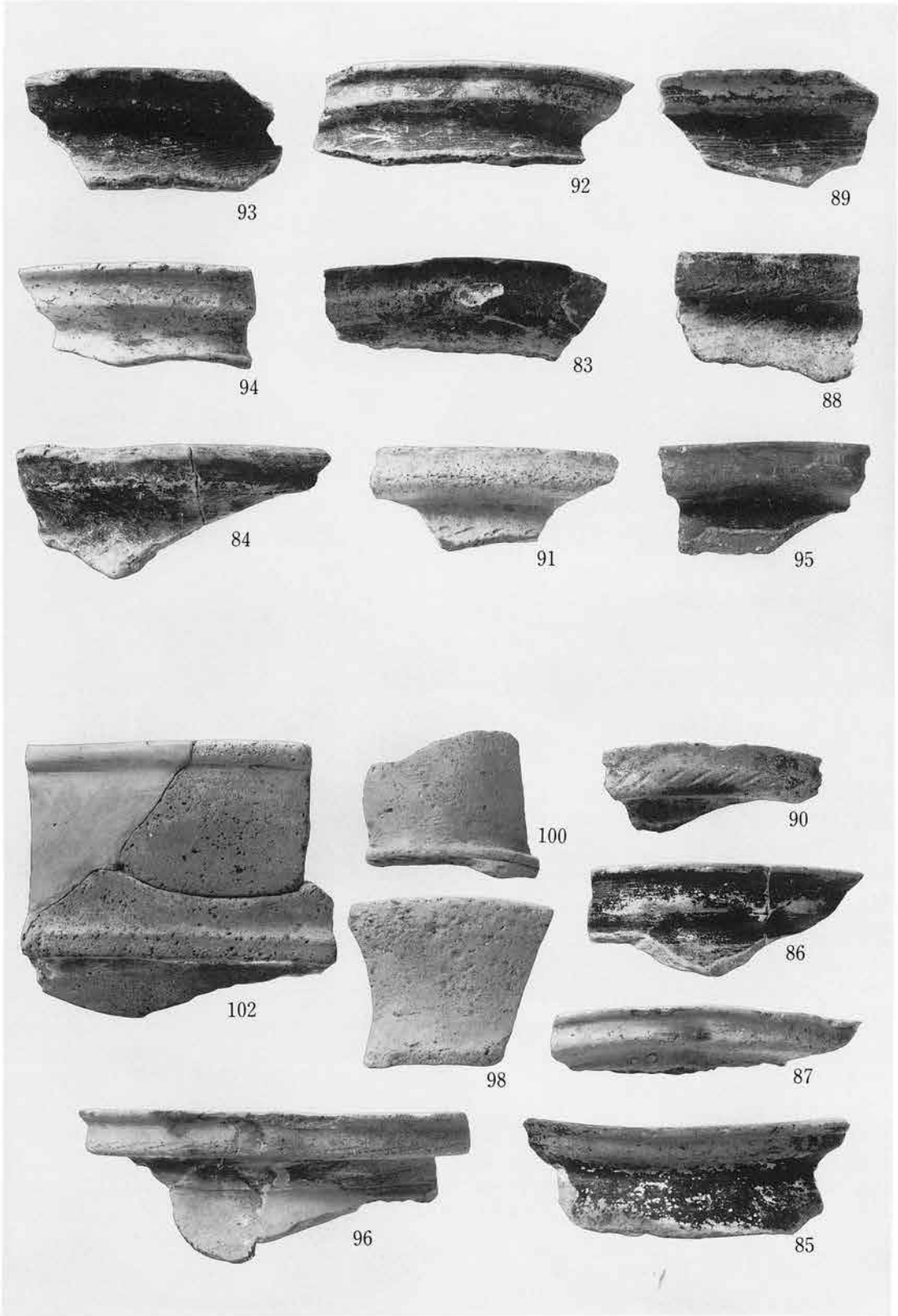
109

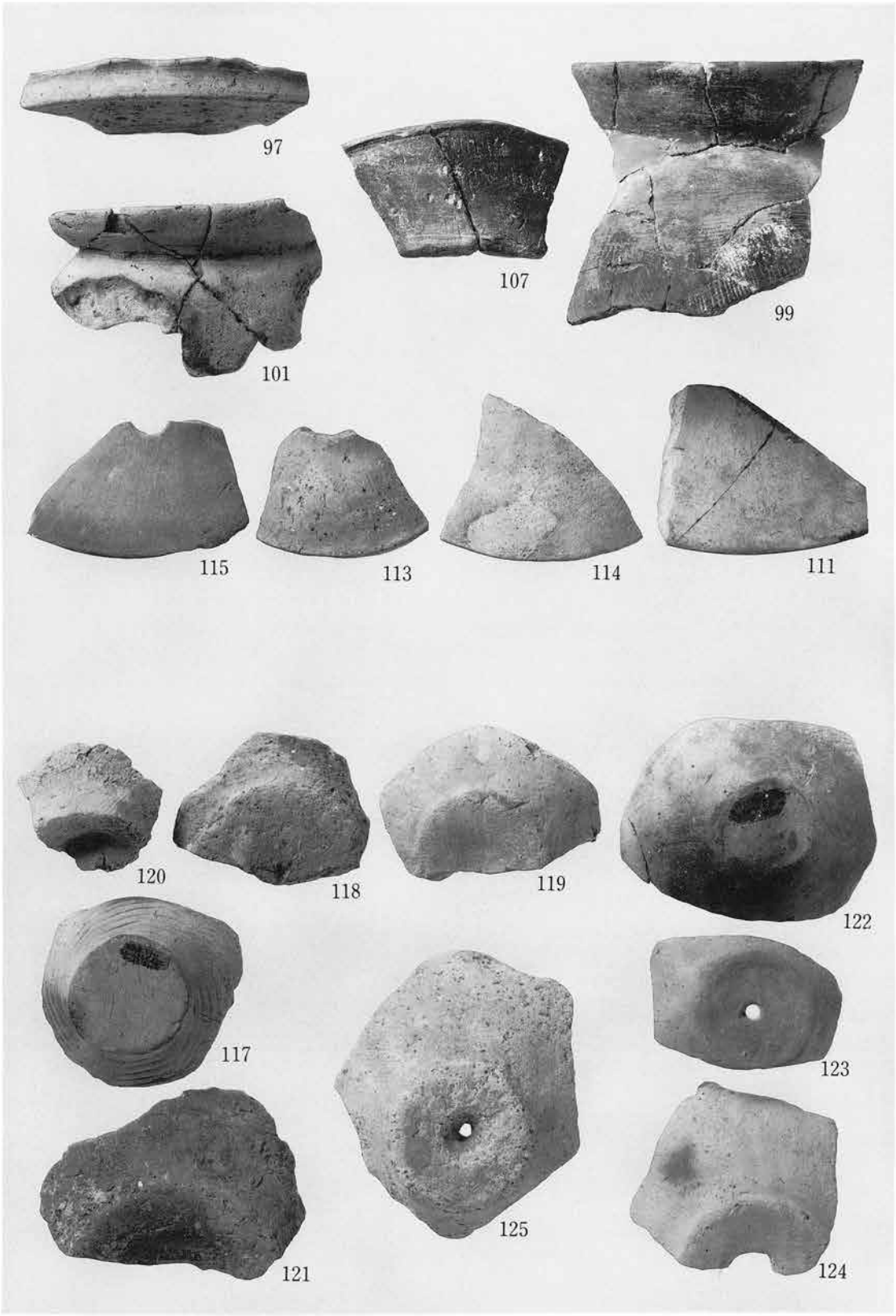
110


116

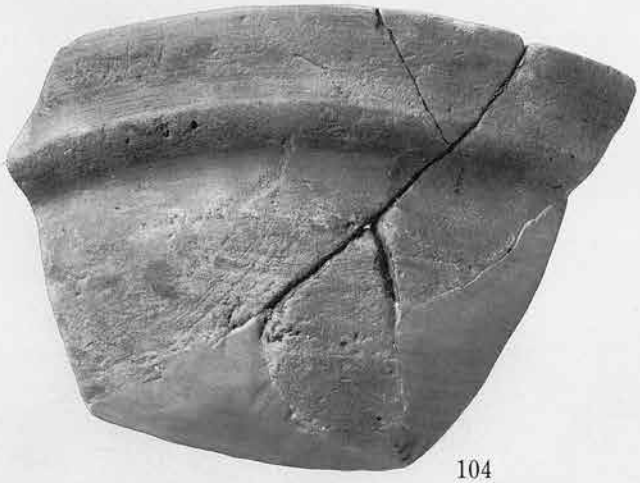
112

図版三二　出土遺物




97
107
99
101
115
113
114
111
120
118
119
122
117
123
125
121
124

図版三四　出土遺物


104

105

106

169

188

129

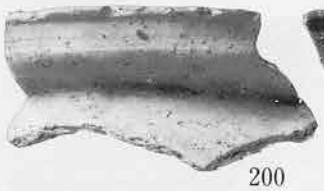
191

135

216

138

204


200

173

130

128

171

203

137

126

161

133

201

164

134

131

198

209

205

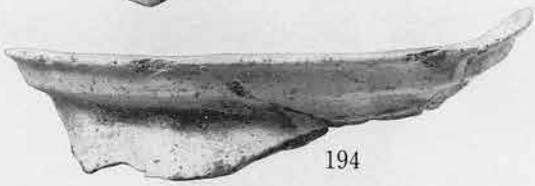
165

図版三六　出土遺物

168

212

132


194

207

166

210

199

170

189

202

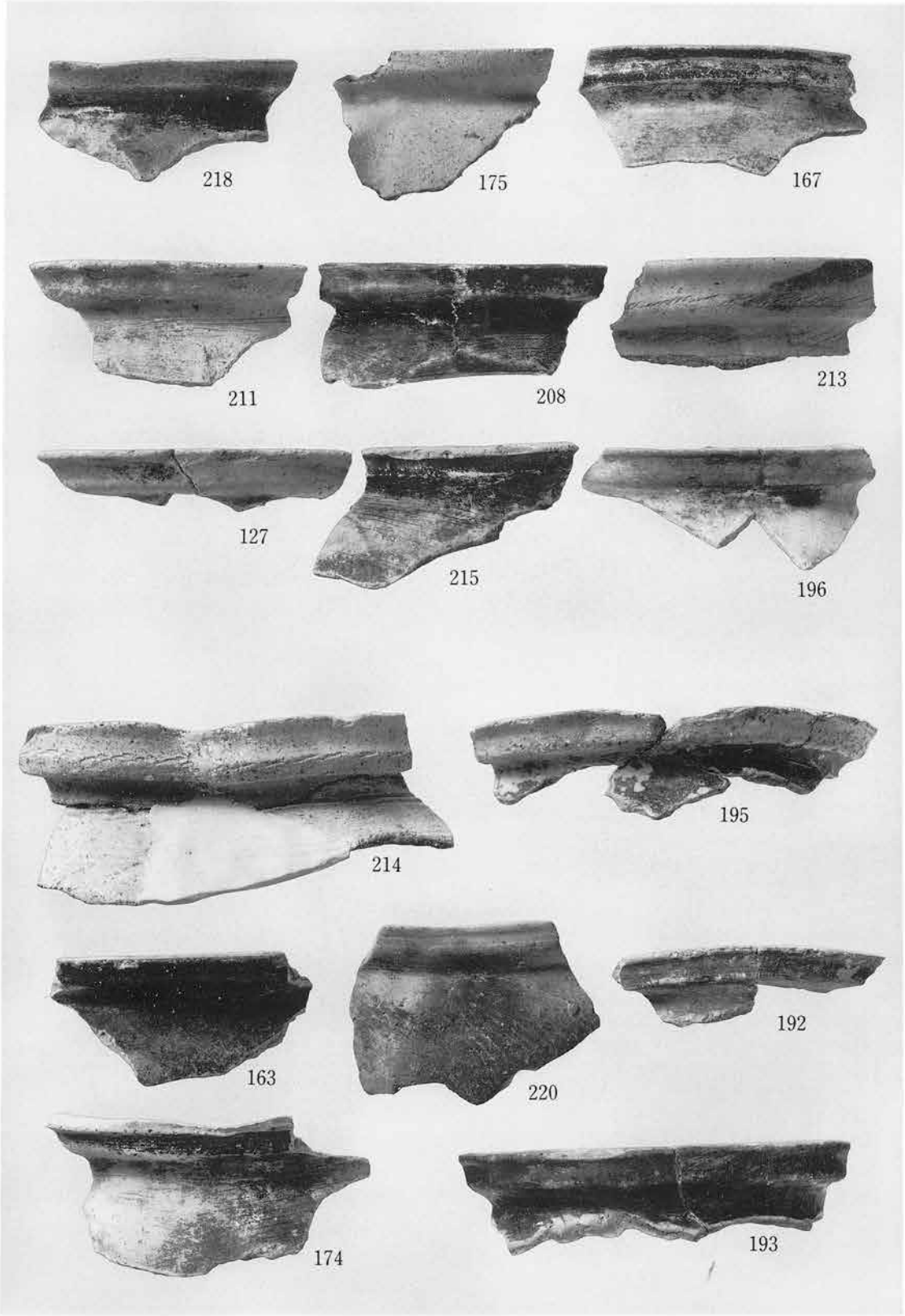
162

172

206

190

197


218
175
167
211
208
213
127
215
196
214
195
163
220
192
174
193

図版三八　出土遺物

140

147

254

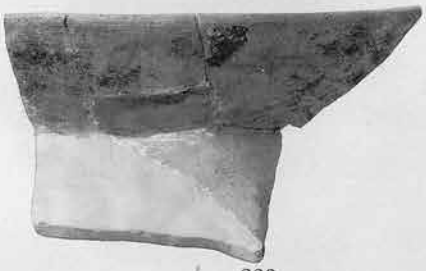
221

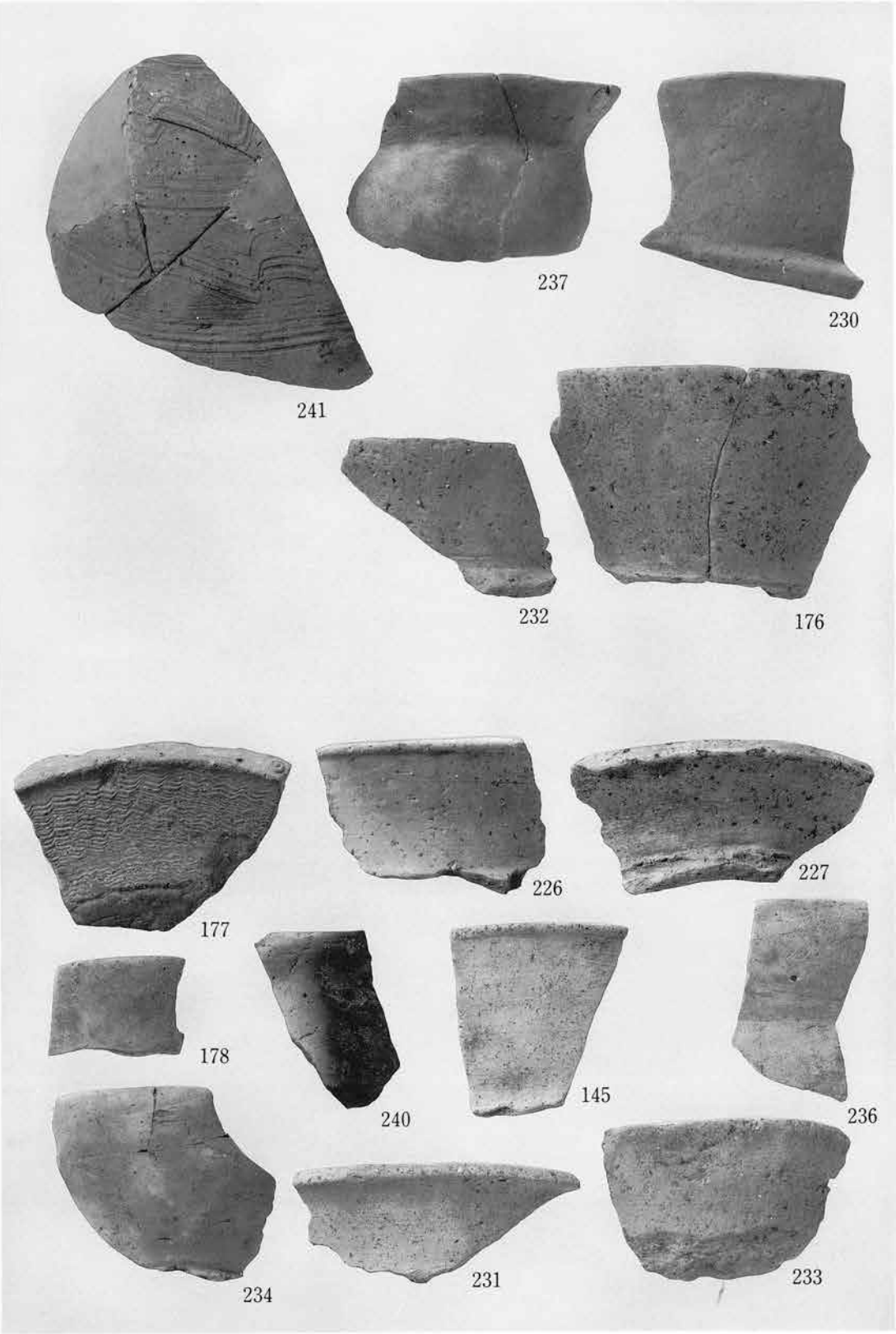
224

142

225

141


223


241
237
230
232
176
177
226
227
178
240
145
236
234
231
233

図版四〇　出土遺物

136

160

139

179

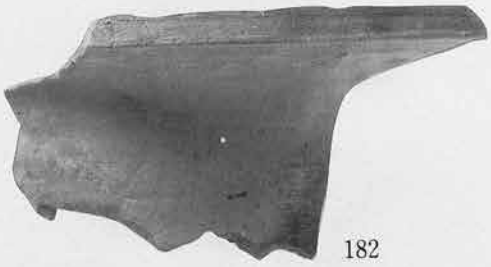
143

181

156

187

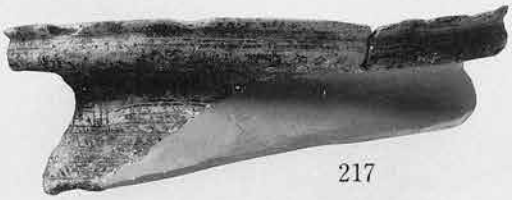
157


182

235

222

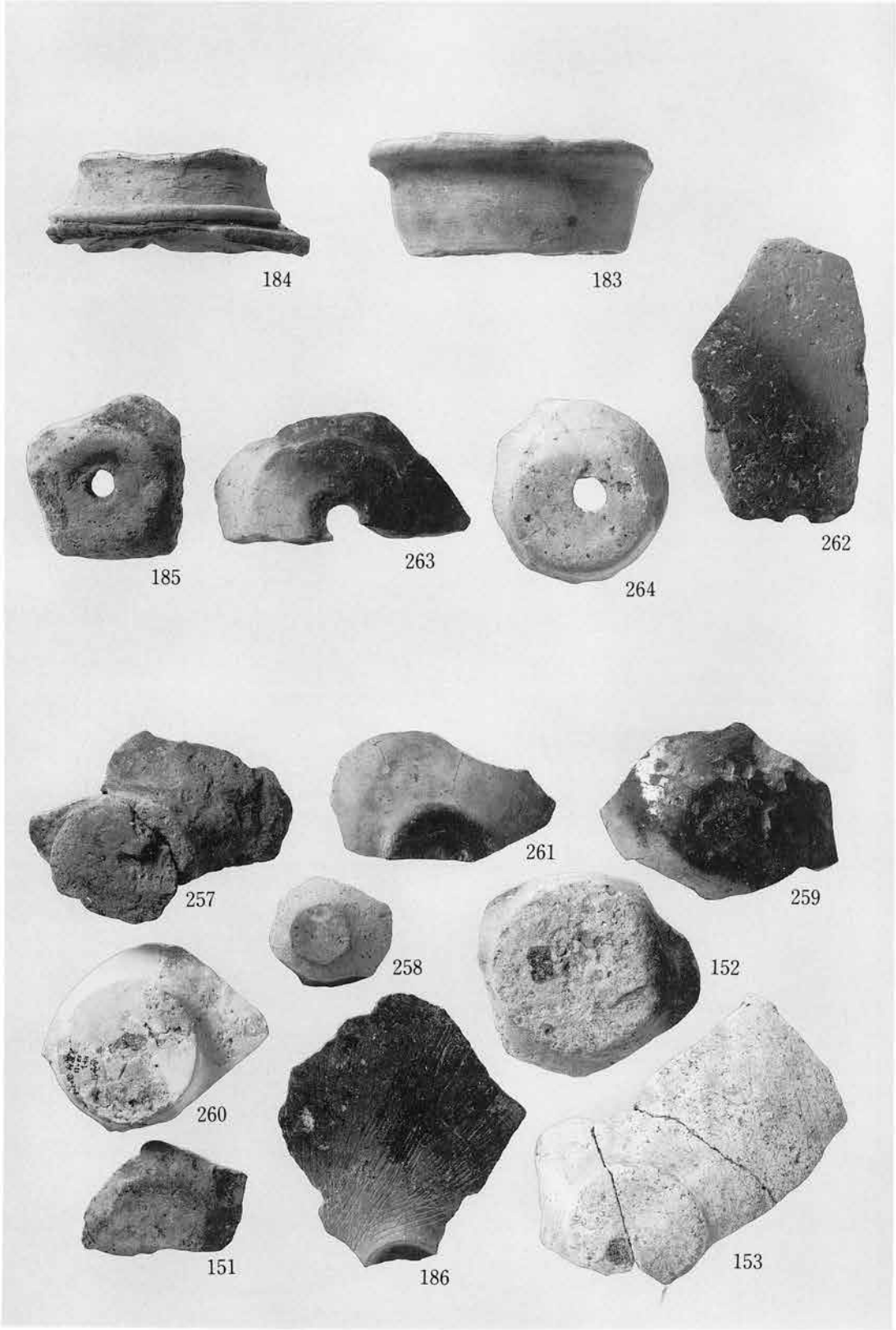
238


217

239

228

242


184
183
262
185
263
264
257
261
259
258
152
260
151
186
153

245
154
251
180
148
150
247
155
144

246

229

159

146

244

252

249

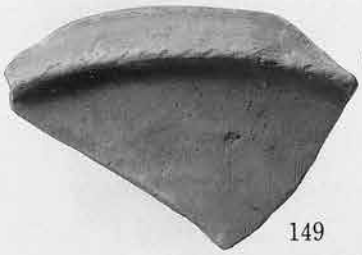
253

255

256

B

図版四五　出土遺物

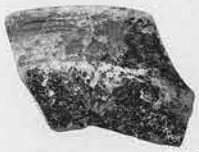

149

158

243

250

248


278

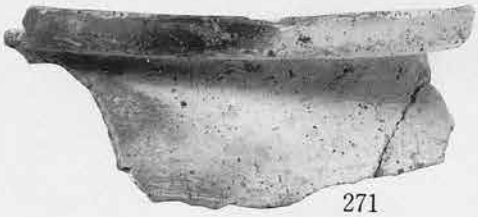
268

267

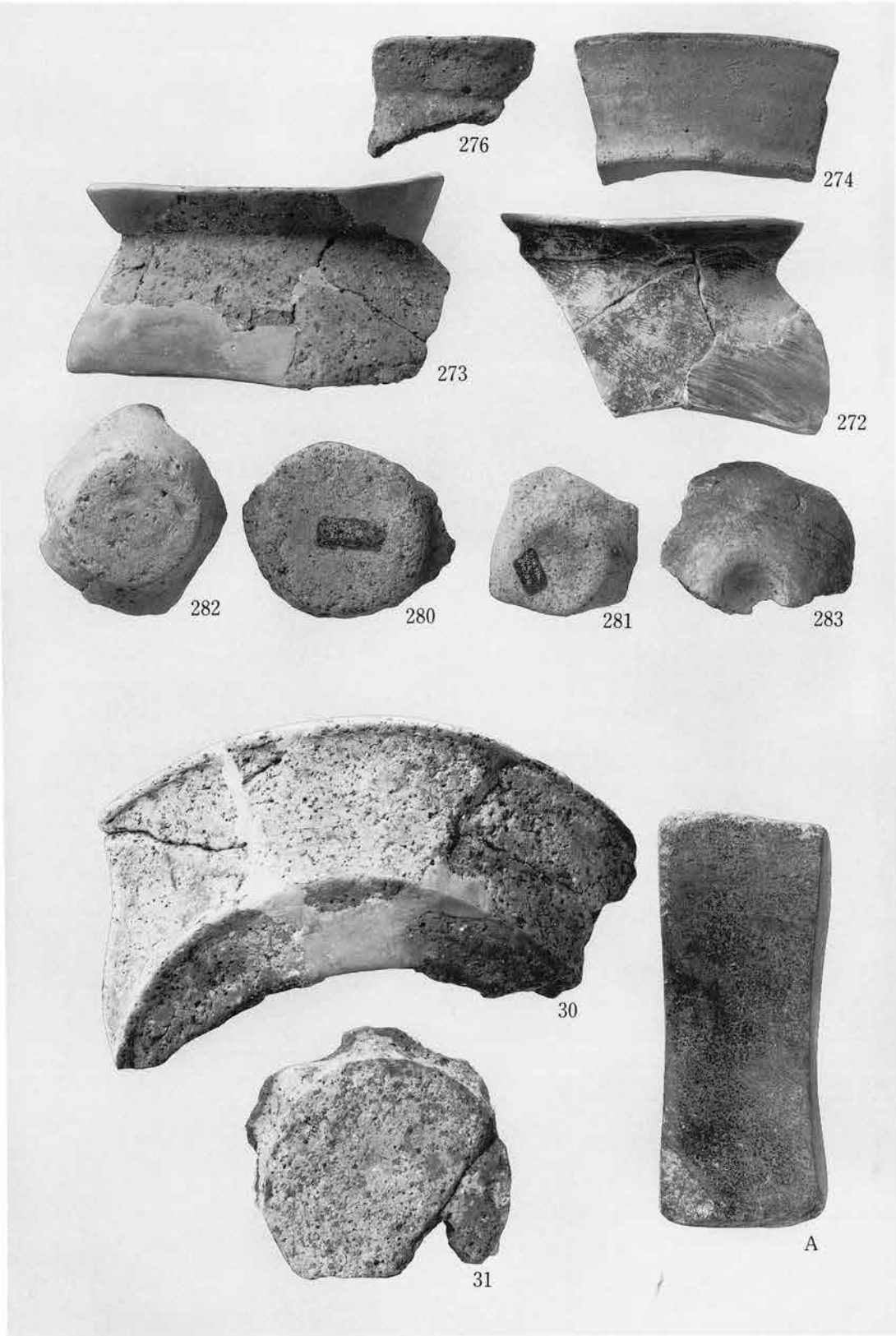
265

266

269


271

図版四六　出土遺物



284

270

286

285

287

289

288

図版四八　出土遺物

296

301

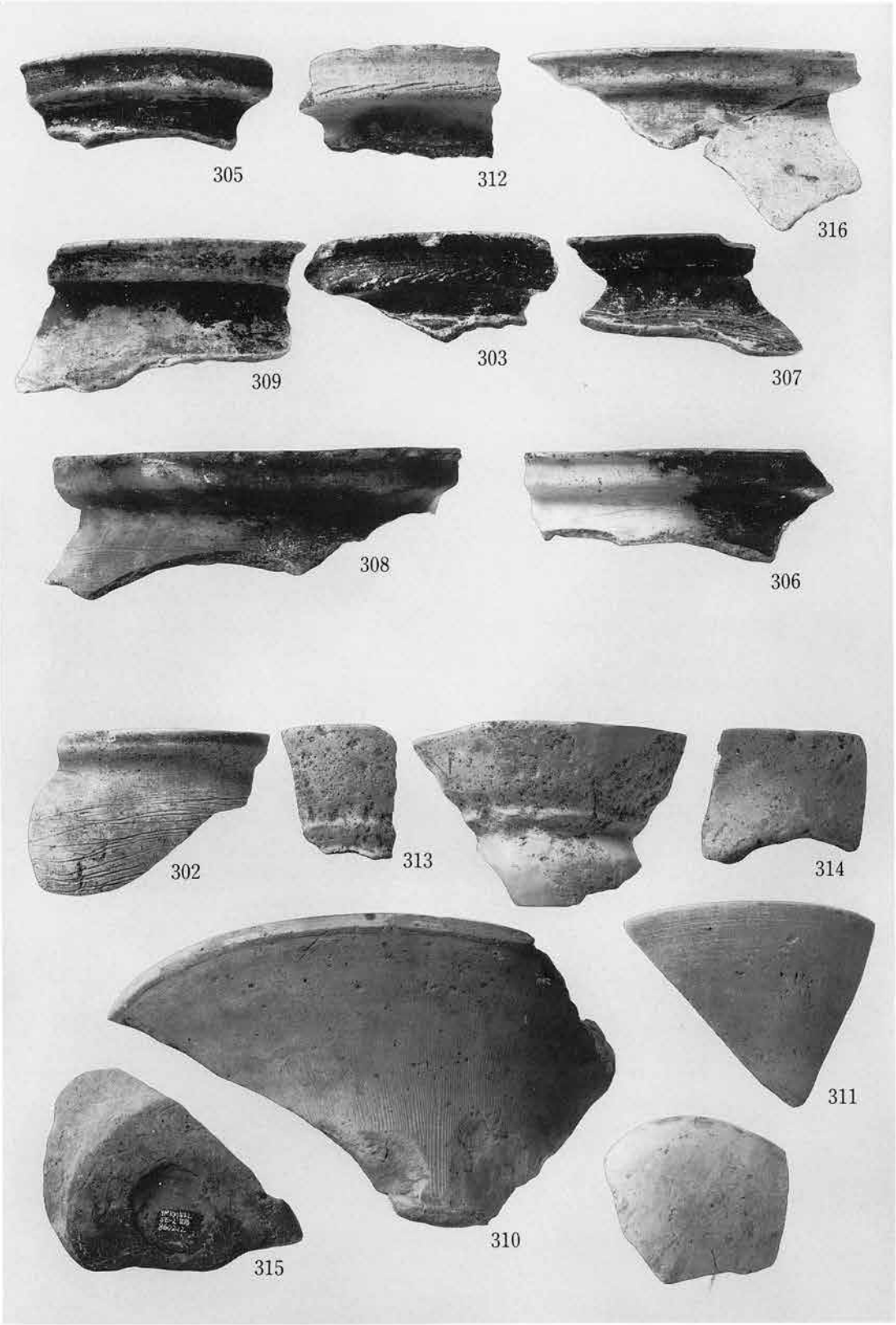
299

304

298

300

図版四九　出土遺物



317

320

321

324

323

322

319

318

293

294

291

290

292

295

325

C

D

328

327

326

334

335

330

333

331

332

343

342

337

336

338

340

341

339

344

345

347

346

349

348

351

352

383

382

378

366

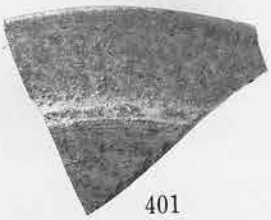
367

386

414

403

399


401

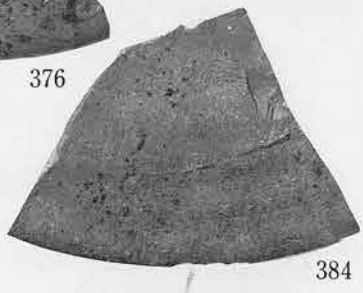
53

375

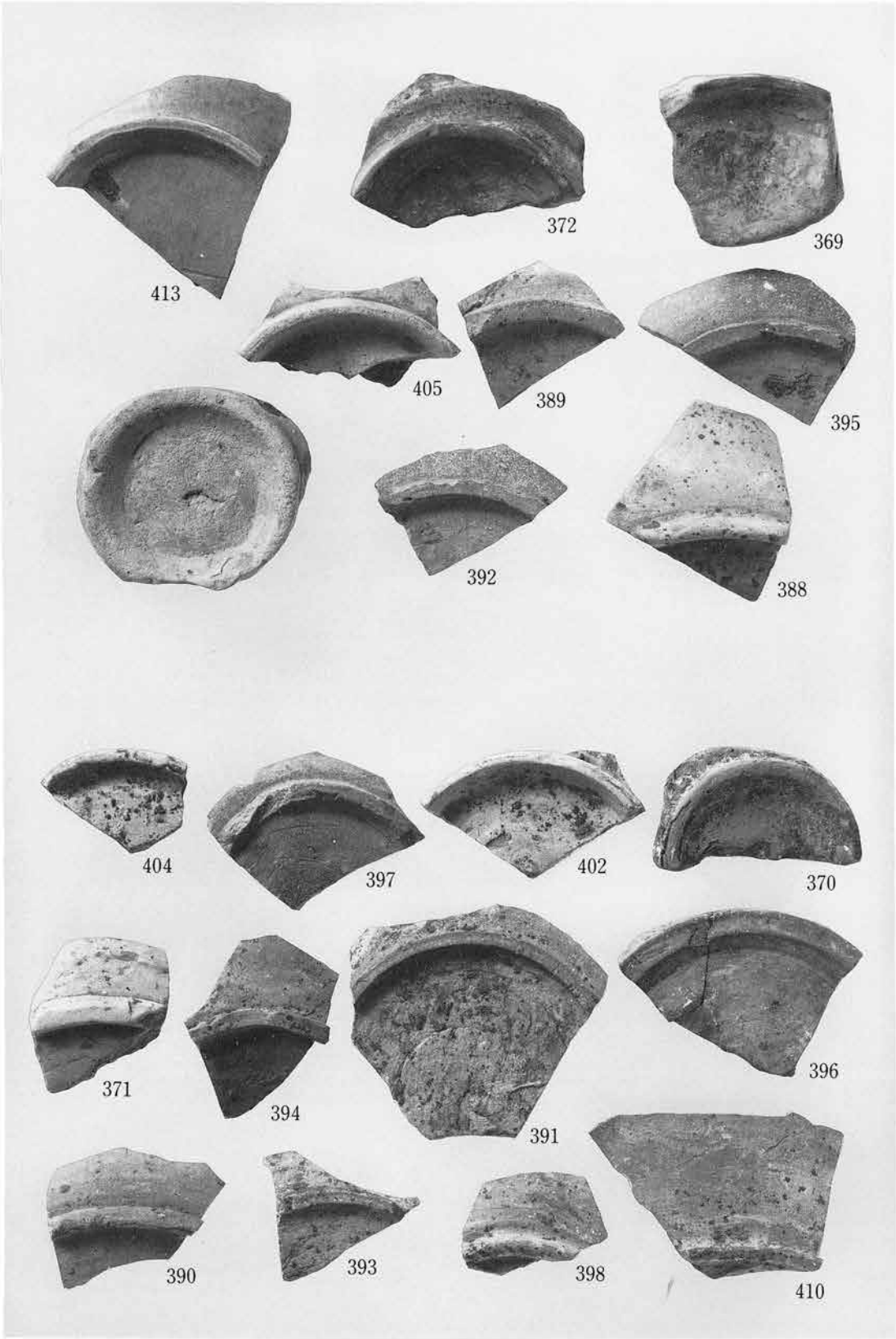
376

379

377


384

図版五六　出土遺物


413
372
369
405
389
395
392
388
404
397
402
370
371
394
391
396
390
393
398
410

図版五七　出土遺物

409

387

407

411

368

413

406

411

400

385

412

図版五八　出土遺物

415

482

431

381

408

455

428

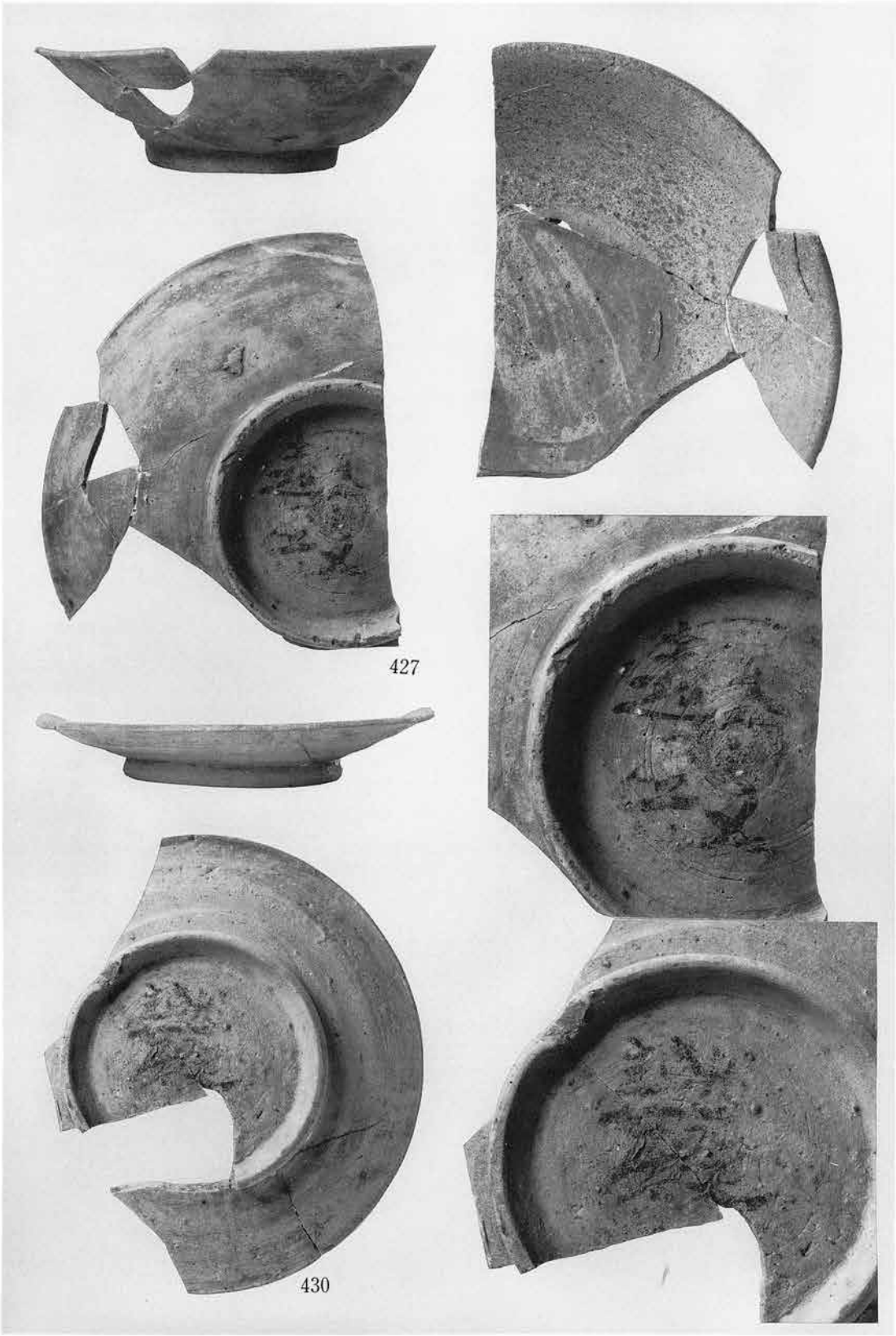
458

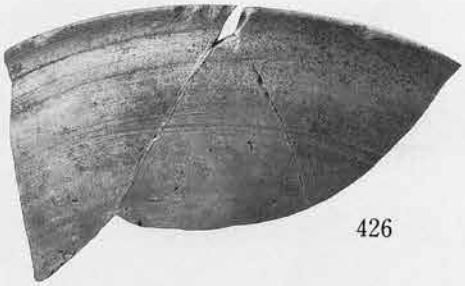
429

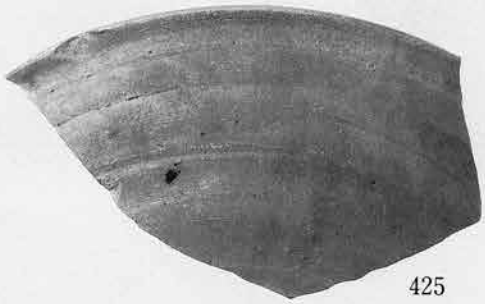
446

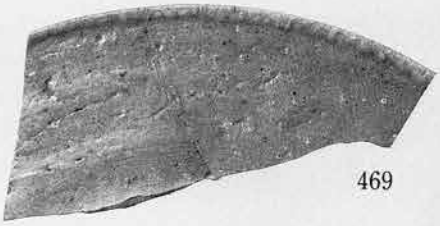
497

471


427
430


426


425


469

432

435

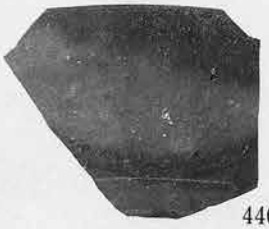
434

437

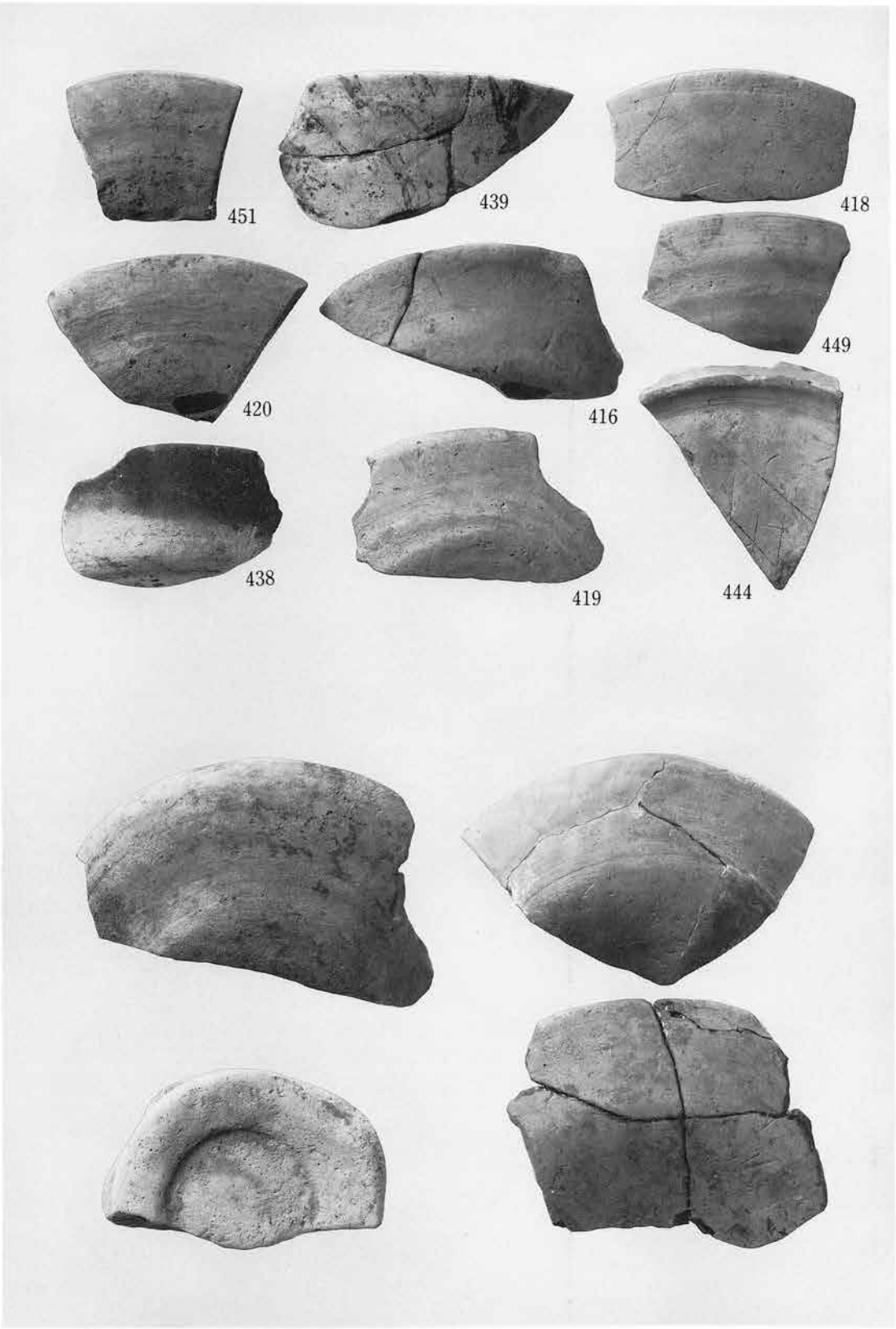
436

433

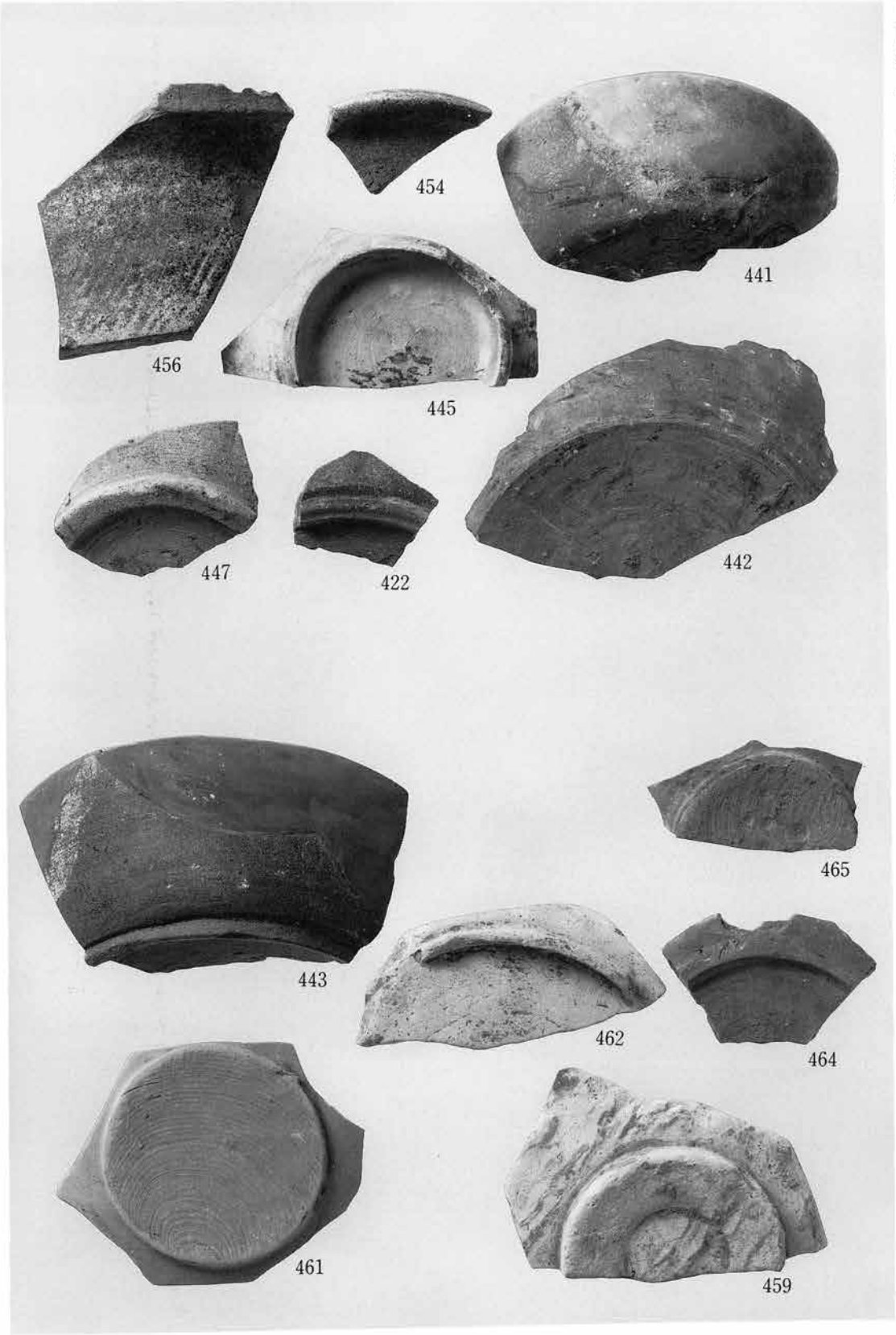
448


440

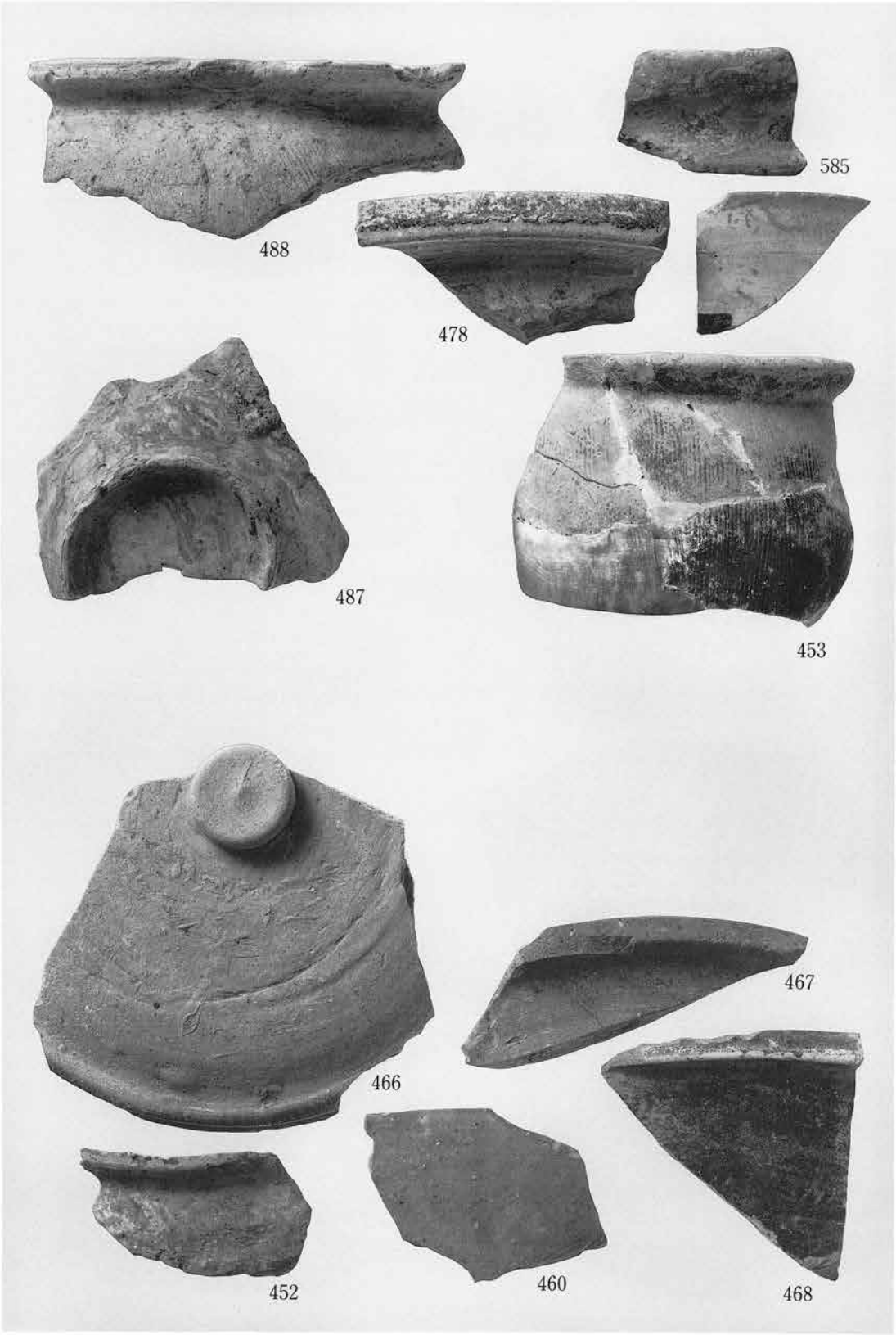
424


451
439
418
420
416
449
438
419
444

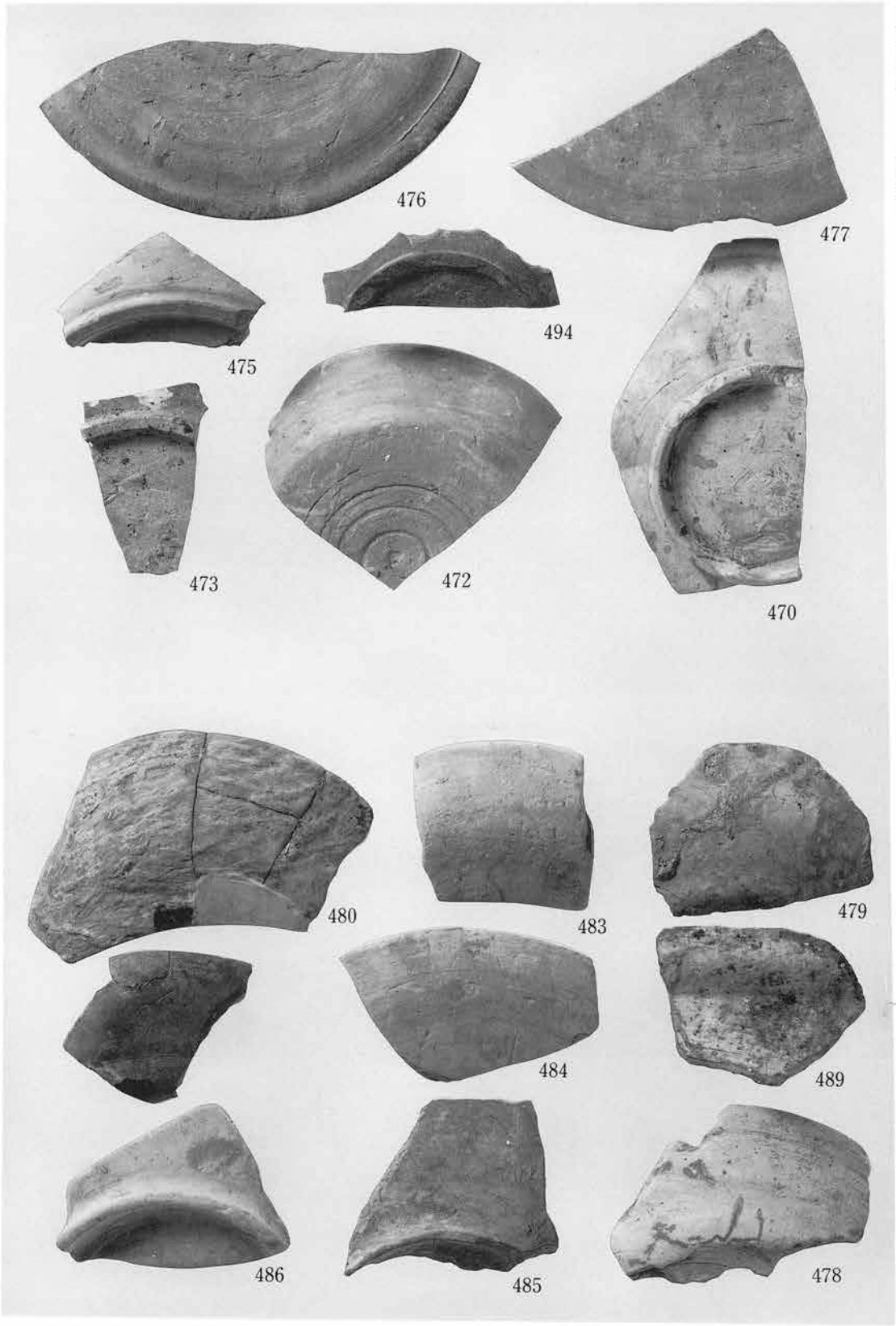
図版六三　出土遺物



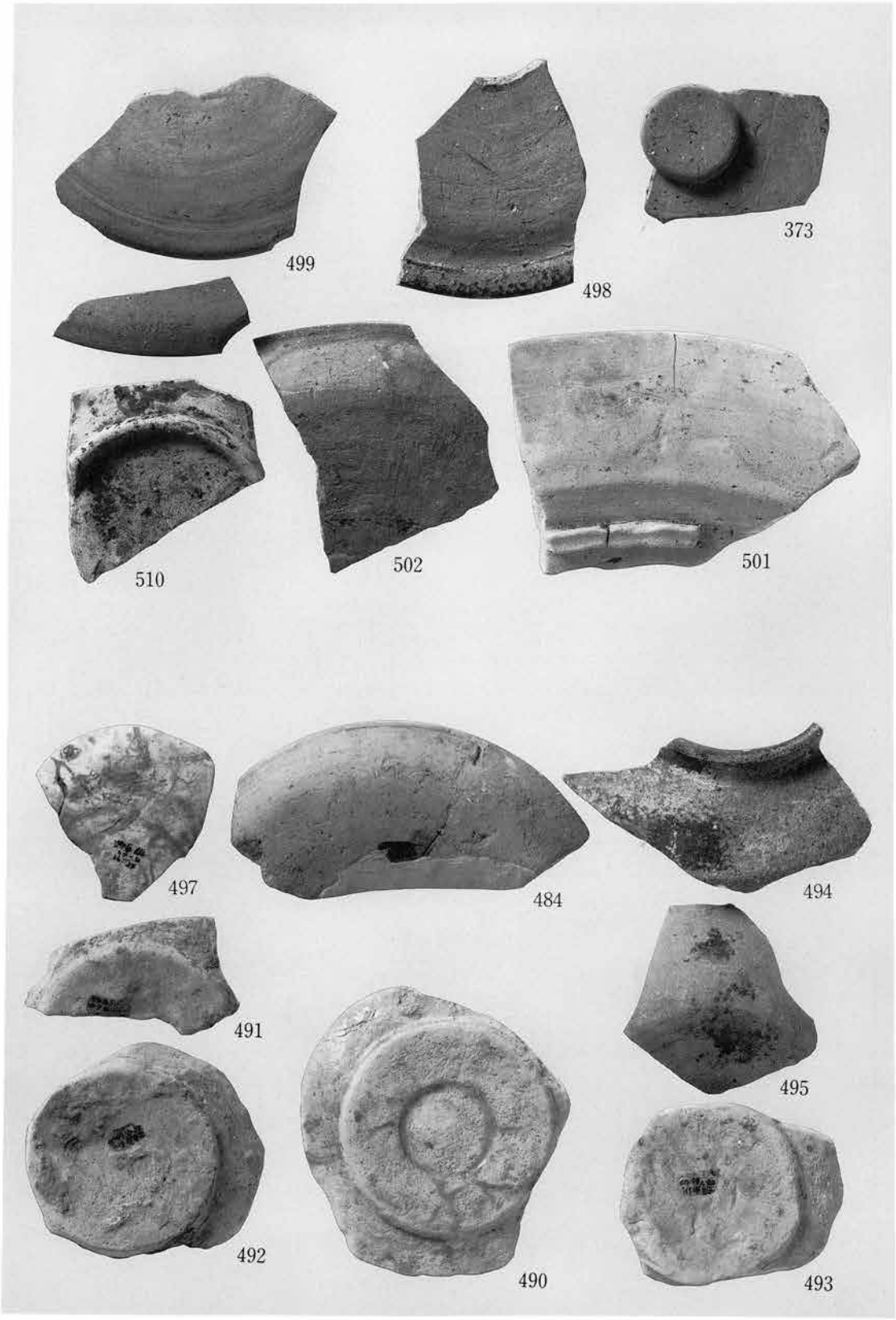
図版六四　出土遺物

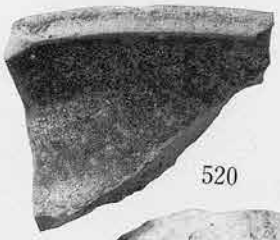


図版六五　出土遺物



図版六六　出土遺物




520

521

523

508

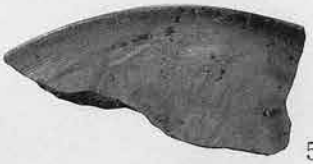
516

505

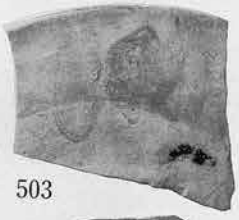
511

513

514


504

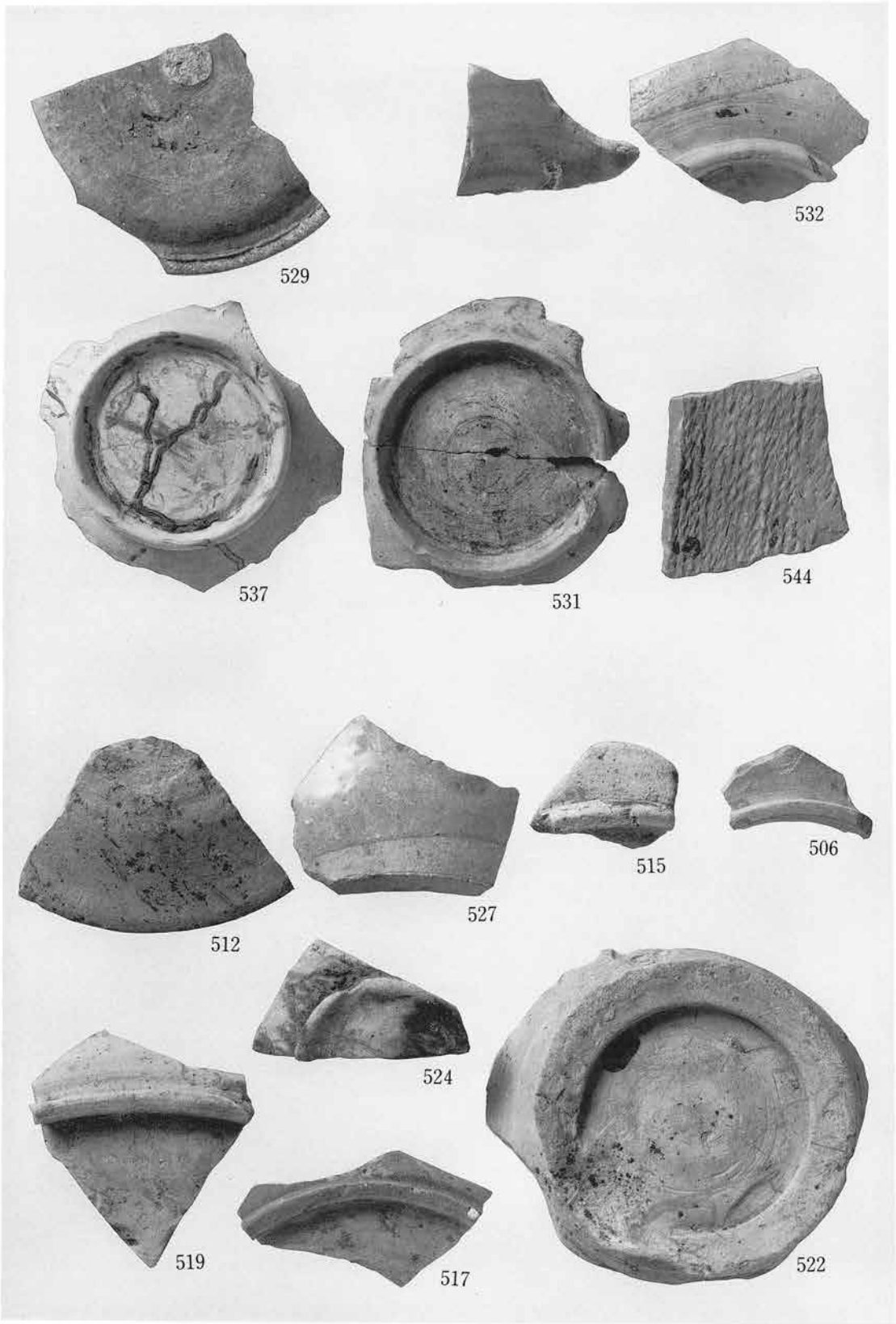
526

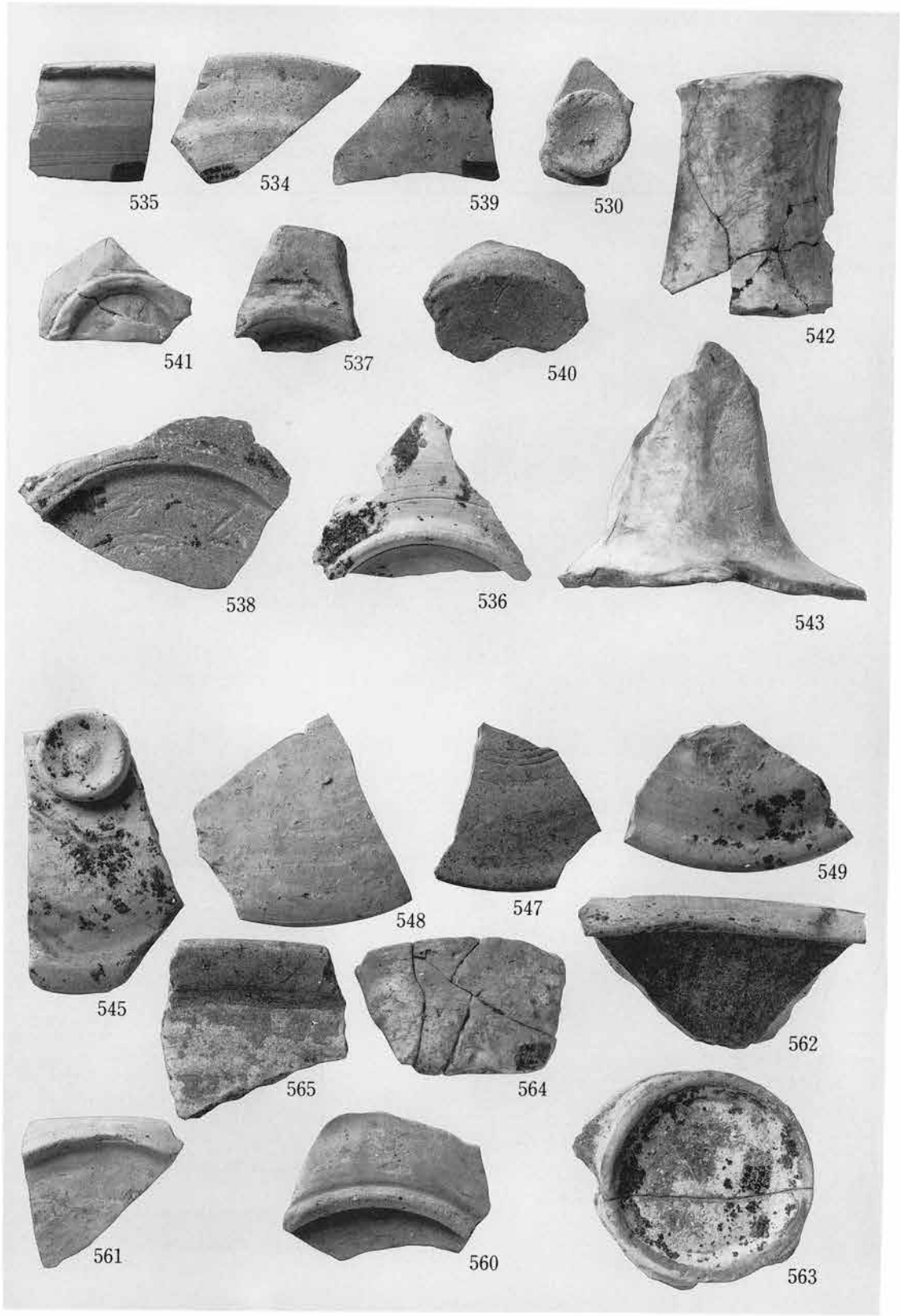

503

518

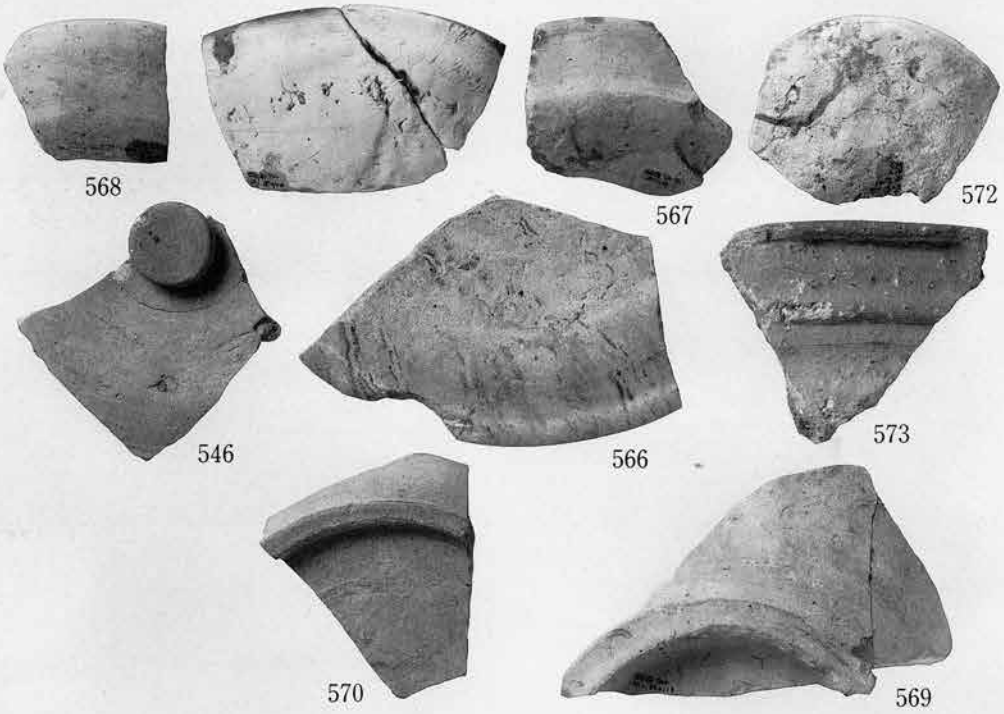
507

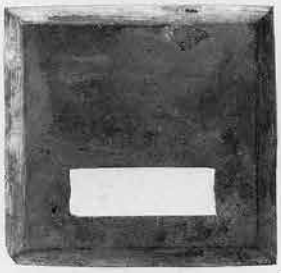
図版六八　出土遺物

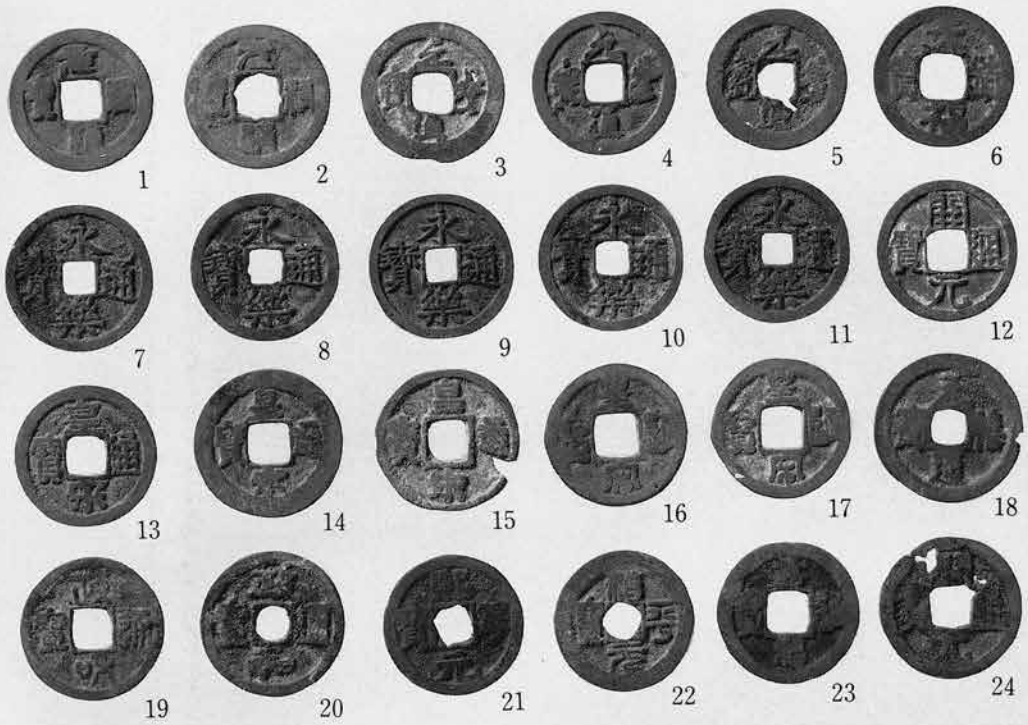


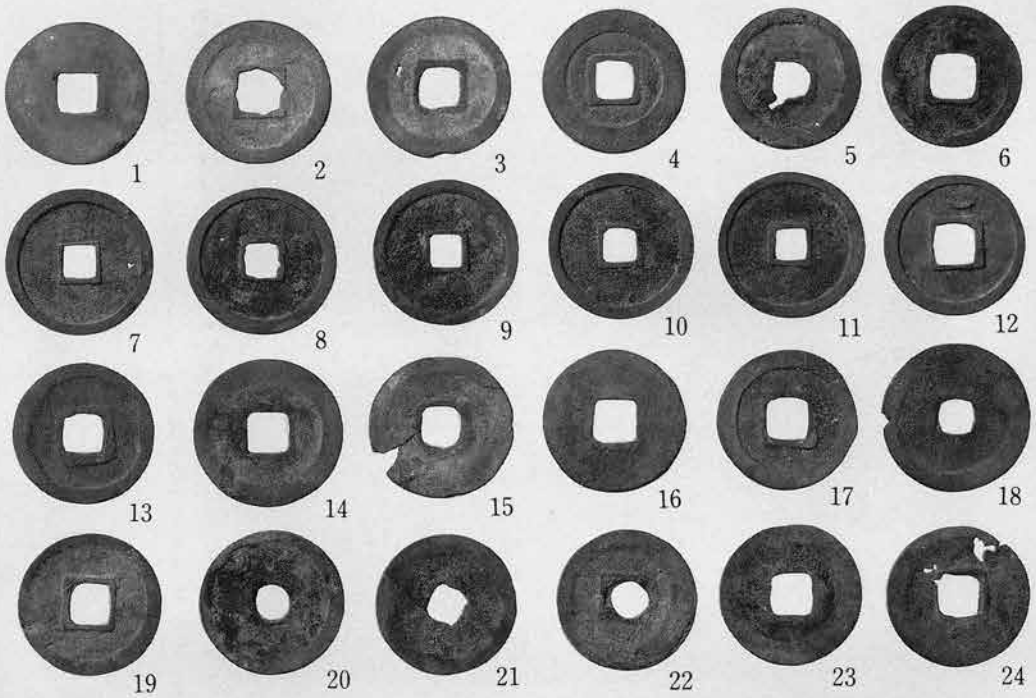

535
534
539
530
542
541
537
540
538
536
543
549
548
547
545
562
565
564
561
560
563

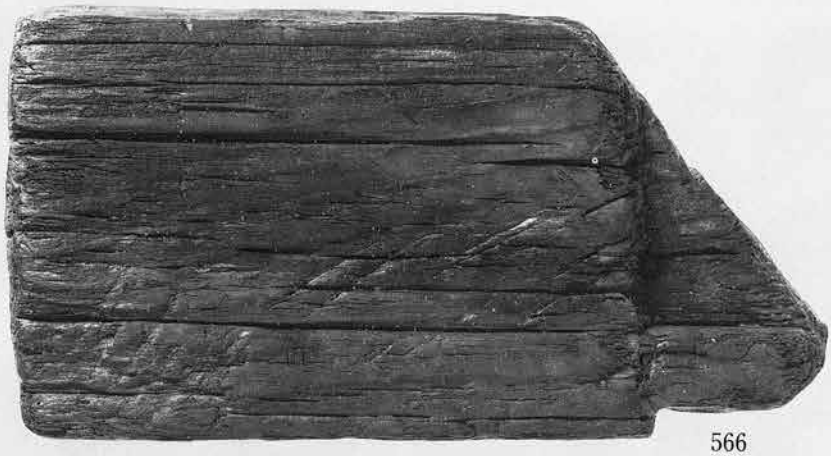
図版七〇　出土遺物






1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24



566

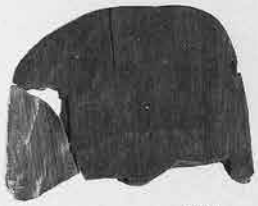
567

569

568

576

578



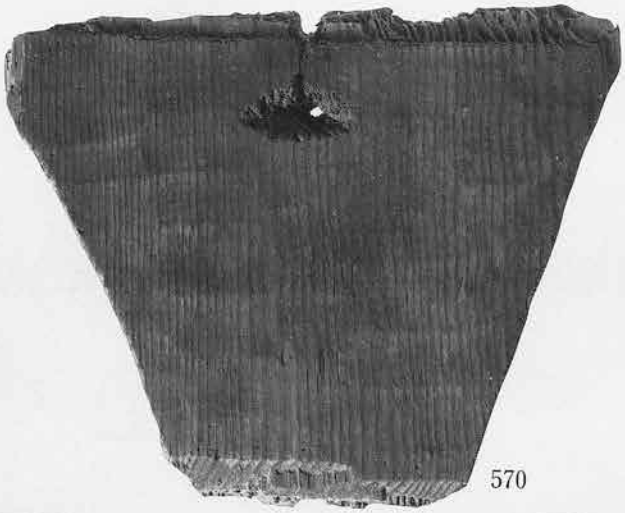
577

575

574

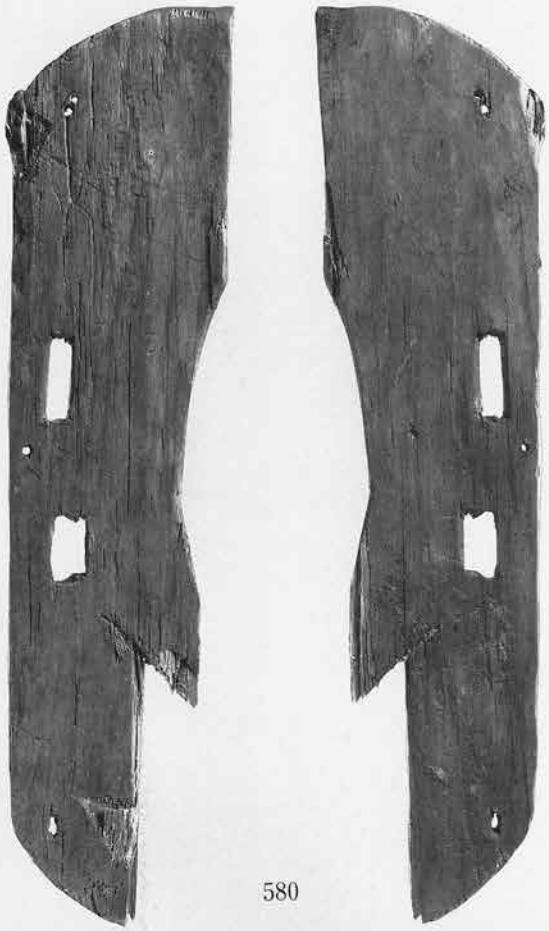
572

581



570

579



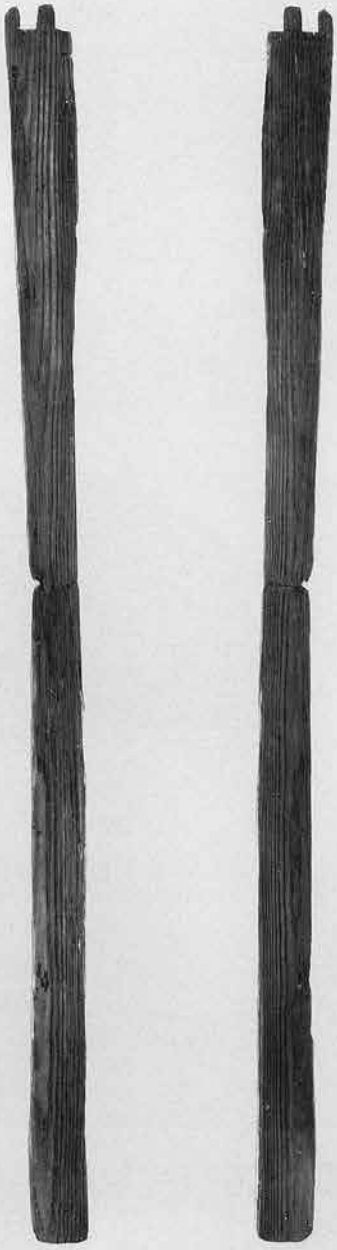
580

571

584

583

582



586

585

刊行年月　昭和62年3月

刊行物名　笠原南遺跡発掘調査報告書

編集・発行　滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目1－1
電話 0775-24-1121 内線 2536

(財)滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－2
電話 0775-48-9780・1

印刷所　㈱図書印刷 同朋舎
京都市下京区中堂寺鍵田町2